

参照文法書研究

渡辺己・澤田英夫 責任編集

JOURNAL OF ASIAN AND AFRICAN STUDIES
SUPPLEMENT

No.02

アジア・アフリカ言語文化研究
別冊



参照文法書研究

渡辺己・澤田英夫 責任編集

JOURNAL OF ASIAN AND AFRICAN STUDIES
SUPPLEMENT

No.02

アジア・アフリカ言語文化研究

別冊

CONTENTS

- 1 序文
- 7 **Towards Ideal Reference Grammars**
WATANABE, Honoré
理想の参照文法書に向けて
渡辺 己
- 21 **Reference Grammars of Japanese**
KATO, Shigehiro
日本語の参照文法書をめぐって
なぜ日本語の参照文法は書かれないか
加藤 重広
- 39 **A Guide to Reference Grammars of Mongolic Languages**
YAMAKOSHI, Yasuhiro
モンゴル語族の文法書
山越 康裕
- 73 **On the Chinese Reference Grammars**
KAWASUMI, Tetsuya
中国語の参照文法書について
川澄 哲也
- 107 **Issues in the Reference Grammars of Tibeto-Burman Languages in China and Its Neighboring Area**
HAYASHI, Norihiko
中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題
林 範彦

- 121 **Issues in the Reference Grammars of Tibeto-Burman Languages in India and Its Neighboring Area**
SAWADA, Hideo
インドおよび周辺地域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題
澤田 英夫
- 149 **Bibliography of Descriptive Grammars of Tibeto-Burman Languages**
SAWADA, Hideo and HAYASHI, Norihiko
チベット・ビルマ諸語の参照文法書目録 [抜粋版]
澤田 英夫・林 範彦
- 183 **Reference Grammars on Burushaski**
YOSHIOKA, Noboru
ブルシャスキー語の文法書について
吉岡 乾
- 201 **On Reference Grammars of Uralic Languages**
MATSUMOTO, Ryo
ウラル諸語の参照文法書について
松本 亮
- 213 **Reference Grammar of Bantu Languages**
The Role of Reference Grammars in the Study of Bantu Languages
YONEDA, Nobuko
バントゥ諸語の参照文法書
バントゥ諸語研究における参照文法書の位置づけ
米田 信子
- 227 **Reference Grammar of Lamba by C. M. Doke**
Focusing on His Analysis on Tense and Aspect System
MAKINO, Yuka
C. M. Doke によるランバ語の参照文法
テンス・アスペクト分析にみられる問題点
牧野 友香

247 **Grammatical Descriptions of Andean Languages**

EBINA, Daisuke

南米アンデス先住民語の文法書

蝦名 大助

序 文

本論集は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下、AA研）が実施した共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」の成果論集である¹。

本課題は、2016年度から2017年度までの2年間、AA研所員4人、所外研究者15人、計19人のメンバーで、都合5回の研究会をおこなった。課題の代表者・副代表者を、渡辺己・澤田英夫（ともにAA研）がそれぞれ務めた。

ここで、そもそも何故、現筆者・渡辺己が本課題を立ち上げるに至ったか、個人的な経験談になるが、述べておきたいと思う。

まず、筆者は北アメリカ先住民諸語を専門とし、なかでも北西海岸に分布するセイリッシュ語族、特にその中のスライアモン語²を調査研究してきた。筆者が調査研究を始めた1990年には、この言語は先行研究がごく限られたものしかなく、必然的に現地調査をおこない、話者から聞き取り調査をし、音素を立て、文法を解き明かしていくことがやるべきことであった。筆者の博士論文（2000年、京都大学）は同言語で複雑な様相を見せる形態論を記述したものであり、それに統語論の概略を加筆修正を施したWatanabe (2003)は、同言語のもっとも大部な文法書である。そのような研究をしてきたこともあり、記述が十分にされていない一言語の文法全体をどのよう

にひとつの文法書にまとめるかということが、筆者の大きな関心のひとつになっている。さらに筆者は2014年の日本言語学会夏期講座（名古屋大学）で「形態論」の講師を担当した。その際に教材として30頁のテキストを執筆することが課され、世界の言語に見られる形態法の多様性を伝えるために、さまざまな言語の文法書にあたった。

ところが、執筆を始め、ある言語現象について具体例をさまざまな言語から引いて示そうと文法書を調べ始めると、予想をはるかに超えて作業が難航した。特に形態法について、かなり多くの文法書にあたって調べた。それは例えば重複法であったり、接中辞、あるいは超分節素が形態法的に意味機能を担う例についてであったりした。実際に個別の文法書にあってみると、思っていたより使いにくい、あるいは分かりにくい文法書が多いことに気がついた。そもそも、ある形態的現象について、自分の専門の言語・語族以外で、それを持つ語族・地域を知っていても、どの文法書を見れば分かりやすい例が見つかるかが分からなかった。

短い文法書の方が当然、情報が見つけやすいが、それは情報が少ないことも意味し、探している現象についての例がない場合がある。あるいは載っていても1例のみしかない場合もあった。

渡辺己. 2022. 「序文」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 1-5.

DOI: <https://doi.org/10.15026/116955>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

¹ 本論集は、編者および一部の執筆者による内部査読のうえ、匿名査読者2名による査読を受けた。査読者にはお礼を申し上げたい。

² この言語をどう呼ぶかは問題があるが、本稿ではスライアモン語という名称を使う。詳しくはWatanabe, Honoré. 2003. *A morphological description of Sliammon, Mainland Comox Salish, with a sketch of syntax*, Endangered Languages of the Pacific Rim Publication Series, A2-040, Suita (Osaka): Osaka Gakuin University. pp.2-3 参照。

逆に、大部で網羅的な文法書だと、求めている情報や具体例がどこに載っているか大変探しにくい場合があった。あるいは、例が載っているが、その形態素分析（ハイフンによる分節）やグロスが施されていないために、その言語や語族の専門家以外には分からない文法書もあった。刊行年が古く（タイプライターで打ったものや、ガリ版刷りのようなものなど）、掲載されている情報がどれほど信頼できるものか分からない場合もあった。

調べている言語現象をテーマとして扱った研究書や論文が見つかったこともあり、それらは有益な場合もあったが、結局そこに載っている言語データがその筆者の一次資料ではなく、他の文献から引用されている場合は、やはり原典にあたる必要があり、それは参照文法書であることが多かった。そしてその文法書にあたってみると、すでに述べてきたような問題があったり、中には原典から間違っただけで引用している場合もあった。

このような作業を通して、筆者は参照文法書について改めて考えさせられた。端的に言えば、「理想の参照文法書」とはどのようなものか、それはどういう要件を満たしているべきなのか、そしてそのような理想の参照文法書を書くにはどうしたら良いか、ということである。

記述的な態度を持ち、細分化された言語の一部の現象ではなく、言語全体の記述をおこなおうと研究している者であれば、誰しも同じような思いを持ち、考え、悩みながら対象言語に取り組んでいるはずであろう。言語の研究は、対象言語の一側面、個別の言語現象だけを扱うのはごまかしが効くという点で「簡単」だと言えるかもしれない。その現象だけきれいに分析し説明ができたとしても、問題はその分析がその言語全体の分析・説明の中でも成立するかどうかである。一言語の文法全体を書こうとすると、それまでの分析はほころびを見せるようになる。ある部分をきれいに分析できたと喜んでいても、文法の違う部分を分析しようとした時、きれいに見えた分析ではどうにも当てはまらなくなり、最初に戻って分析をやり直さなければならなくなることは、文法全体の記述に挑んだ者であれば、全員が経験しているはずである。

本課題を企画するにあたり、何名かの研究者に相談してみたところ、言語の文法全体を捉えようともがいているひとは、参照文法書について、筆者と同じような強い関心と大きな悩みを抱えていることが分かった。そして、さまざまな言語・語族、そして地域で記述研究に従事する研究者を集め、それぞれが研究している言語・語族の参照文法書を解説しつつ、そこから、一言語の文法全体を記述しようとする時にどのような問題があるか、参加者の間に共有し、討議することを目的として本課題を立ち上げることができた。筆者と同じように、先行研究が少ない、あるいはまったくない言語を対象とし、現地調査で自ら一時資料を収集し、それを基に参照文法書をまとめようとしているものが多くなったが、その一方で、日本語、中国語、朝鮮語・韓国語のような研究の歴史が長く、参照文法書がすでにいくつも刊行されている言語の研究者にも参加してもらうことで、対象とする言語・語族と参照文法書が多様になった。本論集は、5回の研究会を通しておこなわれた発表と議論の一部をまとめたものである。本課題の参加者は、議論を通してそれぞれに得るところがあったと思うが、共通して感じたこととしては、我々のすべき文法記述の仕事は、まだまだやるべきこと、取り組むべき言語が山のようにあるということである。

本課題の参加メンバーは以下の通りである。(所属は当時のもの。)

| 氏名 | 所属機関所属部局 | 研究会等での役割 |
|-------|----------------------------|--------------------------|
| 渡辺己 | 東京外国語大学 AA 研 | セイリッシュ語族 |
| 加藤重広 | 北海道大学大学院文学研究科 | 日本語 |
| 黒木邦彦 | 神戸松蔭女子学院大学文学部 | 日本語方言 |
| 下地理則 | 九州大学大学院人文科学研究科 | 南琉球語 |
| 新永悠人 | 成城大学 | 北琉球語 |
| 山越康裕 | 東京外国語大学 AA 研 | モンゴル諸語 |
| 児倉徳和 | 東京外国語大学 AA 研 | ツングース語族 |
| 川澄哲也 | 福岡大学言語教育研究センター | 中国語 |
| 千田俊太郎 | 京都大学大学院文学研究科 | パプア諸語, 朝鮮語 |
| 長屋尚典 | 東京外国語大学総合国際学研究院 | オーストロネシア諸語 |
| 林範彦 | 神戸市外国語大学外国語学部 | チベット・ビルマ諸語 |
| 澤田英夫 | 東京外国語大学 AA 研 | ビルマ諸語 |
| 松本亮 | 京都外国語大学 | ウラル語族 |
| 吉岡乾 | 国立民族学博物館民族社会研究部 | ブルシャスキー語および北パキスタン 諸言語 |
| 仲尾周一郎 | 京都大学大学院アジア・アフリカ地域 研究研究科 | アフロ・アジア語族 |
| 米田信子 | 大阪大学大学院言語文化研究所 | バントゥ諸語 |
| 阿部優子 | 東京外国語大学 AA 研 | バントゥ諸語 |
| 牧野友香 | 大阪大学大学院言語文化研究科 | バントゥ諸語 |
| 蝦名大助 | 神戸山手大学現代社会学部 | ケチュア語族 |

(ほぼ日本から西回り順)

本課題の研究会は以下の日時, 発表者, 発表タイトルでおこなわれた。

2016 年度第 1 回研究会 (通算第 1 回目)

日時: 2016 年 7 月 24 日 (日) 10:00-15:00

場所: AA 研マルチメディアセミナー室 (306)

主催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

1. 渡辺己 (AA 研所員): 「趣旨説明と参照文法書について」
2. 山越康裕 (AA 研所員): 「モンゴル語族の文法書」
3. 児倉徳和 (AA 研所員): 「ツングース語族の文法書」

2016 年度第 2 回研究会（通算第 2 回目）

日時：2016 年 11 月 26 日（土）13:00-18:00, 2016 年 11 月 27 日（日）10:30-15:00

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

11 月 26 日

1. 黒木邦彦（AA 研共同研究員・神戸松蔭女子学院大学）：「日本語方言の文法書について：通時的観点から」
2. 加藤重広（AA 研共同研究員・北海道大学）：「日本語の文法書について」
3. 吉岡乾（AA 研共同研究員・国立民族学博物館）：「ブルシャスキー語の文法書について」
4. 全員：議論

11 月 27 日

1. 新永悠人（AA 研共同研究員・成城大学）：「日琉諸方言の文法書：研究史の整理」
2. 下地理則（AA 研共同研究員・九州大学）：「日琉諸方言の文法書：理論的・方法論的な問題点と今後の動向について」
3. 全員：議論と今後の予定について

2016 年度第 3 回研究会（通算第 3 回目）「バントウの会」

日時：2017 年 3 月 27 日（月）13:00-18:00

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

1. 渡辺己（AA 研所員）：「はじめに」
2. 米田信子（AA 研共同研究員・大阪大学）：「バントウ諸語の参照文法書—バントウ諸語研究における参照文法の位置づけを中心に—」
3. 阿部優子（AA 研共同研究員・AA 研特任研究員）：「タンガニイカ湖バントウ諸語の参照文法」
4. 牧野友香（AA 研共同研究員・大阪大学大学院生）：「ランバ語の文法書—動詞に関する問題を中心に」
5. 全員：全体討議および連絡事項等

2017 年度第 1 回研究会（通算第 4 回目）「シナ・チベットの会」

日時：2017 年 7 月 15 日（土）13:00-18:30

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

1. 渡辺己（AA 研所員）：「はじめに」

2. 川澄哲也 (AA 研共同研究員・松山大学) : 「中国語の参照文法書について」
3. 林範彦 (AA 研共同研究員・神戸市外国語大学) : 「中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」
4. Tun Aung Kyaw (AA 研特別招へい教授) : “Problems Arising from Compiling a New Reference Grammar of Modern Colloquial Burmese”
5. 澤田英夫 (AA 研所員) : 「インドおよび周辺地域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」
6. 全員 : 全体討議および連絡事項等

2017 年度第 2 回研究会 (通算第 5 回目)

日時 : 2018 年 3 月 6 日 (火) 10:30-18:00, 2018 年 3 月 7 日 (水) 10:30-15:00

場所 : AA 研マルチメディア会議室 (304)

主催 : 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

3 月 6 日

1. 仲尾周一郎 (AA 研共同研究員・大阪大学) : 「北東アフリカ非バントゥー系諸言語の文法」
2. 渡辺己 (AA 研所員) : 「セイリッシュ語の文法書について」
3. 蝦名大助 (AA 研共同研究員・神戸山手大学) : 「南米先住民諸語の文法書」
4. 千田俊太郎 (AA 研共同研究員・京都大学) : 「パプア諸語の文法書について」, 「朝鮮語の文法書について」
5. 全員 : 全体討議

3 月 7 日

1. 松本亮 (AA 研共同研究員・京都外国語大学) : 「ロシア内ウラル諸語の文法書」
2. 長屋尚典 (AA 研共同研究員・東京外国語大学) : 「西オーストロネシア諸語の文法書」
3. 全員 : 全体討議および連絡事項等

最後に、本課題に参加していただいた方々、そして本論集に寄稿して下さった執筆者の皆さんにあらためてお礼を申し上げたい。本論集の編集過程で、AA 研で刊行している学術誌『アジア・アフリカ言語文化研究』の「別冊」をシリーズとして新たに立ち上げることが決定され、そのシリーズで本論集を刊行することになった。そのため、「別冊」シリーズの投稿規程などが整備されるのを待つことになり、さらに 2020 年春頃から新型コロナウイルスによる世界的パンデミックが起り、その対応に追われるなどしているうちに、執筆者の皆さんには初稿の提出から刊行まで、ひどく長い時間をお待たせしてしまった。本課題の代表者としてお詫び申し上げたい。

渡辺己 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

理想の参照文法書に向けて*

渡辺 己

Towards Ideal Reference Grammars

WATANABE, Honoré

Keywords: reference grammar, grammar writing

キーワード: 参照文法書, 文法記述

1. はじめに
2. 参照文法書について
3. おわりに

1. はじめに

記述言語学の仕事とは、一言語について「文法・辞書・テキスト」を書くことである。この3つを整えることを唱えた「アメリカ人類学の父」フランツ・ボアズ (Franz Boas, 1858–1942) にちなみ、今でも「ボアズの3点セット」と呼ばれる。この中でも文法を書くことについて、R. M. W. Dixon, そして Nicholas Evans と Alan Dench は次のように言っている。

“If every person who called themselves a linguist settled down to provide a full description of a single previously undescribed language, then he or she would justify the title. This is not an easy task. It invariably demands extended field work, often in difficult circumstances; but it is—as I and others have found—the most satisfying and rewarding of tasks.” (Dixon 1994: 229–230)

“The writing of a descriptive grammar is a major intellectual and creative challenge, often taking

渡辺己. 2022. 「理想の参照文法書に向けて」. 渡辺己・澤田英夫(編) 『参照文法書研究』. (アジア・アフリカ言語文化研究別冊 02.) pp. 7–20. DOI: <https://doi.org/10.15026/116956>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

* 本稿は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) で 2016 年度から 2 年間にわたり実施された共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」(以下、本稿では「本共同研究課題」と呼ぶ) の成果の一部であり、筆者・渡辺己による同課題第 1 回研究会における趣旨説明をもとに加筆修正したものである。本稿の初稿に有益なコメントをくださった山越康裕氏と澤田英夫氏に感謝の意を表したい。本稿の不備や間違いはもちろん筆者ひとりに帰すものである。本稿にあげたスライアモン語の例は筆者の現地調査によるものであり、この言語を教えてくださいました話者の方々に感謝したい。My deepest gratitude goes to the late Mrs. Mary George, the late Mrs. Agnes McGee, the late Mr. and Mrs. Dave Dominick, the late Mrs. Marion Harry, and Mrs. Elsie Paul. 筆者の現地調査は日本学術振興会科学研究費 (課題番号 19H01253 および 19K21627) の助成を受けた。

decades to complete. It calls on the grammarian to balance a respect for the distinctive genius of the language with an awareness of how other languages work, to combine rigour with readability, to depict elegant structural regularities while respecting a corpus of real and sometimes messy material, and to represent the native speaker's competence while recognising the patterns of variation inherent in any speech community.” (Evans and Dench 2006: 1)

文法書をいかにまとめるか、あるいは未記述の言語をいかに調査して捉えるかということは、長年、考察の対象となってきたが、この10年から15年ほどの間に、文法書をまとめるということ自体が論考の対象となった。例えば、書籍やまとまった論集に Aikhenvald (2015)¹, Nakayama and Rice (2014), *Studies in Language* 誌での2006年 (Vol. 30, Issue 2) の特集, Ameka et al. (2006) などあげられる。単独の論文でもエヴァンズ (2009) や下地 (2021) などがある。

現在は、しっかりとした査読を経た大部な記述文法書が多く刊行されている。主だったシリーズとしては、De Gruyter Mouton の Mouton Grammar Library (2021年春現在、刊行数は90を超える)、Language Science Press の Comprehensive Grammar Library (2021年以前は *Studies in Diversity Linguistics* というシリーズ名だった) などがあり、シリーズではなくとも大部な文法書が多く出版されている。日本では、AA研の企画を受け、くろしお出版から「シリーズ記述文法」が2018年より刊行され始めた。2021年現在、下地理則氏の『南琉球宮古語伊良部島方言』(シリーズ第1巻, 下地 2018) と、山田敦士氏の『パラウク・ワ語』(シリーズ第2巻, 山田 2020) が刊行されている。本共同研究課題参加者6名が同シリーズの編集委員として関わっている。

参照文法書そのものに対する評価も言語系の学会で高まってきている。Association for Linguistic Typology (言語類型論学会) では、参照文法書に与えられる賞がふたつ設けてある。Pāṇini Award (パーニニ賞) と Georg von der Gabelentz Award (ゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツ賞) である。(前者は刊行されていない学位論文のもの、後者は刊行されている書籍に対して送られる。)

しかしその一方で、参照文法書が刊行されている言語は、正確に把握するのはむづかしいものの、世界の6000以上の言語のうち、まだまだごく少数にとどまっていることは間違いないであろう。

2. 参照文法書について

参照文法書 (reference grammar) とは、一言語の全体を網羅的に記述した文法書であり、語学用の文法書が規範的であるのとは異なる。記述文法書 (descriptive grammar) とも呼ばれる。本課題ではこれらを同義として使った。

それでは、理想の参照文法書はどのような要件を満たしているべきであろうか。これは簡単な問題ではないことは明らかである。それが分かれば、どの研究者もそのガイドラインに沿って文法を記述していけば良いはずである。ところが、言語は多種多様であり、あるタイプの言語に適した記述方法が他の言語の記述に適したものとは到底言えないことは改めて言うまでもない。さらに、一言語内では、ひとつひとつの部分が互に関連し、連動し、支え合う。その一部分の記述は、その言語の他の部分の記述に影響する。

さらに言語は、構造主義的に考えられてきたほどに静的なものではなく、共時態とは言っても、

¹ 同書の書評に林 (2016) がある。

常に変化の兆しをそこかしこにはらみ、あるいはかつての姿を部分的に引きずっている。言語とは、いわば捉えどころのない巨大なシステムであると言える。それを捉えようとする文法書には自ずと限界がある。しかし、理想の参照文法書に求めるべき共通した点がいくつかある。以下本稿では、まず §2.1 正確性 (accuracy) ・信頼性 (reliability), §2.2 網羅性 (comprehensiveness), §2.3 利便性 (accessibility), §2.4 可読性 (readability) に分けて考察し、そのあとに、§ 2.5 術語, §2.6 例, § 2.7 説明・分析の正当性・根拠, § 2.8 類型論・通言語的観点について考える。便宜的にこのように分けたが、かなり重なり合う部分がある。そしてこれらは時に矛盾する要求であるが、参照文法書はできる限りそれに応えるものでなければならない。

2.1. 正確性 (accuracy) ・信頼性 (reliability)

改めて言うまでもないが、参照文法書にはその言語に関する正確な情報が必須である。文法書のもととなる対象言語のデータの正確性、さらに分析の正確性が求められる。正確でなければ信頼できる参照文法書にならない。特に、研究が進んでいない少数言語や危機言語の場合、その参照文法書の記述が後世に残る唯一のものとなる可能性も高い。北アメリカの先住民諸語に関して言えば、録音機器もない 100 年以上も前に現地調査した E. サピア (Edward Sapir, 1884–1939) や J. P. ハリントン (John Peabody Harrington, 1884–1961) の記録が今でも価値を失わず、利用され続けているのは、ひとえにその音声学の記録の細かさと正確さによるものである。

逆の例として、筆者が調査しているスライアモン語²の先行研究があげられる。Hagège (1981) は 180 ページ程の短い著作であるが、同言語の全体を扱った参照文法書である。しかし、残念なことに軟口蓋の /xʷ/ と後部軟口蓋 (口蓋垂) の /χʷ/ (IPA では χʷ) の対立を認めておらず、一音素にまとめてしまっている。同書より前に公刊された論文 (例えば, Davis 1970) でも、現筆者のものを含む後続した論考でも、この 2 音は音韻的に対立する別の音素としている。さらに、同書は母音について、/a, e, e, o, ə/ とこれらに対応する長母音 /a:, e:, e:, o:/ を音素として立てている。後続する研究では母音音素は /a, e, o, ə/ (ただし、記号としては /a, i, u, ə/ を使っている) のみが立てられており、長母音は認めていない。確かに音声的に複雑なことで知られているセイリッシュ語族の言語なので、間違いも起こる。しかし、音韻分析でこれほどの間違いがあると、それを基にした文法の記述がいかに混沌としたものになったかは容易に想像できるであろう。(同書に関するこれらの批判については、Kroeber 1989 の書評に詳しく書かれている。)

もちろん、著者がどれほど慎重であろうと、音声の聞き取りであれ、音韻や文法の分析であれ、意図せず間違いを起こすことはある。しかし、防ぎうる間違いや言語データの偏りは批判されるべきである。

さらに注意すべきなのは、著者が自分の主張や理論的枠組みに都合の良いデータを強引に話者に言わせたり、最悪の場合では言語データを著者が作ってしまうことである。すなわち、データの捏造である。この問題については、例えば Mithun (2014) が論じている。Thomason (1994) は、アメリカ言語学会の機関紙 *Language* の編集長の時、間違ったデータを使った先行研究からそのデータを検証なしに孫引きしている場合が驚くほど多いと報告をしている。このような問題を防ぐために、データ自体も公開し検証可能にすべきであるとの議論には、例えば Berez-Kroeker

² スライアモン語はカナダで話される先住民諸語のひとつ。系統的にはセイリッシュ語族に属する。同言語をなんと呼ぶかは問題があり、かつてはコモックス語本土方言 (Mainland Comox) と呼ばれていた。最近ではスライアモン語の *?ay?əjuθəm* という呼び方も使われるようになったが、この語も問題がないわけではない。本稿ではスライアモン語と呼ぶ。詳しくは Watanabe (2003: 2–3) を参照されたい。

et al. (2018) がある。(この点については §2.6 でも触れる。)

2.2. 網羅性 (comprehensiveness)

参照文法書は、対象言語のあらゆる側面をすべて網羅的に記述しているべきである。ただしこれは理想であるものの、実際、一言語は巨大であり、複雑に入り組んだ、しかし精緻な体系をなし、さらに体系からの逸脱も多く、その全体像をすべて捉えるのは時に絶望的になる。一言語全体の記述に真剣に取り組んだことのある研究者ならば、その対象を前に立ちすくんだことがあるはずだ。

確かに、一言語全体に現れる構造・現象をすべてカバーするのはむづかしい。しかし、参照文法書では、その骨格は網羅的に捉えたいところである。ここで骨格と呼ぶのは、現れる音素および音素の配列、語や文の構造、語形成に現れる形態素などである。これらはもれなく記述されていることが求められる。例えば、動詞が主語と目的語の人称・数で活用するのであれば、その組み合わせをすべて載せたパラダイムに穴があってはいけない。

参照文法書が著者に要求することは多い。いくら音韻論が得意だったり専門であったりしても、参照文法書を書くとなれば、音韻論だけを詳しく書くわけにはいかない。形態論も統語論も書かねばならないし、さらにもっと大きな談話単位のこと書かねばならない。

2.3. 利便性 (accessibility)

参照文法書は分かりやすく、参照しやすい、使いやすいものとなっているべきである。知りたい情報へのアクセスが容易であるという利便性も重要である。平明な文章で説明が書かれていることが利便性の大前提だということは言うまでもない。説明文を読んでも、読み手が意味を理解できない、あるいは意味を理解するのに苦労するようではいけない。それでは誤解が生じる可能性ができてしまう。参照文法書に限った話ではなく、言語学の研究論文・書籍は、文学ではないのであるから、その説明の内容だけが読者の頭に入っていかななくてははいけない。文体に凝るようなことはするべきではない。電化製品の取扱説明書を書くくらい心構えが良いと思われる。これは逆に言うと、言語学の研究論文・書籍を書くために文才はいらないということであり、訓練によって身につけられる技術で十分であるということでもある。

さて、本文の読みやすさの他に、外形的な点で、参照文法書の利便性を増すものがいくつかあげられる。まず重要なものとしてあげられるのは目次である。目次に連動しているのは、章やセクションの立て方である。セクションの中には、サブセクション、さらにその中にサブサブセクションを立てるものも多い。そうすることによって、参照文法書全体のどの部分に何を書いているかが明確になる。下位セクションをどれくらい深く作るかは、何が利便性を増すか考慮しなくてはならない。§1.2.3.4 くらいまでは視認性が良いが、§1.2.3.4.5.6 くらいになると、読みにくさの方が増してくる。もちろんデジタル版であれば、その下位セクションにリンクを張り、クリックするとそこに飛ぶようにできるので、視認性の問題は軽減するかもしれない。

目次にどの階層まで出すべきかというのも思案のしどころであり、参照文法書の著者によって異なる。すべての下位セクションを目次に表示しているものもあれば、例えば、実際には §1.2.3.4 などの階層までであるが目次には §1.2、§1.3 というレベルまでしか表示しないものもある。

目次の他に利便性を上げるものに、索引がある。適切に作られた索引は、その文法書で調べたいことにすぐに行き着けるようになるので、読み手の助けになる。

もうひとつあげるとすると、例番号がある。論文で例に番号を付さないことは考えにくい

参照文法書の場合、大部になるため、すべての例に先頭から番号を振っていくと数百、数千という番号になってしまい、これも視認性は悪い。そこで、章ごとに番号を振り直したり、セクションごとにそれをしたり、文法書によってさまざまである。例えば、Suttles (2004) はセイリッシュ語族ハルコメレム語（マスクイアム方言）の参照文法書であるが、例が非常に多く、すべてのものには番号が振られていない。説明に必要な場合だけ、セクションごとに (a), (b), (c)... と番号ではなくアルファベットが付されている。

2.4. 可読性 (readability)

研究とは、これまで分からなかったことを解明することだと考えられがちであるが、それは研究のいわば半分であり、もう半分はその成果を伝えることである。すなわち、どれほどの新発見があろうと、それが発見者本人以外に伝わらなかつたら、研究の意味がない。参照文法書も同じく、著者以外のひとが読んで分かるものでなければ意味がない。特に参照文法書の場合は、当該言語の専門家以外にも、そして当該言語が属する語族・地域の専門家以外のひとにも分かるように書くのが重要である。

参照文法書の利用者や利用の目的によって異なるが、一冊の文法書となっているからには、最初から順を追って読み進めることを想定したものであってほしい。大まかに言えば、その章立ては「当該言語の概要、音声・音韻論、形態論、統語論」と進むのが一般的である。このあとに、「情報構造、談話」などが入ることもあろうし、最後に付録として「テキスト、語彙集」などが付いていることもある。

一冊の文法書を最初から読み進め理解できるものにするということは、ある箇所は、そこまで読んできた箇所の知識だけで理解できるように、説明を積み上げていくということである。読んでいる箇所よりも後ろに説明されることを知らなくては分からないというのは、極力避けなくては行けない。ここで「極力」と言うのは、一言語はすべての部分がそれぞれお互いに連動しているために、時には説明する順序が思うようにはいかないこともあるからだ。一言語の内部はそれぞれ連動し、互いに支え合って、ひとつの体系をなしている。それを平面の文法書で表すのは容易ではない。そこで、さまざまな部分に関係しあっていることを示すために、相互参照 (cross-reference) を活用するのが良い。

通読を想定しない構成の極端な例が、Newman (2000) である。同書は、750 ページを超える大部で詳しい、そして信頼できるハウサ語の文法書である。しかし、同書の副題 “*An encyclopedic reference grammar*” が語るように、百科事典的な構成で、最初から通読できるものではない。若干、具体的に述べると、同書は 80 章からなり、それぞれの章であるトピックについて詳述している。ところがその章立ては、そのトピックのアルファベット順に、1. Abstract Nouns (Derived) から、80. Writing Systems: Orthography まで並んでいる。そのため、例えば 54. Phonology は、53. Numerals and Other Quantifiers に続き、そのあとには 55. Pluractional Verbs, 56. Plurals, 57. Prepositions, 58. Pro-Verb yi, 59. Pronouns が並ぶ。第 54 章の音韻論と深い関係にある超分節音素は、71. Tone and Intonation にある。ちなみに、その直前は 70. Tense/Aspect/Mood (TAM)、直後は 72. Topicalization である。ハウサ語の専門家が知りたいことを調べるためには便利なのかもしれないが、専門外の者が同書を読んでこの言語の全体像を掴むのは大変である。

2.5. 術語

文法記述をする際には「術語」を使うことになる。術語はすなわち言語学における専門用語であり、ひとつの専門用語は、ひとつの意味、ひとつの機能、あるいはひとつの構文のみ限定的に指すべきものである。すなわち、形式（シニフィアン）と内容（シニフィエ）が厳密に一対一対応していることが理想である。自然科学ではこれが実現されており、例えば元素記号なら、Hは水素、Nは窒素、Oは酸素と決められている。言語学の分野では、もっとも自然科学寄りの音声学が一番その様相を呈している。例えば、調音点について「両唇音」と言えば上下両方の唇で閉鎖あるいは狭めを作り調音される音であり、「軟口蓋音」と言えば、それが軟口蓋と舌背で作られて調音されるものであり、それ以外の意味はありえない。

ところが、音声を離れると、言語学の術語は途端に細心の注意を要するものとなる。同じ術語が対象言語によって、さらに研究者・文法書著者によって、異なる構造を指す場合が少なくない。

例えば、「受動態 (passive voice)」と呼ばれる現象が多くの言語で見られる。この名称で呼ばれる言語構造は、実に多様である。例えば、日本語のいわゆる「迷惑受け身」の「雨に降られる」「夫に死なれた」は、他動詞ではなく自動詞から派生されている点で、典型的な受動態とは大きく異なる。そうすると、ここで注意すべき点がふたつある。ひとつは、文法書の読み手として、その記述で「受動態」と呼んでいるものが、どのような構造をなしているのか、典型的なものなのか、あるいは何か変わったところがあるのか、注意しなくてはならない。「これは受動態です」というだけの説明を鵜呑みにしてはいけない。

もうひとつは、逆に文法書の書き手の立場として、記述しようとしている形式が、受動態と呼べるものかどうか、受動態と呼ぶとすれば、まず、そこで言う「受動態」の定義はどういうものか、そしてその形式がその定義に合致しているのかいないのか、定義から逸脱する点はないのかなどを説明しなくてはならない。

一例を筆者が調査しているスライアモン語からあげる。問題とするのは(1a)であり、これが受動態と呼べるかどうかである。対応する他動詞文は(1b)である³。

(1) a. ?aq'-a-t-anapi-m

chase-LV-CTR-2PL.OBJ-PASS

'You (pl.) were chased.'

b. ?aq'-a-t-anapi-s

chase-LV-CTR-2PL.OBJ-3ERG

'He chased you (pl).'

(1a, b) いずれにも同じ形式の2人称複数目的語の接尾辞 *-anapi* が使われている。つまり、(1a)でも被動者の標示は目的語のままである。(ちなみに、2人称複数主語は目的語接尾辞とは異なる形式で、クリティック *čap*, あるいは接尾辞 *-ap* で表される。) この点だけを考えると、他動詞文と比べて被動者の昇格がなく、典型的な受動態とは言えない。しかし、筆者は Watanabe (2003: 283-285) において、これは受動態と呼べる十分な根拠があると論じた。ここで詳述はしな

³ 記号・略号は次の通り：_ = clitic boundary, ~ = reduplication boundary, 2 = second person, 3 = third person, CTR = control transitive, DET = determiner, ERG = ergative, IMPF = imperfective, LV = link vowel, OBJ = object, OBL = oblique, PASS = passive, PL = plural.

いが、具体的には、(1a, b)に見るように、能動態と規則的な交替があること、対応する他動詞の動作者が降格されること、他動詞と比べて動詞結合価が減り1項動詞（すなわち自動詞）になっている点である。ちなみに(1a)では動作者が表されていないが、それを明示する場合は、次の(2)に見るように、斜格の名詞項にする必要がある⁴。

- (2) ?aɣ' -a-t-θ-əm ?ə̌ . ɣawgas
 chase-LV-CTR-3OBJ-PASS OBL grizzly.bear
 'He was chased by Grizzly.'

同様の術語の問題は、「語」、「語幹」、「語根」、「付属語」、「文」、「品詞」などと枚挙に暇がなく、言語のほぼ全般に渡る。言語がいかに多様かを物語っているが、それだけ注意して読み、書かねばならない。参照文法書ではこのような基本的な概念についても、明確に説明されていないといけない。

ある術語が一般的に意味する現象から逸脱する場合、その個別言語の現象に合う特殊な術語を作ってしまった方が誤解がないと思われる場合もある。しかし、いたずらに術語を増やしても、それは読み手の負担を増すことになるので注意が必要である。

耳慣れない術語の使用も問題である。一般的とは思われない術語の例として、セイリッシュ語族の文法書から以下のようなものがあげられる。いずれも、オランダの言語学者 Aert Kuipers とその教え子たちによる文法書に現れる。(以下、Kuipers (1967) はスクワミッシュ語、Nater (1984) はベラ・クーラ語、van Eijk (1997) はリレット語のいずれも極めて質の高い参照文法書である。)

- 'verba sentiendi et declarandi' (Kuipers 1967: 192–193, Nater 1984: 103–104, van Eijk 1997: 110)
 verba sentiendi は「知覚動詞 (perception verbs)」, verba declarandi は「告知動詞 (verbs of saying)」
- 'svarabhakti vowel'
 "In a few words of the shape /CVR(?)C/ variants with a **svarabhakti**-vowel between /R/ and /C/ and without glottalization were recorded. [...]" (Kuipers 1967: 41 強調-渡辺)
 これは「挿入母音」のことを指し、サンスクリットの特に *l* あるいは *r* と、後続子音の間に挿入される母音のことを言う。
- 'bahuvrīhi'
 "The prefix /nəx°-/ occurs with a number of stems containing somatic suffixes to form **bahuvrīhi** complexes 'sad-faced', 'bald-headed', etc. Before consonants proper the alternant /n-/ appears: /nəx°-(h)i-a'īus/ 'big-eyed' (cf. /hii/, hi-/ 'big', suff. /-aīus/ 'eye'), [...]" (Kuipers 1967: 114–115 強調-渡辺)
 'bahuvrīhi' はサンスクリット学における「外心的複合語」を指し、特に指示対象を持つ性質を特定することによってその対象を指すものを意味する。例えば、英語で言えば 'much rice' が「裕福な者」を意味する (Scalise and Bisetto 2009)⁵。

⁴ スライアモン語の名詞項は、無標で現れる正格か、斜格標識が前に付く斜格の2種類である。正格名詞項は自動詞主語と他動詞目的語を表し、それ以外は斜格で表される。他動詞主語が名詞項で表されることは極めて稀で、表される場合は受動態の斜格として表されることが多い。

⁵ しかし、Scalise and Bisetto (2009) はこの術語を、複合語に関する術語の中で、問題があるものの筆頭にあげている：“(a) Terminology is often associated with a single language and thus not valid from an interlinguistic point of view” [...] “Problems

これらの用語のうち、‘*verba sentiendi et declarandi*’はラテン語で、他の文献でも見ることがないわけではないが、その他ふたつは他の参照文法書で見るとはまずないと思われる。現在なら各種術語辞典も多く、あるいはインターネット上で検索すればこれらの用語が出てくる。Wikipediaにも記述がある。しかし、読み手の負担になるような術語をわざわざ使わなくてもよいであろう⁶。

2.6. 例

ある文法現象や構造を説明するためには、当然ながら例が不可欠である。(日本語では、「例文」と呼ぶことが多いが、これは厳密には「文」を例示するものであるが、それよりも小さい句や節の例を指すこともある。それよりもさらに小さい単位、例えば、語や音節・モーラなどもあるので、本稿では「例」と呼ぶ。) 文法書であげる例については、Weber (2006) や Mithun (2014) が詳細に論じている。

例は、文法の説明と同等に重要であると考えられる。参照文法書の中で、構成(章立て)が骨だとする、説明する本文は血管と神経、例が肉だと言えるかもしれない。あるいは例は、本文(説明の文)よりもさらに重要と言えるかもしれない。というのは、本文での分析の説明が妥当なものであるかどうかは、例によって支持されるものであるし、分析に過ちがあったり、読み手が同意できないものであったとしても、それは信頼できる例があってこそ読み手が判断できるものである。さらに、例は読み手が二次的に利用できる価値の高い資料となりうる。特に研究が進んでいない言語や、危機言語の例は、「記録」の意味もあり、その分析に使われた理論的枠組みが古くなったとしても、例だけは将来に渡り貴重なデータとなることがある。

どのような例を選択してあげるかは、読み手のことを念頭に、理解しやすくする工夫が必要である。まず、本文の説明と、その言語現象を示す例は連動していなければいけない。すなわち、その例が何についての例なのか、あるいはその例のどの部分が問題としている部分なのか、本文で説明していることの例示なのか分かるようになっていなければならない。読み手がその例を分析や解釈しなくてはならないのでは混乱と誤解のもとになってしまう。

そして、当該参照文法書の中で、その例が出てくるまでの説明で理解できる例をあげるのが理想である。すなわち、その箇所よりもさらに後ろの情報がないと理解できないものは避けるべきである。ただし、これも実際は簡単なことではない。すでに述べてきたが、言語は異なる部分が互いに関係し支え合う。そのため、ある言語現象AとBについて説明をする際に、AについてはBを前提に説明しなくてはならないにも関わらず、Bについては、Aを前提にしなくてはならないという、まさに鶏と卵の関係にあるものばかりである。参照文法書の著者の力量がはかれるところである。

デジタル環境が進化するにしたがい、例の元データ、特に音声データをデジタルファイルとし

identified under (a) can be exemplified by the term *bahuvrīhi*. This Sanskrit word, meaning (*having*) *much rice* (cf. Whitney 1889: 502), has been used for identifying nominal compounds with possessive interpretation but ended up by indicating exocentric compounds *tout court*. As shown by Bauer (2001b: 700), the term *bahuvrīhi* was finally applied ‘to any compound which is not a hyponym of its own head element’. The use of the term *bahuvrīhi* as a generic label for exocentric compounds is thus an incorrect extension; *bahuvrīhi* in fact refers to a specific subclass of exocentric compounds, i.e. possessive compounds.” (Scalise and Bisetto 2009: 35–36)

⁶ 筆者がセイリッシュ語族の勉強を始めた1990年に最初に読んだのが Kuipers (1967) と Nater (1984) であり、言語学の術語集はごく限られていた。もちろんインターネットは存在せず、聞いたこともないこれらの用語が調べてもなかなか見つけれなかった。

て論文や書籍に付けて配布することが可能になった。データの容量が大きいものも、インターネット上に置いたデータファイルへアクセスできるようにすることで対応できるようになってきた。元のデータにアクセスできると、参照文法書や論文のデータの信憑性が保証され、第三者(読み手)によってさまざまな角度から検証することが可能になる。元のデータをアーカイブに入れ、読み手がそこにアクセスできるようにする形式は、今後さらに進むと思われる。この検証可能性の重要性については、Berez-Kroeker et al. (2018), Gawne and Berez-Kroeker (2018) などが詳しい。

2.6.1. 量・多様性

例の数については、簡単に言えば、「多からず少なからず」が理想であるが、ひとつの言語現象や構造を示すために、実際どのような例をいくつあげるかは熟考が必要である。紙幅の都合があり、物理的なスペースの制約のために多くはあげられない場合もある。文法全体を書いたものでも、「概説・スケッチ」の場合は、自ずと少数の例に限られるであろう。その一方で、参照文法書は紙幅の制約が緩いはずである。

まず、筆者がさまざまな文法書を調べていて気がついたのは、その言語の基礎的な言語現象・構造、すなわち無標・デフォルトのものについて、例が極端に少ないことがあった。これはその言語の専門家である著者にとっては、当たり前すぎて、意識がむしろ例外的な現象へ向いているためではないかと思われる。

例が少ないものの中には、一例しかあげていない場合もあり、それでは説得力と信ぴょう性に欠ける⁷。

逆に、例がいたずらに多いのも意味をなさない。参照文法書は語彙集や例文集ではない。(もちろんそれらを含むことはありうる。) 例えば、ある言語の「飛ぶ」という動詞の例文で、「鷹が飛ぶ」、「鳩が飛ぶ」、「すずめが飛ぶ」、「ツバメが飛ぶ」といくつも並んでいても、ただ名詞項が違うだけならば、それを10や20出す意味はなく、2,3あれば十分であろう。

例文は、そこに現れる人称やTAMなどに関して多様性があるのが望ましい。例えば、1人称が主語の例のみ提示されていると、3人称も同じなのかという疑問が生じる。主語が1・2人称か3人称かで、格標示が異なる言語が少なくないためである。さらに、3人称の場合は有生物、無生物、一般名詞、固有名詞、人名などで何らかの扱いが異なることがある。このような点も例の多様性に含めるべきである。

2.6.2. グロス

例には、各語に対応する「グロス」を(通常は原文の下、2行目に)付すべきである。ひとつの語が複数の形態素から形成されている場合は、形態素境界をハイフンなどで明示し、グロスは原則的にひとつひとつの形態素に振る。形態素が文法的機能を持つものであれば、分かりやすい略号を使い、英語ならば大文字、あるいはスモール・キャピタル(small capital)、小型英大文字)で表記し、語彙的なものと判別しやすくするのが慣例である。例えば、次はスライアモン語(Sliammon, セイリッシュ語族)からの例である。

⁷ あえて書誌情報はあげないが、筆者が専門とする語族に関する大部な論文に、分析の主張を支える肝となる例がひとつしかないものがあった。しかもその例の分析が間違っており、その主張を支えないものであったことがある。これも、同様の例を複数あげるということを徹底していれば回避できた問題ではないかと思う。

- (3) ʔa~ʔaq'-a-t-as tə tumiš
 IMPF~chase-LV-CTR-3ERG DET man
 'He is chasing the man.'

適切で分かりやすく、一貫したグロスは必須である。グロスがないと非常に分かりにくい、あるいはまったく分からない。例えば、次の抜粋は *Chamorro Reference Grammar* (Topping 1973: 77) の形態論を扱った章の最初の例文であり、品詞分類の説明について例示をしているものである。

Consider, for example, the word *dánkolo* 'big' in the following sentences:

Dánkolo si Juan
 'Juan is big.'

Hu li'e' i dánkolo
 'I saw the big one.'

Hu li'e' i dánkolo na taotao.
 'I saw the big person.'

Topping (1973: 77)

ここではグロスが付されておらず、本文に各語形の意味機能が説明してあるわけでもない。ここから読者が何をどう読み取ることを期待して、このような記述になったのか理解に苦しむ。確かに、ゆっくり考えれば、*dánkolo* が 'big' を意味するのであろうことは分かる。しかし、そもそも読み手にそのような負担をかけるべきではないし、読み手に分析をさせるべきではない。それは著者が意図していない誤読を引き起こすことになるからである。ちなみに、同書のシリーズとして同じく University of Hawai'i Press からいくつか文法書が出ているが、例文提示についてはどれも同じスタイルである。この文法書シリーズには対応する辞書も刊行されており、チャモロ語では Topping et al. (1980) がそれにあたる。ただし、文法書の方にはこの辞書があることが明記されていないため、すでにその存在を知らない読者には分からない。辞書があり、文法書を読む際にはそれを参照するように書いてあったとしても、掲載された論文を理解するために一語ずつ辞書で引かなければならないのは、読み手には大きな負担である。

もちろんグロスを付けることが、それほど簡単ではないことも少なくない。形態素と意味機能がきれいに一対一対応している場合は良いが、言語はそれほど単純にはできていない。特に同じ形態素に複数の意味機能がある場合、それが現れる例によってグロスを変え、そこで一番合う意味機能をグロスとすることも考えられる。例えば、次のスライアモン語の例に見る *-ʔut* という接辞がある。これは動詞的な語幹に付き、過去を表すが、名詞的な語、例えば親族名称など人間を表す語に付き「亡くなった、故」、あるいは「前の、別れた、元（その関係だった）」を意味し、普通名詞に付き「失くした」を意味する。

- (4) *k'wəq^w-ut*⁸ 「(木など) 割れた」 (*k'wəq* 「(木など) 割れる」)

- (5) *man'-ut*⁹ 「亡くなった父」 (*man* 「父」)

⁸ *q* から *q^w* への変化は後続の母音 *u* の円唇性の同化による規則的な変化。

⁹ *n* から *n'* への変化は後続の接尾辞初頭の声門閉鎖音によって引き起こされる規則的な変化。

(6) *gaqaθ-ut* 「前夫」(*gaqaθ* 「夫」)

(7) *kʷut'a-h-ut*¹⁰ 「失くしたスティック」(*kʷut'a* 「スティック¹¹」)

この接尾辞に対してそれぞれの例で、「過去、故、前、紛失」などという異なるグロスを振る方が、その語全体が表す意味に合致していきなり分かりやすいかもしれない。しかし、グロスが異なると、読み手としてはそれは異なる形態素だと取るのが自然であろう。それはいくら本文で、これが同一形態素であると説明を書きおいても、誤解を招きやすいので避けるべきである。

どのようにグロスを振ることにしても、読み手が誤解せず、すぐに理解できる原則を立てて、それを一貫して適用すべきである。グロスは読み手が例を理解する手助けになるべきものであり、読み手にグロスの「解説」を強いることになっては本末転倒である。

同じ形態素でも、機能が多岐に渡り、そのグロスをひとつに限って一貫して付すと、例文によってはかえって分かりにくくなる場合も考えられる。パラウク・ワ語の記述文法書である山田(2020)は、それを避け、同一形態素に複数種のグロスを振った例である。同書では、冒頭に文法機能を持つ形態素の一覧をあげ、どのようなグロスを付すかを示している。そこで例えば、*kah* は「場所、方向、手段、原因、補標」のいずれかのグロスが振られるが、同一の形態素であることが分かるようになっている(山田 2020: xvii-xviii)。

どのようにグロスを振るかは、分析の結果を反映しているものであるし、可読性を上げることにつながる。「魂は細部に宿る」と言うが、参照文法書の場合、それはグロスなのではないかと思われる。

2.7. 説明・分析の正当性・根拠

学習用の語学文法書と、参照文法書の大きな違いは、前者が規範的であるのに対し、後者は記述的であり、分析の根拠を説明していることにある。すなわち、参照文法書ではある言語事象を何故そのように分析するのか、根拠とともに明確な説明をしているべきである。

例えば、ふたつの形態が形式的に同じ場合、それらはひとつの形態素の異形態なのか、ひとつの形態素だがかなり異なるふたつ(以上)の意味機能を持つものなのか、あるいはふたつの異なる形態素なのかの問題となることがある。著者がどちらの分析を取るにせよ、それは根拠を示して説明をしなくてはならない。それは容易ではなく、分析者である著者も正解、あるいはより妥当な分析が何か、迷うこともある。そのような時は、下手にごまかさず、何故ここではこのような分析をして記述をするのか、他の分析の可能性はどういうものがあるのか、どこが分からず未解決なのかなどを正直に書いておくべきである。

説明がトートロジーになっていないことも重要である。言語は内部で互いに支え合い、関係し、連動する体系なので、説明もトートロジーになりやすいことに常に注意しなくてはならない。例えば、「動詞(語幹)」と「動詞接尾辞」について、前者については、「動詞接尾辞が付くもの」とし、後者は「動詞(語幹)に付く接尾辞」としたのではトートロジーで説明になっていない。

2.8. 類型論・通言語的観点

参照文法書の執筆と類型論や通言語的観点は一見それほど直接的な関係はないように思われる。逆に、参照文法書では、対象とする言語のデータのみから内的な分析をおこない、その理法

¹⁰ *-h-* は母音終わりの語幹にこの接尾辞が後続する際に現れる挿入子音。

¹¹ 鮭のひらきを挟んで焚き火のまわりの地面に刺して焼く時に使う棒のこのみを指す。

を解き明かして記述すべきであり、他の言語の情報を使うべきではない。

しかし、著者に、類型論的・通言語的観点があるかないかで、非専門家の読み手にとっての、その文法書の分かりやすさやおもしろさが変わってくると考えられる。

著者が、当該言語とは異なる系統関係の言語や、特に類型的タイプが異なる言語を多く知っていると、当該言語のどのような点が特徴的なのかが分かり、文法書も、それを踏まえて、特徴的な点についてより多くのページを割いたり、より多くの例をあげることにつながるであろう。著者にそのような知識がないと、多くの言語に見られる現象を「珍しい、おもしろい」と説明したり、逆に本当に珍しい現象について簡単に触れる程度の浅い記述で終えてしまっている場合がある。

例えば、ある言語の格の標示が能格・絶対格型だとする。そうすると、このタイプの言語は類型論的に、逆受動構文を持つことが多い。このような類型論的知識が筆者にあれば、逆受動構文があるかないかは、必ず調べるものであろうし、その参照文法書の中で必ず触れるべきものであろう。そのような知識のある読者は、能格・絶対格型言語だと見た瞬間に、逆受動があるのだらうと予期して読み進めるはずである。

この他にも、筆者がよく気になるものが「部分重複」という用語である。オーストロネシア語族の言語の記述でよく使われている。例えば、タガログ語で、*lakad*「歩行」から形成された *la-lakad*「歩く」は「部分重複」、*araw*「日、太陽」から作られた *araw-araw*「毎日」は「完全重複」であると呼ばれている(山田 1989: 579)。しかし、世界の言語の中には重複を形態的手法として生産的に使う言語は多く、語幹のどの部分を重複するかについては多種多様であり、その点、「部分重複」という用語はそれだけでは明確ではない。これはもちろん、§2.5ですでに述べた、術語を明確に定義して使わなければいけないという点にもつながる。例えば、スライアモン語から例をあげると、語幹の $C_1V_1C_2\dots$ に施されうる重複法には、 $C_1V_1\sim$ 、 $C_1V_1C_2\sim$ 、 $\sim VC_2$ などがある(Watanabe 2003: 371–406)。これらのいずれも「部分重複」と呼べるものである¹²。

このように、類型論的・通言語的な観点や知識をも備えた著者による参照文法書は、対象の言語の特徴をよりよく捉え、記述している可能性が高い。ただし、間違っただけではないのは、類型論的・通言語的な情報を当該言語の分析や説明の根拠にしていけないということである。あくまでその言語の内だけで記述が積み上げられていなければいけない。

その他、当該言語の記述に関係ない他の言語の情報を入れるべきではない。Hagège (1981) はスライアモン語の文法書であるが、時々、「この音はウビフ語のそれに似ている」とか「これはマヤ語族によく見られる」などという指摘が挿入されている。Kroeber (1989: 115) による同書の批評にもあるように、これらはスライアモン語の記述にまったく関係がないし、読み手が同言語を理解するために何ら役に立たない。良い参照文法書では、著者の類型論的・通言語的な知識が行間に感じられることがある。しかし参照文法書は、そのような知識を本文に書いてひけらかす場ではない。

¹² ただし、語幹が $C_1V_1C_2$ の場合には $C_1V_1C_2\sim$ を「完全重複」と呼べるが、この重複法も $C_1V_1C_2$ よりも長い語幹にも施しうる。

3. おわりに

以上、本稿では限られた側面ではあるが、理想の参照文法書とはどういうものか、それに近づくには何が必要かを考察した。網羅的でありながら可読性を高くするなど、時に矛盾するような要求を満たさなければならないし、何より一言語の全体を扱わなければいけないというのは、執筆者にさまざまな知識を要求する。

冒頭に言及した「シリーズ記述文法」(くろしお出版)の「シリーズ刊行にあたって」には、以下の一節がある(下地 2018: ii)。

言語資料を分析する道具、すなわち言語学の方法論も進化を続けている。調査研究が不十分であった多くの言語について研究が進むにつれ、それまで知られていなかった言語現象が見つかることがある。すると逆に、これまで研究されてきた言語でも、同様の現象があったのに、研究者がそれを念頭に調査していなかったために、その言語にはそれがないと思っただけという可能性が出てくる。研究の進化が、新しい疑問・質問を生み出すのである。すなわち、文法記述の営みには終わりが無い。

最後に、理想の参照文法書を書くための著者に必要な資質は何か考えてみると、言語学のほぼ全般に渡る広範なそして深い理解が必要であり、かつ、対象の言語だけではなく、なるべく多くの、それも典型的に異なる言語に関する知識が必要であろう。そこまでは著者となる研究者のためゆめ努力しかないが、さらに本稿で考察してきたこと、例えば、術語はどのようなものが分かりやすいか、どういうものについては説明が必要か、例はいくつくらい、どのようなものをあげれば読み手にとって多すぎず、少なすぎないであろうか、鋭敏な感覚・センスが求められる。その感覚を磨く唯一の方法は、さまざまなタイプの言語の参照文法書になるべく多く触れることではないかと思われる。

“If you want to be a writer, you must do two things above all others: read a lot and write a lot. There’s no way around these two things that I’m aware of, no shortcut.”

— Stephen King, *On Writing*¹³

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」(2016-2017年度)の成果の一部である。

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. 2015. *The Art of Grammar—A Practical Guide—*. Oxford: Oxford University Press.

¹³ 大ベストセラーを連発するアメリカのミステリー小説作家スティーブン・キングが小説を書くことについて書いた本。

- Ameka, Felix K., Alan Charles Dench, and Nicholas Evans, eds. 2006. *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar Writing*. (Trends in Linguistics, Studies and Monographs, Vol. 167.) Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Berez-Kroeker, Andrea L., Lauren Gawne, Susan Smythe Kung, Barbara F. Kelly, Tyler Heston, Gary Holton, Peter Pulsifer, David I. Beaver, Shobhana Chelliah, Stanley Dubinsky, Richard P. Meier, Nick Thieberger, Keren Rice, and Anthony C. Woodbury. 2018. "Reproducible Research in Linguistics: A Position Statement on Data Citation and Attribution in Our Field." *Linguistics*, 56-1: 1–18. DOI: <http://dx.doi.org/10.1515/ling-2017-0032>.
- Davis, John H. 1970. "Some Phonological Rules in Mainland Comox." Master's thesis, University of Victoria.
- Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- エヴァンズ, ニコラス 2009 「記述されていない言語の文法を書くには」『地球研記述言語学論集』第1巻: 1–34。(稲垣和也訳)
- Evans, Nicholas and Alan Dench. 2006. "Introduction: Catching Language." *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar Writing*. (Felix K. Ameka, Alan Charles Dench, and Nicholas Evans, eds), 1–39, Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Gawne, Lauren and Andrea L. Berez-Kroeker. 2018. "Reflections on Reproducible Research." *Language Documentation & Conservation Special Publication No. 15: Reflections on Language Documentation 20 Years after Himmelmann 1998*, 22–32. URL: <http://hdl.handle.net/10125/24805>.
- Hagège, Claude. 1981. *Le comox lhaamen de Colombie britannique: présentation d'une langue amérindienne*. (Amerindia: Numero Spécial 2.) Paris: Amerindia.
- 林範彦 2016 「書評: Alexandra Y. Aikhenvald, The art of grammar—A practical guide—, Oxford: Oxford University Press, 2015.」『言語記述論集』第8巻: 253–272.
- Kroeber, Paul D. 1989. "Review of *Le comox lhaamen de Colombie britannique: présentation d'une langue amérindienne* by Claude Hagège," *International Journal of American Linguistics*, 55, No. 1: 106–116. DOI: <https://doi.org/10.1086/466109>.
- Kuipers, Aert H. 1967. *The Squamish Language: Grammar, Texts, Dictionary*. (Janua Linguarum, Series Practica Vol. 73.) The Hague and Paris: Mouton.
- Mithun, Marianne. 2014. "The Data and the Examples: Comprehensiveness, Accuracy, and Sensitivity." *The Art and Practice of Grammar Writing*. (Toshihide Nakayama and Keren Rice, eds.), 25–52, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Nakayama, Toshihide and Keren Rice, eds. 2014. *The Art and Practice of Grammar Writing*. (Language Documentation & Conservation Special Publication No. 8.) Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Nater, Hank F. 1984. *The Bella Coola Language*. (Paper / National Museums of Canada, National Museum of Man, Canadian Ethnology Service, Vol. 92.) Ottawa: National Museums of Canada.
- Newman, Paul. 2000. *The Hausa Language: An Encyclopedic Reference Grammar*. New Haven: Yale University Press.
- Scalise, Sergio and Antonietta Bisetto. 2009. "The Classification of Compounds." *The Oxford Handbook of Compounding*. (Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, eds.), 34–53, Oxford/New York: Oxford University Press.
- 下地理則 2018 『南琉球宮古語伊良部島方言』(シリーズ記述文法 第1巻) 東京: くろしお出版。
- 下地理則 2021 「グラマーライティング—方言の記述文法を書くためのガイド—」『日本語文法』第21巻第2号: 136–152.
- Suttles, Wayne. 2004. *Musqueam Reference Grammar*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Thomason, Sarah. 1994. "The Editor's Department." *Language*, 70, No. 2: 409–423.
- Topping, Donald M. 1973. *Chamorro Reference Grammar*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Topping, Donald M., Pedro M. Ogo, and Bernadita C. Dungca. 1980. *Chamorro-English Dictionary*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- van Eijk, Jan P. 1997. *The Lillooet Language: Phonology, Morphology, Syntax*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Watanabe, Honoré. 2003. *A Morphological Description of Siammon, Mainland Comox Salish, with a Sketch of Syntax*. (Endangered Languages of the Pacific Rim Publication Series, A2-040.) Suita (Osaka): Osaka Gakuin University.
- Weber, David J. 2006. "The Linguistic Example." *Studies in Language*, 30, No. 2: 445–460. DOI: <https://doi.org/10.1075/sl.30.2.12web>.
- 山田敦士 2020 『バラウク・ワ語』(シリーズ記述文法 第2巻) 東京: くろしお出版。
- 山田幸宏 1989 「タガログ語」 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一(編)『言語学大辞典』第2巻, 578–591, 東京: 三省堂。

日本語の参照文法書をめぐって なぜ日本語の参照文法は書かれないか

加藤 重広

Reference Grammars of Japanese

KATO, Shigehiro

Keywords: grammars for reading, verse, agglutinateness, philological tradition, school grammar

キーワード: 解釈文法, 韻文, 膠着性, 文献学的伝統, 学校文法

1. 日本語における参照文法書
2. 前近代までの日本における文法の位置づけ
3. 文法成立と近代
4. 総括—日本語に参照文法書がほぼ存在しない理由

1. 日本語における参照文法書

参照文法書が、「言語 X について、その言語についての個別知識がなくても、言語学的な基礎知識があれば、記述内容について理解できるように書かれている、包括的に言語規則をまとめたもの」のように解してよいのであれば、日本語について日本語で書かれた「参照文法書」は存在しない。

ここでは、ごく一般的かつ常識的に、参照文法書が、「言語 X について、その言語の全体像が把握できることを意図して、記述的な態度で、言語学的な情報を記し、通読せずとも必要な部分だけを参照して求めている情報が得られるように構成・執筆されたもの」としておこう。このような簡単な定義で重要部分は「通読せずとも必要な部分だけを参照して求めている情報が得られる」であろう。通読すれば全体像を把握するとともに必要な情報も得られるであろうが、類型論や通言語学的観点でさまざまな言語の事実やデータが必要なときには、適切な文献資料にならない。

参照文法書には、データの豊富さと記述量の多さ、また、例外や逸脱事象にも言及するような網羅性が求められると思われるが、カテゴリーを考えずに動詞 1 つ 1 つに詳細な記述をすれば、それは辞書に近づいてしまう。またデータ量や記述量（具体的には例文数で測ることもできる）

加藤重広, 2022. 「日本語の参照文法書をめぐって：なぜ日本語の参照文法は書かれないか」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』. (アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 21–37. DOI: <https://doi.org/10.15026/116957>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

と網羅性は比例関係にはなく、特定の言語の状況をどれだけ網羅しているかを見極める科学的な基準があるわけではない。よって、データ量・記述量と網羅性が重要であることは理解しつつも、今回はこの点については論じることを控えることにする。

メタ言語を日本語に限定せずに考えても、日本語を対象言語として「参照文法書 (reference grammar)」の名がついているものは、管見の限り、Martin (1975) と Vovlin (2003) くらいである。

前者は、1975年にイエール大学出版から初版が刊行され、1987年に東京のタトル出版から、2004年にハワイ大学出版から刊行されているが、初版以外はリプリント版で内容はほぼ同一である。現代日本語を対象にしている唯一の参照文法書と言ってよいが、ただ、出てくる例文は現在の目で見るとやや古めかしさを感じるものがないわけではない。後者は、主に中古の散文を対象にした文法であるが、例文は『古事記』からもとっており、上古から中古(奈良時代から平安時代)までの日本語を対象にしていると言ってよい。日本における古典文法の研究書を踏まえてはいるが、phonology や writing から説き起こすなど、全体の構成は参照文法書と呼んで差し支えないものと言えるだろう。古典語文法についての参照文法書は珍しく、その点でも価値はあるが、現代語文法から古典語文法に拡張して行く方向性が一般的だとすると、もっと現代語の参照文法書が豊富に存在すべきだと思う者は多いだろう。

このほかにも日本語に関する文法書のたぐいはもちろんある。英語で書かれたものでは、Hinds (1988) や Kaiser et al. (2001) などがあるが、これらは日本語文法の概説書といった趣で、上に述べた「参照文法書」の特質を十分に具えているようには見えない。ほかにも、2000年以降に、いわゆる *Handbook* のたぐいが多く上梓されているが、これらは例えば生成文法の枠組みで網羅する、というように特定の理論的枠組みがまずあり、その記述と説明に必要なデータがあるという構成になっている。ここでは個々の書名はあげないが、日本語文法に関する概説書も相当数あるものの、機能文法や談話文法といった観点で書かれていることが多い。

もちろん、日本語で書かれているもの、より正確に言うならば「日本語を母語とする研究者が母語の文法について網羅的に記した文法書」ということになるが、その種の文法書があまり存在しているにもかかわらず、参照文法書とは呼べない文法書であるのはなぜか、いわば例外的な1冊ないしは2冊を除いて日本語に参照文法書が存在しないのはなぜか、について考察することがこの小論の目的である。

2. 前近代までの日本における文法の位置づけ

辞書にしても文法書にしても、書籍の形態にまとめる以上、なんらかの実用的な意味を想定して著者は執筆すると考えるのが自然である。需要を市場原理の中で考えなくとも、必要とする人がいることを想定できなければ、著者は執筆の動機を持ちにくいだろう。この節では、日本語の文法書がどのように書かれてきたのかを簡単に振り返ることにしたい。

2.1. 日本における「文法」の意識

「文法」は司馬遷の『史記』などでは「法律の条文」の意で用いられ、平安期の日本語でもその用例が確認されるが、中世末以降に「文章作法」の意で用いられるようになり、grammarの訳語に用いられるのは近世末に至ってのようである。あとで確認するが、19世紀前半以降明治期でも「語法」が混在して用いられており、当初は「語法」のほうが優勢だった観がある。また、やはり近世末に現れた「文典」は、文法書に相当する意味で広く用いられている。

2.2. 文法意識を生じさせたもの：膠着性と韻文

日本語においても、言語規則としての文法が意識されるのは、やはりことばを文字で書き表すときであったと推定されるが、仮名が作られる以前は、正規の文書は漢文で書かれ、借用した漢字を用いて古代中国語の文法に従っていた。一方、和文を書き表すときは、漢字を表音文字として用いるいわゆる万葉仮名を用い、ある種の棲み分けがあった。しかし、漢語（いわゆる語種としての漢語）が上代日本語に借用されるようになると、和漢混淆文が現れ、孤立語たる中国語と膠着語たる日本語の違いを踏まえて表記を行う必要が生じた。たとえば、天皇が出す「詔」「勅」は漢文だが、和文で出されるものを「宣命」と言い、(1)に見られるような宣命書を発達させた。

(1) すめらが おほみこと まとのりたまは 天皇 詔 旨 みましふぢはらのあそみ 久, つかへまつるさまはいま 汝藤原朝臣乃仕奉状者今 乃未爾

ここでは、その後の漢文訓読での送り仮名にあたる部分を漢字で表しているが、それは日本語における活用語の語尾や助詞、形式名詞のたぐいであることが多く、後のヲコト点も助詞や形式名詞や語尾を表していることと整合する。このことは長く（古代）中国語と（古代）日本語の言語接触が生じる場面において、日本語を母語とする者が中国語を読んだり、理解したりする上で、膠着語たる日本語の差異が顕在化する部分として、語尾や助詞、形式名詞に注意が払われ続けてきたとも言えるだろう。母語に関する関心を歴史的に捉え直すと、中国語では音韻や文字に大きく偏っているのに対し、日本語では、文字と音韻も多少は関心の対象であったものの、活用変化といった統語形態論的な関心が強かったことも、対照的な点である。

送り仮名は、文法とあまり関わらない表記の問題のように見えるが、動詞の送り仮名は、音節単位で表示した語幹を漢字で書き、残りの活用語尾を仮名として送るのが本則である以上、現代にあっても活用という統語形態論的システムを意識しないわけには行かない。もちろん、「書く」のように音節レベルで「か」という語幹と「く」という語尾に分けてしまえば本則通りになるものばかりではない。「食べる」のように「たべ」が語幹でも、語幹と連用形・未然形が同じ形態になる一段動詞の場合、連用形を「食」と書いて「たべ」と読ませると、送り仮名のない状態になり、「食」が「ショク」なのか「たべ」なのか判断しにくい場合が生じたり、判断はできてもそれが負担になったりするようでは表記システムとして好ましくない。よって、語幹の一部を送り仮名に回して「食べ」とする例外措置をとる。「わかる」と「わかる」はそれぞれ語幹が「わか」「わけ」なので、本則通りにするといずれも「分る」となってしまう。ふりがなが一般的だった時代には区別できるが、ふりがなを最小限にする現代の表記慣行では区別できない。よって「分かる」「分ける」のように、語幹の一部を送り仮名に回す例外措置で対処する。しかし、「開く」と書いて「ひらく」とよむのか「あく」と読むのかわからないケースや、「認める」が「みとめる」か「したためる」か決めにくいケースもないわけではない。もちろん、これらはいずれも書きことばの規則であって、音声言語だけを用いる上では問題にならない。

前節で述べたように、文字言語を使用する際に規則を決める根拠として広義の文法が必要とされることは普遍的な問題である。文字言語に規範性が強く作用するのも同様の事情と考えてよいだろう。日本における文字言語は、中世あたりまで、支配者階層に占有される傾向が強かったが、正規の公文書は漢文を用い、仮名を用いる和文を漢字仮名交じりで書くのは私信を除けば、和歌を詠む場合が主であった。教養のある者は、漢文で公文書を書き、和文で歌が詠めなければならない。作歌の作法と結びついて、表記を含む書きことばの規範やルールが求められることは自然

なことであった。特に作歌上は、伝統的な規範を守ることが教養人の教養のあかしでもある。

和歌を詠むことは、古くから行われているが、長く続けられているうちに、伝統が確立し、規範が生ずることになる。和歌に用いる表現が、日常語にない場合は、新たに学ぶ必要が生じる。話しことばは大きく変化しても、書きことばは古い時代の語彙や文法を残していることがあり、両者の差異は後代になる程、拡大しやすい。よく知られているのは、定家仮名遣であるが、藤原定家(1162-1241)の時期には、日本語における音声変化が文字表記と大きくずれてしまい、混乱が生じていたことを示すと言われる。定家は、オとヲ、エとへとエ、イとヒとキ、の区別にも『下官集』(成立年未詳)で言及しているが、12世紀にはオとヲは音声的に合流して完全に中和していたので、学習抜きに区別はできなかったことだろう。このほかに、中古から中世にかけて、係り結びが崩れ始め、助動詞や助詞の変化も見られるようになったため、これらにも注意を惹起するようになった。例えば、『^{てにはたいがいせう}手爾葉大概抄』¹は歌学における伝書の一つだが、そこでも詞と辞(特に助詞)の関係や、文の切れ目や終え方、係り結びなどに触れている。ただし、これらは表記や呼応の不備によって作歌の質が下がることを避けるために規範として示されたという意味が強く、その意味では、実用的なものとするべきだろう。

和歌のための指南書と見れば日本独自の事情のように見えるが、文学の古態が韻文や詩歌の形態をとっていたことは普遍性のあることであって、その規範を守る実用知識という意味では、特異なことではない。しかし、和歌と文法の親縁性は近代になっても続いたことは特異なことと言えるかもしれない。

2.3. 近代文法への布石

戦国時代に来日した宣教師ロドリゲス(João Tçuzzu Rodriguez, 1561-1634)が著した *Arte da lingua de Iapam* (1604-1608) と *Arte breve da lingua de Iapam* (1620) は、16世紀末の日本語について変異も含めつつ、文法などについて記している。それぞれ『日本大文典』『日本小文典』と訳されているが、文法の枠組みはラテン文法の枠組みを使っており、日本語を記述する文法というわけではないが、近代言語学成立以前のことだから、現在の言語学の視点で、日本に「分詞」や「接続法」を導入することを批判しても始まらないだろう。また、動詞の活用変化もラテン文法のパラダイムとして記述しているので、人称や数との一致を持たない日本語の動詞活用としては無駄が多いと日本語の観点からは断言できるが、当時のヨーロッパ人としては慣れ親しんだパラダイムに当てはめてくれた方が、理解しやすかったのかもしれない。これらは、近代になって日本でも知られるようになり、安土桃山時代の日本語資料としていまでも重要な意味を持っている。近世における文法研究で重要なのは、本居宣長に始まる^{やちまた}八衢派と非主流とも言える富士谷成章の流れ(ここでは便宜上「富士谷派」と言う)である。

八衢派と富士谷派は、いわゆる国語学史における重要な研究対象で、すでに多くの成果もあることから、本論では流れを理解する上で必要なことを瞥見するに留める。

富士谷派の祖といってよい富士谷成章(1738-1779)は、『あゆひ抄』と『かざし抄』の独創的な文法研究で知られる。『あゆひ抄』(または『脚結抄』(5巻, 1778))の冒頭では、「師曰く、^な名をもて物をことわり、^{よそひ}装をもて事を定め、^{かざしあゆひ}挿頭脚結をもてことばを助く」と述べている。成章の4大品詞論は、その後、山田孝雄によって再評価され、近代文法論の構築に影響を与えることに

¹ 以前は藤原定家の作と言われていたが、近年では鎌倉時代末ごろの成立と考えられ、別の著者が想定される。

なったが、同時代人であった本居宣長が本居派あるいは八衢派として明治まで続く国学の国語研究の中心であったのに対して、成章の思想はそのまま長く継承されることなく、埋もれていたと見ることができる。ほかに、用言の活用表（よそひのかたがき「装 図」）も画期的業績で、さらにオとヲの所属の訂正やアクセント研究も行なっている。他に著作は、『かざし抄』（または『挿頭抄』（3巻、1767））、きたのべ『北辺成章家集』（1818）がある。『脚結抄』の先見的な点は、「もぞ」や「もこそ」など複合助詞や複合助動詞を1つの形式として分析していることである。これらは「つぎあゆみ継脚結」と呼ばれている。成章の長子・ふじたにみつえ富士谷御杖（1768–1822）は、成章の学説を継承し、『脚結抄翼』『脚結玄義』『俳諧手爾波抄』などを著したが、理論的に見ると大きな発展はなかった。また、仙台の国学者・保田光則（1797–1870）は、『脚結抄考』『脚結抄増補』『挿頭抄増補』等を著し、丁寧の助動詞など成章が挙げなかったものを多少追加した。しかし、この富士谷派はこの後取り上げる八衢派を主流とすると非主流であった。

富士谷派の4品詞とは、名詞を指す「名」、用言を指す「装」、副用語を指す「挿頭」、助詞・助動詞・接尾辞を指す「脚結」である。ここでは、生身の人間にあたる「名」を包んで人前に出せるようにする「装」、髪飾りとして上の方につける「挿頭」、足もとを覆い、固め上げる「脚結」で、人間の身なりに例えて「文」のありようを捉えていることがわかる。これらは、体言と用言と副用語といった「詞」と「辞」に相当し、日本語の品詞分類の第一次区分としては今でも有効性を持っている。

八衢派の祖は、もとおりのりなが富士谷成章よりも八歳年長の本居宣長（1730–1801）である。宣長は伊勢松坂の医者であったが、その学風は長く継承され、後世に大きな影響をもたらした。宣長の残した国語学的な研究は、①係り結びの研究、②活用の研究、③字音・音韻の研究に三大別することができる。特に、③の領域では、門下の石塚龍麿（1764–1823）による上代特殊仮名遣いの発見（現代の知見は橋本進吉による）のほか、五十音図の確定などがある。現在、私たちがよく知る五十音図の原形は、宣長にさかのぼるといえる。「八衢」は八つに分岐するところから入り組んでいて悩みの尽きない状況を比喻するが、本居春庭著の『詞八衢』から八衢派と呼ぶ。

係り結びの存在は、既に定家の時代から言語規則として理解されていたが、それを体系的に明らかにしたのは宣長であった。てにをはひもかがみ『天爾遠波紐鏡』（1771）は、係り結びの原則を一覧にして示しており、「は・も・徒²」「ぞ・の・や・何」「こそ」に三区分別し、結びを詳しく示している。この三種類は、ことばのたまのを『詞玉緒』（1779）ではみすぢ三條の大綱おほつなと呼ばれる。第二区分の「の」の係り結びは、現代では、これらによる係り結びと見なさず、呼応する述部が終止形になる第一区分も係り結びに数えないことが多いが、いずれにせよ、体系的に係り結びのしくみを明らかにした功績は大きい。『詞玉緒』は、『天爾遠波紐鏡』の原則について和歌による実例を示しつつ、係りと結びの対応を論じる。書名からも、「詞」を自立語たる体言や用言とし、「緒」をそれに付属する助辞や機能語とする宣長の日本語観を見て取ることができる。『活用言の冊子』では、用言の活用種と行により27の会に分けて、五十音順に配列している。第一会から第六会までは四段動詞があつめられているが、第六会のラ行では「あり・をり」を区別して掲げる。第七会から第十五会までは下二段活用、第十六会・第十七会・第十九会から第廿二会までは上二段活用、第十八会はナ変、第廿三会は一音節の下二段、第廿四会はサ変・カ変、第廿五会は上一段、第廿六会は形容詞ク活用、第廿七会は形容詞シク活用を掲げる。古典文法の活用分類の原形も宣長によってもたらされたも

²「上にこそぞのや何はもなどいふ辞のなきを今かりに徒といふ」とあり、「徒（ただ）」は、松下（1930）に言う「単説」、加藤（2003）に言う「ゼロ助詞」を指していることがわかる。

ので、それが近代になって動詞活用の分類に用いられた結果が学校文法における何行何段活用という区分なのである。

鈴木^{すずきあきら}^{あきら} 眠(1764-1837)は、宣長の門人で、『活語断続譜』に見る活用の研究と、『言語四種論』に見る単語の分類で知られる。『活語断続譜』は『天爾遠波紐鏡』で示された係り結びの法則で扱われていない「切れずに続いていく形」＝「続」についても触れ、活用形全体を記述しようとする姿勢が窺える。『言語四種論』は、語をその特性によって4大品詞に分けたものである。これは富士谷派とは異なり、名詞(体の詞)と用言(用の詞)とそれ以外の「亘爾乎波」に分け、用言をさらに形容詞にあたる「形状の詞」と動詞にあたる「作用の詞」に分ける四区分である。ここで言う「亘爾乎波」は、自立語である副用語と付属語である助詞・助動詞の「辞」のたぐいを包摂している。自立語と付属語を区分せずに用言を動詞と形容詞に分けるというバランスの悪さに違和感を覚えるが、山田(1908)でも富士谷を称揚する一方でこの四区分は批判している。

宣長^{のりなが} 長子・春庭(1763-1828)は、『詞八衢』で五十音図に基づいて動詞の活用を整理した。これは、宣長『活用言の冊子』と鈴木^{くわつごだんぞくふ} 眠『活語断続譜』を踏まえ、更に体系化したもので、四段・一段(＝上一段)・中二段(＝上二段)・下二段・変格三種の7つに整理し、活用形も八等を三形・四形・五形とした。『詞通路』では、動詞の自他のほか、掛詞などに触れる。東条^{とうじょう} 義門(1786-1843)は、宣長以降の活用研究を集大成し、『天爾遠波紐鏡』を受けた『友鏡』、『詞玉緒』を補足敷衍した『玉緒繰分』のほか、『和語説略図』とその解説にあたる『活語指南』、用言についてまとめた『山口菜』などで知られる。義門の活用語分類は、『言語四種論』や『詞八衢』などに準ずるもので、創見はなく、助動詞も活用形態で動詞と同じように分類している点に特徴がある。『活語指南』では、6種の活用形(将然言・連用言・截断言・連躰言・已然言・希求言)を立てているが、これは私たちがよく知っている古典文法の6活用に近い。富樫^{とがしひろかげ} 広蔭(1793-1873)は本居大平・春庭の門人で、『辞玉櫛』、『詞玉橋』で知られる。広蔭は、体言を「言」、用言を「詞」と呼び、辞を活用の有無で静辞と動辞に分けた。

近世、特に江戸後期にあって、顕著な動きとして無視できないのは、西洋文典の影響である。江戸期は、鎖国の時代であったが、長崎の出島を通じて蘭語学が紹介され、蘭語に基づいた日本語理解も一部に見られ、幕末期には盛んになった。杉田^{すぎた} 玄白・前野^{まきの} 良沢・中川^{なかがわ} 淳庵らの『解体新書』の刊行が1771年であるが、このころから幕末にかけて、西洋文典の受容も進み、それに基づく日本語文法を構築しようとする試みも始まった。初期のものとしては、藤林^{ふじの} 晋山(泰介)『和蘭語法解』があるが、その後、オランダ語からの直訳やその写本、また、その修訂本などが出され、1814年には馬場^{ばば} 佐十郎『訂正蘭語九品集』、1816年には大槻^{おおいつき} 玄幹『蘭学凡』などが現れ、幕末になると大庭^{おほにわ} 雪斎の翻訳『訳和蘭文語』なども現れた。それらを踏まえて、日本語をオランダ語文法の枠組みで整理しようとしたのが、鶴峯^{つるみね} 戊申であるが、それは戊申ひとりの創見によるものではなく、当時の和蘭文法書の枠組みがひろく受け入れられていたことを背景にしている。戊申は、『語学究理九品九格総括図式』で日本語の品詞分類を行い、『語学新書』でそれを詳しく解説している。

2.4. 文法における日本の近世

文法面からみた近世を概括したい。第一に、動詞・形容詞などの用言の活用に関する記述が進み、その成果が近代の文法教育に取り込まれた。第二に、係り結びという呼応の文法現象が体系的に記述され、これも近代の文法教育に取り込まれた。係り結びへの関心は中世の歌学書から継

続しており、次節で見るように、用例に和歌が多く引かれる基盤的な要因ともなった。第三に、膠着語としての扱いの難しさはあるものの、品詞分類に関するいくつかの枠組みが提案された。自立性や活用の有無など現在でも有効な観点もこの時期に確立した。第四に西洋文法との接触があったものの、西洋文法の枠組みで日本語を記述するなど、不整合や問題点は放置されてきた観があり、国学の流れとは没交渉と言ってよい状況が続いた。これに加えるとしたら、この時期においても、和歌をはじめとする古典語の文法という面が強く、話しことばの文法という視点はまだ欠けていた。

また、詳細に記す紙幅を持たないので簡潔に記すが、『片言』のように規範意識に基づいた語彙やことばづかいへの関心も見られた。安原直室による『片言』(1650)は、方言や幼児語や俗語など標準語形から外れるものを集めてあり、そこには規範意識(京都方言が規範になっている)の成立がみとれる。方言辞書の性質を持つ各種の『濱荻』類などの実用書(江戸に上る侍のためのガイドブックの意味もあった)も見られ、『物類称呼』のように各地の方言語彙を集めた語彙集のようなものも作られた。ただ、『物類称呼』は俳諧のためのもので、その意味では実用書であった。近世後半には、辞書のたぐいも多く作られたが、百科事典的な情報を記すものや、字引としての機能が主であるものが大半で、語源に関する諸説を集めたものも一部見られるが、誰もが知る日常卑近語の意味用法も一律に記すような西洋式の近代辞書は19世紀末まで現れなかった。

3. 文法成立と近代

一般には意識されることがなく、言語研究者でもあまり意識しないことであるが、明治維新以後の近代日本は文法の時代、あるいは、文法書の時代と言ってよいほどに、盛んに文法書が書かれ、文法教育にも力を入れた時代であった。明治後期から終戦までの半世紀のあいだに大槻文法・三矢文法・山田文法・松下文法・橋本文法・時枝文法・佐久間文法などが現れており、二十世紀後半にも三上文法・林文法・南文法・渡辺文法・寺村文法など十指に余るものを挙げるができる。このうち、時枝文法や佐久間文法は戦前に現れているが、戦後まで継続して著作が上梓されたこともあり、二十世紀後半にも引き続き、強い影響力を持った。橋本文法も学校文法として現在まで影響力を持っている。紙幅の都合もあり、詳細に論じることはできないが、流れの概略を確認しておきたい。

3.1. 近代文法の起点としての大槻文法

日本初の近代文法と見なされるのは、西欧文典と国学文法の折衷と言われる大槻文彦^{おおつきふみひこ}(1847-1928)による大槻文法(大槻 1891, 1897a, 1897b)である。大槻は、当初近代辞書を作成する際に、品詞などの扱いを明確にしておくべきだと考えて、辞書編纂のための文法を整理することにしたのであるが、その部分を独立させて1891年に『語法指南』として出版、のちに増補し、1897年に『広日本文典』と教授用参考書『同別記』として刊行された。大槻は、その業績から国語学者とされることが多いが、必ずしも国語学の専門家ではなく、歴史や政治に関する著作や業績もあることから、幕末から明治期にかけての教養人と見るのが適切だろう(加藤 2015)。

大槻は『言海』作成の中で、記述の規則として文法の必要性を痛感し、日本語の文法書(当時は「文典」と呼ぶことが多かった)を整備しようとした。『廣日本文典』は1882年には脱稿していたが、『廣日本文典別記』とともに一般向けに刊行されたのは1897年である。一方、『語法指

南』は『言海』に付されたものを文典として独立させ、1890年に教科書用に刊行したもので、『語法指南』の奥付にはそれが辞書の編集方針を定めるための文法概説を転用したものであることが付記されている。『廣日本文典別記』は、『廣日本文典』の付録編と位置づけられ、補綴や参考・持論などを本編に記して煩瑣になるのを避けてまとめて独立させたものである。これからは、文典としての一般性を保ちながら、大槻自身の個人的な見解を分けて述べるという、大槻の姿勢が窺える。

『廣日本文典』は、中古の日本語についての文典で、その構成は、文字篇、単語篇、文章篇に分かれ、文字篇は「仮名」と「漢字」に分けて音声のほか、漢字の部首や書体なども解説している。大槻は物集高見らと「かなのくあい」に参加していたが、自説と一般性のある知見とを区別することを重視していた。大槻文法は、英文法の枠組みを基盤にしていると言われるが、特定の文法書や文法学者の見解をそのまま使うのではなく、多数の文法書を参観してより中立的な見解に基づいて論を構築する慎重さが大槻の性格であり、それが文法にも反映している。

大槻は日本語に、8つの品詞を設定した。それは、(1)名詞(体言)、(2)動詞(用言・作用言)、(3)形容詞(形状言)、(4)助動詞、(5)副詞、(6)接続詞、(7)亘尔乎波てにをは、(8)感動詞、である。うち名詞は、固有名詞・普通名詞・代名詞・数詞の四種に分け、動詞は自他といった文法区分、活用といった形態区分、形容詞は形態区分のみ、助動詞は意味機能により分ける。用言の活用体系は、八衢派の成果が取り込まれているが、助動詞といったカテゴリーは英文法など西欧文典から取り込んだものと言われている。中でも目を引くのは「亘尔乎波」で後の学校文法で言う「助詞」を「てにをは」といった和文法の伝統で括っている。この「亘尔乎波」は第一類(名詞にのみ付くもの)、第二類(種々の語に付くもの)、第三類(動詞にのみ付くもの)のように分けられていて、おおむね第一類が格助詞、第二類が係助詞・副助詞、第三類が接続助詞に相当するが、日本語の格助詞は名詞にのみつくわけではないものもあって、副助詞類も種々の語につくとするのは十分ではないが、大槻の中で西欧文典のよいところは取り込み、しかし、合わないところは日本語独自の工夫が必要だという、合理的な判断があったものと見られる。

3.2. 説明すべき体系としての山田文法

山田孝雄よしお(1873-1958)は富山市出身の国語学者・国文学者で東北帝国大学に国語学講座が置かれたときの初代教授である。国語学・文法学のほかにも、歴史や文学や倫理学などに強い関心を持っていたことは、その著作を見ればよくわかる。上田万年などの当時の国語学者にも見られるが、山田も国粹的な傾向が強かったため、戦後は公職追放の憂き目にもあった。山田は、西欧語の文法を借りなくても、日本語には日本語としての論理と文法があるという強い信念を持っており、西欧文法を引き写すやり方に対する強い拒絶があったと考えられている。

一方で、ヴント(Wilhelm Wundt, 1832-1920)の心理学、特に民族心理学の影響を強く受けるなど、必要な枠組みや手法は西欧に学ぶ姿勢も見られる。文における「統覚」という考え方も心理主義的と評されるが、言語運用を認識思考の主体としての人間から捉えるなど、時枝誠記の言語観に通ずるところがある

山田は、『日本文法論』(山田1908)の冒頭で、それまでの文法研究を振り返り、富士谷成章の4種分類が優れていることを主張している。また、これらの大分類は『脚結抄』の品詞分類とおおむね重なる。山田の品詞分類には、接続詞や感動詞は独立した品詞カテゴリーになっていないが、これらは副詞の一種に数えられる。また以下の表1からわかるように、山田文法には助動

詞という品詞もないが、現行の学校文法などでいう助動詞は一律に動詞の語尾と見て、「複語尾」というカテゴリーに含める。用言のうち、動詞・形容詞を実質用言とし、それ以外を形式用言とした点が、山田文法の特徴となっている。また、大槻文法の「弓尔乎波」は山田文法の「助詞」になり、大槻文法の「助動詞」は上述の「複語尾」に相当することになる。山田文法の品詞体系を整理したのが下記の表である。

表1 山田文法における品詞分類

| | | | | | | |
|--------|-------------|-------------|----------------------------|------------------|---------|-------|
| 単 語 | 観 念 語 | 自 用 語 | 観 念 語 → 体 言 | 実質体言 | 名詞 | |
| | | | | 形 式 体 言 | 主観的形式体言 | 代名詞 |
| | | | | | 客観的形式体言 | 数詞 |
| | | | 陳 述 語 → 用 言 | 実 質 用 言 | 形状用言 | 形容詞 |
| | | | | | 動作用言 | 動詞 |
| | | | | 形 式 用 言 | | 形式形容詞 |
| | | | | | 形式動詞 | |
| | | | 存在詞 | | | |
| | | | | (用言の語尾) | (複語尾) | |
| | | | 副 用 語 | | 副詞 | |
| | 関 係 語 | | 助詞 | | | |

紙幅の都合もあって詳細には論じられないが、観念語と関係語は、現在の（語彙的）概念語と機能語の区分にあたり、自用語と副用語は修飾を受ける基幹的な品詞と修飾をおこなう副次的な品詞という区分に相当する。体言が事物の概念を表し、それについて陳述をおこなう用言という組み合わせは、テーマとレーマの組み合わせを思わせる。後の「陳述論争」の起源がここにあると言ってもいいほどだ。なお、複語尾は表に含めてあるが、山田文法では品詞の一つとは扱われない。大槻は、西欧文典と国学的伝統をうまく調合してバランスをとろうしたのに対して、山田からは日本語には日本語のしくみがあり、それを西欧の知識は参考にしても全体として自前で自分たちの言語を説明できなければならないという強い意思が読み取れる。

山田は、日本人（より正確に言うなら日本語を母語とする者）が日本語の文法を説明できないことはあってはならないことだと考え、母語に内在している論法・論理が文法に反映している以上、それを母語話者として理解でき、説明できなければならないという義務感を動機として、文法書を書いたとも言われる。それは、山田を国粹的・民族主義的と評することにもつながっている。しかし、すべての人間が自らの文化、その一部としての母語や母方言を慈しむことは基本的な人権としての言語権に含まれると考えれば、文法論の背後に母語への愛があることを責めることはできない。

また、大槻が事実を客観的・中立的に述べる記述的な文法であるのに対して、山田文法はなぜこういうしくみになっているのかを「説明する」という姿勢が強い。いわば説明的な文法、説明文法になっているのである。山田文法が、この種の「説明文法書」として現れた事実は、後述するが、近代から現代に至るまでの日本語の文法論の主要な流れを形成するものである。記述した情報を整理して提示するのが参照文法書の大きな特質の1つであるとすれば、それと対立するような流れが文法論における大きなうねりとして20世紀の初めには出現していた、ということである。この「説明する文法」としての説明文法書の特徴は、文法学史においては「山田文法は思

弁的だ」という言い方で片付けてしまうことが少なくないが、日本語を母語とする者は記述的な事実をデータとして既に共有しているのをそれをしくみとしてどう説明するかが重要だとする態度に集約される。当然のことながら、そこでは、日本語がどんな言語か、どのような音韻論や形態論や統語論の規則があるのか、といった記述的な関心は説明の巧みさを追究する態度の背後に追いやられてしまう。語弊が生ずることを覚悟しながら、簡略化して言うならば「説明文法書が参照文法書を駆逐する」のである。

3.3. 松下文法

松下大三郎(1878-1935)による松下文法は、論理的な、普遍文法を思わせる体系性の高さの特徴としている。例えば、思念には「観念」と「断定」の二段階があり、それに対応する言語には「原辞」「詞」「断句」の三段階があるとするが、「原辞」は形態素や語基あるいは語幹に近く、詞は句に近い。明治期から昭和初期には「文」にあたるものを「句」と呼ぶことも多く、「断句」は断定を行う、よって完結性を持つ文の意である(「。」を句点と呼ぶのはその名残である)。文は断定を行うという考え方は、山田文法の「文は統覚作用によって思想が完結性をもって提示されるもの」という考え方と通じるところがある。なお、「花を」「月に」は原辞が連結している「連辞」で一つの詞からなる「単語」でもあるとするので、名詞と助詞という形態素の結合で1つの名詞句ができるとする、理論言語学の句構造文法に近い考え方とは言えるだろう。いわば形式をまず整理してから意味の差異を扱うという手順をとる。母語話者の説明文法では、形式は既に知っていることなので、意味の問題を直接議論することが可能であり、意味への傾斜が大きくなりやすい。

松下が、大槻や山田と異なる点は、外国人に日本語を教授した経験を持っていた点³だと思われる。山田の文法論が、日本語を母語とする人々のための文法であるのに対し、松下は日本語を母語としない人々も理解できる文法を意識していると言ってよいだろう。外国人に教授する文法は、実用性が重要であり、それはコミュニケーションに用いる現代話しことばが中心である。山田や大槻も、話しことばを意識していないわけではないが、文語と口語という対比であり、口語は必ずしも当時の話しことばと一致していたわけではない。松下文法は必ずしも日本語教育文法という性質を明示的に持っているわけではないが、国学的な伝統からは距離を置くような姿勢も見える。それは一方で、日本語にだけ当てはまるような特異な文法よりも、日本語を母語としない外国人が見ても理解できるような論法と普遍性を意識することにつながる。大槻から山田にかけては日本人(日本語を母語とする者)のための日本語文法だったが、松下では、日本語に関心を持つ人のための日本語文法という性質が強まっている点で異なると言える。

松下は、自分の母方言である静岡西部方言(いわゆる遠州方言)についての記述『遠江文典』もものしており、自分の用いる話しことばを基準として考察していた点は、現代言語学の方法論と合致する。ただ、松下は現代言語学の方法論を知っていて音声言語を言語の基本形態とみるのではなく、自らの用いる言語の実態を解明するという強い意志があったのだと推測する。『日本文典』のなかでは、和歌を含む文語と口語が両方とも例文として取り上げられている。当時の口語は、いまの話しことばよりも規範性が弱かったことが関わっているだろう。大正から昭和に移る時期で、まだ文語抜きに文典を成立させるという発想はなかったと考えればよい。

³ 松下は、國學院卒業の七年後に宏文学院(嘉納治五郎が駐日清国公使の依頼を受け、清国からの留学生のために1899年に開設した「亦楽書院」を移転して、1902年に牛込に開いた教育機関。1909年に閉校)で教授として日本語教育に従事している。1913年には自ら日華学院を創設し、清に代わった中華民国からの留学生への日本語教育にあたった。

山田文法は、のちに現れる学校文法にかなり取り込まれているが、松下文法はほとんど取り込まれていない。これは、用語法のずれがその一因だと見ることができるだろう。例えば、名詞にも相や態を設定し、「格」はいわゆる case の意味と部分的に重なりはするが、違いもあって同一ではない。また、動詞にも格と相を設定し、アスペクトやモダリティも「態」として整理している。これは名称・命名法の問題でしかないが、そのまま現在の枠組みに取り込むことを阻む重大な問題点ともなっている。

3.4. 橋本文法と学校文法

橋本進吉⁴(1882-1945)は、国語音韻史を主たる専門とする国語学者で、領域全般にわたって業績を残すが、文献資料に基づく音韻・文字の歴史的研究が研究の中心をなし、徹底した文献主義を学風としている。係り結びをはじめとする文法研究も行っているが、特に学校文法として知られる文法論は、当時の文部省からの要請に応じて構築していったとみていいだろう（本論では、橋本 1935, 1937, 1959 に基づく）。現在の学習指導要領に相当する教授要目などの指針の策定に関わり、それに合わせて『新文典』という文法教科書を文語篇と口語篇に分けて執筆したのが学校文法に関わる大きな業績である（1931 年刊行、1935 年改訂、1937 年改制）。学校文法あるいは教科文法と呼ばれる文法体系の内容について文部省が詳細に定めていたわけではなく、その方針策定に強く関わった橋本進吉の文法体系を標準的な基盤として利用することが自然な流れであったに過ぎない。1943 年刊の国定教科書⁴『中等文法』も、橋本文法を基盤にしているが、実態は弟子の岩淵悦太郎の執筆によるものである。その後、時枝が新しい文法体系を導入しようとしたり、三上章が執拗に攻撃したり、学校文法に対する批判が巻き起こったりしても、橋本文法に代わる文法体系はついぞ現れることなく、現在に至っている。教育現場では相応の教授内容と利便性を具え、大きな破綻のない橋本文法を別の文法理論に差し替える動機はあまりなく、むしろ枠組みを変えることによる混乱と負担の方が大きい。もっとも、減り続ける国語の授業時間のなかで文法を体系的に扱う機会はなく、文法教育をどうするかということも考えられないというのが現状だろう。

橋本文法の最大の特徴は、形態論的な品詞区分だと言われる。語を自立するかしないかでまず「自立語」の「詞」と「付属語」の「辞」に分け、さらに活用を持つか持たないかで「活用語」と「無活用語」に分ける。詞のうち活用語は用言、無活用語は体言と副用語などになり、辞は活用語の助動詞と無活用語の助詞になる。これだけであれば、非常に機械的で理論的な区分に見えるが、なにを1つの「語」とみるかといった問題がないわけではない。また、活用があるかどうかをどう判断するかという問題も残る。形容動詞が用言に含まれていることは前者に関する問題であり、「単なる」という連体詞と「単に」という副詞に連体形と連用形のような活用関係を認めずに別品詞とすることは後者に関する問題である。他にも、主語になれるのものは名詞、なれないのものは副用語か感動詞とする区分が「詞の無活用語」にあるが、そもそも主語の定義あるいは認定基準が明示されなければ実際の区分が完遂できない。

この形態論的、あるいは、より正確に言うなら、形式的な区分は、深く考えずとも、品詞の区分が可能だということである。そして、それは受動や自発の意味論的理解を求める山田文法・松下文法に比べれば、初等教育や中等教育に向いているとも言えるだろう。理念的な理解を前提に

⁴ 日本では、1903 年から 1945 年まで国定教科書制、それ以後は検定教科書制、それ以前は申告制、認可制、検定制と変遷している。

してしまえば、それを普通教育において全生徒・全学生に課すのには適切でない。しかしながら、主語をどう見分けるか、何が単語かなど、気にしなければ無視できそうな問題が手つかずのまま残されている点は重要である。学校文法は、表層的に日本語の文法を理解しようとするれば役に立つところも多いが、掘り下げて文法の本質や日本語の言語学的特性を理解するようなものとしては設計されておらず、細部においても分析が適用できないところも多い。しかし、その後の一世紀の言語学的発展の成果を知っている我々が橋本文法の完成度を批判しても得るところは少ないだろう。

むしろ、文節が近年、イントネーション・ユニット (IU) として提案されている概念とほぼ重なるものであることがわかってきた点や、当初の橋本文法そのものがかなり山田文法概念や用語を取り込みながら山田文法のプライオリティに言及していないこと、敬語法についての記述が少なく、戦後になって教育現場で山田文法における敬語論が徐々に取り込まれていったと考えられることなど、整理すべき点は少なくない。橋本文法は、習得すべき文法事項を列挙して例示とともに解説するスタイルで書かれていることは、先行する山田文法やあとに続く時枝文法と対照的な点である。

学校文法としての橋本文法の功罪はここで論じるべきでないので省くが、橋本が自らのことばの規則性としくみとしての口語文法を入り口に日本語文法を理解し、それを基盤に知識の修正と追加を行うことで文語文法を習得するという教授順序あるいは学習階程を定めた点は重要であり、日本の国語教育の方針となって既に一世紀近くが経過している。この方針はいまでも消えておらず、日本の文法教育の方向性を決めたといいてもよい。つまり、文語文法を習得することによって古典が読めるようになることが文法教育の目的だと定めたのであり、それはとりもなおさず、文法とは解釈文法であって、文語文法の習得の踏み台として口語文法が設定されるということである。現在は、文法教育や古典教育の比重が減じて、それに合わせて口語文法の教育も以前より時間を割くことが減っているものの、方向性そのものは大きく変わっていないと言えるだろう。

参照文法書は、主に現代の話しことばを網羅的に記述するものであり、母語話者にわかっていることや微妙な差異や機能が説明しにくいことを省いてよい解釈文法とは全く異なる性質を持っている。終助詞や間投助詞の機能をいづれも「強調」とだけ定めてそれ以上の説明を与えなかったり、「詠嘆」という感覚的な理解を要求する機能を定めたりできるのは、共通基盤が大きい母語話者同士の間で用いられる解釈文法だからである。しかし、これは科学的記述と研究を旨とする言語学の研究に資するものとして想定される参照文法書とは相容れない点でもある。

3.5. 時枝文法以降

時枝誠記^{とまへだもとき} (1900-1967) は、東京帝国大学文学部国語学講座で橋本進吉の後任となった国語学者である。時枝文法は、ソシュールを批判的に読み解きながら提唱した言語過程説を軸に詞と辞の組み合わせを基本構造として措定している。時枝の代表的成果と言ってよい『国語学原論』(時枝 1941) はソシュールの訳書の当時の書名『言語学原論』を意識しているのだろう(加藤 2019) が、紙幅の制約から詳細に論じることは控える。重要なことは、時枝は山田孝雄と同じスタイルをとり、先行研究を批判的に検討しながらみずからの研究上の位置を定めた上で、文法に関する枠組みを構築し、文法論の詳細を述べているということである(ここでは、時枝 1941, 1955 にもとづく)。取り上げている先行研究は両者に 40 年ほどのずれがあるので一致せず、時系列で先行研究を網羅的に論じる山田に対して、ソシュールを散発的に論難して言語過程説に至る時枝は、

あまり似たスタイルに見えないかもしれないが、松下や橋本のように先行研究を論じることなく、従ってそれらとの違いを踏まえてみずからの文法論を位置づけるわけでもなく、文法の体系や基礎概念を一から説き起こすスタイルと比較すれば大きくくりには同じカテゴリーに含まれることがわかる。山田は「統覚」という認知処理を鍵概念とし、時枝は「概念過程」という認知処理を言語過程説の基盤としている点で、両者ともに心理主義的と言われることもある。松下や橋本が言語形式によって客観的な記述と分析をめざした点と対照的である。

いまでも研究の独自性を担保する中で、先行研究を批判的に論じながらみずからの立場を明確にしていく方法は一般的であるが、文法全体を体系的に論じる場合には先人どこか決定的な違いがなければ新たな文法体系を提唱する根拠が薄弱になってしまう。枠組みが同じであれば、助動詞や格助詞など個別のトピックを取り上げ、その修正を提案する技術論になってしまう。いわば文法イデオロギーのレベルでは、テクニカルな文法論になる。現在の日本語の文法研究では後者が中心になっていると言っていいかもしれない。文法論のスタイルで山田や時枝と同じカテゴリーに分類すべき文法論には、渡辺実による渡辺文法があげられる。

3.6. 日本語記述文法の系譜

日本語記述文法をどう位置づけるかにはいろいろな考え方があると思われる。例えば、益岡隆志(2003: 4)は、現在の日本語文法研究が、「国語学」の伝統を引き継ぐ流れ(渡辺1971, 北原1981ほか)、「言語学」の伝統を引き継ぐ流れ、そして、そのいずれにも直接的には属さない流れの3つがあり、第三の流れを「日本語記述文法」と名づけている。そして、日本語記述文法の流れには、奥田靖雄をリーダーとする言語学研究会⁵の流れ、南文法(例えば、南1974, 1993など)ほかの流れ、三上章から寺村秀夫(寺村門下の研究者のほかに仁田義雄とその門下の研究者を含む)に継承された流れがあるとする(本論では、三上1953, 1959, 寺村1982, 1984, 1991, 1992, 1993を参照)。寺村秀夫は、三上章に指導を受けたり、研究上の交流を持ったりしたわけではないが、「日本語母語話者が持つ言語知識を明らかにする」というみずからの立場を三上章のスタンスに連ねて位置づけた。そして、どこまでを「日本語記述文法」に含めるかの議論を別にする、現在「日本語記述文法」として多くの人が想起するのは、寺村秀夫から仁田義雄・益岡隆志、またその指導を原点としている研究者の系譜であろう。

国語学的な伝統の文法研究は既述のように、文語文法を主とし、口語文法を従とすることが多かった。これは文献学的手法に重点を置く国語学の伝統を考えると、当然であるが、現代の話しことばを主たる対象とする日本語記述文法とはこの点が決定的に異なる。また言語学的な伝統というのはわかりにくい、生成文法をはじめとする理論的な文法分析を想定しているのであれば、あらかじめ具体的な分析手順を定めておかないという点では、日本語記述文法は理論言語学の枠組みと異なっている。

本論では、詳しく取り上げる紙幅がないが、三上章はさくまかなえ佐久間鼎(1888-1970)の佐久間文法に触発されて文法研究に深く入り込み、佐久間が九州大学退職後に学長を務めた東洋大学に博士論文を提出して学位を得ている。佐久間は九州帝国大学の心理学講座初代教授を務めた心理学者である。ただ、この時代は、19世紀以来の伝統でまだ哲学と心理学と言語学は大きな括りで捉えられ

⁵ 高橋太郎・鈴木重幸・工藤浩・松本泰丈・工藤真由美・鈴木泰・鈴木康之・宮島達夫らが参加していたようであるが、参加期間や関わりは深さは一様ではない。一般には、「教科研文法」と呼ばれる文法体系として知られる。専門用語は、「はだか形」「なかどめ」など和語を用いる点で方法論の基礎は共有されていたとみられる。

ることがあった⁶。佐久間は言語学専攻でないこともあって、いわゆる本流としては生み出すことのない成果を生み出した。それは独自の考えに基づくユニークなものとも言えるが、本流から逸脱した傍流とも言えるだろう。言語学専攻であれば基盤的な知識を共有しているがそれが固定観念となってブレークスルーは起こりにくい。本流の固定観念や権威を嫌った三上にしてみれば親近感を覚えるのが佐久間の言語研究だったのだろう。佐久間の言語理論（例えば佐久間 1943 など）は、部分的には知られているが、全体的に継承されているわけではない。しかし、三上の中にその精神が取り込まれ、それを寺村が継承しているという意味では、現代の言語研究においても生きていてよと言ってもらえる。

寺村の言語研究を一言でまとめることは難しいが、自分の用いる日本語を外国語としての日本語（日本語教育）を意識しながら解明しようという点では、松下大三郎や三尾砂などと同じカテゴリーと考えることができる。「激しい雨が昨夜から降り続けている」の「激しい雨」を「激しかった雨」にすると不自然だが、「激しかった雨ももう止んだ」は不自然ではないといった観察を寺村はいくつも記しているが、これは日本語教育における誤用をヒントにしなげればなかなか思いつかないものである。こういった現象を記述することだけに重点を置き、その言語事実を整理するだけなら、いわゆる *descriptive grammar* の意味での「記述文法」になり、通称と内実に大きな差はなくなる。しかし、寺村文法は、事実の記述にとどまるわけではなく、母語話者にとっての機能や意味の違いを明らかにしようとする方向性を持っている点が異なる。そして、その「意味」は、話しことばを対象とし、話し手や聞き手などの解釈に踏み込んでいる点で、意味論の意味よりも語用論の意味に近く、語用論の意味の割合が大きい。ただ、日本語記述文法の研究では、近年、「語用論」という表現も見られるようになったものの、当初の語用論のイメージがグライス系の哲学的あるいは論理学的色彩の強い枠組みであったせいも、距離を置く姿勢だったことが窺える。これは、系統を重んじる謙虚な姿勢も関わっていると思われるが、後述するように、独自性の極まりがガラパゴス化につながる可能性が懸念されることでもある（加藤（編）2015）。

3.7. 日本語の近代文法の特性

ここまで見てきた代表的な文法はいずれも、先行研究を踏まえて、それを程度の差こそあれ批判して、みずからのポジションを定めてから、文法の全体像を記述するというスタイルをとっている。先行研究を踏まえられない文法も成立すると思うが、品詞分類を見ても個々の文法で異なり、同一の体系で分類の実質だけが違うようなものは見られない。そもそも文法を論じる楽しみは文法の体系や枠組みをつくる楽しみでもあり、先人と同じでは面白くない。これは日本語を母語とする人が、母語たる日本語を分析することから帰着する状況であり、いずれも「私の日本語論」の趣を色濃く持っている。もちろん、個々の文法に存在意義を持たせるためには、どこかに違いが必要だという考えもあるだろうが、それは研究が独自性を求める以上、領域や分野を問わない姿勢である。結果として、事実を収集することよりも枠組みをつくるのが優先することになる。

また、日本語の研究は、書きことばを想定して行われ、表記に関心があっても、音声への関心

⁶ 元良勇次郎が1888年に「精神物理学」の講義を始めたときは、帝国大学文科大学哲学科においてであり、1993年に元良が教授として着任したのも哲学科の「心理学・倫理学・論理学第一講座」であった。心理学研究室は1897年に設置されるが、東京帝国大学文科大学心理学科が設置されるのは1919年である。佐久間は、まだ心理学科がなかったため、心理学を専攻しつつも1913年に哲学科を卒業し、1923年に文学博士の学位を取得、1925年に九州帝大に着任した。なお、言語学科の前身の博言学科は帝国大学となった1886年に4つめの学科として設置され、1900年には言語学科と改称されている。

は薄かった。また、話しことばを対象にする場合でも、音声研究と文法研究が分離する傾向が強く、語彙の研究も切り離される傾向が強い（日本語の文法学者の多くは、IPAの正確な知識を持っていないことが珍しくない）。記述言語学の研究であれば、対象言語の音声から語彙、文法にテキスト収集までを一人の研究者が担うことが多いが、日本語の研究のなかでは、個々の専門家が個別の領域として研究するのが普通である。しかし、これは「分担」しているとも言えない状況にある。というのは、日本語における音声研究が文法研究や語彙研究と統合されることはないからで、多くの場合、それらは没交渉のまま進められているのである。文法研究における形態論の重要性もあまり認識されていない。接辞や倚辞（接語）の認定は日本語文法のテーマというよりも、一般言語学的なテーマと見なされるのが普通である。形態論が文法に不可欠な言語であれば考えがたいことだが、形態論は語彙論で扱えばよく、活用や形態素の話は文法に必要なものと見なされず、形態論が音韻論と統語論を結ぶ架け橋になるというような美しい研究の風景もほとんど見られない。

日本語の研究において分担が成立するとすれば、通時的研究や共時的研究の中で、時代や地域に分担がある場合くらいであろう。言語学が想定する参照文法書が日本語に関して存在しないのは、参照文法書を独力で書くという発想がないだけでなく、統合して参照文法書にくみ上げるという発想がそもそも欠けていることによると考えるべきだろう。

4. 総括—日本語に参照文法書がほぼ存在しない理由

前節までに見たように、日本語を母語とする者がその母語たる日本語についてつくる文法は、特定の目的があり、それは参照文法書の性質が希薄なものであった。中古から近代初期までの文法は、和歌や俳句などの韻文を創作するための指南書の性質が強く、その名残は山田文法や松下文法にも見られる。近世後期の八衢派や富士谷派の日本語の本質をいかに理解し、整理するかという態度が強まる。これは、その出発点においては純粋な学問的関心があったことを示している。とは言え、本居宣長は「詞玉緒」で係り結びの実質を整理しているが、それは藤原定家以来の作歌技巧としての係り結びへの関心を引き継いでいる面がある。この意味では、実用書としての文法という意義が強かったと言える。

近代において、大槻文法は辞書編纂のための品詞区分と語彙研究をおこなったという意味で重要である。それ以降は、現代に至るまで、文法論は先行研究の枠組みを批判しながらみずからの意義を見定めるという方法論が主流であった。この種の文法論では、事実観察に基づく事実の収集と蓄積をおこなった後に理論的な分析を加えるという手順にはならない。まず、理論的な枠組みがまずあり、そこでは先験的に措置される原則や規則が決められ、文法事実はそれを確認する手段になってしまう。これは参照文法書とはまったく逆の方向性を持つと言うしかない。例えば、言語過程説では、概念過程を持つものと持たないものに形態素は二分できるが、なぜ二分できるのかや概念過程の本質性を科学的に検証するわけではない。あらかじめそう定めたからそうなのである。また、詞は概念過程を有し、概念過程を持つものを詞と定義するならば、それはシンプルな循環定義にはかならない。概念過程という理論装置が循環定義を理由に有効性を失うわけではないが、科学的検証の対象にならないのだとすると、その正しさを信仰するか信仰しないかという感性に依存することになってしまう。

ただし、橋本文法は理論に合うように文法事実を整えるという方向性は希薄で、先行研究の枠組みを否定しながらみずからの理論を構築するようなことはしていない。その点で言語事実の観

察と記述に割く労力が多くなり、文法事実が文法理論に従属する他の文法とは一線を画している。もちろん、個々の用語の定義や分類基準が明確でなく、網羅すべきことが漏れている点は重要な問題ではあるが、初等教育から利用できる学校文法には最も適していると言えるだろう。そして、学校文法は古典の文章を読み解くための解釈文法へと集約していく特性を持っている。これは作歌技巧の典範とよく似た実用性を持っていると言える特徴で、理論が優先する他の文法と対照的である。

外国語教育などを踏まえた客体視から始まる日本語記述文法は、話しことばを主たる対象とし、話し手と聞き手の意図や受け止め方を分析対象に含めている点でやや参照文法書に近い特性を持つが、しかし、記述文法という名前とは実態がずれており、言語学における記述文法とは似ているものの、本質に異なる点がある。加えて、広範に記述をしながらも、全体を統合的に体系化するという方向性に乏しく、語用論や談話文法と連携しながら、一般言語学的な成果に近づける可能性があるのに、それを放棄しているようにも見える。よい点を評価するなら母語話者の微妙な感覚をうまく説明する工夫をいくつも重ねてきたと言えるが、逆の見方をすれば日本語研究独自の方向性を強め、研究のガラパゴス化を奨めているということもできる。

以上に加えて、日本語研究では、言語としての日本語を全体的に、かつ、統合的に捉えようとすることはほぼなく、音声・音韻と語彙・形態、文法・統語などに分化して分離しており、それは分担して統合連結するようなものですらない。よって、参照文法書のように、情報の多寡や記述の精度の違いこそあれ、網羅的に記述しようとする研究や成果が生じないという事情がある。

日本語で書かれた文法のうちで、冒頭で述べた「通読せずとも必要な部分だけを参照して求めている情報が得られる」という参照文法書の特徴をある程度満たすものは、日本語教師向けの文法教授資料あるいはマニュアルとなるような文献がそれにあたると思われるが、それほど多くはない。例文集や例文辞典もあるが、それも文法事実を解説する部分は多くない。また、何より近年の日本語教育学は、教授法でもカリキュラムなどの運営部分や学習者のメンタルケアに重心が移っており、日本語研究と蜜月だった以前の研究とは異なる様相を呈している。

以上、日本語に関する限り、産出的な実用性のための文法、理論のための文法、解釈と解釈技法のよりどころとしての実用的文法のいずれかしかなく、しかも、文法とそれ以外の領域が分断されたままであることによって、日本語母語話者による日本語参照文法書が生み出されない状況が続いていると考えられるのである。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016-2017年度）の成果の一部である。

参考文献

- 橋本進吉 1935 『新文典：別記 初年用・上級用』東京：富山房。
 —— 1937 『改制 新文典 初年級用』東京：富山房。
 —— 1959 『國文法體系論』東京：岩波書店。
- Hinds, John. 1988. *Japanese*. (Croom Helm Descriptive Grammars.) London: Routledge. (Series editors: Bernard Comrie and Norval Smith.)
- Kaiser, Stefan et al. 2001. *Japanese: a comprehensive grammar*. (Routledge Grammars.) London: Routledge. (Consultant editor: Sarah Butler.)
- 加藤重広 2003 『日本語修飾構造の語用論的研究』東京：ひつじ書房。
 —— 2015 「形容動詞から見る品詞体系」『日本語文法』15-2: 48-64. 日本語文法学会。
 —— 2019 『言語学講義』東京：筑摩書房。
- 加藤重広(編) 2015 『日本語語用論フォーラム』東京：ひつじ書房。
- 北原保雄 1981 『日本語の文法』中央公論社。
- Martin, Samuel E. 1975. *A reference grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
- 益岡隆志 2003 『三上文法から寺村文法へ 日本語記述文法の世界』東京：くろしお出版。
- 松下大三郎 1930 『改選標準日本文法』東京：中文館。
- 三上章 1953 『現代語法序説：シンタクスの試み』東京：刀江書院。
 —— 1959 『続 現代語法序説：主語廃止論』東京：刀江書院。
- 南不二男 1974 『現代日本語の構造』東京：大修館書店。
 —— 1993 『現代日本語文法の輪郭』東京：大修館書店。
- 大槻文彦 1891 『語法指南』東京：大槻文彦。
 —— 1897a 『廣日本文典』東京：大槻文彦。
 —— 1897b 『廣日本文典別記』東京：大槻文彦。
- 佐久間鼎 1943 『日本語の言語理論的研究』東京：三省堂。
- 寺村秀夫 1982, 1984, 1991 『日本語のシンタクスと意味I/II/III』東京：くろしお出版。
 —— 1992, 1993 『寺村秀夫論文集』東京：くろしお出版。
- 時枝誠記 1941 『国語学原論』東京：岩波書店。
 —— 1955 『国語学原論 續篇』東京：岩波書店。
- Vovlin, Alexander. 2003. *A reference grammar of classical Japanese prose*. London: Routledge.
- 渡辺実 1971 『国語構文論』東京：塙書房。
- 山田孝雄 1908 『日本文法論』東京：宝文館。

モンゴル語族の文法書

山越 康裕

A Guide to Reference Grammars of Mongolic Languages

YAMAKOSHI, Yasuhiro

Keywords: Mongolic languages, reference grammar

キーワード: モンゴル語族, モンゴル諸語, 参照文法

1. はじめに
2. モンゴル語族の概要
3. 類型論的観点から見た文法概略
4. 参照文法書リスト
5. モンゴル語族を対象とした参照文法書の特徴
6. おわりに

1. はじめに

本稿ではモンゴル諸語を対象に、これまで（2020年3月時点まで）に刊行された文法書について概観する。いわゆる記述文法書に限らず、規範的な文法書についても可能な範囲で言及し、モンゴル語族の文法書における特徴と問題点を挙げる。

2. モンゴル語族の概要

モンゴル諸語はモンゴル高原を中心に、中国・東北地方（大興安嶺）を東端（ダグール語、モンゴル語ホルチン方言など）、カスピ海西岸を西端（カルムイク語）、バイカル湖沿岸を北端（ブリヤート語）、中国・青海省（モンゴル語オイラト方言、ボウナン語など）・アフガニスタン・ヘラート周辺（モゴール語）をおおよそ南端として広い範囲にわたって分布している（地図参照）。ただしカスピ海沿岸のカルムイク語、アフガニスタンのモゴール語は他のモンゴル諸語の分布地域からかなり距離を隔てて点在している。

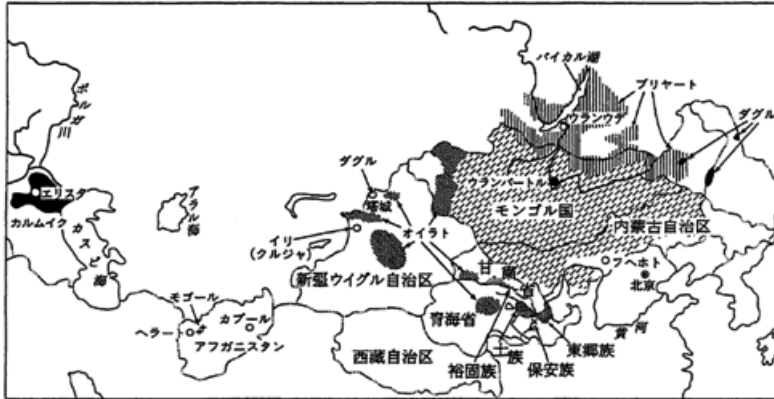
山越康裕. 2022. 「モンゴル語族の文法書」. 渡辺己・澤田英夫(編) 『参照文法書研究』. (アジア・アフリカ言語文化研究別冊 02.) pp. 39–72. DOI: <https://doi.org/10.15026/116958>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

¹ 斎藤 (2012: 64). ただし斎藤 (2012) の地図も本来は栗林 (2000), さらにさかのぼると栗林 (1992) から転用し, 国名表記を改めたものである。本稿の地図は斎藤 (2014: 64) 記載のものから中国・モンゴル国・アフガニスタン以外の境界線は除



地図. モンゴル語族の言語分布 (斎藤 2012 による)¹

広く分布している大きな要因のひとつが、チンギス・カン（とその後数代にわたる）モンゴル帝国～元朝その他の領土拡張である。その結果、モンゴル系の民族じたいは中国雲南省など南にも分布している²。

現在母語話者が確認される（と推定される）モンゴル語族の言語は（方言・言語をどう区別するかが問題となるが）10前後ある。いずれもモンゴル語族であることは確実視されているが、系統樹モデルが提示され、おおむね意見の一致をみているツングース語族とは異なり、言語間の近縁関係については先行研究でもかなりの違いがある。これは、モンゴル帝国期の急速な使用地域の拡大とその後の分断、およびモンゴル高原以外の地域における他言語との接触による変化が原因と思われる。

モンゴル語族の言語・主要方言を表1にリストアップする。方言区分については研究者や話者コミュニティによって見解が異なるうえ、さらに細分化されるため、このリストが一般的なものだとは言いえないことをあらかじめことわっておきたい。

語族内部の分岐については諸説あり、定説はいまのところない。ブリアート語、ハムニガン・モンゴル語、モンゴル語、オイラト語（カルムイク語を含む）は広義の「モンゴル語」とみなされることもあり、これら言語間の関係は近いとみられる。また、東部裕固語、東郷語、康家語、保安語、土族語民和方言、土族語互助方言はシロンゴル・モンゴル諸語(Shirongol Mongolic) もしく

1 いううえで、「康家」を追加した。ダグル（ダグール）、カルムイク（カルムイク）等、本稿の表記と一部異なること、この地図は民族分布であり、言語分布とは若干異なることに注意する必要がある。

2 たとえば中国南部の雲南省通海県興蒙蒙古族郷には13世紀に当地に移動したモンゴル人の子孫とされる人々がコミュニティを形成している。彼らは中国の民族識別工作においては「蒙古族」とされ、モンゴル人としてのアイデンティティを有しているという（雲南省通海県蒙古族文化研究传承保护中心・内蒙古錫林郭勒职业学院蒙古文化研究所 2017）。また、白語と彝語の混交言語である卡卓語（喀卓語とも表記）を母語とする（していた）とされる（木 2003, 雲南省通海県蒙古族文化研究传承保护中心・内蒙古錫林郭勒职业学院蒙古文化研究所 2017）。この言語がモンゴル語を基層言語とするという説もかつてあったが、戴・劉・傅(1987), 和(1989), 木(2003)といった先行研究ではモンゴル語を基層言語とする説に対しては否定的である。

表1 モンゴル語族に含まれる（とみなされる）主要言語・方言リスト

| 言語 | 方言・主要下位方言 | 主な地域 | 備考 | |
|------------------------------------|---------------------------------|-----------------------------|---|-------------------|
| †契丹語 Khitan | | | 死語。モンゴル語族に含まれるかどうか、未解決 | |
| ダグル語 Dagur/Daur | ブトハ方言 Butha Dagur | 中国・内蒙古自治区北部、黒竜江省 | | |
| | チチハル方言 Qiqihar Dagur | 中国・黒竜江省 | | |
| | ハイラル方言 Hailar Dagur | 中国・内蒙古自治区北部 | | |
| ブリヤート語 Buryat | ボラガド方言 Bulagat Buryat | ロシア・バイカル湖西岸 | | |
| | エヒリド方言 Ekhirit Buryat | ロシア・バイカル湖周辺 | | |
| | ホリ方言 Khori Buryat | ロシア・バイカル湖東岸、ブリヤート共和国 | | |
| | アガ方言 Aga Buryat | シネヘン方言 Shinekhen Buryat | 中国・内蒙古自治区北部 | |
| | | バルガ方言 Bargu Buryat | 中国・内蒙古自治区北部 | モンゴル語に分類されることもある。 |
| | | 新バルガ方言 New Bargut Buryat | 中国・内蒙古自治区北部 | |
| ハムニガン・モンゴル語 Khamnigan Mongolian | | ロシア・チタ州；中国・内蒙古自治区；モンゴル国東部 | | |
| モンゴル語 Mongolian | ホルチン方言 Khorchin Mongolian | 中国・内蒙古自治区東部、黒竜江省、吉林省など | モンゴル語諸方言の中では最多の話者数。 | |
| | ハラチン方言 Kharchin Mongolian | 中国・内蒙古自治区東南部 | | |
| | バーリン方言 Baarin Mongolian | 中国・内蒙古自治区東南部 | | |
| | チャハル方言 Chakhar Mongolian | 内蒙古自治区中南部 | 内蒙古自治区の威信方言 | |
| | ハルハ方言 Khalkha Mongolian | モンゴル国 | モンゴル国の80%が話者 | |
| | オルドス方言 Ordos | 中国・内蒙古自治区西部 | 個別言語（オルドス語）と扱われることもある。 | |
| オイラト語 Oirat | | 中国・新疆ウイグル自治区、甘粛省、青海省；モンゴル国 | | |
| | カルムイク語 Kalmyk | ロシア・カルムイク共和国 | オイラト語の一方言とみなせるが、別言語として扱われることも多い。 | |
| 東部裕固語 Shira Yögür | | 中国・甘粛省 | | |
| 東郷語 Santa/Dongxiang | | 中国・甘粛省、新疆ウイグル自治区、青海省 | | |
| 康家語 Kangjia | | 中国・青海省 | | |
| 保安語 Bonan | | 中国・甘粛省、青海省 | | |
| 土族語 Monguor | 民和方言 Minhe Monguor/Mangghuer | 中国・青海省 | 民族識別工作上「土族」という民族にまとめられ、1言語とされてきたが、現在では別言語とする立場も有力である。 | |
| | 互助方言 Huzhu Monguor/Mongghul | 中国・青海省 | | |
| モゴール語 Moghol | | アフガニスタン・ヘラート周辺 | | |

は河湟語と称され、こちらも音韻・文法特徴の多くを共有することが指摘されている。ただし古い時代にこの2グループ(広義「モンゴル語」およびシロンゴル・モンゴル諸語)に分岐したという確証はない。たとえば東部裕固語はシロンゴル・モンゴル諸語のなかでは広義の「モンゴル語」に近いともいわれる。ダグール語は満洲語由来の語彙も多く、20世紀初頭まではツングース語族とみなされることもあったが、Poppe(1930)によりモンゴル語族の言語であることが立証された。死語である契丹語についてもダグール語同様、ツングース語族とする説もあったが、こちらについても現在ではモンゴル諸語のひとつとする説が有力である(§4.2.15にて後述)。

3. 類型論的観点から見た文法概略

続いて、モンゴル諸語に共通する文法特徴について概述する。モンゴル諸語にみられる、類型的観点から見た文法特徴はおおむね共通している。接尾辞接続を基本とする膠着型言語で、接頭辞はない。SOV, Dependent-Headを基本語順とする pro-drop 型言語で、従属節は主節に先行する。つまり語レベルでも節レベルでも従属部が主要部に先行する。従属部標示型で、述語動詞と名詞項との関係は名詞項に各種の格接尾辞が接続することであらわされる。述語に主語人称が標示される言語(ブリヤート語、ハムニガン・モンゴル語、オイラト語、カルムイク語など)もあるが、これら言語の人称標識は人称代名詞が通時の変化によって付属語化したものである。

語形成は接尾辞を接続する接辞法がもっぱらで、複合・重複等他の手段による語形成は生産的ではない。その一方で形態的緊密性が高い「句」を構成する「句形成」ともいえるような手法が発達している。後述するが、「語」の定義を明示していない多くの先行記述ではこの「句」を「複合語」としている。先行記述のなかには、語を繰り返すことで複数性等を示す用法についても「重複」とみなしているものもある。これらを複合・重複といった語形成法とみなすことができるかどうかはどのように「語」を定義するかで見解が異なるが、音韻論的観点から「語」を定義する場合には、やはり語形成法とは認めがたい(cf. Yamakoshi 2011)。

品詞はおもに三つに大別され、格接尾辞をとりうる語類を名詞類、「活用」接尾辞をとりうる語類を動詞、どちらもとらない語類を不変化詞類とするのが妥当だと筆者(=山越; 以下同様)は考える(cf. 山越 2008)。形容詞は名詞類の下位範疇に属し、格接尾辞をとることができる。

動詞は文末(=主節述語)専用の形式(定動詞直説法、定動詞希求法)とそれ以外の形式(分詞(伝統的には「形動詞」とよばれる)、副動詞)にわけられる。分詞は連体節述語、名詞節述語として機能する。副動詞は副詞節述語として機能する。分詞と副動詞の一部は動詞連続の先行要素にもなりうる。

自然発話においては二つ以上の節が連続し、長い一文を構成することが頻繁に観察される。その一方、分詞や副動詞が文末に位置することもある。これを insubordination, いわゆる「言いさし」と認めるか否かは慎重に判断する必要があるが(cf. Robbeets 2016, Dwyer 2016), 少なくとも原則として文終止の機能をもたない副動詞に関しては insubordination とみなしてよいと考える。なお、副動詞がさらに文法化が進んで一定の機能(希求法など)を有するようになったと考えられる形式も観察される(Yamakoshi 2017)。分詞の文末用法はモンゴル語族の多くの言語に存在するが、その頻度については差異があり、ダグール語、ブリヤート語、ハムニガン・モンゴル語では高頻度であらわれ、東郷語、康家語、土族語互助方言ではほぼ確認されない(山越 2018)。

音韻面ではいわゆる「母音調和」とよばれる語内部の母音の共起制限がモンゴル諸語を含むアルタイ諸言語の特徴と言われるが、「母音調和」を欠く言語(東郷語、康家語、保安語、土族語互

助方言、土族語民和方言、モゴール語)も多い。モンゴル文語の表記から古くはCVCを基本とする音節構造を有していたと考えられるが、これを比較的保持している言語(ブリヤート語など)、CVCCのように音節末の子音連続が確認される言語(モンゴル語、カルムイク語など)、CCVCのように音節頭の子音連続が確認される言語(土族語民和方言、東部裕固語など)と、さまざまな改変がみられる。

アクセントはモンゴル語族のすべての言語で非弁別的である。ただしアクセントのタイプ(高低か強弱か、またはその双方の組み合わせか)やアクセント位置は言語によって異なっており、上述の音節構造の改変にも影響を及ぼしていると考えられる。

4. 参照文法書リスト

以下、基本的には「単著」で、音韻・文法を含むものを言語・刊行年順にリストアップする。参照文法書と呼ぶには若干分量や内容が不足しているものでも、入手しやすいものについては書誌情報を記載する。先述した通り、筆者も網羅的に把握しているわけではないため、リストに掲載していない文献も当然ながら存在することをあらかじめことわっておく。

4.1. 語族全体を網羅した概説書

以下2点が先行研究の情報をある程度網羅的にまとめている。

Janhunen, Juha, ed. 2003. *The Mongolic Languages*. London and New York: Routledge. [Eng]³

斎藤純男. 2012. 『モンゴル語史研究入門』[草稿 2012年版] 東京学芸大学. [Jpn]

Janhunen, ed. (2003) は語族全体を概括したもので、比較的新しく、利用価値が高い。収録言語はProto-Mongolic(モンゴル祖語; Janhunen 2003a), Written Mongol(モンゴル文語; Janhunen 2003b), Middle Mongol(中期モンゴル語; Rybatzki 2003a), Khamnigan Mongol(ハムニガン・モンゴル語; Janhunen 2003c), Buryat(ブリヤート語; Skribnik 2003), Dagur(ダグール語; Tsumagari 2003), Khalkha(モンゴル語ハルハ方言; Svantesson 2003), Mongol dialects((おもに中国領内の)モンゴル語諸方言; Janhunen 2003d), Ordos(オールドス語; Georg 2003a), Oirat(オイラト語; Birtalan 2003), Kalmuck(カルムイク語; Bläsing 2003), Moghol(モゴール語; Weiers 2003), Shira Yughur(東部裕固語; Nugteren 2003), Mongghul(土族語互助方言; Georg 2003b), Mangghuer(土族語民和方言; Slater 2003a), Bonan(保安語; Hugiiltu 2003), Santa(東郷語; Kim 2003)。このほかに類型的特徴から語族間の言語を対照した章(Rybatzki 2003b)、契丹語の研究概況をまとめた章(Janhunen 2003e)、チュルク語族との関係について記した章(Schönig 2003)を含む。各章には先行研究の概要も記載されているため、2003年以前に刊行された文献を網羅した文献ガイドとしても活用しうる。以降、本書収録の文法概説についての書誌情報に言及する際には冒頭に【諸語】と付す。

斎藤(2012)は私家版であり、広く公開されている文献ではないが、こちらも文献ガイドとしての利用価値が高い。モンゴル語史、文字史、モンゴル語族諸言語の紹介、研究史などを文献情報とともに概括している。この類の情報が日本語で公刊されることは少ないことを考えると、私家

³ 以下、書誌情報末尾に記述言語を[]で括った略号で示す。略号は稿末に一覧で示す。

版ではなく何らかの形で公刊が望まれる。

このほか以下も語族全体を概括的にとらえるのに適している。

栗林均氏による『言語学大辞典』（亀井・河野・千野編 1989–2002）の以下の項目：「オイラト語」「オールドス語」「カルムイク語」（以上第1巻）、「シラ・ユグル語」「シロンゴル・モンゴル語」「ダグール語」「東郷語」「内蒙古語」（以上第2巻）、「保安語」「ブリヤート語」（以上第3巻）、「モゴール語」「モンゴール語」「モンゴル語」「モンゴル諸語」（以上第4巻）

Akademija Nauk SSSR. 1968. *Jazyki narodov SSSR: Mongol'skie, Tunguso-man'zhurskie i paleoaziatskie jazyki*. Leningrad: Akademija Nauk SSSR. [Rus]⁴

Russiiskaja Akademija Nauk. 1997. *Jazyki mira: Mongol'skie jazyki, Tunguso-manchzhurskie jazyki, Japonskii jazyk, Koreiskii jazyk*. Moskva, Rossiiskaja Akademija Nauk and Izdatel'stvo Indrik. [Rus]

Mongyul sudulul-un nebterkei toli nayirayulqu jöblel, ed. 2004. *Mongyul sudulul-un nebterkei toli: üge kele, üsüg biçig*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：蒙古学百科全书编辑委员会『蒙古学百科全书：语言文字』呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]

4.2. 個別言語を対象としたおもな文法書

4.2.1. シリーズとしての文法書

モンゴル語族の諸言語の記述文法としてシリーズ化されているものに以下の2点がある。

1) 「蒙古语族语言方言研究丛书」（呼和浩特：内蒙古民族出版社）

中国・内蒙古大学のモンゴル語研究室チームが1980年代に実施した合同調査の成果として、中国国内に分布するモンゴル諸語（ブリヤート語バルガ方言（陳バルガ方言）、ダグール語、東郷語、保安語、土族語互助方言、東部裕固語、オイラト語）の文法・語彙・テキストの3点セット（合計20冊）を刊行している。ただし、オイラト語の文法書は未完である。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所2015–16年度共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」（代表：児倉徳和）および2018–2020年度共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内的要因—」（代表：山越康裕）にてオンラインデータベース化作業をおこなっている。このシリーズに共通する大きな欠点は、1) 例文グロスを欠くこと、2) 品詞分類の基準が一部恣意的であること、の2点である。ただしこの2点の欠点はその他多くの先行研究にも共通するもので、単に「叢書」に限定した問題というわけではない。なお、ブリヤート語バルガ方言の文法書のみモンゴル語で記述されており、他の文法書は漢語（中国語）で記述されている。これは、このシリーズではブリヤート語バルガ方言（と、文法書が未刊のオイラト語）のみがモンゴル語の方言とみなされ、他がモンゴル語とは別言語とみなされていることによる。

⁴ ロシア語、モンゴル語（キリル文字、モンゴル文字とも）による出版物の書誌情報はラテン字に転写して表記する。

以下、各言語において「【叢書】」を冒頭に付したものがこのシリーズとして刊行された文法書である。文中でこのシリーズ全体について言及する際には「叢書」と示す。

2) 「中国少数民族语言简志丛书」(北京：民族出版社)

中国(台湾含む)における57の少数民族言語の音韻・文法概略を『○○語簡志』(○○語簡誌)というタイトルでそれぞれ1冊ずつ書き著した文法概説書である。地域・語族ごとに再編・改訂増補された全6巻の「修訂本」が2009年に出版されている。以下、「【簡誌】」と冒頭に付したものがこのシリーズとして刊行された文法書である。

4.2.2. ダグール語 *Dagur; Daur* 达斡尔语

モンゴル語族のなかでは(現在の分布でいえば)東端に分布する言語である。18世紀に新疆地域の守備を命じられ、一部が新疆に移住した。その末裔が塔城方言を使用する。話者数は全体で9万人前後⁵と推定される。

Poppe, Nicholas. 1930. *Dagurskoe narechie*. Leningrad: Izdatel'stvo Akademij Nauk SSSR. [Rus]
⇒ テキスト・語彙・文法の3点セットが1冊にまとめられている。

Martin, Samuel E. 1961. *Dagur Mongolian Grammar*. Bloomington: Indiana University Press. [Eng]
⇒ 構造主義に則った文法・語彙・テキストの3点セット。インディアナ大学はアメリカにおけるアルタイ諸言語研究の拠点でもあり、さまざまな文法書が出版されている。

Todaeva, B. X. 1986. *Dagurskii jazyk*. Moskva: Rossiiskaja Akademija Nauk and Izdatel'stovo. [Rus]
⇒ ブトハ方言を対象とした文法書。テキスト・語彙を含む。

【簡誌】 仲素纯. 1982. 『达斡尔语简志』北京：民族出版社. [Chi]

Namtsarai and Qaserdeni. 1983. *Dagur kele mongyul kelen-ü qaričayulul*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：那木四来・哈斯额尔敦『达斡尔语与蒙古语比较』呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]
⇒ モンゴル語との比較を念頭に記述された文法書。統語に比較的分量を割いている点、各例文にモンゴル語の逐語訳がついている点が特徴である。

【叢書】 恩和巴图. 1988. 『达斡尔语和蒙古语』(蒙古语族语言方言研究丛书004) 呼和浩特：内蒙古民族出版社. [Chi]
⇒ 「叢書」のなかでは分量が多く、比較的詳細な記述といえる。

Chuluu, Üjjiyediin. 1994. *Introduction, Grammar, and Sample Sentences for Dagur*. (Sino-Platonic Papers, 56.) Toronto: University of Toronto. [Eng]
⇒ 恩和巴图(1988)に依拠したスケッチだが、例文にきちんとグロスが付されている。

⁵ 以下、話者数は引用元が示されていない場合は斎藤(2012)による。ただし斎藤(2012)の見積もりは推定される「最大値」をあらわしている印象がある。使用人口は実際にはより少ない印象を受ける。

【諸語】 Tsumagari, Toshiro. 2003. Dagur. In: Janhunen, ed. (2003), 129–153. [Eng]

烏珠尔・欧南. 2003. 『达斡尔语概论』 哈尔滨: 哈尔滨出版社.

⇒ チチハル方言の記述。

Yu, Wonsoo, Jae-il Kwon, Moon-Jeong Choi, Yong-kwon Shin, Bayarmend Borjigin and Luvsandorj Bold. 2008. *A Study of the Tacheng Dialect of the Dagur Language*. (Altaic languages series 2.) Seoul: Seoul National University Press. [Eng]

⇒ 新疆ウイグル自治区の塔城方言に関する記述。分量じたいは多くないが、語彙・グロス付きテキストを含む。韓国アルタイ学会 REAL プロジェクト (Researches on Endangered Altaic Languages) で多くのアルタイ系危機言語のフィールドワークを実施。本書と §4.2.4 にあげた Yu (2011) はその成果だが、モンゴル語族に関しては現時点では他の文法書は出ていない (調査自体はブリヤート語、オイラト語、東部裕固語、保安語、土族語民和方言などの言語・方言を対象におこなっている)。

4.2.3. ブリヤート語 Buryat; Buriat

ブリヤート語はロシア・バイカル湖周辺で主に使用される。地理的分布でいえばモンゴル語族のなかでもっとも北に分布する言語である。話者は約 30 万人と推測される。モンゴル語との類似点が多いことから広義の「モンゴル語」に含め、モンゴル語ブリヤート方言とすることもあつた。しかしモンゴル語他方言 (たとえばハルハ方言) 話者との意思疎通は困難である。さらにブリヤート語はバイカル湖を挟み、東部方言 (威信方言であるホリ方言) と西部方言 (ボラガド方言・エヒリド方言) の間の差が大きく、文化的背景も異なる。西部方言は話者数が減っており、いわゆる危機言語とされる (Moseley, ed. 2010)。

Sanzheev, G. D. 1941. *Grammatika burjat-mongol'skogo jazyka*. Moskva and Leningrad: Izdatel'stvo Akademij Nauk SSSR. [Rus]

⇒ 後の Sanzheev et al., eds. (1962) に引き継がれる。

Poppe, Nicholas N. 1960. *Buriat Grammar*. (Uralic and Altaic Series 2.) Bloomington: Indiana University Publications. [Eng]

⇒ インディアナ大学から刊行される文法書はいずれも音韻やパラダイムの記述が構造主義的である。

Sanzheev, G. D. et al., eds. 1962. *Grammatika Burjatskogo jazyka: fonetika i morfologija*. Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury. [Rus]

Bertagaev, T. A. and C. B. Cydendambaev. 1962. *Grammatika Burjatskogo jazyka: sintaksis*. Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury. [Rus]

⇒ この 2 点で音韻・形態・統語を総合的に記述。合計 650 ページあまりの詳細な文法書。ただしグロスはない。

【諸語】 Skribnik, Elena. 2003. Buryat. In: Janhunen, ed. (2003), 102–128.

ブリヤート語シネヘン方言

山越康裕. 2006. 「シネヘン・ブリヤート語」中山俊秀・江畑冬生編『文法を描く：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 271–298. [Jpn]

⇒ 言語類型論的観点に基づいて章立てされたラフスケッチ。

Yamakoshi, Yasuhiro. 2011. Shinekhen Buryat. In: Yasuhiro Yamakoshi, ed. *Grammatical Sketches from the Field*. Fuchu: ILCAA, TUFS. 137–177. [Eng]

⇒ 上記山越 (2006) の英語版。

ブリヤート語バルガ方言 (バルガ・ブリヤート語)

【叢書】 Buusiyang and B. Jirannige. 1995. *Baryu aman ayalu*. Kökeqota: Öbür Mongγul-un yeke suryaγuli-yin keblel-ün qoriya. (保祥・吉仁尼格『巴尔虎土语』呼和浩特：内蒙古人民出版社 (蒙古语族语言方言研究丛书 001)) [T.Mon]

⇒ バルガ・ブリヤート語陳バルガ方言を扱う。詳細な記述ではあるが、モンゴル語によって書かれている。バルガ方言に関しては Poppe や服部四郎なども文法記述を行っているが、量的にはこの叢書の 1 冊がもっとも充実している。

4.2.4. ハムニガン・モンゴル語 *Khamnigan Mongolian*

ブリヤートとほぼ同地域に分布する。話者数はおよそ 2000 人前後と推定される (Janhunen 2003c)。ツングース系のハムニガン・エヴェンキ (自称: *kamnigan* / モンゴルおよびブリヤートからの他称 *xaminigan* または *tunguus*) だという民族アイデンティティを有し、ハムニガン・エヴェンキ語も母語とする。ハムニガン・エヴェンキ語、ハムニガン・モンゴル語ともに危機言語である。旧来ブリヤート語の一方言と見なされていたが、モンゴル語とブリヤート語の中間的な音韻特徴を有することから別個の言語としてあつかうべきだと Janhunen (1990) が主張、Janhunen (2003c) にもそれが反映されている。

Janhunen, Juha. 1990. *Material on Manchurian Khamnigan Mongol*. (Castrenianumin toimitteita 37.) Helsinki: The Finno-Ugrian Society. [Eng]

⇒ 中国領内に亡命したハムニガンが使用するハムニガン・モンゴル語の音韻論・形態論の概説および語彙をまとめたもの。Janhunen 氏はフィン・ウゴル方式の音韻表記法を採用しており、慣れないと若干読みづらい。

【諸語】 Janhunen, Juha. 2003. *Khamnigan Mongol*. In: Janhunen, ed. (2003), 83–101.

Janhunen, Juha. 2005. *Khamnigan Mongol*. München: Lincom. [Eng]

⇒ Lincom 社より刊行されている一連のスケッチグラマーシリーズの一つ。用例は少ない。

山越康裕. 2007. 「ハムニガン・モンゴル語」 中山俊秀・山越康裕編『文法を描く 2: フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 229–258. [Jpn]

⇒ ラフスケッチ。Janhunen (1990) と同じく、中国領内のハムニガン・モンゴル語の文法概略。

Yu, Wonsoo. 2011. *A Study of the Mongol Khamnigan Spoken in Northeastern Mongolia*. (Altaic Languages Series 4.) Seoul: Seoul National University Press. [Eng]

⇒ モンゴル国東部に亡命したハムニガンのハムニガン・モンゴル語の参照文法。比較的まとまっている。中国領内のハムニガン・モンゴル語に比べるとモンゴル語ハルハ方言にかなり近づいており、Janhunen (1990), 山越 (2007a) の記述と対照すると差異が大きいことが読み取れる。

4.2.5. モンゴル語 Mongolian

現在のモンゴル語族の中で最大の話者数を有する。話者は全体で 500 万人前後と推測される。文語、ハルハ方言、内蒙古自治区の標準モンゴル語を対象とした文法書が代表的だが、その他の方言に関してもいくつか文法書が出ている。モンゴル国内ではハルハ方言の使用人口が増え、その反面他の方言が急速に衰退しつつある。内蒙古自治区はじめ中国領内では中国語を母語とするモンゴル系民族も多く、モンゴル語諸方言話者は減少しつつある。以下、文語、各方言の参照文法と呼べそうなものを列挙する。各地域の威信方言を対象とする文法書は音声・音韻に関する記述が乏しく、その一方で周辺方言を対象とする記述は形態論・統語論の記述が貧弱である。これは日本語の方言記述にも共通する問題だといえる。

モンゴル文語 Written Mongolian

伝統的モンゴル文字によって表記される「文語」の文法書のいくつかを挙げる。

Poppe, N. N. 1937. *Grammatila pis'menno-mongol'skogo jazyka*. Moskva i Leningrad: Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR. [Rus]

Hambis, Louis. 1945. *Grammaire de la Langue Mongole Écrite (premiere partie)*. Paris: Adrien-Maisonneuve. [Fre]

Poppe, Nicholas. 1954. *Grammar of Written Mongolian*. Wiesbaden: Otto Harrasowitz. [Eng]

⇒ 上記 Poppe (1937) からの英訳。Poppe の記述はいずれも概括的で、若干物足りない。

Chingaltai. 1963. *A Grammar of the Mongol Language*. New York: Frederick Ungar Publishing co. [Eng]

Rinchen, Bjambyn. 1964–67. *Mongol bichgijn xelnij züj*. Ulaanbaatar: Shinzhlex Uxaany Akademijn Xevlex Üjldver. [C.Mon]

⇒4 巻本で充実しているが、文字史・筆写法・形態論で終わっており、統語に関する記述を欠いている。

【諸語】 Janhunen, Juha. 2003b. *Written Mongol*. In: Janhunen, ed. (2003), 30–56. [Eng]

Sárközi, Alice. 2004. *Classical Mongolian*. München: Lincom. [Eng]

⇒Lincom 社のスケッチグラマーシリーズの一つであり、シリーズの他の書籍同様、エッセンスのみを抜き出している。

ハルハ方言 Khalkha

話者数およそ 250 万人。モンゴル国の標準的方言である。キリル文字による正書法が 1940 年代に整備され、以後マイナーチェンジを経ている。音韻表記を欠いた文法書がほとんどであるが、これは正書法のある言語の「文法書」の多くに共通する問題だと思われる。

Poppe, Nikolas. 1931. *Prakticheskij uchebnik Mongol'skogo razgovornogo jazyka (Xalxaskoe narechie)*.

Leningrad: Izdanie Leningradskogo Vostochnogo Instituta. [Rus]

⇒ハルハ方言に関する最初の包括的な文法書とされる。筆者未見。

野村正良. 1950. 「蒙古語」市河三喜・服部四郎編『世界言語概説』下巻. 研究社. 537–590.

⇒スケッチ。イソップ物語「北風と太陽」のテキストを含む。日本語による逐語訳あり。

Poppe, Nikolaus. 1951. *Khalkha-mongolische Grammatik*. Wiesbaden: F. Steiner. [Ger]

⇒上記 Poppe (1931) の「改訂増補版」。テキスト、語彙も含む。ただしグロスはない。服部 (1953) による書評あり。

Todaeva, B. X. 1951. *Grammatika sovremennogo Mongol'skogo jazyka: fonetika i morfologija*. Moskva:

Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR. [Rus]

⇒音韻論と形態論のみだが、内容は比較的詳細である。

Luvsanvandan, Sh., ed. 1966. *Orchin cagijn Mongol xel zij*. Ulaanbaatar: Ulsyn Xevlelijn Xereg Erxlex

Xoroo. [C.Mon]

⇒モンゴル国におけるモンゴル人による参照文法書。半世紀経つがいまだに広く利用される。

Poppe, Nicholas. 1970. *Mongolian Language Handbook*. Washington: Center for Applied Linguistics.

[Eng]

⇒生涯通じていくつかの文法書を著した Poppe が生前最後に刊行した文法書。米国亡命後の、構造主義的な考え方に基づく記述。精密ではあるが、Handbook とあるようにやはり分量は少なめである。

Sanzheev, G. D. 1973. *The Modern Mongolian Language*. Moscow: NAUKA publishing house, Central Department of Oriental Literature. [Eng]

⇒ ソ連で 1960 年代を中心に刊行されていた文法概略集「アジア・アフリカの言語」シリーズのモンゴル語文法を英訳し、刊行したもの。原典は Sanzheev, G. D. 1960. *Sovremennyj mongol'skij jazyk*. 比較的最まよりのよい文法書で、末尾に簡略ながらテキストがついている。

Kullmann, Rita and D. Tserenpil. 1996. *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jensco, Ltd. [Eng]

⇒ ドイツ語で書いた原稿（未公開）を英訳し出版した総合的記述である。ただし「キリル文字正書法によるモンゴル語」を対象としており、音声・音韻に関する記述を欠く。文法用語が独特（術語がドイツ語的）で癖があるが、400p を超える分量と豊富な用例、インデックスつき、といった点では「参照しやすい」文法書といえる。基本文献として参照されることが多い。著作権が何度か譲渡され再版を重ね、2015 年にスイス、Kullnom Verlag より刊行された第 5 版が最新の版である（2020 年 3 月現在）。

【諸語】 Svantesson, Jan-Olof. 2003. Khalkha. In: Janhunen, ed. (2003), 154–176. [Eng]

Bittigau, Karl Rudolf. 2003. *Mongolische Grammatik: Entwurf einer Funktionalen Grammatik (FG) des modernen, literarischen Chalchamongolischen*. (Tunguso-sibirica 11.) Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

⇒ コーパスをもとに機能文法の枠組みで書かれた文法書。

Önörbajan, C., A. Cog-ochir and Ü. Ariunbold, eds. 2008. *Orchin cagijn mongol xel*. Ulaanbaatar: Mongol Ulsyn Bolovsrolyn Ix Surguul'. (第 2 版) [C.Mon]

⇒ モンゴル国立教育大学で編纂されたモンゴル語文法書。歴史・音声・音韻・形態・統語・語彙・文体と総合的に記述されており、比較的バランスはよい。例文にグロス等はないが、そもそもモンゴル語で書かれているため当然ともいえる。

Janhunen, Juha A. 2012. *Mongolian*. (London Oriental and African Language Library 19.) Amsterdam: John Benjamins. [Eng]

⇒ 堅実な記述で充実した参照文法書。モンゴル語を対象としたものとしては現時点でもっとも信頼がおけるうえ、体系的でわかりやすい記述的な文法書といえる。bound morpheme に関する affix と clitic の区別に言及している点、品詞分類に関して形式的基準を示している点などが特徴的である。

内モンゴル標準モンゴル語 Barimjaa

おもにチャハル方言に依拠した中国領内の標準モンゴル語（モンゴル語でバリムジャー barimjaa とよばれる）についての文法書を挙げる。

Čenggeltei. 1979. *Odu üye-yin mongyul kelen-ü jüi*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：清格尔泰『现代蒙古语语法』呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]

⇒ 中国領内におけるモンゴル語研究の「教科書」的存在。音声・音韻・形態・統語・語形成論で構成。中国語に翻訳、改訂した版として下記がある。

清格尔泰. 1991. 『蒙古语语法』 呼和浩特：内蒙古人民出版社. [Chi.]

Nasunbayar, Qaserdeni, Sečen, Čoytu, Dawadayba, Türgen and Naranbatu, eds. 1982. *Orčin čay-un mongγul kele*. Kökeqota: Öbür mongγul-un surγan kümüjil-ün keblel-ün qoriya. [別題：那森柏・哈斯額爾敦・斯琴・朝格圖・達瓦達布格・圖力更・那仁巴圖『現代蒙古語』呼和浩特：内蒙古教育出版社.] [T.Mon]

⇒ 「高等学校教材」として編纂。音韻論が弱い反面、他の文法書と異なり統語論にある程度分量を割いている。記述的とはいえないが、例文の豊富さ、内容の充実さという点で優れている。

【簡誌】道布編著. 1983. 『蒙古語簡志』 北京：民族出版社. [Chi]

チャハル方言 Chakhar

中国領内の標準モンゴル語の基礎となっている方言。

Kökebars and Čimeg. 1994. *Üjümčin aman ayalyu*. Kökeqota: Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin keblel-ün qoriya. [T.Mon]

⇒ 筆者未見。チャハル方言の下位方言とされるウジュムチン方言の文法書。

Sechenbaatar Borjigin. 2003. *The Chakhar Dialect of Mongol: A Morphological Description*. [Suomalais-ugrilaisen Seuran toimituksia 243] Helsinki: The Finno-Ugrian Society. [Eng]

⇒ 形態論に特化されているため、参照文法書には含められないが、精緻な記述であるため紹介する。suffix と clitic, word を分析し分けている点が特徴（その基準は示されていない）。モンゴル語の主要方言がこのように総合的にていねいに分析されているものはあまり多くない。

ホルチン方言 Khorchin

話者数としては中国領内のモンゴル語方言のなかでは最大。漢語話者、満洲語話者との古い時代からの接触により、変容も大きい。

查干哈达. 1996. 『蒙古语科尔沁土语研究』 北京：社会科学文献出版社. [Chi]

⇒ 網羅的で比較的良質。

Bayančoytu. 2002. *Qorčin aman ayalyun-u sudlal*. Kökeqota: Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin keblel-ün qoriya. [別題：白音朝克圖『科尔沁土语研究』呼和浩特：内蒙古大学出版社.] [T.Mon]

ハラチン方言 Kharachin

橘瑞超. 1914. 『蒙古語研究』 大阪：大阪寶文館. [Jpn]

⇒ 日本におけるある程度まとまった分量の初の文法書。モンゴル語經典の翻訳を命じられた著者が、神戸在住だったハラチン出身のモンゴル人の羅子珍（罗布桑却丹; ロブサンチョイドン）氏の協力を得て執筆。音声・音韻はなく、文法と語彙、仏教語彙の対訳、日常会話テキスト等を含む。伝統文法の枠組みに沿っており、たとえば「関係代名詞」の項を設けて「無い」と説明するといった点が特徴的である。

Edquriyaǰi. 1996. *Mongyuljin aman ayalyu*. Ulañanqada: Öbür mongyul-un suryan kümüjil-ün keblel-ün qoriya. [別題：額德虎日亚奇『蒙古贞土语』 赤峰：内蒙古教育出版社.] [T.Mon]

⇒ 遼寧省阜新モンゴル族自治県で使用されるハラチン方言の下位方言、モンゴルジン方言の記述文法。文法はスケッチ程度で書籍の2/3は語彙集となっている。

曹道巴特爾. 2007. 『喀喇沁蒙古語研究』 北京：民族出版社. [Chi]

⇒ モンゴル語の中でも漢語（中国語）との接触が大きいハラチン方言の記述文法書。統語に関しては弱いですが、モンゴル語文語、チャハル方言等との比較語彙インデックスなどの配慮がある。漢語によるグロスが付されている。

バーリン方言 Baarin

Bayarmendü, Borjigin. 1997. *Bayarin aman ayalyun-u sudlul*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：巴音門德『巴林土语研究』 呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]

⇒ 実験音声学の手法も用いて音声分析をおこなっている点が特徴的といえる。また接辞の使用等についてもコーパスをもとに統計的に使用状況を示すなど、随所にユニークな点がみられる。グロスはない。

ナイマン方言 Naiman

旧来ホルチン方言の下位方言とされていたが、ホルチン方言とバーリン方言の中間的位置にあるということがムングングレル (Mönggüngerel) によって主張される。

Mönggüngerel. 1998. *Naiman aman ayalyu*. Kökeqota: Öbür mongyul-un yeke suryayuli-yin keblel-ün qoriya. [別題：孟根格日乐『奈曼土语』 呼和浩特：内蒙古大学出版社] [T.Mon]

⇒ 音韻・品詞ごとの形態論・語彙論。下記博士論文のベースとなっている。

ムングングレル. 2007. 『ナイマン方言の研究』 東京外国語大学博士論文. [Jpn]

⇒ 動画資料等も含むとのことだが、資料は未見。

オルドス方言 Ordos

テキスト集は数多く出ている一方で文法書はわずかである。これはモンゴル語との差異が比較

的小さいことが原因と推測される。

Soulié, M. G. 1903. *Éléments de Grammaire Mongole (Dialecte Ordoss)*. Paris: Imprimerie Nationale. [Fre]

Sečen, C., M. Bayatur and Sengge. 2002. *Ordus aman ayalyun-u sudlul*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：斯钦・巴特尔・森格『鄂尔多斯土语研究』呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]

⇒ 音声・音韻・形態・語彙。接辞一覧や借用語に関する記述など、ていねいに書いてある印象を受ける。

【諸語】 Georg, Stefan. 2003. Ordos. In: Janhunen, ed. (2003), 193–209.

⇒ 1.2 節で挙げた Janhunen, ed. (2003) 収録のスケッチ。モンゴル語諸方言とは別個に章を設けている。

Sengge, Jin Iui. 2010. *Mongyul kelen-ü ordus aman ayalyu*. Kökeqota: Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya. [別題：森格・金钰『蒙古语鄂尔多斯土语』呼和浩特：内蒙古人民出版社] [T.Mon]

⇒ Sečen et al. (2002) からどのようにアップデートされたのかよくわからない。同一の例文や説明で、ほぼ再版ではないかと思われる。

このほか、内蒙古自治区のモンゴル語諸方言を網羅的に概観したものに下記がある。

Todaeva, B. X. 1985. *Jazyk Mongolov vnutrennej Mongolii: ocherk dialektov*. Moskva: Izdatel'stvo NAUKA. [Rus]

⇒ 内蒙古自治区の方言を東部方言（ホルチン，ハラチン，アルホルチン）・中央方言（チャハル，シリングル）・西部方言（オルドス語）に分け概説したもの。ホルチン方言を対象とした音韻論・形態論の記述がある。

【諸語】 Janhunen, Juha. 2003. Mongol Dialects. In: Janhunen, ed. (2003), 177–192. [Eng]

⇒ 分類・音声的な特徴といった概括的な内容。統語論に関する記述はない。

内蒙古自治区地方志办公室编. 2012. 『内蒙古自治区地方志・方言志：蒙古语方言卷』北京：方志出版社. [Chi]

⇒ おもに中国・内蒙古自治区におけるモンゴル語諸方言（チャハル方言，バーリン方言，オルドス方言，アラシャン・エジネ方言，ハラチン方言，ホルチン方言，ブリヤート語バルガ方言（＝モンゴル語バルガ方言））の音韻論・形態論を対照する形で項目別に記述している。また、各方言のテキストも付されている。モンゴル文語による逐語訳は付されているが、グロスと呼べるものではない。参照する点で非常に便利だが、統語論に関する記述がほぼ「無い」というほどに乏しい（音韻論・形態論に 800 頁ほど割いているのに対し、統語論は 12 頁分しかない）。

4.2.6. オイラト語 Oirat

新疆ウイグル自治区、青海省、モンゴル国西部など広範囲に分布する。次項 4.2.7 で紹介するカルムイク語もオイラト語の一方言とみなしてよい言語だが、ひとまず別項とする。カルムイク語を除くと話者数は約 20 万人と推測される。

話者集団はもともとバイカル湖南部～南西部に暮らす「森の民 (Hoi-yin irgen; 森-GEN 民)」に属する一集団だったのではないかと推測されている (Birtalan 2003)。モンゴル帝国期にチンギス・カンに帰属し、モンゴル帝国解体期にモンゴル高原西部で力を強め、近世ではジュンガル帝国を築く。モンゴル文字を改良したオイラト文字 (トド文字) を使用し、近世以降多くの文献が残ることから、文語研究がメインでおこなわれる。文法書でも文語と口語とが明確に区別されていない記述もある。

下位方言に関する文法書がモンゴル国で数点出版されている。ただしモンゴル語で書かれており、モンゴル語がわからないと例文もわからない。「叢書」シリーズでも現地調査が行われているのだが、文法書が未刊となっている (語彙集、テキスト集は刊行済み)。

Coloo, Zh. 1965. *Zaxchiny aman ajalguu*. Ulaanbaatar: BNMAU-yn Shinzhlex Uxaany Akademijn xevel. [C.Mon]

⇒ オイラト語ザハチン方言を記述した手書き原稿の謄写版印刷。音声・音韻にわずかに形態論を含む。

Vanduj, E. 1965. *Dörvöd aman ajalguu*. Ulaanbaatar: BNMAU-yn Shinzhlex Uxaany Akademijn xevel. [C.Mon]

⇒ 同じくドゥルブド方言の記述。音声・音韻と形態論・語彙論を含む。上記 Coloo (1965) よりも有用。

Battulga, C. and D. Badamdorzh. 2005. *Ööld aman ajalguuny ojilogo*. Ulaanbaatar: EKIMTO XXK. [C.Mon]

⇒ 音韻・形態のスケッチと語彙。少しもの足りない。

【諸語】 Birtalan, Ágnes. 2003. Oirat. In: Juha Janhunen, ed. (2003), 210–228. [Eng]

⇒ モンゴル国のオイラト語について、モンゴルとハンガリーの科学アカデミーによる合同調査が進行中だが成果は未完 (p.212) との記述がある。その後どうなったか筆者は把握していない。

4.2.7. カルムイク語 Kalmuck

オイラトの一部族、トルグートが 17 世紀に内紛を避けてヴォルガ河畔に移動。その後 1771 年初頭に新疆・イリ地方への帰還をめざすが、暖冬でヴォルガ河が凍結せず、西岸に残ったトルグートが取り残された。これがカルムイクの祖先である。カルムイクという呼称はチュルク系言語の動名詞 *qal-maq* (「留ま-ること」。現代トルコ語で *kalmak*) のロシア語式発音に由来する。一部のトルグートは無事イリ地方に帰還したこともあり、カルムイク語もオイラト語の一方言としてあつかわれることも多い (e.g. Ethnologue)。話者数は約 13 万人。ヨーロッパに分布するという

地理的条件もあり、比較的資料にめぐまれている。とくに口承文芸を中心としたテキストが豊富である。

Bobrovnikov, Aleksandrovich. 1849. *Grammatika Mongol'sko-Kalmyckago jazyka soeinen*. Kazan: Universitetsk. [Rus]

Kotwicz, Władysław. 1929. *Opyt grammatiki Kalmyckogo razgovornogo jazyka*. Izdanie vtoroe, Rzhhevnicu u Pragi: Izdanie Lalmyckoi komissij kul'turnyx rabotnikov. [Rus]

Sanzheev, G. D. 1940. *Grammatika Kalmyckogo jazyka*. Moskva: Izdatel'stvo Akademij Nauk SSSR. [Rus]

Ochirov, U. U. 1964. *Grammatika Kalmyckogo jazyka: sintaksis*. Elista: Kalmgosizdat. [Rus]

Badmaev, B. B. 1966. *Grammatika Kalmyckogo jazyka: morfologija*. Elista: Kalmyckoe knizhnoe izdatel'stvo. [Rus]

Bitkeev, P. C. et al. 1983. *Grammatika Kalmyckogo jazyka: fonetika i morfologija*. Elista: Kalmyckoe knizhnoe izdatel'stvo. [Rus]

Pjurbeev, G. C. 1977–79. *Grammatika kalmyckogo jazyka: [1] sintaksis prostogo predlozhenija, [2] sintaksis slozhnogo predlozhenija*. Elista: Kalmyckoe knizhnoe izdatel'stvo. [Rus]

⇒ 上記 Bitkeev et al. (1983), Pjurbeev (1977–79) で音韻・形態・統語を一通りカバーできるかたちになっている。

Pjurbeev, G. C. 2010. *Grammatika Kalmyckogo jazyka: sintaksis*. Elista: Rossijskaja Akademija Nauk. [Rus]

⇒ 上記 Pjurbeev (1977–79) の再版。

【諸語】 Bläsing, Uwe. 2003. Kalmuck. In: Juha Janhunen, ed. (2003), 229–247. [Eng]

4.2.8. 東部裕固 (シラ・ユグル) 語 *Shira Yögür (Yughur); Eastern Yögür (Yughur)*

中国で「裕固族」とされる少数民族の一部が使用している。裕固族は東部裕固と西部裕固にわかれ、東部裕固が使用する言語がこの東部裕固語、別名シラ・ユグル語である。話者数約 3–4,000 人とされる。西部裕固はチュルク語族のサリク・ユグル語を使用する。シラ・ユグル、サリク・ユグルともそれぞれの言語で「黄色いウイグル」を意味する。これは伝統的に仏教を信仰してきたことに由来する。

Tenishev, E. R. and B. X. Todaeva. 1966. *Jazyk zheltyx Ujgurov*. Moskva: Izdatel'stvo NAUKA. [Rus]

⇒ チュルク語族のサリク・ユグル語とモンゴル語族のシラ・ユグル語それぞれの音韻・形態・統語・語彙を概括している。ごくわずかなテキストを含む。用例には乏しい。

【簡誌】照那斯图编著. 1981. 『东部裕固语简志』北京: 民族出版社. [Chi]

【叢書】保朝鲁・贾拉森编. 1991. 『东部裕固语和蒙古语』(蒙古语族语言方言研究丛书 016) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社. [Chi]

【諸語】Nugteren, Hans. 2003. Shira Yughur. In: Janhunen, ed. (2003), 265–285. [Eng]

4.2.9. 東郷（ドゥンシャン）語 **Santa; Dunshan; Dongxiang**

「東郷族」とされる少数民族が使用。欧米では Santa と呼ばれることも多い。イスラム教を信仰しており、漢民族からは「蒙古回回」などとよばれていた。シロンゴル・モンゴル語のなかでは比較的話者数が多く、約 20 万人の話者を有するとされる。

Todaeva, B. X. 1961. *Dunsjanskij jazyk*. Moskva: Izdatel'stvo Vostochnoj Literatury. [Rus]

【簡誌】刘照雄编著. 1981. 『东乡语简志』北京: 民族出版社. [Chi]

【叢書】布和编. 1986. 『东乡语和蒙古语』(蒙古语族语言方言研究丛书 007) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社. [Chi]

Field, Kenneth L. 1997. *A Grammatical Overview of Santa Mongolian*. Doctoral dissertation at University of California, Santa Barbara. [Eng]

⇒ 博士論文。派生と屈折, clitic と suffix 等の区別にも配慮している。

【諸語】Kim, Stephen S. 2003. Santa. In: Janhunen, ed. (2003), 346–363. [Eng]

金双龙. 2013. 『东乡语研究』内蒙古大学博士论文。

⇒ 博士論文。新疆ウイグル自治区と甘粛省の東郷語の記述。音韻論に多くが割かれているが、形態論はごく簡単な素描に終わっている。2020 年に書籍としても刊行されている（金双龙. 2020. 『东乡语研究』北京: 民族出版社）。

Napolis, Mateus Froes. 2014. *Studies on the Verb Complex of Santa Mongolian*. PhD thesis at the Payap University, Thailand. [Eng]

⇒ 動詞の屈折にフォーカスした博士論文だが、音韻論・形態論・統語論の概述を含み、巻末にテキストが数編付されている。

4.2.10. 康家（カンジャ）語 **Kangjia**

1988 年に初めて調査された言語で、民族としては回族が使用する。話者数は 500 人弱。次項の保安語に近いとされるが、格形式などが異なる。

申钦朝克图. 1999. 『康家语研究』上海: 上海远东出版社. [Chi]

⇒ この文献が唯一の文法書。有用。

4.2.11. 保安（ボウナン; バオアン）語 Bonan; Bao'an

「保安族」とされる少数民族が使用する。話者数は約1万人と推定される。日本国内では佐藤暢治氏（広島大学）が記述研究に従事している。

Todaeva, B. X. 1966. *Baoan'skii jazyk*. Moskva: Nauka (AN SSSR Institut narodov Azij). [Rus]

【簡誌】 布和・刘照雄编著. 1981. 『保安语简志』北京：民族出版社. [Chi]

【叢書】 陈乃雄编. 1987. 『保安语和蒙古语』（蒙古语族语言方言研究丛书 010）呼和浩特：内蒙古人民出版社. [Chi]

【諸語】 Hugjiltu, Wu. 2003. Bonan. In: Janhunen, ed. (2003), 325–345. [Eng]

Fried, Robert Wayne. 2010. *A Grammar of Bao'an Tu, A Mongolic Language of Northwest China*. Ph.D dissertation at the University of Buffalo, State University of New York. [Eng]

⇒ ボウナン語はイスラム教を信仰する「保安族」の言語とされるが、チベット仏教を信仰する「土族」（モンゴル族）の一部も同言語を使用する。この土族が使用するボウナン語を、Dixon (2010) の枠組に基づいて記述した博士論文。用例も多く、良質な文法書である。この文法書では格標識は clitic と分析。

佐藤暢治. 2011. 『保安語積石山方言のテキスト』白帝社. [jpn]

⇒ 記述文法ではなくテキストだが、文法概略を含む。

4.2.12. 土族（モンゴル）語民和方言 Mangghuer; Minhe Monguor

本項民和方言と次項の互助方言は、土族語 (Monguor) として一言語にくくられている (cf. 栗林 1992: 518)。しかしながら両言語コミュニティは異なる文化的背景を有すること、相互理解が困難なことなどから、とくに欧米では近年この両言語を別個の言語と見なすようになっている。両言語ともに「土族」とされる少数民族が使用する。「土族」の名称は「土着の」の意味に基づいているとされる。民和方言話者は約2万5,000人 (Slater 2003a)。互助方言に比べて民和方言は研究が進んでいないが、Slater (2003b) は良質な文法書である。

Slater, Keith W. 2003. *A Grammar of Mangghuer: A Mongolic Language of China's Qinghai-Gansu Sprachbund*. London and New York: Routledge Curzon. [Eng]

⇒ 包括的な文法書としては唯一か。名詞の格標識が他と異なり clitic であると規定されている。

【諸語】 Slater, Keith W. 2003. Mangghuer. In: Janhunen, ed. (2003), 307–324. [Eng]

4.2.13. 土族語互助方言 Mongghul; Huzhu Monguor

前項民和方言に比べると先行研究に恵まれている（が、それでも多いわけではない）。話者数は5万人以下 (Georg 2003)。1920–30年代に調査したモスタールトとシュミットによる記述（音韻・文法・辞書の三部作）が精緻で、長らくこの記述が参考にされてきた。

Smedt, Albert and Antoine Mostaert. 1929–31. *Le dialecte monguor, parlé par les Mongols du Kansou occidental Ière partie: Phonétique, Anthropol.* 24: 145–166, 801–815; 25: 657–669, 961–973; 26: 253. [Fre]

⇒ 音韻論

Smedt, Albert and Antoine Mostaert. 1933. *Le dialecte monguor, parlé par les Mongols du Kansou occidental IIIe partie: Dictionnaire monguor-français.* Pei-p'ing: Imprimerie de l'Université Catholique. [Fre]

⇒ 辞書

Smedt, Albert and Antoine Mostaert. 1964. *Le dialecte monguor, parlé par les Mongols du Kansou occidental IIe partie: Grammaire.* [2. éd.] (Uralic and Altaic Series 30.) Hague, London and Paris: Mouton co. [Fre]（初版は1945. Peking: The Catholic University）

⇒ 文法書

Todaeva, B. X. 1973. *Mongorskii jazyk: Issledovanie, teksty, slovar'.* Moskva: Nauka (AN SSSR Institut vostokovedenija). [Rus]

⇒ 文法・テキスト・語彙がセットになっている。互助方言を基本とし、音韻論・形態論では民和方言にも触れている。表記がキリル文字にもとづく音素表記となっており、慣れないと読みづらい。

【簡誌】照那斯图编著. 1981. 『土族语简志』北京：民族出版社. [Chi]

【叢書】清格尔泰编. 1991. 『土族语和蒙古语』（蒙古语族语言方言研究丛书 013）呼和浩特：内蒙古人民出版社. [Chi]

⇒ いずれも互助方言の記述もわずかに含む。「叢書」は比較的詳細に記述されている。

【諸語】Georg, Stefan. 2003. Mongghul. In: Janhunen, ed. (2003), 286–306. [Eng]

4.2.14. モゴール語 Moghol

アフガニスタンに暮らすモゴールと呼ばれる集団が母語とする。アフガニスタンの政情から、モゴール語は現地調査が困難である。おそらく死語、もしくは極めて死語に近い状態にあると推測される。なお、「服部四郎が調査を行い、録音資料を得た（1961年）……（中略）……服部四郎の持ち帰った資料は現在、島根県立大学の所蔵となっている」（斎藤 2012: 88）という。

Weiers, Michael. 1972. *Die Sprache der Moghol der Provinz Herat in Afghanistan* (Sprachmaterial, Grammatik, Wortliste). Opladen: Westdeutscher Verlag. [Ger]

⇒ テキストや語彙などの資料は出ているが、文法がある程度まとまった形であらわされたものはこの1点のみか。文法書としては分量が少なめだが、限られた資料のもとでまとめられている点を考えると充実しているといえる。ドイツ語対訳つきのテキストが音韻・文法よりも先に配置されている不思議な構成。テキストにグロスはない。

Böke, ed. 1996. *Moyul kelen-ü sudulul*. Kökeqota: Öbür mongyul-un yeke suryayuli-yin keblel-ün goriya. [別題：布和『莫戈勒语研究』呼和浩特：内蒙古大学出版社。] [Chi]

⇒ フィールドワークは行わず、先行研究およびテキスト等にもとづいてまとめられた文法書。音韻・形態・統語・語彙を一通り網羅。グロスはないが、モンゴル語で逐語訳がなされている。

4.2.15. 契丹語 Khitan

モンゴル語族に含まれるかどうか、まだ解決されていないが、Janhunen (2003e) は契丹語を Para-Mongolic として、現在のモンゴル諸語とは別に祖語から分岐した言語であろうと位置付けている。契丹小字・契丹大字という二種の文字による記録がある。長らく未解読であったが、近年新資料が多数発見されており、解読がすすむとともに文法も少しずつ明らかにされている (cf. 大竹 2015a, 2015b, 2016, 2020, Takeuchi 2015, 武内 2016, 2017, etc.)。参照文法書と呼べる類のものはないが、比較的体系的なものについて記載する。

吳英喆. 2007. 『契丹语静词语法范畴研究』呼和浩特：内蒙古大学出版社. [Chi]

⇒ 名詞形態論を扱った単著。

Daniel, Kane. 2009. *The Kitan Language and Script*. (Handbook of Oriental Studies Series, Section 8: Uralic and Central Asian Studies.) Leiden: Brill. [Eng]

⇒ 文字素論・形態論等の記述に加え、語彙・テキストを含む。

武内康則. 2013. 「契丹語の研究」京都大学博士論文. [jpn]

⇒ 研究史・文字解読・音韻論・形態論・統語論を含む。文字解読・音韻論が多くを占めており、形態論・統語論の記述は少ない。

5. モンゴル語族を対象とした参照文法書の特徴

5.1. 全体にわたる特徴

文法書の多くが、以下のような構成になっている。研究の背景が異なる国ごとにもう少し特徴があらわれるかと思ったが、差異はあまり見られない。

1. 音声・音韻論

母音 (短母音・長母音・二重母音・母音調和)

子音

音節構造

子音連続

形態音韻規則

アクセント (← 非弁別的であるためか、非常に簡略な記述にとどまるケースが多い)

2. 形態論

品詞分類

名詞類 (名詞・名詞の屈折：格の用法・代名詞：人称、指示・形容詞・数詞・場所名詞、etc.)

動詞 (動詞の屈折：定動詞 (直説法、希求法)、形動詞、副動詞・動詞の態：使役、受動、相互、協同など・指示動詞・補助動詞・動詞連続)

不変化詞類 (副詞・接続詞・文末小詞・感動詞など)

3. 統語論

疑問文・複文の構造など (← 簡略な記述が多い)

以下、いくつか多くの先行研究に共通する問題点を挙げる。

統語に関する言及が少ない

音韻・形態に分量の多くが割かれ、統語については簡潔にまとめているものが目立つ。後述するが、形態論で品詞別の機能について言及しており、そこで他の語句との修飾構造も説明されることによるのか。ただしこうした文法書の構成は、とくに言語の構造を把握していない読者にとって Referential という点では不便である。

例文にグロスがない／形態素境界が示されていないケースが多い

20世紀中盤までの文法書ではロシア・ドイツなどで出版されたものもグロスがない。近年解消されてきているが、「叢書」シリーズのようにモンゴル圏 (モンゴル国・中国内蒙古自治区・ブリヤートなど) で出版されるものはまだグロスがないものも多い。「モンゴル語を理解する読者」を対象として想定していることにより、モンゴル語からのある程度の類推がきくことが背景にあると思われる。そもそもグロスをつけるというのは文法を書く際にどの程度「当然」のこととして認識されているのだろうか。

モンゴル語との比較を前提として記述されており、モンゴル語の知識が求められる

たとえば「叢書」シリーズがこのタイプである。「モンゴル語では○○のようにあらわすが」といった説明が多い。これは比較がそもそも文法書の目的となっていることに起因する。ツングース語族 (Ikegami 1974) は語族内の系統関係がある程度解明されているのに対し、モンゴル語族は内部の系統関係が十分に解明されていない。そのためか、それぞれの文法記述においても常にモンゴル語との比較が念頭におかれる。その際、モンゴル文語が比較対象となることが多い。これは有益な場合もあるが、当該言語とモンゴル文語を比較対照する意義があるのかどうか疑わしいケースもある。というのも、モンゴル文語は「祖語」の状況を示しているわけではなく、現存するモンゴル諸語すべてが文語であらわされる音韻・文法体系にさかのぼれるわけではないためである。たとえばシロンゴル・モンゴル諸語 (河湟語) とくらわれる言語群は単に文語との比較で

は十分に理解が進まない。

ロシア（ソ連圏）における文法記述の枠組みに拠っているものが多い

Poppe（やそれ以前のロシア・旧ソ連の研究者）らが先駆となっていること、またモンゴル国も社会主義時代はソ連の影響を大きく受けていたことから、モンゴル語文法はロシア語文法の枠組みに沿って記述される傾向にある。たとえば動詞の屈折が「定動詞」「形動詞」「副動詞」という範疇に下位区分されたり、屈折範疇に含まれない（と筆者が考える）名詞の「数」標示が数・格の体系としてまとめて章立てされていたり、という点が特徴的である。動詞の屈折に関する記述は、中国側の文法記述でも踏襲されている。

「非文」の記載を欠くものが多い

これはモンゴル語族の文法書に限った問題ではないと思われるが、「非文」つまり文法構造上適格ではない例を載せている文法書が少ない。ただし Slater (2003b), Fried (2010) といった最近の記述文法書には非文も提示されている。死語や文献に頼らざるを得ない言語はさておき、そうではない言語に関しては多少なりとも非文の例があってほしい。

5.2. 各論における諸問題

5.2.1. 音声・音韻論

表記法

「叢書」をはじめ、とくに中国側の記述に多い問題点として、表記が音素表記であるのか、簡略な音声表記であるのかが不明瞭である点があげられる。音素表記としては複雑な体系に見えるケースがある。一方、Janhunen 氏をはじめ近年の欧米の研究者による参照文法書はこの区別が明確である。

アクセントの記述

アクセントの記述が簡素で、問題がある。とくに中国で出されているモンゴル語・モンゴル語諸方言の参照文法においては、母音調和の法則（語内部の母音の共起制限／語内部の先行音節に基づいて後続音節の母音の音価に制約がでる）に依拠していることが原因なのか、『語頭』もしくは『長母音・二重母音を含む音節』がある場合にはそちらにアクセントが置かれる」（e.g. Poppe 1951: 13）といった記述がある（ただしこれについては細部で記述が異なる。Luvsanvandan, ed. (1966: 46) は「母音の長短に関わらず常に第一音節に置かれる」、清格尔泰 (1991: 76) は「重音は第一音節に固定されており、音高（筆者注：ピッチ）は第二音節で高くなる」としている）。モンゴル語やオイラト語、カルムイク語などでは第2音節以降の短母音があいまい母音化するため、これを弱化ととらえれば相対的に第一音節や長母音・二重母音を含む音節が「強い」ことになるが、いわゆる「強勢」の分布とは異なる。高さアクセントについては第一音節／長母音・二重母音を含む音節が高くなるということはない。記述の不正確さに加え、強弱アクセント・高低アクセントの別がなされていない点が問題の原因と言える。

シロンゴル・モンゴル諸語ではアクセント（中国語では「重音」）が最終音節に置かれるという記述がされる⁶が、こちらについても強弱アクセントか、高低アクセントかの区別はなされていない。こうしたシロンゴル・モンゴル諸語の記述においても「第一音節に『重音』が固定され

⁶ 角道 (2001: 82) は「東部裕固語、土族語、保安語、東郷語のアクセントが最後の音節にあるというようなことは軽々しくは言えない」と指摘している。

るモンゴル語とは異なり…」(e.g. 陈编 1987: 72) といった説明がある。こうしたアクセント記述が誤りであることはすでに指摘されているのだが、いまだに『『アクセントは第一音節』が通説である』(宝音 2014) といった言説が、とくにモンゴル人研究者の間で通用している。

音韻解釈

モンゴル語ハルハ方言など、第二音節以降の短母音が著しく弱化する言語に関しては Svantesson et al. (2008) のように第二音節以降に母音の長短を認めないとする音韻解釈や、第二音節以降の母音音素をすべて /ə/ とする解釈 (フレルバートル・栗林 1997) もある。このような点をふまえても、音声・音韻に関してはまだまだ未解決なところが多いことがうかがえる。モンゴル語の音声・音韻に関しては上記 Svantesson et al. (2008) のほか、日本国内でも植田尚樹氏による一連の研究 (植田 2013, 2014, 2018, 2019) が出ており、他の言語についても研究の進展が待たれる。

5.2.2. 形態論

「語」の規定とそれに関する問題

自立語・付属語・付属形式をどう区分するべきか、説明があつてしかるべきだが、それを欠いている。Slater (2003b), Fried (2010), Janhunen (2012) など近年の文法書では clitic の規定とともに説明されている。このうち Slater (2003b), Fried (2010) はともに格標識の自立性が高いとみられる言語 (土族語民和方言, 土族が使用する保安語) を対象としている点も特徴的である。

「語」の規定が不十分なため、音韻的には 2 語であるような語結合が「複合」として語形成法のひとつに含められているところも、多くの先行記述に見られる問題点の一つである。もちろん、それを「複合」とみなす根拠が説明されていればよいが、そのような説明は欠いている。なお自立語・付属語の境界に関する重要な論考として梅谷 (2013a, 2014) がある。付属語・付属形式の境界に関しては山越 (2004, 2007b) も言及している。

品詞分類

品詞分類については、Kullmann and Tserenpil (1996) を除くとほとんどが「名詞類 (格接尾辞を接続しうる語類)・動詞 (「活用」接尾辞を接続しうる語類)・不変化詞類」という上位分類と、それぞれの下位分類で品詞を設定している。しかし、上位分類が形式による分類なのに対し、下位分類が機能による分類になっているケースがある (表 2)。とくに不変化詞類についてはその傾向が顕著である。品詞分類についてはモンゴル語族全般に共通して、もう少し慎重に考える必要がある。しかし品詞分類に関する議論は梅谷 (2013b, 2015), 山越 (2008) などにとどまり、モンゴル諸語研究における関心の対象とはなりえていない。

表2 (参考) いくつかの文法書におけるモンゴル語の品詞分類

| Luvsanvandan, ed. (1966) | | Kullmann and Tserenpil (1996) | | Janhunen (2012) | | 清格尔泰 (1991) | | |
|---------------------------|---------------------------|-------------------------------|---------|-----------------|---------------------|-------------|-----|----------|
| Нэр үг (noun) | Жинхэнэ нэр (substantive) | Concrete parts of speech | Noun | | Nominals | Proper | 靜詞類 | 名詞 |
| | Тэмдгийн нэр (adjective) | | Verb | | | Spatial | | 形容詞 |
| | Тооны нэр (numeral) | | Adword | Adjective | | Adjective | | 數量詞 |
| Үйл үг (verb) | | | Adverb | | Numeral | | 時位詞 | |
| Дайвар үг (adverb) | | | Numeral | | Pronoun | | 代詞 | |
| Төлөөний үг ('proword') | | | Proword | | Verbals | | 動詞 | |
| Дагавар үг (postposition) | | Postposition | | Invariables | Adverb ⁷ | 不變化 | 副詞 | |
| Сул үг (particle) | | Conjunction | | | | | | Particle |
| | | Particle | | | | | | 摹擬詞 |
| | | Interjection | | | | | | 後置詞 |
| | | | | | | | 語氣詞 | |
| | | | | | | | 連接詞 | |
| | | | | | | | 感情詞 | |

派生か屈折か

付属形式については、派生と屈折の線引きについても十分な基準を示しているものはないように思われる。ポップな図式(図1)で派生と屈折の別を解説している Kullmann and Tserenpil (1996) のようなものもあるが、同書でもその基準をどこに置くかは示していない。

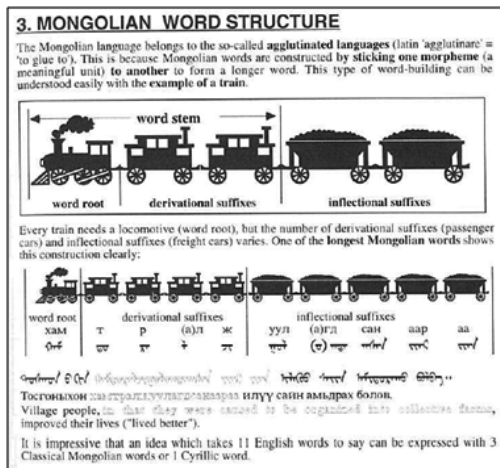


図1 語根・語幹・派生・屈折の解説 (Kullmann and Tserenpil 1996: 33)

⁷ Janhunen (2012: 58) は Adverb については積極的定義はしていない。auxiliary や conjunction, postposition, interjection なども含むとしており、いわゆる「品詞のゴミ箱」として副詞を設定している。筆者も Yamakoshi (2011) などと同様の品詞分類をおこなっている。

このほかに、たとえばどこまでを格接尾辞と認めるか、どこまでを動詞の屈折範疇と認めるかという点において、周辺的な形式を含めるか否かが文法書毎に異なっている。あくまで印象だが、モンゴル語母語話者による記述のほうがより多様な格（表3）・多様な屈折体系があるように記述する傾向がある印象を受ける。

表3 （参考）ダグール語の格体系（恩和巴图 1988 と Tsumagari 2003 の比較）

| 恩和巴图 1988 | Tsumagari 2003 |
|-----------|---|
| 基本格 | 主格（接辞なし） |
| | Nominative（接辞なし） |
| | 領格 -i, -ui, -ji |
| | 賓格 I -i, -ui, -ji |
| | 賓格 II -i:ju, -uiju, -ju（不定対格?） |
| | 与位格 -d |
| | Dative -d |
| | 凭借格 -A:r (-a:r, -o:r, -ə:r), -e:r, -jA:r |
| | Instrumental -AAr, [y]-ier, [w]-oor, -y-AAr |
| | 界限格 -A:r(s), -e:r(s), -jA:r(s) |
| | Ablative -AAs, [y]-ies, [w]-oos, -y-AAs |
| | 共同格 -ti: |
| | Possessive -tii |
| 非基本格 | 程度格 -ŋA:r |
| | — |
| | 確定方位格 I -kA:kəl |
| | — |
| | 確定方位格 II -kA:ki: |
| | — |
| | 不定方位格 I -A:tən, -e:tən, -jA:tən |
| | — |
| | 不定方位格 II -A:kul, -e:kul, -jA:kul |
| | — |
| | 由来格 -A:ta:r(s), -e:ta:r(s), -jA:ta:r(s) |
| | — |
| | 方向格 -dA: |
| | — |
| | 目標格 -mA:ji |
| | — |
| | 定格 -n |
| | — |

派生接尾辞の共時的記述

モンゴル語族の言語は多様な派生接尾辞を有する。それをまとめた先行研究としてたとえば塩谷 (2006) がある。しかしながら、その共時的な生産性についての言及がないものがほとんどである。実際には生産的ではないにもかかわらず、通時的側面から当該形態素を抽出し、派生接尾辞として認めているものも多く、いたずらに複雑に記述する傾向がある。たとえば Luvsanvandan, ed. (1966: 78–85), Kullmann and Tserenpil (1996: 42–56) などがそれに該当する⁸。

動詞形態論

従来の先行記述のほとんどは、1.1 で触れたように動詞の屈折を定動詞 (finite), 形動詞 (verbal noun/participle), 副動詞 (converb) の三つに大別し、記述している。形動詞・副動詞というカテゴリーは、ロシア語文法における причастие, деепричастие を適用したもので、これが広くアルタイ諸言語の記述にも適用されている。しかしながら、主節述語専用の形式である定動詞は別として、形動詞・副動詞のカテゴリー内の諸形式の機能は、それぞれ均質ではない。たとえば形動詞に分類される諸屈折形式は定動詞に比べ「名詞性」を有しているといえるが、その「名詞化」の

⁸ ただし Kullmann and Tserenpil (1996) は頻度（生産性）についても言及している。

度合いは異なる(山越 2012a)。もう一方の副動詞は、従属節述語としての機能と、動詞連続の先行要素となる機能があるが、前者の機能しかもたない形式、後者の機能しかもたない形式、双方の機能をもつ形式と連続的である。さらに、形動詞に格接尾辞を伴った形式をも副動詞に分類する記述もあるが、その一方 Janhunen (2012) や Napoli (2016) はこれを quasi-converb としている。

従来の三つに大別する記述が妥当なのかどうかは近年になって再検討されるようになっており、Field (1997), Slater (2003b), Fried (2010) のように、non-finite と finite を区別するにとどめる記述が近年では増えている。なお、古いものでは橘 (1914) が定動詞・形動詞・副動詞の枠組みによらず、伝統文法的な記述をしているところが目を引く(図2)。

| 目 次 | 目 次 |
|---|----------|
| <p>動詞……………スモノ『ヤット』又ニ『催カニ』或ル『催一ツ』等ノ義ヲ表ハスモノ—及ビツノ構成法ト實例。</p> <p>1. 元來ノ動詞タルト……派生語タルトヲ問ハズツノ變化ハ規則的デアアル。</p> <p>2. 『コボレ』ニ就テ……過去—未來—ツノ構成法—實例—ツノ表解—其他ノ二三ニ就テ—動詞ヲ疑問ノ義ヲ表ハスニハ語根ニヒテヲ添加スレバヨイ—ツノ實例(日本、支那トノ比較)</p> <p>e. Moods</p> <p>(イ) Indicative mood—英語ト蒙古語トハ、コノ意味ヲ表ハス方法ニ相違ガアル—ツノ實例。</p> <p>(ロ) Subjective and Potential mood—蒙古語デハ、コノ兩 Mood ノ意味ヲ表ハスニ使用スル詞ハ單體ダ—ツノ實例ト説明—其他ニ就テ。</p> <p>(ハ) Imperative mood—其ノ構成法—實例ト説明。</p> <p>1. Voice 體</p> <p>ハンナ事ヲ表ハスモノカ—能動體ト受動體トニ大別スル—受動體ノ構成法ハ、規則的デ簡單ダ—ツノ實例ト説明。</p> <p>2. 催起體—ハンナ事ヲ表ハスモノカ—ツノ構成法—實例ト説明。</p> <p>3. Co-operative Voice—ハンナ事ヲ表ハスモノカ—ツノ構成法—實例ト説明。</p> <p>助動詞……………七六</p> <p>助動詞ト主動詞トノ區別—助動詞トシテ使用スル主詞—コレヲ使用上ノ區別—ツノ説明。</p> <p>否定詞……………七七</p> <p>助ト Set ト Set トニツノ詞—ツノ使用上ノ相違點—實例。</p> <p>准動詞……………七七</p> <p>1. 准動詞トハンナモノカ—所謂正動詞トハ、ゴガ相違スルカ—ツノ種類ハ、ニツアル—即チ Inhabitive ト participle ト gerund</p> <p>2. Inhabitive—トハンナモノカノ意味スルノカ—ツノ構成法、</p> <p>3. Participle—トハ何ヲ意味スルカ—ツノ構成法</p> <p>4. Gerund—トハ何ヲ指スノカ—ツノ構成法、</p> <p>5. 各々ニ就テノ實例ト説明</p> <p>特種ノ字義ニ就テノ一一……………八二</p> <p>「……スルヤ其ノ時」……ヲ助タル爲メニ「誰曰ク」等ノ義ヲ表ハス詞—ツノ實例ト説明。</p> | <p>七</p> |

図2 橘(1914)の目次(動詞形態論)

このほか、voice/aspect に関わる形態素を屈折接尾辞とみなすか、派生接尾辞とみなすかといった問題もある。上記定動詞・形動詞・副動詞のカテゴリーに分類される接尾辞(←語幹に接続する)とは異なり、voice/aspect に関わる形態素はそれよりも「内側」に接続する。たとえば下の(1b)にあらわれる使役接辞 *-uul* (代表形 *-UUI*) は、動詞語根 *zod-*「殴る」と形動詞完了接辞 *-sAn* との間にあられる⁹。

⁹ 以下、例文はモンゴル語ハルハ方言による。表記はモンゴル国のキリル文字による正書法をラテン字に置換したものに、若干音韻解釈をほどこしたものである。なお、モンゴル語語のいくつかには母音調和の法則(単語内部の母音の順行同化規則)による複数の異形態をもつ拘束形態素が存在するため、そのような拘束形態素については *-sAn* のように母音大文字を用いた代表形を示す。

- (1) a. *dorzh bat-yg zod-son.*
 PN PN-ACC hit-PTCP.PFV
 ドルジがバトを殴りました。
- b. *bat dorzh-d zod-uul-san.*
 PN PN-DAT hit-CAUS-PTCP.PFV
 バトがドルジを殴りました。(山越 2012b: 258)

(1b)にあらわれている *-UUL* を屈折接尾辞とみなす場合、動詞語幹は *zod-* となる。一方これを派生接尾辞とみなす場合は *zod-uul-* が動詞語幹ということになる。「卵が先か鶏が先か」のような議論になるが、つまり「語幹」をどのように定義するかという問題と、voice/aspect 接辞を屈折範疇に含めるか、派生接尾辞とみなすかという問題が連動している。現状、動詞形態論のなかでこれをどう位置付けるかはあいまいに片づけられているケースもみられる。筆者自身は voice/aspect 接辞を接続した形式に出動名詞派生接尾辞が接続する (=2) ことを根拠に、voice/aspect 接辞は(出動動詞)派生接尾辞だと位置づけている。しかしたとえば Kullmann and Tserenpil (1996: 33) は、voice/aspect に関わる接尾辞を屈折接尾辞とみなしている。

- (2) *ögüül-* → *ögüüle-xüün*
 mention- mention-NMLZ
 述べる 述語(述べるもの)
- ögüül-* → *ögüüle-gde-* → *ögüüle-gde-xüün*
 mention- mention-PASS- mention-PASS-NMLZ
 述べる 述べられる 主語(述べられるもの)

屈折接尾辞とみなす立場についても、もちろんその根拠が述べられていればよい。しかしこの派生／屈折の区別に関する問題に限らず、モンゴル諸語に関する参照文法書の多くはそうした根拠の提示が欠けている。

5.2.3. 統語論

統語に関する記述は(ロシアで書かれたブリヤート語の Bertagaev and Cydendambaev (1962), カルムイク語の Pjurbeev (1977-79) のようなケースはあるが)、全体を通じてかなり貧弱だといえる。参照文法書として統語論を比較的ていねいに扱っているものにはこのほか Kullmann and Tserenpil (1996), Fried (2010), Janhunen (2012), などがある。たとえば Janhunen (2012) は *phrasal syntax, clausal syntax, complex sentences* と 3 段階に分けて詳細に記述している。ただしモンゴル語族の諸言語は徹底した主要部後置型であり、*pro-drop* であることから、とくに動詞を主要部とする構造に関しては *phrase* か *clause* かを区別するのは困難であるように筆者は感じていることもあり、どのような構成で記述すべきかは今後検討する必要がある。

統語論の記述が貧弱であることには以下のような理由があるだろう。述語動詞が文末に位置さえすれば語順は比較的「自由」¹⁰であること、先述の通り形態論のなかで他の語句との修飾構造

¹⁰ しかし、語順が「自由」であるかどうかは慎重に検討する必要がある。語順は情報構造その他、重要な文法事項に関わっていると考えられるためである。

も説明されることが多く、そこで「言い尽くした」感があることなどである。

こうした、形態論の項で統語構造に関する記述も含めるといって構成それ自体が、モンゴル語族（やアルタイ諸言語）の特徴があらわれているとも言い換えられる。拘束形態素の接続が単に語形成に関与するだけでなく、格接尾辞や分詞・副動詞接尾辞などは「他の語句との修飾構造を示すために従属部に接続する要素」として用いられるため、同時に主要部も示さないと機能を十分に説明できない。そのため形態論のなかで修飾構造も記述せざるをえない。だが、他の語句との関係を形態論の項目で論じてしまうことで、「形式ごとに説明しているはずが機能（他の語句との関係）にすり替わってしまう」パターンもある。たとえば次の「目的語」「使役・受動」に関する議論がそれに該当する。

「目的語」の記述

前世紀の記述文法では「目的語」は形態論・対格の項で説明されることが多い。しかしながら、いわゆる他動詞文における動作の対象がとりうる形式は対格のみではない(3)。

- (3) a. *ter ene nom-iig unsh-zh bai-n.*
 that this [book-ACC]_O read-CVB.IPFV be-IND.PRS
 彼がこの本を読んでいます。
- b. *tend bat nom unsh-zh bai-n.*
 there PN [book]_O read-CVB.IPFV be-IND.PRS
 そこでバトが本を読んでいます。
- c. *tend bat nom-oo unsh-zh bai-n.*
 there PN [book-REFL]_O read-CVB.IPFV be-IND.PRS
 そこでバトが自分の本を読んでいます。(山越 2012b: 63-64)

(3a-c) のボールドの部分動詞 *unsh-*「読む」の動作対象にあたる。いわゆる DOM (Differential Object Marking) であり、動作の対象となる事物の定性や動作主体との対比による有生性、動作主体との関係（所有物か否か）などの関与により、動作対象が対格接尾辞を接続して対格(3a)となるか、無標形(3b)となるか、再帰所有接尾辞を接続(3c)するかが決まる。このとき、先行研究ではこの動作対象をアプリアリに「目的語」とみなしているが、その定義の根拠を明示しているものはない。さらに、仮にこれを「目的語」としたとしても、この目的語の形式選択は本来「統語論」で扱われるべき現象である。しかし、たとえば「叢書」シリーズではこの使い分けを等しく「詞法(=形態論)」の「対格」の項目で扱っている。(3b)のような無標形(これをどう呼ぶかも検討の余地がある¹¹)を「領賓格(=属対格¹²)」が省略されたもの(保朝魯・贾拉森編 1991: 156; 下線は筆者による)とみなしたり、「主格的な形式が用いられる」(陈编 1987: 99; 同じく下線は筆者による)としながら「主格」の項でそれにふれていなかったりという記述がなされている。つまり、形態論の章で「形態」ごとに項目を立てる必要がありながら、それが「機能」にすり替

¹¹ モンゴル諸語の多くでは、この無標形は主格形と同一の形式となる。そのような言語ではこれを主格と呼んでも問題はない(が、そう記述している参照文法は少ない)。なお、モンゴル諸語同様に無標形が目的語となりうるチュルク諸語に関して、江畑(2014)はこの無標形を主格形と呼んでいる。

¹² 「叢書」シリーズで扱われている河湟語、ダグール語では普通名詞の属格形と対格形が同じであるため、これを属対格(原文では「領賓格」)とよびあわしている。これを Janhunen, ed. (2003) は connective と呼ぶ。connective については Janhunen (2003f) に解説がある。

わっているという状況がみられる。このように、「目的語」の記述は文法書の構成上大きな問題を含んでいる。

「使役・受動」の記述

こちらでも文法書では動詞形態論のなかでも論じられる。たとえばモンゴル語では使役動詞は接尾辞 *-UUI* もしくは *-lgA* が動詞語幹に接続することで派生される¹³。そのため形態論の項で当該接尾辞の接続法について記述する際に、(4) のような例文とともに「使役文」の説明がなされる。

- (4) a. *bagsh tiün-eer sambar shiree arch-uul-v.*
 [teacher]_{CAUSER} [that-INS]_{CAUSEE} [blackboard table]_O wipe-CAUS-IND.PST
 The teacher had her clean the blackboard and the table.
 (Kullmann and Tserenpil 1996: 118)
- b. *suragch-d-aar sandal shiree zöö-lgö-v.*
 [pupil-PL-INS]_{CAUSEE} [chair table]_O carry-CAUS-IND.PST
 (Someone) had the pupils move the chairs and tables.
 (Kullmann and Tserenpil 1996: 119)

それと同時に、「被使役者は具格または与位格であらわされる¹⁴(=(4))」「使役構文が受動もあらわしうる(=(5))」というような、統語に踏み込んだ内容まで同項目で説明されてしまう。もちろん被使役者の格標示は名詞形態論の格接尾辞の項目でも説明されるが、できれば相互参照付きで統語論で扱ったほうがより理解しやすい。こうした相互参照のしやすさといった点に配慮した文法書が欠けている。

- (5) a. *dorzh bat-yg zod-son.* → *bat dorzh-id zod-uul-san.* (=1)
 PN PN-ACC hit-PTCP.PFV PN PN-DAT hit-CAUS-PTCP.PFV
 ドルジがバトを殴りました。 バトがドルジに殴られました。
- b. *chono xurga id-sen* → *xurga chonon-d id-iüül-sen.*
 [wolf]_S [lamb]_O eat-PTCP.PFV lamb wolf-DAT eat-CAUS-PTCP.PFV
 狼が子羊を食べました。 子羊が狼に食べられました。
 (山越 2012: 258)

6. おわりに

以上、モンゴル語族の言語・方言を対象とした文法書について概観してきた。5節でおおよその問題点について列挙してきたことを総合すると、モンゴル語族を対象とした文法書はこれまで多くの場合、読み手が「モンゴル語の基本的構造を理解している」ことを前提に編まれていたこ

¹³ 前述のように、これを「派生」とみなしてよいかどうかは研究者によって見解が異なると思う。筆者は前項(2)で示した根拠に基づき、これを使役動詞の派生とみなす。

¹⁴ 使い分けに関しては先行記述でさまざまな説明がなされているが、与位格を使った使役文と具格を使った使役文とでは、前者のほうが被使役者に対する使役者の当該行為を実現させようとする働きかけが弱い、と梅谷(2008)が示している。

とに起因するものと思われる。しかしながら、90年代後半以降の非母語話者による文法記述は精緻であり、その成果となる記述文法書も読み手を限定しない良書 (e.g. Field 1997, Slater 2003b, Fried 2010, Janhunen 2012, etc.) が目立ってきているのは好ましい傾向である。ただしそれは語族内の周辺言語を対象としているものが多く、今後語族内の主要な言語において、こうした文法書が記述されるようになるかどうかはわからない。より主要な言語、つまりモンゴル語の文法書は、そこに教育という側面、つまり規範文法という面も影響してくるためである。そうした問題はあるが、今後記述的な参照文法書がよりいっそう充実することに期待したい。

略号

[]_A: Agent, []_O: Object, []_S: Subject, ACC: accusative, CAUS: causative, CVB: converb, DAT: dative-locative, E: epenthesis, IND: indicative finite, INS: instrumental, IPFV: imperfective, NMLZ: nominalizer, PASS: passive, PFV: perfective, PL: plural, PN: proper noun, PRS: present, PST: past, PTCP: participle, REFL: reflexive

注3で示した通り、書誌情報末尾に [] でくくった以下の略号は、当該文献の記述言語を指す。

[Chi] Chinese, [C.Mon] Cyrillic Mongolian, [Eng] English, [Fre] French, [Ger] German, [Jpn] Japanese, [Rus] Russian, [T.Mon] Traditional Mongolian

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」(2016-2017年度)の成果の一部である。本稿は同課題の第1回研究会(2016年7月24日)での発表に基づく。同じく共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語の言語変容—外的要因と内的要因—」(2018-2020年度)の成果でもある。作成・加筆に際してはJSPS 科研費 JP17K02714, JP18K00521, JP18H03578 の助成を受けた。

参考文献

- 保朝魯・賈拉森編 1991 『东部裕固語和蒙古語』(蒙古語族語言方言研究叢書 016) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- 宝音 2014 「現代モンゴル語ハラチン方言のアクセントについて」日本モンゴル学会 2014 年度春季大会 (於 静岡大学)。
- Bertagaev, T. A. and C. B. Cydendambaev. 1962. *Grammatika burjatskogo jazyka: Syntaksis*. Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury.
- Birtalan, Ágnes. 2003. "Oirat." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 210-228.
- Bläsing, Uwe. 2003. "Kalmuck." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 229-247.
- 陈乃雄編 1987 『保安語和蒙古語』(蒙古語族語言方言研究叢書 010) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- 戴庆厦・刘菊黄・傅爱兰 1987 「云南蒙古族嘎卓语研究」『语言研究』12(1): 151-175.
- Dixon, R. M. W. 2010. *Basic Linguistic Theory* vol.1-3. Oxford: Oxford University Press.
- Dwyer, Arianne M. 2016. "Ordinary Insubordination as Transient Discourse." *Insubordination* (Nicholas Evans and Honoré Watanabe, eds.) (Typological Studies in Language 115), 183-208, Amsterdam: John Benjamins.
- 江畑冬生 2014 「サハ語・トルコ語・トゥバ語の目的語格標示」『北方言語研究』4: 33-42.
- 恩和巴图 1988 『达斡尔語和蒙古語』(蒙古語族語言方言研究叢書 004) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Field, Kenneth L. 1997. "A Grammatical Overview of Santa Mongolian." Doctoral dissertation at University of California, Santa Barbara.

- Fried, Robert Wayne. 2010. "A Grammar of Bao'an Tu, a Mongolic Language of Northwest China." Ph.D dissertation of the University of Buffalo, State University of New York.
- Georg, Stefan. 2003a. "Ordos." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 193–209.
- . 2003b. "Mongghul." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 286–306.
- 服部四郎 1953 「批評と紹介：ポッペ教授著『ハルハ蒙古語文法』」『東洋学報』36(1): 108–124. (服部四郎 1987 『服部四郎論文集 2: アルタイ諸言語の研究 II』三省堂, pp. 400–418 に再録)
- 和即仁 1989 「云南蒙古族语言及其系属问题」『民族语文』59: 25–36.
- Hugjiltu, Wu. 2003. "Bonan." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 325–345.
- フレルバートル・栗林均(編) 1997 『モンゴル語入門・会話 (モンゴル語研修テキスト 1)』(1997 年度 AA 研言語研修テキスト) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Ikegami, Jiro. 1974. "Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprache." *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII*, 271–272, Berlin: Akademie Verlag.
- Janhunen, Juha. 1990. *Material on Manchurian Khamnigan Mongol*. (Castrenianumin toimitteita 37.) Helsinki: The Finno-Ugrian Society.
- . 2003a. "Proto-Mongolic." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 1–29.
- . 2003b. "Written Mongol." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 30–56.
- . 2003c. "Khamnigan Mongol." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 83–101.
- . 2003d. "Mongol Dialects." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 177–192.
- . 2003e. "Para-Mongolic." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 391–402.
- . 2003f. "On the Taxonomy of Nominal Cases in Mongolic." *Altai Hakpo* 13: 83–90.
- , ed. 2003. *The Mongolic Languages*. London and New York: Routledge.
- Janhunen, Juha A. 2012. *Mongolian*. (London Oriental and African Language Library 19.) Amsterdam: John Benjamins.
- 「池田哲郎著『アルタイ語のはなし』におけるモンゴル系諸言語の記述に関する問題点」『大阪外国語大学論集』25: 73–100.
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一(編) 1989–2002 『言語学大辞典』(第1巻～第6巻, 別巻) 三省堂.
- Kim, Stephen S. 2003. "Santa." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 346–363.
- Kullmann, Rita and D. Tserenpil. 1996. *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jensco, Ltd.
- 栗林均 1992 「モンゴル諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編) 『言語学大辞典』第4巻, 517–526, 三省堂.
- 2000 「草原の道 (〔特集〕ことばの道—言語伝播の道筋をたどる)」『言語』29(6): 50–58.
- Luvšanvandan, Sh., ed. 1966. *Orchin Cagijn Mongol Xel Zij*. Ulaanbaatar: Ulsyn Xevlelijn Xerex Erxlex Xoroo.
- 木仕华 2003 『卡卓语研究』北京: 民族出版社.
- Moseley, Christopher, ed. 2010. *Atlas of the World's Languages in Danger, 3rd edn*. Paris: UNESCO Publishing. Online version: <http://www.unesco.org/culture/en/ endangeredlanguages/atlas> (2022 年 2 月 14 日最終閲覧)
- Napolis, Mateus Froes. 2014. "Studies on the Verb Complex of Santa Mongolian." MA thesis at the Payap University, Thailand.
- Nugteren, Hans. 2003. "Shira Yughur." *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 265–285.
- Poppe, Nicholas. 1930. *Dagurskoe narechie*. Leningrad: Izdatel'stvo Akademij Nauk SSSR.
- . 1951. *Khalkha-mongolische Grammatik*. Wiesbaden: F. Steiner.
- 大竹昌巳 2015a 「契丹小字文献における母音の長さの書き分け」『言語研究』148: 81–102.
- 2015b 「契丹語の奉仕表現」『KOTONOHA』149: 1–15.
- 2016 「契丹語形容詞の性・数標示体系について」『京都大学言語学研究所』35: 59–89.
- 2020 「契丹語の歴史言語学的研究」京都大学博士論文.
- 清格尔泰 1991 『蒙古语语法』呼和浩特: 内蒙古人民出版社.

- Robbeets, Martine. 2016. “Insubordination and the Establishment of Genealogical Relationship across Eurasia.” *Insubordination* (Nicholas Evans and Honoré Watanabe, eds.) (Typological Studies in Language 115), 209–246, Amsterdam: John Benjamins.
- Rybatzki, Volker. 2003a. “Middle Mongol.” *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 57–82.
- . 2003b. “Intra-Mongolic Taxonomy.” *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 364–390.
- 斎藤純男 2012 『モンゴル語史研究入門』 [草稿 2012 年版] 東京学芸大学.
- Schönig, Claus. 2003. “Turko-Mongolic Relations.” *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 403–420.
- 塩谷茂樹 2006 『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』 (大阪外国語大学学術研究叢書 35) 箕面：大阪外国語大学.
- Skribnik, Elena. 2003. “Buryat.” *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 102–128.
- Slater, Keith W. 2003a. “Mangghuer.” *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 307–324.
- . 2003b. *A Grammar of Mangghuer: A Mongolic Language of China’s Qinghai-Gansu Sprachbund*. London and New York: Routledge Curzon.
- Svantesson, Jan-Olof. 2003. “Khalkha.” *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 154–176.
- Svantesson, Jan-Olof, Anna Tsendina, Anastasia Karlsson and Vivian Franzen. 2008. *The Phonology of Mongolian*. Oxford: Oxford University Press.
- 橘瑞超 1914 『蒙古語研究』 大阪：大阪實文館.
- 武内康則 2013 「契丹語の研究」 京都大学博士論文.
- . 2015. “Direction Terms in Khitan.” *Acta Linguistica Petropolitana* 11(3): 453–464.
- . 2016 「契丹語の複数接尾辞について」 『言語研究』 149: 1–117.
- . 2017 「契丹語の数詞について」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 93: 91–104.
- Tsumagari, Toshiro. 2003. “Dagur.” *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 129–153.
- 植田尚樹 2013 「モンゴル語の母音調和と母音の弱化：外来語を用いた分析」 『京都大学言語学研究』 32: 37–76.
- . 2014 「UB モンゴル語の i と e の合流」 『京都大学言語学研究』 33: 89–104.
- . 2018 「モンゴル語の母音に関する総合的研究」 京都大学博士論文.
- . 2019 『モンゴル語の母音：実験音声学と借用語音韻論からのアプローチ』 京都：京都大学学術出版会.
- 梅谷博之 2008 「モンゴル語の使役接辞-UUL と受身接辞-GD の意味と構文」 東京大学博士論文.
- . 2013a. “Classification of Some Sentence-Final Modal Particles in Khalkha Mongolian.” 『東京大学言語学論集』33: 301–318.
- . 2013b 「モンゴル語の名詞・形容詞・副詞の区分」 『第 147 回日本言語学会大会予稿集』, 338–343.
- . 2014 「モンゴル語の否定小辞の自立度」 『第 148 回日本言語学会大会予稿集』, 284–289.
- . 2015 「モンゴル語における形容詞を修飾する不変化詞」 2014 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」 2015 年 3 月 26 日. 於京都大学ユーラシア文化研究センター.
- 山越康裕 2004 「モンゴル諸語の ‘particle’ について：シネヘン・ブリヤート語の事例から」 『環北太平洋の言語』 11: 151–178.
- . 2007a 「ハムニガン・モンゴル語」 中山俊秀・山越康裕 (編) 『文法を描く 2：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』, 229–258, 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- . 2007b 「シネヘン・ブリヤート語の clitic」 『アジア・アフリカの言語と言語学』 2: 1–15.
- . 2008 「品詞分類のありかた：シネヘン・ブリヤート語の事例から」 『アジア・アフリカの言語と言語学』 3: 47–59.
- . 2011. “Shinekhen Buryat.” *Grammatical Sketches from the Field* (Yasuhiro Yamakoshi, ed.), 137–177, Fuchu: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- . 2012a 「シネヘン・ブリヤート語の形動詞」 『北方人文研究』 5: 95–111.
- . 2012b 『詳しくわかるモンゴル語文法』 白水社.

- 2017. ‘Mongol töröl xelnüüdijn “insubordination” (gishüun bus ögүүлber).’ *Mongol Sudlal ba Togtvortoj Xögzhil*, 289–292, Ulaanbaatar: International Association for Mongol Studies.
- 2018 「モンゴル諸語における分詞の統語機能と文末標識」2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」2018年3月29日. 於京都大学ユーラシア文化研究センター.
- Yu, Wonsoo. 2011. *A Study of the Mongol Khammigan Spoken in Northeastern Mongolia*. (Altaic Languages Series 4.) Seoul: Seoul National University Press.
- 云南省通海县蒙古民族文化研究传承保护中心・内蒙古锡林郭勒职业学院蒙古文化研究所 2017 『云南省通海县兴蒙蒙古族乡喀卓语』昆明: 云南民族出版社.
- Weiers, Michael. 2003. “Moghol.” *The Mongolic Languages* (Juha Janhunen, ed.), 248–264.

中国語の参照文法書について

川 澄 哲 也

On the Chinese Reference Grammars

KAWASUMI, Tetsuya

Keywords: Chinese, reference grammar, errata

キーワード: 中国語, 参照文法書, 正誤表

1. はじめに
2. Chao (1968)
3. Li and Thompson (1981)
4. Yip and Rimmington (2016)
5. Huang and Shi, eds. (2016)
6. 結語

1. はじめに

本稿では、中国語の参照文法書の中から以下の4点を取り上げ、それぞれの構成を紹介するとともに、筆者が感じた各書の特徴を簡単に述べていく¹。

- 1) Chao, Yuen Ren. *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1968, xxxi+847pp.
- 2) Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press, 1981, xxiii+691pp.
- 3) Yip, Po-Ching and Don Rimmington. *Chinese: A Comprehensive Grammar*. (2nd edition) London and New York: Routledge, 2016, xxi+634pp.
- 4) Huang, Chu-Ren and Dingxu Shi, eds. *A Reference Grammar of Chinese*. Cambridge: Cambridge University Press, 2016, xxix+598pp.

川澄哲也. 2022. 「中国語の参照文法書について」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp.73-105. DOI: <https://doi.org/10.15026/116961>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

¹ この4冊を選定した理由は以下の通りである。1と2については、伝統的な文法書であり、これまで最も多く参照されてきた2冊だと考えられることによる。3と4については、(本稿のもとになった発表を行った2017年7月15日時点で、) 出版後間もない2冊であり、紹介する意義が大きいと判断したためである。

2. Chao (1968)

2.1. Chao (1968) の構成

まず、以下に Chao (1968) の目次を移録し、同書の構成を示す。

Chapter 1. INTRODUCTION

- 1.1. Grammar
- 1.2. Spoken Chinese
- 1.3. Phonology

Chapter 2. THE SENTENCE

- 2.1. General Observations
- 2.2. Minor Sentences
- 2.3. Structure of the Full Sentence
- 2.4. Grammatical Meaning of Subject and Predicate
- 2.5. The Logical Predicate
- 2.6. Subject and Predicate as Question and Answer
- 2.7. The Full Sentence as Made Up of Minor Sentences
- 2.8. Types of Subjects
- 2.9. Types of Predicates
- 2.10. Full-Sentence (S-P) Predicates
- 2.11. Compound Sentences
- 2.12. Complex Sentences
- 2.13. Pivotal Constructions
- 2.14. Planned and Unplanned Sentences

Chapter 3. WORD AND MORPHEME

- 3.1. General
- 3.2. Free and Bound Forms
- 3.3. Prosodic Aspects
- 3.4. Substitution and Separation
- 3.5. Words in Functional Frames
- 3.6. The Word as a Unit of Meaning
- 3.7. Word Identity and Morpheme Identity
- 3.8. Definitions and Tests for the Syntactic Word
- 3.9. Synoptic Tables of Word-Like Units

Chapter 4. MORPHOLOGICAL TYPES

- 4.1. General
- 4.2. Reduplication
- 4.3. Prefixes
- 4.4. Suffixes
- 4.5. Infixes

Chapter 5. SYNTACTICAL TYPES

- 5.1. Expressions and Constructions
- 5.2. Coordination
- 5.3. Subordination
- 5.4. Verb-Object (V-O) Constructions
- 5.5. Verbal Expressions in Series
- 5.6. Verb-Complement (V-R) Constructions

Chapter 6. COMPOUNDS

- 6.1. Nature and Classification of Compounds
- 6.2. Subject-Predicate (S-P) Compounds
- 6.3. Coordinate Compounds
- 6.4. Subordinative Compounds
- 6.5. Verb-Object (V-O) Compounds
- 6.6. Verb-Complement (V-R) Compounds
- 6.7. Complex Compounds

Chapter 7. PARTS OF SPEECH: SUBSTANTIVES

- 7.1. General Observations on Parts of Speech
- 7.2. Nouns
- 7.3. Proper Names
- 7.4. Place Words
- 7.5. Time Words
- 7.6. D-M Compounds
- 7.7. N-L Compounds
- 7.8. Determinatives
- 7.9. Measures
- 7.10. Localizers
- 7.11. Pronouns
- 7.12. Other Substitutes

Chapter 8. VERBS AND OTHER PARTS OF SPEECH

- 8.1. Verbs (Including Adjectives)
- 8.2. Prepositions
- 8.3. Adverbs
- 8.4. Conjunctions
- 8.5. Particles
- 8.6. Interjections

2.2. Chao (1968) に対する寸評

後に取り上げる 3 冊に比して Chao (1968) に特徴的と言えるのは、同書が中国語学に近い枠組みで記述を行っている点であろう。

例えば、中国語学では一般に、中国語を「主述構造」「動目構造」「動補構造」「偏正構造」「連

合構造」「述連構造」の諸構造に分類する²。それは、中国語は基本的にこれら構造（およびその組み合わせ）から成り立つため、各構造について記述すれば、自ずと中国語文法の全体像も記述できるためである。Chao (1968) では、以下の各節においてそれぞれの構造を詳細に論じている。

| 構造の種類 | 言及箇所（統語面） | 言及箇所（形態面） |
|-------|-----------|-----------|
| 主述構造 | 2.4-2.10 | 6.2 |
| 動目構造 | 5.4 | 6.5 |
| 動補構造 | 5.6 | 6.6 |
| 偏正構造 | 5.3 | 6.4 |
| 連合構造 | 5.2 | 6.3 |
| 述連構造 | 5.5 | 6.3 |

また、前半の3構造と関連する「主語」「目的語」「補語」といった概念の扱い方についても言及しておきたい。

[1] 这儿不能说话。(p.84)「ここでは話してはいけない。」

[2] 他们吵了两回了。(p.312)「彼らは2回言い争った。」

[3] 写错(了)的字(p.440)「書き間違えた字」

Chao (1968) では [1] の“这儿(ここ)”を主語、[2] の“两回(2回)”を目的語とする。中国語学の立場からするとこれは妥当な扱いである³が、言語学の分析とは異なるだろう。また中国語学で言う「補語(complement)」とは、[3]における“错(〜し間違う)”のように、動詞(又は形容詞⁴)に後続し、先行要素の意味を補う語のことを言い、言語学での用語法とは異なる。

中国語に適した枠組みによって中国語を記述するのが Chao (1968) の特徴であるが、その反面、参照文法書としては使いにくい面もある。Wadley (1987) が指摘するとおり、Chao (1968) は章立てが(言語学から見ると)独特であるため、参照したい事項がどこに記述されているか、探すのに時間を要する場合がある。また Chao (1968) は、例文の引用にも不向きなところがある。Chao

² 本稿は読者として中国語以外を専門とする言語学者を想定した文章であるため、各構造の中身について簡単に言及しておきたい(以下の説明および用例は、中国語学の代表的文法書である朱 1981 に対する邦訳、杉村・木村訳 1995 に基づく)。

- ・ 主述構造…主語と述語から成る構造。例) 我知道 [私は知っている]
- ・ 偏正構造…前半部分が後半部分を修飾する構造。例) 新书 [新しい本]
- ・ 動目構造…前半が動詞又は形容詞、後半はその目的語という構造。例) 洗衣服 [服を洗う]
- ・ 動補構造…前半が動詞又は形容詞、後半が補語という構造。例) 做完 [やり終える]
- ・ 述連構造…動詞句が連続した構造。例) 打电话通知他 [電話をかけて彼に知らせる]
- ・ 連合構造…同等の地位にある複数の要素が並列された構造。
例) 北京, 上海, 广州 [北京, 上海, 広州]

³ 中国語学がこの分析を妥当とする根拠の詳細は、「主語」については中川・木村編訳(1986), pp.87-95, 「目的語」は同書 pp.131-136 を参照されたい。なお中川・木村編訳(1986)は、中国語文法研究の理論的総括と言われる朱(1985)の邦訳である。

⁴ Chao(1968)は p.84 や p.163 で、形容詞は動詞の一種と記述しているが、これも中国語学的な考え方である。中国語では動詞と形容詞が同じように振舞うことが少なくない。

(1968)の例文は基本的に漢字表記とアルファベット表記が並列されている⁵が、それぞれ、一般的な簡体字、ピンインとは異なった、著者独自の体系が使われている⁶。

このように、Chao (1968)は中国語以外が専門の言語学者が参照文法書として使用するにはやや不便なところがある。しかし音声面に関する記述などを中心に、出版後半世紀を経た今日でも比類ない、卓越した記述が随所に見られる。時間が許せば、通読することをお勧めしたい一冊である。

3. Li and Thompson (1981)

3.1. Li and Thompson (1981)の構成

本節ではLi and Thompson (1981)の目次を移録し、同書の構成を示す。なお実際にはLi and Thompson (1981)の目次は第3レベル(n.n.n)まで書かれているが、本稿ではChao (1968)およびHuang and Shi, eds. (2016)に合わせ、第2レベル(n.n)までの提示に留める。

1. Introduction
 - 1.1 The Chinese Language Family
 - 1.2 The Phonology of Mandarin
2. Typological Description
 - 2.1 The Structural Complexity of Words: Mandarin as an Isolating Language
 - 2.2 Monosyllabicity: The Number of Syllables per Word
 - 2.3 Topic Prominence
 - 2.4 Word Order
3. Word Structure
 - 3.1 Morphological Processes
 - 3.2 Compounds
4. Simple Declarative Sentences
 - 4.1 Topic and Subject
 - 4.2 The Noun Phrase
 - 4.3 The Verb Phrase
5. Auxiliary Verbs
 - 5.1 Auxiliary Verb versus Verb
 - 5.2 Auxiliary Verb versus Adverb
 - 5.3 List of Auxiliary Verbs
6. Aspect
 - 6.1 The Perfective Aspect
 - 6.2 The Durative Aspect
 - 6.3 The Experiential Aspect

⁵ 一部、漢字表記が与えられていない用例もある。

⁶ 一般的な漢字表記への置き換えに関してはChao (1968)の2種の中国語訳(呂译 1979, 丁译 1980)が参考にはなるが、呂译(1979)は抄訳であるため、必要な例文が省かれている可能性もある。丁译(1980)は全訳ではあるが、台湾の出版物であるため、大陸で一般に用いられる簡体字ではなく、繁体字による表記になっている。

- 6.4 The Delimitative Aspect
- 6.5 Summary
- 7. Sentence-Final Particles
 - 7.1 *le*
 - 7.2 *ne*
 - 7.3 *ba*
 - 7.4 *ou*
 - 7.5 *a/ya*
 - 7.6 Conclusion
- 8. Adverbs
 - 8.1 Movable Adverbs
 - 8.2 Nonmovable Adverbs
 - 8.3 Negation and Adverbs
 - 8.4 Adverbs and the *bǎ* Construction
 - 8.5 Quantity Adverbial Phrases
- 9. Coverbs/Prepositions
 - 9.1 The Function of Coverbs
 - 9.2 Representative List of Coverbs
- 10. Indirect Objects and Benefactives
 - 10.1 *gěi* Obligatory
 - 10.2 *gěi* Optional
 - 10.3 *gěi* Forbidden
 - 10.4 Apparent Indirect Objects
 - 10.5 Explanation for the Indirect Object Facts
 - 10.6 Benefactive Noun Phrases, and Preverbal Indirect Object
 - 10.7 Other Functions of *gěi*
- 11. Locative and Directional Phrases
 - 11.1 Locative Phrases
 - 11.2 Directional Phrases with *dao* 'to'
- 12. Negation
 - 12.1 The Position and Scope of Negative Particles
 - 12.2 The Functions of *bu* and *méi(yǒu)*
 - 12.3 *méi(yǒu)* Is Not a Past Tense Negative Particle
 - 12.4 Negation and Aspect
 - 12.5 Negating Some Element other than a Simple Verb Phrase
 - 12.6 Summary
- 13. Verb Copying
 - 13.1 Where Verb Copying Occurs
 - 13.2 Grammatical Properties of the Verb-Copying Construction
- 14. The Imperative
- 15. The *bǎ* Construction

- 15.1 The *bǎ* Noun Phrase
- 15.2 Disposal
- 15.3 *bǎ* Sentences without a Subject
- 15.4 *bǎ* . . . *gěi*
- 15.5 When to Use the *bǎ* Construction
- 16. The *bèi* Construction
 - 16.1 Use and Function
 - 16.2 Structural Properties
 - 16.3 *bǎ* and *bèi*
 - 16.4 Variant Forms
- 17. Presentative Sentences
 - 17.1 Existential and Positional Verbs
 - 17.2 Verbs of Motion
- 18. Questions
 - 18.1 The Four Types of Questions
 - 18.2 Question-Word Questions
 - 18.3 Disjunctive Questions
 - 18.4 Tag Questions
 - 18.5 Particle Questions
 - 18.6 Differences between A-Not-A Questions and Particle Questions
 - 18.7 Questions Serving as Subjects or Direct Objects of a Verb
 - 18.8 Answers to Questions
- 19. Comparison
 - 19.1 Comparative Constructions
 - 19.2 Superlatives
- 20. Nominalization
 - 20.1 A Nominalization Functioning as a Noun Phrase
 - 20.2 Nominalizations Modifying a Head Noun
 - 20.3 The *shì* ... *de* Construction
- 21. Serial Verb Constructions
 - 21.1 Two or More Separate Events
 - 21.2 One Verb Phrase/Clause Is the Subject or Direct Object of Another
 - 21.3 Pivotal Constructions
 - 21.4 Descriptive Clauses
 - 21.5 Summary
- 22. The Complex Stative Construction
 - 22.1 Inferred meanings
 - 22.2 General Structural Properties
- 23. Sentence Linking
 - 23.1 Forward Linking
 - 23.2 Backward Linking

24. Pronouns in Discourse

24.1 Zero Pronouns

24.2 Pronouns

24.3 Syntactic Constraints on Zero Pronouns

3.2. Li and Thompson (1981) に対する寸評

目次を一見すればわかるとおり、Li and Thompson (1981) では基本的に言語学の枠組みが用いられている。そのため Chao (1968) に比べると参照先の検出は容易であろう。

2.2 節で触れた「主語」「目的語」についても、中国語学とは一線を画する分析が示されている⁷。

[4] qiáng-shang pá-zhe hěn duō bìhǔ. (p.95) 「壁で多くのトカゲが登っている。」⁸

[5] tā zhǎo-le liǎng cì le. (p.353) 「彼(女)は2回探した。」⁹

例文 [4] は、先掲 [1] と類似の構造をもつ。文頭の“qiáng-shang (墙上)”は「壁で」の意であるが³、Li and Thompson (1981) ではこれを主語とは見ず、topic と分析する¹⁰。[5] は [2] の類例であるが、本書では“liǎng cì (两次)”「2回」を quantity adverbial phrase としている。

Li and Thompson (1981) はまた、例文の提示が非常に豊富で、説明部分の理解を助けてくれることが多い（なお上で引用した2つの例文からもわかる通り、Li and Thompson 1981 の用例はピンイン表記のみである。そのため、引用に際して漢字表記も必要な場合は、これを補う必要がある¹¹）。

但し、説明や分析の中には、一般的とは言い難い、著者陣独自のものと思われる見解も多く含まれており¹²、副題で参照文法書と銘打ってはいるものの、「研究書」の色合いも強く感じさせる。また黄譯著 (1983) の序や Wadley (1987) でも指摘されているように、例文の中には文法性の判断が疑わしいものも含まれており、引用する際には注意が必要である。

このように本書には慎重な取り扱いを要する側面があるため、批判も多い。しかし筆者は、本書は一定の学術的用途を持つ一冊であると考えている。一例を挙げると、上述したとおり Li and Thompson (1981) は用例提示が豊富であるが、その中には、他書に比べて多くの非文も含まれている。それら非文は、中国語の共通語と方言の文法的差異を把握する目的の調査票を作成する際に役立っている。

⁷ 中国語学でいう「補語」については Li and Thompson (1981) では取り上げられておらず、同書は“写错”のような表現を単に compound として処理している（第3節）。

⁸ 例文 [4] の漢字表記は次の通りである：墙上爬着很多壁虎。

⁹ 例文 [5] の漢字表記は次の通りである：他（又は她）找了两次了。

¹⁰ Li and Thompson (1981) は“bìhǔ (壁虎)”「トカゲ」を例文 [4] の主語と見る。なお Li and Thompson (1981) における主語の捉え方に対しては中国語学の立場から批判がある（朱 1985, pp.40-41, 中川・木村編訳 1986, pp.108-112）。

¹¹ Li and Thompson (1981) には、繁体字のものではあるが中国語訳として黄譯著 (1983) があり、漢字表記を補う際に一定の助けになる。

¹² 例えば 4.2.3 節では、形容詞が名詞を修飾する際に“的 de”を挟むか否かについて、名詞が古典中国語由来の文語である場合“的 de”を介さないという「条件」を提示しているが、このような説明は他で見たことがないし、有効性も疑わしい。また第5章では“要 yào”や“想 xiǎng”は助動詞ではないと分析するが、この点も極めて独特である。

4. Yip and Rimmington (2016)

4.1. Yip and Rimmington (2016) の構成

本節では Yip and Rimmington (2016) の目次を移録し、同書の構成を示す。なお Yip and Rimmington (2016) の目次は実際には第 3 レベルまで書かれているが、3.1 節と同様に、他書との統一を図り、ここでは第 2 レベルまでの提示に留める。

Introduction

The layout of the grammar

The Chinese language

1 Nouns and nominalisations

1.1 Nouns and categorisation

1.2 Nouns and reference

1.3 Nouns and plurality

1.4 Nouns and syntactic functions

1.5 Nouns and semantic fields

1.6 Nominalisations

2 Numerals and measures

2.1 Digits, units and cardinal numbers

2.2 Ordinals

2.3 Enumeration

2.4 Fractions, percentages and decimals

2.5 Imprecise numbers, halves and multiples

2.6 Mathematical symbols and simple arithmetic equations

2.7 The multiplication table

2.8 Measure words

2.9 Measure words and other attributives

2.10 Reduplication of measure words

2.11 Missing measure words

2.12 Disyllabic measure words

2.13 Compound measure words

2.14 Duration and frequency measures

3 Pronouns, pronominals and pro-words

3.1 Personal pronouns

3.2 Demonstrative pronouns

3.3 Interrogative pronouns

3.4 Indefinite pronouns

3.5 Enumerative pronouns

3.6 Pronominals

3.7 Pro-words

- 4 Adjectives as attributives and predicatives
 - 4.1 Adjectives in Chinese
 - 4.2 Qualifiers or quantifiers
 - 4.3 Degree adverbs and complements
 - 4.4 The descriptive indicator 的 *de*
 - 4.5 Attributives and predicatives
 - 4.6 Various inherent features of adjectives
 - 4.7 Adjectives and valency
 - 4.8 Adjectives and collocation
 - 4.9 Adjectives and comparison
- 5 Attributives other than adjectives
 - 5.1 The different forms of attributive
 - 5.2 The sequencing of attributives
 - 5.3 Combination, embedding and delaying
- 6 Action verbs
 - 6.1 Transitive and intransitive
 - 6.2 Dynamic and static differences
 - 6.3 Dative verbs
 - 6.4 Causative verbs
 - 6.5 Coverbs
 - 6.6 Agreement between the subject and its action verb predicate
 - 6.7 Agreement between an action verb and its object
 - 6.8 Action verbs: completion and continuation
 - 6.9 Action verbs: manner described and experience explained
- 7 Action verbs and time
 - 7.1 Point of time
 - 7.2 Duration
 - 7.3 Brief duration
 - 7.4 Frequency
 - 7.5 每 *měi* 'every'
 - 7.6 Other time expressions
 - 7.7 Negation and time reference
- 8 Action verbs and locations
 - 8.1 Location expressions and position indicators
 - 8.2 在 *zài* with location expressions
 - 8.3 Location expressions as sentence terminators
 - 8.4 Location expressions as sentence beginners
 - 8.5 Direction indicators
 - 8.6 The destination indicator 到 *dào* 'to arrive'
- 9 Adverbials
 - 9.1 Restrictive adverbials

- 9.2 Descriptive adverbials
- 9.3 Initiator-oriented or action-oriented descriptive adverbials
- 9.4 Omission of the descriptive marker 地 *de*
- 9.5 Relative position of adverbials
- 10 Complements
 - 10.1 Resultative complements
 - 10.2 Potential complements
 - 10.3 Complements of manner and consequential state
 - 10.4 Complements of direction
- 11 Coverbs
 - 11.1 Peer characteristics
 - 11.2 Semantic categories
 - 11.3 Coverbal positions
- 12 把 *bǎ* constructions
 - 12.1 The structural features of a 把 *bǎ* construction
 - 12.2 Intentionality in a 把 *bǎ* construction
 - 12.3 把 *bǎ* constructions and imperatives
 - 12.4 A particular feature of 把 *bǎ* constructions in evaluative sentences
 - 12.5 把 *bǎ* constructions in immediate contexts and narratives
 - 12.6 把 *bǎ* versus 将 *jiāng*
- 13 The passive voice and 被 *bèi* constructions
 - 13.1 Three forms of passive
 - 13.2 The notional passive
 - 13.3 The formal passive
 - 13.4 The lexical passive
- 14 Chain constructions
 - 14.1 The first verb introducing a coverbal phrase that indicates location, etc.
 - 14.2 The second verb indicating purpose
 - 14.3 The first verb indicating reason or cause
 - 14.4 The first verb expressing accompanying manner or circumstances
 - 14.5 Consecutive actions
 - 14.6 Simultaneous actions
 - 14.7 An emphatic chain construction
 - 14.8 An articulated chain construction
- 15 The verb 是 *shì*
 - 15.1 是 *shì* introducing a predicative
 - 15.2 Predicatives with an optional 是 *shì*
 - 15.3 是 *shì* indicating existence
 - 15.4 是 *shì* expressing emphasis
 - 15.5 是 *shì* assessing an overall situation
 - 15.6 是 *shì* forming part of a connector

- 15.7 是 shì as a pivot
- 16 The verb 有 yǒu
 - 16.1 有 yǒu indicating possession
 - 16.2 有 yǒu indicating existence
 - 16.3 有 yǒu introducing subjects and time or location expressions of indefinite reference
 - 16.4 有 yǒu specifying degree or extent
 - 16.5 有 yǒu introducing comparison
 - 16.6 有 yǒu as an adjectival formative
 - 16.7 有 yǒu expressing ideas of development and change
 - 16.8 有 yǒu introducing a conditional clause
 - 16.9 没(有) méi(yǒu) as negator of action verbs
 - 16.10 有 yǒu to indicate 'part of'
 - 16.11 有 yǒu as the first verb in a sequence
- 17 Verbs that take verbal or clausal objects
 - 17.1 Intention and aspiration
 - 17.2 Attitudes
 - 17.3 Knowing and thinking
 - 17.4 Appearance and value
 - 17.5 Dummy verbs
- 18 Modal verbs
 - 18.1 Semantic categories of modal verbs
 - 18.2 Speaker perspective of modal verbs
 - 18.3 Negation of modal verbs
 - 18.4 Grammatical orientation of modal verbs
- 19 Telescopic constructions
 - 19.1 Topic and sub-topic
 - 19.2 Topic and subject
 - 19.3 'Subject + predicate' as topic
 - 19.4 '(Subject) + predicate' inserted between 'topic' and 'comment'
- 20 Narration, description, exposition and evaluation
 - 20.1 Narrative sentences
 - 20.2 Descriptive sentences
 - 20.3 Expository sentences
 - 20.4 Evaluative sentences
 - 20.5 Comparisons between sentence types
 - 20.6 Concluding remarks
- 21 了 le-expository sentences
 - 21.1 Change or reversal of a previous situation
 - 21.2 Subjective endorsement behind the objective explanation
 - 21.3 Summing up after a series of actions
 - 21.4 A rhythmic necessity for monosyllabic verbs or verbalized adjectives

- 21.5 Two or three functions in one
- 21.6 *le*-expository sentences and the four basic sentence types
- 22 Conjunctions and conjunctives
 - 22.1 Conjunctions that link words or phrases
 - 22.2 Clausal conjunctions and conjunctives
 - 22.3 Clausal conjunctions and conjunctives in semantic categories
 - 22.4 Correlations and parallels
 - 22.5 Zero connectives
- 23 Interrogative sentences
 - 23.1 Yes-no questions
 - 23.2 Surmise questions
 - 23.3 Suggestions in the form of questions
 - 23.4 Alternative questions
 - 23.5 Affirmative-negative questions
 - 23.6 Question-word questions
 - 23.7 Follow-up queries with 呢 *ne*
 - 23.8 Rhetorical questions
 - 23.9 Exclamatory questions
- 24 Imperatives and exclamations
 - 24.1 Verbs in imperatives restricted to voluntary actions
 - 24.2 Imperatives: beginners and end-particles
 - 24.3 Spoken and written requests
 - 24.4 Interjections and exclamatory expressions
 - 24.5 Exclamations: particles and degree adverbials or complements
- 25 Abbreviations and omissions
 - 25.1 Abbreviations in answers to questions
 - 25.2 Abbreviations in face-to-face exchanges
 - 25.3 Abbreviations in comparisons
 - 25.4 The hidden presence of the narrator in a narrative
 - 25.5 Omissions in a discourse
- 26 Prosody and syntax
 - 26.1 Setting the scene: an experiment with 一 *yi* used similarly to an indefinite article in English
 - 26.2 End weight: the balance between the verb and its direct object
 - 26.3 The disyllabic rhythmic pattern of Chinese speech
 - 26.4 Rhythms of commonly discernible syntactic patterns
 - 26.5 Echoing patterns of singular rhythms
 - 26.6 Two paragraphs by way of conclusion
- 27 Stylistic considerations in syntactic constructions
 - 27.1 The presentational factor
 - 27.2 The rhetorical factor
 - 27.3 What lies beyond?

- 28 Morphology and syntax (I)
 - 28.1 Monosyllabic lexemes and morphemes of the lexicon
 - 28.2 An overall view of the syntactically oriented part of the lexicon
 - 28.3 Syntactically oriented trisyllabic lexemes and expressions
 - 28.4 Syntactically oriented quadrisyllabic (or multisyllabic) words, expressions and idioms
 - 28.5 Syntactically oriented multisyllabic sayings
- 29 Morphology and syntax (II)
 - 29.1 Sentential formulation devices
 - 29.2 A close examination of the interaction between the microsyntax of lexemic formation and the macrosyntax of sentential formulation
 - 29.3 Syntactic economy and retrieval system
- 30 Intralingual transpositions
 - 30.1 Options influenced by different modes of expression
 - 30.2 Choices made through stylistic considerations
 - 30.3 Word order guided by difference in meaning, emphasis or focus
 - 30.4 Synonymy that affects word order, formality, collocation, mode of expression, individual speech habit, etc.
- 31 Interlingual conversions
 - 31.1 Context-dependent economy vs strict structural completeness
 - 31.2 A time-sequenced string of verb-centred constructions vs an organized combination of verbs, participles, gerunds, infinitives, preposition, etc.
 - 31.3 Chinese verbs vs English prepositions
 - 31.4 Chinese bamboos vs English trees
 - 31.5 The inbuilt logic of the Chinese bamboo

4.2. Yip and Rimmington (2016) に対する寸評

本書も基本的に言語学に近い立場から記述をしていることが見て取れよう¹³。また Li and Thompson (1981) に比べ、説明は通説の提示に徹している感がある¹⁴。一部事項¹⁵の説明は参照文法書として必要な範囲を超えているように思われるが、実際の言語運用まで考えた場合には有用な記述であるとも言える。

一方、中国語学的な分析を提示する箇所も一部に見られる。例えば第 10 節において、「補語 (complement)」を先述した中国語学の意味合いで用いている。あるいは本稿の 2.2 節で言及した諸構造についても、形態面に限ってはあがあるが、28.2 節で扱われている。

回数に代表される動詞後の数量表現については、中国語学、言語学どちらの分析とも異なり、「complement」としている (p.135)。これは、学習文法書においてよく採用されている考え方であ

¹³ 例えば「主語」に関して中国語学的な捉え方は採用していない (p.108, p.152 等参照)。

¹⁴ 但し、動詞に後続して経験の意味を表す“过 guo”をアスペクトマーカ―と認めない (p.128) など、他 3 書と異なる分析も時折は見られる。

¹⁵ 例えば第 2 節や第 31 節などが代表例である。

る¹⁶。

例文提示については、Li and Thompson (1981)と同じく豊富である。漢字表記、アルファベット表記ともに現代中国語で一般的な簡体字、ピンインによってなされており、引用するのには4書中で最も便利である。

短所としては、学術書としては曖昧な記述が散見されることを挙げることができる。一例を挙げると、所謂「方向補語¹⁷」に対し、8.5節では“directional indicator”と称するのに対し、10.4節では“complements of direction”としており、如何なる要素と分析しているのかが判然としない。

総じていえば、本書では豊富な用例提示と実際の言語運用に資する詳しい解説がなされており、極めて有用な「学習書」としての性格を有しているように思われる¹⁸。その反面、用語法や記述に厳密さを欠くところもあり、参照文法書としてはやや不十分の感がある。

5. Huang and Shi, eds. (2016)

5.1. Huang and Shi, eds. (2016) の構成

本節では Huang and Shi, eds. (2016) の目次を移録し、同書の構成を示す。

1. Preliminaries
 - 1.1 The Chinese language
 - 1.2 A data-driven and corpus-based reference grammar
 - 1.3 Chinese writing system
2. Syntactic overview
 - 2.1 Morphemes, words, and word classes
 - 2.2 Phrases, clauses, and sentences
 - 2.3 Negation
 - 2.4 Aspectual system
 - 2.5 Comparisons and comparative constructions
 - 2.6 Information-packaging constructions
 - 2.7 Illocutionary force and sentence types
 - 2.8 Deixis and anaphora
3. Lexical word formation
 - 3.1 Introduction
 - 3.2 Defining “word” in Chinese
 - 3.3 Description of word components
 - 3.4 Lexical word formation processes
 - 3.5 Issues in Chinese word formation
4. Verbs and verb phrases

¹⁶ 例えば、守屋 (1995) や相原他 (2016) といった日本の代表的な中国語学習文法書では、動詞後に現れる数量表現を「数量補語」として扱っている。

¹⁷ “上来 (上がって来る)” の“来”や“走下去 (歩いて下りて行く)” の“下去”のように、動詞に後続し、動作の方向性を補足説明する要素のことをいう。

¹⁸ Yip and Rimmington (2016) から学習文法書に近い印象を感じることは、両著者が Routledge Grammar Workbooks シリーズから何冊かの中国語学習書を出版していることと、或いは関連があるかも知れない。

- 4.1 Introduction
- 4.2 Properties of verbs
- 4.3 Verb types
- 4.4 Arguments
- 4.5 Other post-verbal constituents
- 4.6 Other types of objects
5. Aspectual system
 - 5.1 Definition of aspect
 - 5.2 The perfective aspects
 - 5.3 The imperfective aspects
6. Negation
 - 6.1 Scope of negation
 - 6.2 The positions and scopes of negators
 - 6.3 Sublexical negation
 - 6.4 Negative answers to questions
 - 6.5 Negative polarity items and negation
 - 6.6 Metalinguistic negation
7. Classifiers
 - 7.1 Definition of classifiers
 - 7.2 Semantic properties of classifiers
 - 7.3 Syntactic properties of classifiers
 - 7.4 Overview of classifier types
 - 7.5 Sortal classifiers
 - 7.6 Measure words
 - 7.7 Polysemous classifiers
 - 7.8 Sortal classifier coercion of noun senses
8. Nouns and nominal phrases
 - 8.1 Distinctive properties of nouns and nominal phrases
 - 8.2 Overview of noun classes and nominal phrases
 - 8.3 The function of DET
 - 8.4 The function of NUM-CL
 - 8.5 Nouns and the N position
 - 8.6 Pronouns
 - 8.7 Apposition
 - 8.8 Referential and non-referential use of nominal phrases
 - 8.9 Proper names, proper nouns, and vocatives
 - 8.10 Nominal phrases as propositions, predicates, or sentences
9. Relative constructions
 - 9.1 Basic properties of relative clauses
 - 9.2 Grammatical relations in relative clauses
 - 9.3 Relative clauses without a grammatical relation

- 9.4 Relative clauses and topicalization
- 10. Adjectives and adjective phrases
 - 10.1 Defining properties of adjectives
 - 10.2 Two major subclasses of adjectives in Chinese: non-derived adjectives and derived adjectives
 - 10.3 Functions and properties of adjectives and adjective phrases
 - 10.4 Adjectives and verbs: a comparison
 - 10.5 Special adjectives 多 *duo1* 'many/much,' 少 *shao3* 'few/little,' and 大 *da4* 'big'
- 11. Comparison
 - 11.1 Distinctive properties of comparative clauses in Chinese
 - 11.2 Affirmative superiority comparison
 - 11.3 Superiority comparatives marked with 比 *bi3* 'than'
 - 11.4 Negative 比 *bi3* 'than' constructions
 - 11.5 跟 *gen1* 'with' comparatives: comparison of equality and likeness
 - 11.6 像 *xiang4* 'like': a partial variant of 跟 *gen1* 'with'
 - 11.7 如 *ru2* 'as' equality comparatives
 - 11.8 有 *you3* 'YOU' equality comparatives
 - 11.9 越... 越... *yue4... yue4...* 'the more ... the more ...' correlative comparative constructions
- 12. Adverbs
 - 12.1 Distinctive properties of adverbs
 - 12.2 Overview of adverbs
 - 12.3 Types of functional adverbs
 - 12.4 Frequently used adverbs
- 13. Prepositions and preposition phrases
 - 13.1 Distribution and function of PPs
 - 13.2 Differentiating prepositions from other lexical categories
 - 13.3 Monosyllabic and disyllabic prepositions
 - 13.4 Semantic classification of prepositions
 - 13.5 Locative PPs
- 14. Sentence types
 - 14.1 Sentences and clauses
 - 14.2 Overview of sentence classification
 - 14.3 Declarative and exclamative sentences
 - 14.4 Interrogative and directive sentences
 - 14.5 Logic relations between clauses
 - 14.6 Concessive complex sentences
 - 14.7 Conditional complex sentences
 - 14.8 Causative and purposive complex sentences
 - 14.9 Strategies of clause linking
 - 14.10 Compound sentences without overt marking
- 15. Major non-canonical clause types: *ba* and *bei*
 - 15.1 The *ba* constructions

- 15.2 Passive constructions
- 16. Deixis and anaphora
 - 16.1 Overview of deixis
 - 16.2 Overview of anaphora
- 17. Information structure
 - 17.1 Topic and object preposing
 - 17.2 Word order variations
 - 17.3 Sentences involving 是 shi4
 - 17.4 连 lian2... 都/也 dou1/ye3 'even' sentences
 - 17.5 只 zhi3, 只(有) zhi3(you3), and 只(是) zhi3(shi4)
- Appendix: Punctuation
 - A.1 Boundary-marking punctuation marks
 - A.2 Punctuation marks indicating the nature and function of expressions

5.2. Huang and Shi, eds. (2016) に対する寸評

Huang and Shi, eds. (2016) は Preface において、可能な限り *The Cambridge Grammar of the English Language* (Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum. Cambridge: Cambridge University Press, 2002) の章立てに従うという方針を示している¹⁹。そのため本書は、本稿で取り上げた4冊のなかで最も他言語（特に英語）と対照しやすい構成になっている。また上述した3冊では1-2名の著者が全編を記述していたが、Huang and Shi, eds. (2016) は22名の著者が専門に応じて執筆を分担しており、各章とも記述が精緻である。

例文はほぼ全てがコーパス資料から採取されている。文章語が多いことに起因し、必要以上に複雑な例文も散見されるが、Li and Thompson (1981) に対して指摘したような例文精度の問題は生じにくい。

また、構成からも予想されるとおり、記述の枠組みは言語学的である²⁰。例えば上述した「主語」の扱い方については、p.200で、文頭の時間／場所を表す名詞句は副詞に相当すると記述している²¹。また「補語 (complement)」という用語は本書には現れず、“写错”のような表現は Li and Thompson (1981) と同様に compound / complex word と見做している (p.106)²²。

惜しむらくは、初版であるためか、例文部分を中心に、誤植が極めて多い²³。本稿で取り上げた4冊の中で最も「参照文法書」と呼ぶにふさわしいのは本書であると筆者は考えているが、そ

¹⁹ 参考までに *The Cambridge Grammar of the English Language* の構成を以下に示す：

1. Preliminaries; 2. Syntactic overview; 3. The verb; 4. The clause: complements; 5. Nouns and noun phrases; 6. Adjectives and adverbs; 7. Prepositions and preposition phrases; 8. The clause: adjuncts; 9. Negation; 10. Clause type and illocutionary force; 11. Content clauses and reported speech; 12. Relative constructions and unbounded dependencies; 13. Comparative constructions; 14. Non-finite and verbless clauses; 15. Coordination and supplementation; 16. Information packaging; 17. Deixis and anaphora; 18. Inflectional morphology and related matters; 19. Lexical word-formation; 20. Punctuation

²⁰ わずかながら、中国語学の考え方が導入されている箇所もある。例えば本稿2.2節で触れた各構造について、形態面に限ってではあるが、p.17からp.19にかけて記述が見られる。

²¹ 主語の扱いについてはp.97やp.227も参照されたい。

²² 動詞後の数量表現については、言語学的に扱っている箇所 (p.94) と中国語学的説明をする箇所 (p.109) が混在している。どちらの箇所も同じ第4章の中にあるため、この混在は著者の違いに起因するものではない。

²³ 先述した3冊についても誤植が皆無という訳ではないが、Huang and Shi, eds. (2016) の誤植の多さは3冊の比ではない。

れ故に膨大な誤植の存在は残念である。本書の参照価値を保つため、稿末附録として誤記の一覧を提出する。

6. 結語

中国語は世界有数の長い研究史をもつ言語ではあるが、こと文法研究に関して言えばその歴史はまだ浅い²⁴。英語による本格的な参照文法書についてはChao (1968)が嚆矢とされ、ここで以後の関連研究の基礎が築かれた。その後、より言語学を軸足を置いたLi and Thompson (1981)が出版され、一定の影響を与えた。そして近年、Yip and Rimmington (2016), Huang and Shi, eds. (2016)といった大部の著作が立て続けに刊行された。これら先行研究に基づき、中国語の文法研究が今後も引き続き進展していくことを期待したい²⁵。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016-2017年度）の成果の一部である。

参考文献

- 相原茂・石田知子・戸沼市子 2016 『Why? にこたえるはじめての中国語の文法書(新訂版)』東京：同学社。
- Chao, Yuen Ren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press. 【中国語訳】1) 呂叔湘(译) 1979 《汉语口语语法》北京：商务印书馆。2) 丁邦新(译) 1980 《中国語の文法》臺北：學生書局。
- Huang, Chu-Ren and Dingxu Shi, eds. 2016. *A Reference Grammar of Chinese*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press. 【中国語訳】黄宣範(譯著) 1983 《漢語語法》臺北：文鶴出版有限公司。
- Li, Xuping. 2018. *A Grammar of Gan Chinese*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Matthews, Stephen and Virginia Yip. 2011. *Cantonese: A Comprehensive Grammar* (2nd edition). New York: Routledge. 【日本語訳】千島英一・片岡新(訳) 『広東語文法』東京：東方書店。
- 守屋宏則 1995 『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東京：東方書店。
- 大島正二 1998 『中国言語学史(増訂版)』東京：汲古書院。
- Wadley, Stephen. 1987. "Reviews of books: *Mandarin Chinese*." *Journal of the American Oriental Society* 107-3: 505-506.
- Yip, Po-Ching and Don Rimmington. 2016. *Chinese: A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- 朱德熙 1981 《语法讲义》北京：商务印书馆。【日本語訳】杉村博文・木村英樹(訳) 1995 『文法講義』東京：白帝社。

²⁴ 中国語の研究史については大島(1998: 8)の以下の一文が端的に表している：

「中国における言語研究では、二十世紀を迎えるまで文法的事柄などは関心の対象とされることなく、専ら漢字の形・音・義研究が、それ自体完結した言語研究として継続され、多くの成果が積み重ねられて中国独自の伝統が構築された」

²⁵ 中国語の方言については本文中で触れる機会はなかったが、英語で書かれた参照文法書としては、広東語を扱ったMatthews and Yip (2011)があり、日本語訳も出ている(千島・片岡訳2000 [邦訳は1994年出版の初版に基づく])。また現在発刊済みなのは贛方言を扱うLi (2018)のみであるが、Mouton de Gruyter社からSinitic Languages of Chinaという方言参照文法書のシリーズが順次出版される予定である。

—— 1985 《语法答问》北京：商务印书馆。【日本語訳】中川正之・木村英樹(編訳) 1986 『文法のはなし』東京：光生館。

[附録] Huang and Shi, eds. (2016) 所収用例中の注意を要する表記，及び誤記一覧

本附録では Huang and Shi, eds. (2016) 所収の用例に見られる注意を要する表記法，及び誤記を網羅的に指摘する。同書から用例を引用する場合には参照されたい。

まず冒頭では，一概に誤記とまでは言えないが，(通例と異なる表記法等，) 注意を要する点についてまとめて言及しておく。

1 点目は“一 yī”の変調に関する表記法である。“一 yī”の声調は後続する要素の声調に基づいて以下の変調を起こす。

- 1) 後ろに第4声以外の要素が続く場合→第4声(yì)に変調
- 2) 後ろに第4声の要素が続く場合→第2声(yí)に変調
(但し“一月 yīyuè”のように順番の意を表す“一”の場合は常に変調しない)

一般に，変調する“一”は変調後の声調を記すが，Huang and Shi, eds. (2016)では変調する“一”に対しても“yī1”のように本来の第1声で表記する方針をとっている(なお Huang and Shi, eds. 2016では，声調符号ではなく数字によって声調を表記している)。

2 点目は“不 bù”の変調に関わる表記法である。この要素は後に第4声の要素が続く場合，第2声(bú)に変調する。Huang and Shi, eds. (2016)では原則，変調する“不”についても本来の声調で“bu4”と表記する。しかしながら，(第6章を中心に，) 変調後の“bu2”で表記している箇所も少なからずある。この表記上の不統一は容易に看取することができるため，本附録ではいちいち指摘しないこととする。

3 点目は第3声の変調についての表記法である。中国語では第3声の要素が連続した場合，前の方の要素が第2声に変調する。Huang and Shi, eds. (2016)では基本的に，変調するものであっても本来の声調“3”を付している。一方で，変調後の声調“2”が付されている例も散見される。この不統一は中国語を専門としない読者には判別しがたいと考えられるため，本附録では変調後の声調“2”に改められている箇所について指摘を加えている。

4 点目は所謂「軽声(neutral tone)」の表記法についてである。Huang and Shi, eds. (2016)では軽声に対し，“0”と表記している場合もあれば，その要素本来の声調を付している場合もある。この不統一も中国語専門外の読者には判別しがたいであろうが，該当例の数が膨大であることと，軽声と本来の声調どちらで発音するかで揺れを見せる語も多いことから，本附録では原則指摘しないこととした。但し，必ず軽声で発音する要素であるにも拘わらず本来の声調が記されている場合は指摘を加えていることもある。

注意を要する表記法の最後は「アル化(“儿化 érhuà”)」に関わるものである。一般的なピンイン表記法ではアル化を表す“儿”は“r”とのみ表記する(e.g. “这儿 zhèr”)。一方 Huang and Shi, eds. (2016)では“er0”と表記する(e.g. “这儿 zhe4er0” [p.54 etc.])。「兒，子供」の意を表す“儿”は“er2”と表記されている(e.g. “女儿 nǚ3er2” [p.58])ため，判別に支障はないが，特異な表記法であるので言及しておく。

続いて，以下に誤記の一覧を掲げる。

Chapter 2

- p.17, 例文 [5]-a：量詞 (classifier) の“个”は必ず轻声で発音されるが、本例文では“ge4”のように、本来の声調“4”を付している。同様の表記は Huang and Shi, eds. (2016) 全編を通して随所に見られるので、以後は言及しない。
- p.24, 例文 [19]-a：“会议”に対するピンイン表記が“hui4yi1”とあるが、“议”の声調は第4声である。
- p.27, 例文 [25]-a：“咱们”に対するピンイン表記が“zan3men”とあるが、“咱”の声調は第2声である。また“们”は常に轻声で発音されるため“men0”とすべきである。
- p.30, 例文 [28]-c：“地点”に対するピンイン表記が“dian4dian3”とあるが、“地”は正しくは“di4”である。
- p.31, 例文 [29]-b：“以便”の“以”に対する声調表記(3)が欠けている。
- p.32, 例文 [30]：“也”に対するピンイン表記が“ye2”とあるが、“也”の声調は第3声である。
- p.32, 例文 [31]-a：“尽管”に対するピンイン表記が“jin4guan3”とあるが、“尽”の声調は第3声である。
- p.44, 例文 [52]-b：“那”のピンイン表記(na4)およびグロス(that)が欠けている。
- p.45, 例文 [54]-a：“爸爸”に対するピンイン表記が“ba4ba4”とあるが、2字目は轻声である(中国語では同字を重複させる親族名称は2字目を轻声で読む)。p.37の例文 [39]等と統一し“ba4ba0”とすべきである。
- p.55, 例文 [72]-a：“舅舅”に対するピンイン表記が“jiu4jiu4”とあるが、2字目は轻声である(前項括弧内参照)ため、“jiu4jiu0”とすべきである。
- p.57, 例文 [76]-a：“空客”に対するピンイン表記が“kong4ke4”とあるが、「エアバス社」は“kong1ke4”である。
- p.60, 例文 [81]-a：“山谷”に対するピンイン表記が“shang1gu3”とあるが、“山”は正しくは“shan1”である。
- p.61, 例文 [83]-b：“新型”に対するピンイン表記が“xin1xing1”とあるが、“型”の声調は第2声である。

Chapter 3

- p.69, 用例 [2]-c：“谦虚”に対するピンイン表記が“qian1ü1”とあるが、“虚”は正しくは“xu1”である。

Chapter 4

- p.83, 例文 [1]-a：“姑姑”に対するピンイン表記が“gu1gu1”とあるが、2字目は轻声(gu0)である。また“的”に対するピンイン表記(de0)およびグロス(DE)が欠けている。
- p.92, 例文 [20]-a：漢字表記とピンイン表記が一致していない。漢字表記を“列车在两个小时内抵达上海。”と改めるか、ピンイン表記を“lie4che1 jiang1yu2 liang3 dian3 ban4 di3da2

shang4hai3”とすべきである。

- p.92, 例文 [20]-c: “很久”に対するピンイン表記が“hen2jiu3”とあるが, “很”は本来の声調“3”を付すべきである。
- p.93, 例文 [22]-a: 漢字表記“…了学…”は“…学了…”とすべきである。またこの“了”に対するピンイン表記(le0)およびグロス(LE)が欠けている。
- p.93, 例文 [22]-b: 漢字表記とピンイン表記が一致していない。漢字表記から“说”を削除するか, ピンイン表記/グロスの“hui4 / can”の後に“shuo1 / say”を加えるべきである。
- p.96, 例文 [26]-c: “匹”に対するピンイン表記が“pi1”とあるが, “匹”の声調は第3声である。
- p.97, 例文 [27]-a: “朋友们”に対するピンイン表記が“peng2you3men2”とあるが, “们”は常に軽声で発音されるため, “men0”とすべきである。
- p.101, 例文 [35]-a: “手中”に対するピンイン表記が“shou3zhong4”とあるが, この“中”の声調は第1声である。
- p.102, 例文 [38]-c: “会”に対するピンイン表記(hui4)およびグロス(can)が欠けている。
- p.103, 例文 [39]-b: 漢字表記とピンイン表記が一致していない。漢字表記“星期”の前に“个”を加えるか, ピンイン表記“xing1qi1”の前の“ge4”およびそのグロス(CL)を削除すべきである。
- p.104, 例文 [41]-c: “予以”に対するピンイン表記が“yu2yi3”とあるが, “予”の声調は第3声である。
- p.107, 例文 [46]: “只”に対するピンイン表記が“zhi3”とあるが, この“只”の声調は第1声である。
- p.114, 例文 [56]-c: “气氛”に対するピンイン表記が“qi4fen4”とあるが, “氛”の声調は第1声である。
- p.114, 例文 [56]-e: “吃老本”に対するピンイン表記が“chi1 lao2ben3”とあるが, “老”の声調は第3声である。

Chapter 5

- p.120, 例文 [8]-a: “一场雨”に対するピンイン表記が“yi1 chang3 yu3”とあるが, この“场”の声調は第2声である。
- p.130, 例文 [26]-a: “啊”に対するピンイン表記が“a1”とあるが, Huang and Shi, eds. (2016)では基本的に句末助詞の声調を軽声としている。p.47の例文 [57]-a などでは“啊 a0”となっており, ここもそれに統一すべきである。

Chapter 6

- p.147, 例文 [9]-a: “好好”に対するピンイン表記が“hao3hao”とあり, 2つ目の“好”の声調表記(3)が欠けている。
- p.152, 例文 [24]-a: 様態補語を導く“得”は常に軽声で発音されるため, ピンイン表記は“de0”とすべきである。
- p.153, 例文 [25]-b: “那么好”に対するピンイン表記が“na4me0 hao4”とあるが, この“好”の

声調は第3声である。

- p.156, 例文 [32]-a: “召开”に対するピンイン表記が“zhao1kai1”とあるが, “召”の声調は第4声である。
- p.156, 例文 [32]-c: “规划”のピンイン表記(gui1hua4)およびグロス(planning)が欠けている。
- p.157, 例文 [33]-a: “成熟”に対するピンイン表記が“cheng2shou2”とあるが, この“熟”は“shu2”である。
- p.159, 例文 [35]-b: 1つ目の“停下来”のピンイン表記が“ting2 xia4lai4”とあるが, “来”の声調は第2声である。また, “再”のピンイン表記(zai4)およびグロス(again)が欠けている。
- p.160, 例文 [37]-a: “再”のピンイン表記(zai4)およびグロス(again)が欠けている。
- p.160, 例文 [37]-b: “了”のピンイン表記(le0)およびグロス(LE)が欠けている。
- p.160, 例文 [38]-c: “吗”に対するピンイン表記が“ma1”とあるが, 他所と統一して“ma0”とすべきである。
- p.162, 例文 [42]-b: “好好”に対するピンイン表記が“hao3hao0”とあるが, 他所と統一して“hao3hao3”とすべきである。
- p.165, 例文 [48]-c: “尽管”に対するピンイン表記が“jin4guan3”とあるが, この“尽”の声調は第3声である。また“仍旧”に対するピンイン表記が“reng3jiu4”とあるが, “仍”の声調は第2声である。さらに, “但是”のピンイン表記(dan4shi4)およびグロス(but)が欠けている。
- p.165, 例文 [49]-b: “血本”に対するピンイン表記が“xue2ben3”とあるが, この“血”の声調は第4声である。
- p.167, 例文 [53]-c: “怪”に対するピンイン表記が“guan4”とあるが, 正しくは“guai4”である。

Chapter 7

- p.177, 9行目: “官员”に対するピンイン表記が“guan1yuan2”とあるが, “员”は正しくは“yuan2”である。
- p.177, 29行目: “项炼”とあるが, 正しくは“项链”である。
- p.178, 31行目: “唱片”に対するピンイン表記(chang4pian4)が欠けている。
- p.178, 32行目: “相片”に対するピンイン表記が“xiang1pian4”とあるが, この“相”の声調は第4声である。
- p.178, 39行目: “几张”に対するピンイン表記が“ji3hang1”とあるが, “张”は正しくは“zhang1”である。
- p.179, 14行目: “几片”に対するピンイン表記が“ji3pian1”とあるが, この“片”の声調は第4声である。
- p.179, 16行目: “数十片”に対するピンイン表記が“shu4shi2pian1”とあるが, この“片”の声調は第4声である。
- p.179, 30行目: “美元”に対するピンイン表記が“mei3yuan2”とあるが, “元”は正しくは“yuan2”である。
- p.179, 38行目: 2箇所において“片”に対するピンイン表記が“pian1”とあるが, これら“片”の声調は第4声である。
- p.180, 1行目: “那片”に対するピンイン表記が“na4pian1”とあるが, この“片”の声調は第4声である。

- p.180, 18 行目：“一滴血”に対するピンイン表記が“yi1 di1 xue4”とあるが、この“血”は“xie3”である。
- p.180, 21 行目：“雨水”に対するピンイン表記が“yv3shui3”とあるが、“雨”は正しくは“yu3”である。
- p.183, 1 行目：“shang4ce4”に対する漢字表記は“上”を補って“上册”とすべきである。
- p.183, 12 行目：“休旅车”に対するピンイン表記が“xiu1lü3che2”とあるが、“车”の声調は第1声である。
- p.183, 34 行目：“纪录片”に対するピンイン表記が“ji4lu4pian1”とあるが、この“片”の声調は第4声である。
- p.183, 35 行目：2 箇所において“片”に対するピンイン表記が“pian1”とあるが、これら“片”の声調は第4声である。
- p.185, 39 行目：“十分”に対するピンイン表記が“ten2fen1”とあるが、“十”は正しくは“shi2”である。
- p.185, 最終行：“三分”に対するピンイン表記が“san1 fen4”とあるが、この“分”の声調は第1声である。
- p.186, 5-6 行目：4 箇所において“分 fen4”という表記があるが、いずれの“分”も第1声で読まれるものである。
- p.186, 11 行目：“间 jian4”とあるが、“件 jian4”の誤りである。
- p.187, 12 行目：“开了”のピンイン表記が“kai1 le”とあるが、“le”の後に“o”を補うべきである。
- p.187, 23-30 行目：9 箇所において“场 chang3”とあるが、各例中の“场”は第2声で読まれるものである。
- p.188, 6 行目：漢字表記で“锦标赛”が重複しており、削除すべきである。
- p.188, 19 行目：“第一、二期”に対するピンイン表記が“di4yi1, er4 qi1”とあるが、読点は漢字表記中と同じ“、”を用いるべきである。
- p.188, 23 行目：“处理”に対するピンイン表記が“chu4li3”とあるが、この“处”の声調は第3声である。
- p.188, 34 行目：漢字表記“一件事”の後に“／事情”を補うべきである。
- p.192, 13 行目：“一手好字”に対するピンイン表記が“yi1 shou3 hao4zi4”とあるが、この“好”の声調は第3声である。
- p.193, 2 行目：“这”に対するピンイン表記が“zhi4”とあるが、正しくは“zhe4”である。
- p.193, 14 行目：“一片好风光”に対するピンイン表記が“yi1 pian4 hao4 feng1guang1”とあるが、この“好”の声調は第3声である。
- p.194, 9 行目：“喝彩”に対するピンイン表記が“he1cai3”とあるが、この“喝”の声調は第4声である。
- p.198, 9 行目：“这种”に対するピンイン表記が“zhe4 zhong4”とあるが、この“种”の声調は第3声である。

Chapter 8

- p.218, 例文 [32]-c：“空着”に対するピンイン表記が“kong1zhe0”とあるが、この“空”の声調

は第4声である。

- p.225, 例文 [45]-a: “同桌”に対するピンイン表記が“tong1zhuo1”とあるが, “同”の声調は第2声である。
- p.229, 例文 [50]: “啊”に対するピンイン表記が“a1”とあるが, “啊 a0”とすべきである (上述 Chapter 5 の最終項目も参照)。
- p.231, 例文 [53]-a: “一”に対する声調表記 (1) が欠けている。
- p.231, 例文 [53]-b: “照顾好”に対するピンイン表記が“zhao4gu4 hao4”とあるが, この“好”の声調は第3声である。
- p.233, 例文 [56]-a: “啊”に対するピンイン表記が“a1”とあるが, “啊 a0”とすべきである (上述 Chapter 5 の最終項目も参照)。
- p.240, 例文 [69]-a および b: 様態補語を導く“得”のピンイン表記は“de0”とすべきである。
- p.253, 例文 [86]-a: “好”に対するピンイン表記が“hao4”とあるが, この“好”の声調は第3声である。

Chapter 9

- p.263, 例文 [18]: “尘螨”に対するピンイン表記が“chen2man2”とあるが, “螨”の声調は第3声である。
- p.265, 例文 [23]: “策略”に対するピンイン表記が“ce4lue4”とあるが, “略”は正しくは“lüe4”である。
- p.272, 例文 [47]: 漢字表記“着作”は“著作”とすべきである。

Chapter 10

- p.281, 例文 [6]-b: “村委会”の“会”に対するピンイン表記 (hui4) が欠けている。
- p.282, 例文 [7]-a: “吐出”に対するピンイン表記が“tu4chu1”とあるが, この“吐”の声調は第3声である。
- p.282, 例文 [7]-b: “门前”に対するピンイン表記が“men2qian1”とあるが, “前”の声調は第2声である。
- p.283, 例文 [9]-a: “钉”に対するピンイン表記が“ding1”とあるが, この“釘”の声調は第4声である。
- p.284, 例文 [11]: “傻里傻气地”に対するピンイン表記が“sha3liosha3qi4”とあるが, “li”を“li0”に改め, “地”に対する“di0”を補うべきである。また当該部分に対する英語グロスが“DE”とのみあるが, “silly DE”とすべきである。

Chapter 11

- p.301, 例文 [17]: “可以”に対するピンイン表記が“ke2yi3”とあるが, “可”の声調は第3声である。
- p.305, 例文 [32]: “少许”に対するピンイン表記が“shao2xu3”とあるが, “少”の声調は第3声

である。

- p.305, 例文 [33]: “国画”に対するピンイン表記が“guo4hua”とあるが、正しくは“guo2hua4”である。
- p.309, 例文 [52]: “似的”に対するピンイン表記が“si4de0”とあるが、原則的には“shi4de0”である。
- p.310, 例文 [53]: 同上。
- p.313, 例文 [67]: “原来”の“来”に対する声調表記(2)が欠けている。

Chapter 12

- p.316, 例文 [1]: “好”に対するピンイン表記が“hao4”とあるが、この“好”の声調は第3声である。
- p.317, 例文 [3]: “除夕”に対するピンイン表記が“chu2xi4”とあるが、“夕”の声調は第1声である。
- p.319, 上部の用例中で“微微”に対するピンイン表記が“wei2wei2”とあるが、“微”の声調は第1声である。
- p.319, 例文 [9]: “变质”に対するピンイン表記が“bian4zhi2”とあるが、“质”の声調は第4声である。
- p.320, 例文 [10]: “颇好”に対するピンイン表記が“po3 hao4”とあるが、それぞれ声調を改め、“po1 hao3”とすべきである。
- p.321, 例文 [13]: “暂且”に対するピンイン表記が“zhan4qie3”とあるが、“暂”は正しくは“zan4”である。
- p.322, 例文 [18]: “种群”と“处于”に対するピンイン表記がそれぞれ“zhong2qun2”, “chu3yu1”とあるが、この“种”の正しい声調は第3声, “于”の声調は第2声である。
- p.323, 例文 [22]: “休息”に対するピンイン表記が“xiu1xi2”とあるが、この“息”は常に轻声で発音されるため“xiu1xi0”とすべきである。或いは本来の声調を記す場合でも“xiu1xi1”とすべきである。
- p.323, 例文 [23]: “马来西亚”に対するピンイン表記が“ma3lai2xi1ya3”とあるが、“亚”の声調は第4声である。
- p.324, 例文 [24]: 漢字表記に“饮食, 运动和冥想”とあるが、意味的にこの読点は“、”でなければならない。
- p.325, 例文 [27]: “了”に対するピンイン表記が“e0”とあるが、正しくは“le0”である。
- p.325, 例文 [28]: “啦”に対するピンイン表記(la0)およびグロス(LA)が欠けている。
- p.328, 例文 [39]: “新舞”に対するピンイン表記が“xin1 wu2”とあるが、“舞”の声調は第3声である。
- p.328, 例文 [41]: “与会”に対するピンイン表記が“yu3hui4”とあるが、この“与”の声調は第4声である。
- p.331, 例文 [54]: 漢字表記中の下線を“智”にも付すべきである。また“暑期”と“忽略”に対するピンイン表記が“shu3qi2”, “hu1lue4”とあるが、それぞれ“shu3qi1”, “hu1lue4”とすべきである。
- p.331, 例文 [55]: 漢字表記中の“一共”は、下線を削除し、太字にすべきである。

- p.332, 例文 [58]: “品質” に対するピンイン表記が “pin3zhi2” とあるが, “质” の声調は第 4 声である。
- p.333, 例文 [61]: “移居” に対しピンイン表記は “yi2min2” とあり, 一致しない。漢字表記に合わせてピンイン表記を “yi2ju1” とするか, ピンイン表記に合わせて漢字表記を “移民” とすべきである。
- p.334, 例文 [67]: “宁可” に対するピンイン表記が “ning2ke3” とあるが, この “宁” の声調は第 4 声である。
- p.335, 例文 [71]: “兴奋” に対するピンイン表記が “xing4fen4” とあるが, この “兴” の声調は第 1 声である。
- p.336, 例文 [72]: “事迹” に対するピンイン表記が “shi4ji1” とあるが, “迹” の声調は第 4 声である。
- p.337, 例文 [76]: “丢” に対するピンイン表記が “diou1” とあるが, 正しくは “diu1” である。
- p.338, 例文 [79]: “怎么” に対するピンイン表記が “zhen3me0” とあるが, “怎” は正しくは “zen3” である。
- p.339, 例文 [86]: “玩” に対するピンイン表記 (wan2) およびグロス (play) が欠けている。
- p.341, 例文 [94]: “研究生” に対するピンイン表記が “yan2jiu4sheng1” とあるが, “究” の声調は第 1 声である。
- p.343, 例文 [102]: “究竟” に対するピンイン表記が “jiu4jing4” とあるが, “究” の声調は第 1 声である。
- p.343, 例文 [103]: “夕” に対するピンイン表記が “xi4” とあるが, 正しい声調は第 1 声である。
- p.344, 例文 [105]: “好好” に対するピンイン表記が “hao2hao3” とあるが, 他所と統一し, 1 つ目の “好” も元の第 3 声で表記すべきである。
- p.345, 例文 [109]: 様態補語を導く “得” は常に軽声で発音されるため, ピンイン表記は “de0” とすべきである (2 箇所)。
- p.350, 例文 [128]: “好好” に対するピンイン表記が “hao2hao3” とあるが, 他所と統一し, 1 つ目の “好” も元の第 3 声で表記すべきである。
- p.350, 例文 [132]: 句末助詞 “啊” に対するピンイン表記が “a1” とあるが, Huang and Shi, eds. (2016) では基本的に句末助詞の声調を軽声としているため, 統一して “a0” とすべきである。
- p.351, 例文 [136]: 2 箇所において “哥哥” に対するピンイン表記が “ge1ge0” とあるが, 正しくは “ge1ge0” である。また用例 A において, 漢字表記中の 1 つ目の “高” に対するピンイン表記 (gao1) およびグロス (tall) が欠けている。

Chapter 13

- p.356, 例文 [5]-b: “教育” に対するピンイン表記が “jiao1yu4” とあるが, この “教” の声調は第 4 声である。
- p.366, 例文 [26]-a: “答应” に対するピンイン表記が “da2ying4” とあるが, この “答” の声調は第 1 声である。またこの語の “应” は必ず軽声で発音されるので “ying0” とすべきである。
- p.373, 例文 [41]-b: “艘” に対するピンイン表記が “sao1” とあるが, 正しくは “sou1” である。また “帆船” に対するピンイン表記が “fan2chuan2” とあるが, “帆” の声調は第 1 声である。

- p.377, 例文 [51]-a: 漢字表記“冲”に下線を付すべきである。
- p.382, 例文 [58]-a: “婆婆”に対するピンイン表記が“po2po2”とあるが、2字目は常に軽声であるため“po2po0”とすべきである。
- p.382, 例文 [59]-a: “强盗”に対するピンイン表記が“qian2dao4”とあるが、“强”は正しくは“qiang2”である。
- p.383, 例文 [60]-a: “分钟”に対するピンイン表記が“fen4zhong1”とあるが、この“分”の声調は第1声である。
- p.387, 例文 [68]-b: 様態補語を導く“得”のピンイン表記は“de0”とすべきである。
- p.387, 例文 [70]-a: 同上。
- p.389, 例文 [72]-b: 漢字表記に“其他县市, 乡”とあるが、意味的にここの読点は“、”でなければならない。
- p.389, 例文 [73]-b: 様態補語を導く“得”のピンイン表記は“de0”とすべきである。
- p.390, 例文 [73]-c: 助詞“啊”に対するピンイン表記が“a1”とあるが、Huang and Shi, eds. (2016)では基本的に“啊”の声調を軽声で表記しているため、統一して“a0”とすべきである。
- p.390, 例文 [74]: 様態補語を導く“得”のピンイン表記は“de0”とすべきである。
- p.390, 例文 [75]: “自杀率”に対するピンイン表記が“zi4sha1lu4”とあるが、“率”は正しくは“lü4”である。
- p.392, 例文 [77]-c: 漢字表記に“鉴于美元今年, 大幅升值”とあるが、ここの読点は不要である。
- p.393, 例文 [78]-b: “藉着”に対するピンイン表記が“jie4zhu4”とあるが、この“着”は正しくは“zhe0”である。
- p.393, 例文 [78]-c: 漢字表記に“姊姊”とあるが、ピンイン表記に合わせて“姐姐”とすべきである。
- p.394, 例文 [80]-a: “好”に対するピンイン表記が“hao4”とあるが、この“好”の声調は第3声である。
- p.398, 例文 [87]-b: “二十九”に対するピンイン表記が“er2shi2jiu3”とあるが、“二”の声調は第4声である。

Chapter 14

- p.407, 例文 [10]-a: “栓子”に対するピンイン表記が“shuan4zi0”とあるが、“拴”の声調は第1声である。
- p.407, 例文 [10]-b: 漢字表記に“…上司一个多疑的人把他…”とあるが、3つ目(=“个”の直前)のハイフンは漢字“一”の誤植である。
- p.413, 例文 [18]-b: “好你个”に対するピンイン表記が“hao4 ni3 ge4”とあるが、この“好”の声調は第3声である。
- p.414, 例文 [21]-c: 漢字表記“了”に対するピンイン表記(le0)およびグロス(LE)が欠けている。
- p.420, 例文 [30]-b: “女朋友”に対するピンイン表記が“nü3peng2you2”とあるが、“友”の声調は第3声である。
- p.421, 例文 [33]-a: “咱们”に対するピンイン表記が“za2men0”とあるが、“咱”は正しく

は“zan2”である。

- p.426, 例文 [41]-a: “碰”に対するピンイン表記が“peng2”とあるが、正しくは第4声である。
- p.430, 例文 [47]-a: “提供”に対するピンイン表記が“ti2gong4”とあるが、この“供”の声調は第1声である。
- p.436, 例文 [53]-a: “女主角”の“角”に対するピンイン表記(jue2)が欠けている。
- p.444, 例文 [62]-c: 漢字表記“省得”に対するピンイン表記が“mian3de0”とあり、一致しない。漢字表記に合わせてピンイン表記を“sheng3de0”と改めるか、ピンイン表記に合わせて漢字表記を“免得”と改めるべきである。
- p.445, 例文 [64]-a: 漢字表記“而且”に対するピンイン表記(er2qie3)およびグロス(and)が欠けている。

Chapter 15

- p.451, 例文 [2]: “混为一谈”に対するピンイン表記が“hun3wei2yi1tan2”とあるが、正しくはこの“混”の声調は第4声である。
- p.454, 例文 [9]: “放火”に対するピンイン表記が“fang3huo3”とあるが、“放”の声調は第4声である。
- p.455, 例文 [13]: “血”に対するピンイン表記が“xue3”とあるが、この“血”は正しくは“xie3”である。
- p.461, 例文 [31]: “身子”に対するピンイン表記が“sheng1zi0”とあるが、“身”は正しくは“shen1”である。
- p.462, 例文 [35]: “满眶”に対するピンイン表記が“man3 kuang1”とあるが、“眶”の声調は第4声である。
- p.463, 例文 [40]: 2箇所において“当”に対するピンイン表記が“dang1”とあるが、これら“当”の声調は第4声である。
- p.463, 例文 [41]: “好”に対するピンイン表記が“hao4”とあるが、この“好”の声調は第3声である。
- p.464, 例文 [46]: 同上。
- p.466, 例文 [54]: “当”に対するピンイン表記が“dang1”とあるが、この“当”の声調は第4声である。
- p.469, 例文 [62]: “听”に対する声調表記(1)が欠けている。
- p.471, 例文 [67]: “侮辱”に対するピンイン表記が“wu1ru3”とあるが、“侮”の声調は第3声である。
- p.471, 例文 [70]: 句末助詞“啊”に対するピンイン表記が“a1”とあるが、Huang and Shi, eds. (2016)では基本的に“啊”の声調を軽声で表記しているため、統一して“a0”とすべきである。
- p.473, 例文 [77]: “满满”に対するピンイン表記が“man2man3”とあるが、“man3man3”とすべきである。
- p.475, 例文 [84]: 2箇所において“干邑”に対する声調表記が“gan4yi4”とあるが、この“干”の声調は第1声である。
- p.477, 例文 [91]: “两旁”に対するピンイン表記が“liang2pang2”とあるが、“两”の声調は第3

声である。

- p.478, 例文 [95]: “北部”に対するピンイン表記が“bei4bu4”とあるが, “北”の声調は第3声である。
- p.479, 例文 [96]: “为”に対するピンイン表記が“wei4”とあるが, この“为”の声調は第2声である。
- p.480, 例文 [99]: “好”に対するピンイン表記が“hao4”とあるが, この“好”の声調は第3声である。また漢字表記に“惯怀”とあるが, 正しくは“惯坏”で, そのピンイン表記は“guan4huai4”である。

Chapter 16

- p.487, 例文 [2]: “细菌”に対するピンイン表記が“xi4jun4”とあるが, この“菌”の声調は第1声である。
- p.495, 例文 [16]: “这”に対するピンイン表記が“zh4”とあるが, 正しくは“zhe4”である。
- p.495, 例文 [17]: 2箇所において“养育”に対するピンイン表記が“yang3yu1”とあるが, “育”の声調は第4声である。
- p.496, 例文 [18]: “削价”に対するピンイン表記が“xue4jia4”とあるが, “削”の声調は第1声である。また“这种产品”に対するピンイン表記が“zhe4zhong4 chan3pin3”とあるが, この“种”の声調は第3声である。
- p.497, 例文 [20]: “冲击”に対するピンイン表記が“chong1ji2”とあるが, “击”の声調は第1声である。
- pp.500-501, 例文 [28]: “电影业”に対するピンイン表記が“dian4yin3”とあるが, “影”のピンイン表記は正しくは“ying3”である。また“业”のピンイン表記“ye4”を補うべきである。さらに, “解决”に対するピンイン表記が“jie2jue2”とあるが, “解”の声調は第3声である。
- p.501, 例文 [29]: 漢字表記“到了”に対するピンイン表記が“zhuan3 dao4”とあり, 一致しない。ピンイン表記に合わせて漢字表記を“转到”と改めるべきである。
- p.505, 例文 [36]: “猜谜”に対するピンイン表記が“cai1mei4”とあるが, “谜”は正しくは“mi2”である。
- p.506, 例文 [41]: “仍然”に対するピンイン表記が“reng2”とあり, “然”に対するピンイン表記(ran2)を欠く。
- p.508, 例文 [42]: “身心”に対するピンイン表記が“sheng1xin1”とあるが, “身”は正しくは“shen1”である。
- p.510, 例文 [46]: “休息”に対するピンイン表記が“xiu1xi2”とあるが, “息”の声調は第1声である。或いは, この“息”は必ず軽声で発音されるため, “xi0”でも良い。
- p.511, 例文 [48]-b: “微光”に対するピンイン表記が“wei2 guang1”とあるが, “微”の声調は第1声である。
- p.511, 例文 [48]-e: 漢字表記“塑料”に対するピンイン表記が“su4jiao1”とあり, 一致しない。漢字表記に合わせてピンイン表記を“su4liao4”と改めるか, ピンイン表記に合わせて漢字表記を“塑胶”と改めるべきである。
- pp.511-512, 例文 [48]-f: 同上。
- p.512, 例文 [49]-b: “我们俩”に対するピンイン表記が“wo3men0 liang3”とあるが, この“俩”

は“lia3”である。

- p.514, 例文 [50]-a : “淳朴”に対するピンイン表記が“chun2pu2”とあるが, “朴”の声調は第3声である。
- p.514, 例文 [50]-e : “漫画”に対するピンイン表記が“man2hua4”とあるが, “漫”の声調は第4声である。
- p.516, 例文 [53] : “好”に対するピンイン表記が“hao4”とあるが, この“好”の声調は第3声である。

Chapter 17

- p.520, 例文 [8]-a : “可以”に対するピンイン表記が“ke2yi3”とあるが, “可”の声調は第3声である。
- p.520, 例文 [8]-b : “只”に対するピンイン表記が“zhi1”とあるが, この“只”の声調は第3声である。
- p.522, 例文 [12]-a : “哪里”に対するピンイン表記が“na2li3”とあるが, “哪”の声調は第3声である。なお“哪里”の“里”は常に轻声で発音されるため, “li0”と表記しても良い。
- p.527, 例文 [23]-a : “入狱”に対するピンイン表記が“ru4yu1”とあるが, “狱”の声調は第4声である。
- p.527, 例文 [23]-b : “浴缸”に対するピンイン表記が“yu1gang1”とあるが, “浴”の声調は第4声である。
- p.528, 例文 [24]-a : “子女”に対するピンイン表記が“zi2nu3”とあるが, 正しくは“zi3nu3”である。
- p.529, 例文 [26] : “演讲”に対するピンイン表記が“yan2jiang3”とあるが, “演”の声調は第3声である。
- p.530, 例文 [27]-b : “只有”に対するピンイン表記が“zhi2you3”とあるが, “只”の声調は第3声である。
- p.530, 例文 [28]-b : “略知一二”に対するピンイン表記が“lue4zhi1yi1er4”とあるが, “略”は正しくは“lüe4”である。
- p.533, 例文 [34] : 2箇所において“按摩椅”に対するピンイン表記が“an4mo1yi3”とあるが, “摩”の声調は第2声である。
- p.538, 例文 [45]-a : “愉快”に対するピンイン表記が“yu1kuai4”とあるが, “愉”の声調は第2声である。
- p.540, 例文 [48] : “模样”に対するピンイン表記が“mo2yang4”とあるが, この“模”は“mu2”である。
- p.541, 例文 [51] : “坊间”に対するピンイン表記が“fang3jian1”とあるが, “坊”の声調は第1声である。
- p.544, 例文 [56]-a : “熟透”に対するピンイン表記が“shou2tou4”とあるが, この“熟”は“shu2”である。
- p.544, 例文 [56]-b : “不一会儿”に対するピンイン表記が“bu2yi1hui3er2”とあるが, この“儿”はアル化を表しているため“er0”とすべきである。
- p.545, 例文 [60] : “背上”に対するピンイン表記が“bei1 shang4”とあるが, この“背”の声調

は第4声である。

- p.545, 例文 [61]: “土匪”に対するピンイン表記が“tu2fei3”とあるが, “土”の声調は第3声である。
- p.550, 例文 [72]-a: “法国”に対するピンイン表記が“fa4guo2”とあるが, “法”の声調は第3声である。
- p.550, 例文 [72]-b: “上述”に対するピンイン表記 (shang4shu4) およびグロス (aforementioned) が欠けている。
- p.552, 例文 [78]: “五匹马”に対するピンイン表記が“wu3 pi1 ma3”とあるが, “匹”の声調は第3声である。
- p.554, 例文 [83]: “内疚”に対するピンイン表記が“nei4jiu1”とあるが, “疚”の声調は第4声である。
- p.555, 例文 [86]-A: “嗯”に対するピンイン表記が“en4”とあるが, 正しくは“ng4”である。
- p.557, 例文 [95]-a: “提携”に対するピンイン表記が“ti2xi2”とあるが, “携”は正しくは“xie2”である。
- p.562, 例文 [108]: “孟子”に対するピンイン表記が“meng4zi0”とあるが, この“子”は“zi3”である。
- p.562, 例文 [109]: “仅只”に対するピンイン表記が“jin2zhi3”とあるが, “仅”の声調は第3声である。また“血肉”に対するピンイン表記が“xie3rou4”とあるが, この“血”は“xue4”である。
- p.564, 例文 [113]-a: “值得一提”の“得”に対する声調表記 (0) が欠けている。
- p.566, 例文 [117]-a: “教育”に対するピンイン表記が“jiao1yu4”とあるが, この“教”の声調は第4声である。
- p.566, 例文 [117]-b: “相差”に対するピンイン表記が“xiang1cha1”とあるが, この“差”の声調は第4声である。
- p.569, 例文 [124]: “宁愿”に対するピンイン表記が“ning2yuan4”とあるが, この“宁”の声調は第4声である。
- p.570, 例文 [126]-b: “自己”の“己”に対するピンイン表記 (ji3) が欠けている。
- p.573, 例文 [132]: “仅仅”に対するピンイン表記が“jin2jin3”とあるが, “仅”の声調は第3声であるため, “jin3jin3”とすべきである。
- p.573, 例文 [133]-b: “鲍叔牙”に対するピンイン表記が“bao4shu2ya2”とあるが, “叔”の声調は第1声である。
- p.575, 例文 [139]-b: “被昵称为”に対するピンイン表記が“bei4 ni4cheng1 wei4”とあるが, この“为”の声調は第2声である。
- p.576, 例文 [140]-b: “用”に対するピンイン表記が“yon4”とあるが, 正しくは“yong4”である。

Appendix

- p.578, 例文 [1]-a: “按照”に対するピンイン表記が“an1”とあるが, “按”の声調は第4声である。また“照”に対するピンイン表記 (zhao4) が欠けている。
- p.578, 例文 [1]-b: “服务员”に対するピンイン表記が“fu2wu2yuan2”とあるが, “务”の声調は

第4声である。

- p.579, 例文 [4]-a: 漢字表記“着名”は“著名”とすべきである。また“名”のピンイン表記が“min2”とあるが, “ming2”とすべきである。
- p.580, 例文 [7]: “地方”の“方”に対する声調表記(0または1)が欠けている。
- pp.580-581, 例文 [8]-a: “坦桑尼亚”に対する声調表記が“tan2sang1ni2ya4”とあるが, “坦”の声調は第3声である。また国名「ザンジバル」の漢字表記が“桑几巴尔”とあるが, “桑给巴尔”が一般的である。さらに“商业”に対するピンイン表記が“shang1yan4”とあるが, “业”は正しくは“ye4”である。
- p.581, 例文 [8]-b: “全球暖化”に対するピンイン表記が“quan1qiu2nuan3hua4”とあるが, “全”の声調は第2声である。
- p.582, 例文 [13]: “袭击”に対するピンイン表記が“xi2ji2”とあるが, “击”の声調は第1声である。また“出其不意”に対するピンイン表記が“chu1qi1bu4yi4”とあるが, “其”の声調は第2声である。
- p.583, 例文 [16]: “包括”に対するピンイン表記が“bao1gua1”とあるが, “括”は正しくは“kuo4”である。また“汽油”の“汽”に対するピンイン表記(qi4)が欠けている。
- p.584, 例文 [17]-a: “新娘子”に対するピンイン表記が“xin1nian2zi0”とあるが, “娘”は正しくは“niang2”である。
- p.585, 例文 [20]-b: “物种起源”に対するピンイン表記が“wu4zhong4qi3yuan2”とあるが, この“种”の声調は第3声である。
- p.586, 例文 [20]-c: “伙食费”に対するピンイン表記が“huo2shi2fei4”とあるが, “伙”の声調は第3声である。
- p.586, 例文 [21]-a: “自身”に対するピンイン表記が“zi4sheng”とあるが, “身”は正しくは“shen1”である。
- p.586, 例文 [22]-a: “毕加索”に対するピンイン表記が“bi3jiasuo3”とあるが, 正しくは“bi4jia1suo3”である。
- p.587, 例文 [23]-a: “连声”に対するピンイン表記が“lian2sheng2”とあるが, “声”の声調は第1声である。また2箇所において“赢”のピンイン表記が“yin2”とあるが, 正しくは“ying2”である。
- pp.587-588, 例文 [23]-b: 漢字表記“作品是”に対しピンイン表記は“zuo4pin3 zhen1 shi4”とあり, 一致しない。漢字表記に合わせてピンイン表記から“zhen1”を削除するか, ピンイン表記に合わせて漢字表記を“作品真是”とすべきである。
- p.588, 例文 [25]-b: 例文中の数字“35”に対するピンイン表記およびグロスが“50”になっている。
- p.589, 例文 [27]: “身份证”に対するピンイン表記が“sheng2fen4zheng4”とあるが, “身”は正しくは“shen1”である。

中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題

林 範 彦

Issues in the Reference Grammars of Tibeto-Burman Languages in China and Its Neighboring Area

HAYASHI, Norihiko

Keywords: Tibeto-Burman, Mandarin Chinese, tonogenesis, conjunct/disjunct, word class

キーワード: チベット・ビルマ諸語, 漢語, 声調発生, 接合/離接, 語類

1. はじめに
2. 主としてチベット・ビルマ系から発信された有名な言語学用語/言語現象
3. 中国研究者の参照文法書の特徴と問題
4. 中国周辺領域の良質なTB参照文法書
5. おわりに

1. はじめに

本稿¹は2017年7月15日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開かれた共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」研究会にて同名のタイトルにて発表した内容を改訂したものである。本研究会では副代表である澤田英夫教授が同じくチベット・ビルマ諸語の専門家であるため、澤田氏が主としてインドおよび周辺領域を担当し、筆者が中国を中心とした領域を担当することとした。

さて、よく知られているように、各地域・各語族の参照文法書の記述方法や技術的な構成は大きく異なる。本稿で取り扱うチベット・ビルマ諸語の参照文法の記述的な枠組みも極めて特異なところがある上に、中国の伝統的な記述の方法にも独特の性格を認めねばならない。この点を十分に踏まえて、本稿ではできるだけ平明にそれらが理解できるよう説明して行きたい。

本稿の構成を以下に述べる。まず、1節で簡単にチベット・ビルマ諸語の系統分類と地理的分

林範彦. 2022. 「中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』. (アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 107-120. DOI: <https://doi.org/10.15026/116962>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

¹ 本稿の草稿は白井聡子氏(筑波大学・日本学術振興会 [当時], 現東京大学講師)に多大なご指摘を頂いた。記して感謝を申し上げます。もちろん、本稿における全ての誤謬は筆者個人に帰する。

布, さらに類型的特徴の概略を述べる。2節では主としてチベット・ビルマ諸語研究から発信された独特な術語について略説する。3節では中国のチベット・ビルマ諸語研究の様相とその諸問題について論じる。4節では中国及びその周辺領域の推薦されるべきチベット・ビルマ諸語の記述文法書について例示したい。5節で本稿を締めくくる。

1.1. チベット・ビルマ諸語の分布

チベット・ビルマ諸語は図1(破線で囲まれた部分)に見るように, 東は中国西南部である四川省や貴州省から, 西はパキスタン北部にまで, 北はチベット・ヒマラヤ地域から, 南は東南アジア大陸部のミャンマーまで広大な地域で分布する。その故地はいまも不明であるが, これほどまでに拡散した結果, 他の語族の言語との接触が起こり, 各地域の語彙と文法は同一系統と言えども, 豊かな多様性を見せる。

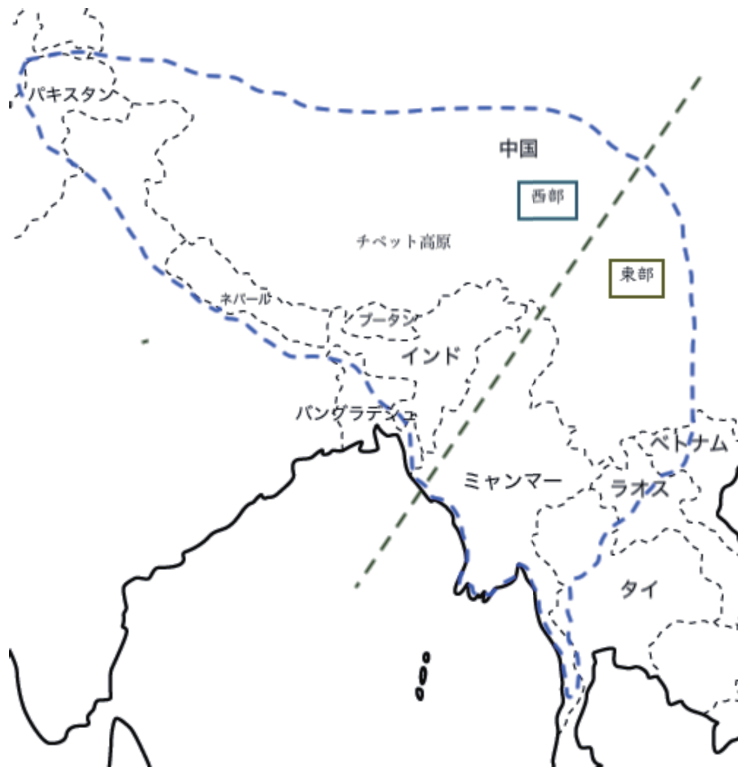


図1 チベット・ビルマ諸語の分布範囲の概略
(<https://www.freemap.jp/> の地図をもとに筆者作成)

詳細な分析を施した上での分類ではないのだが, 本稿では試みにチベット・ヒマラヤ地域を含む部分をチベット・ビルマ諸語の西側に, 中国雲南省・四川省・貴州省やビルマ中部・東部, およびタイ・ラオス・ベトナム北部を含む地域をチベット・ビルマ諸語の東側に位置するとする。

1.2. チベット・ビルマ諸語の系統と類型論的特徴

下位語群に対する分析手法や結果は未だに一致を見ない。ここに掲げるのは代表的な言語系統に関する諸説である。図2は Matisoff (2003) より、図3は van Driem (2001) からである。この他にもいくつか示されてきてはいるが、いずれも同一の言語系統の関係性を示しているとは思えないほど多様性に富んでいる。特に図3は系統樹というよりも「木の葉が落ちた形状」をモデルとしている。

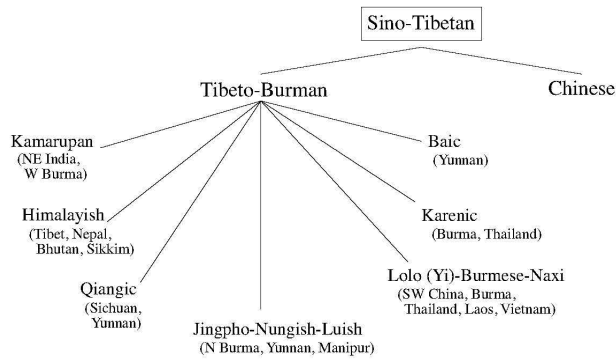


図2 Matisoff (2003) におけるチベット・ビルマ諸語の系統概略

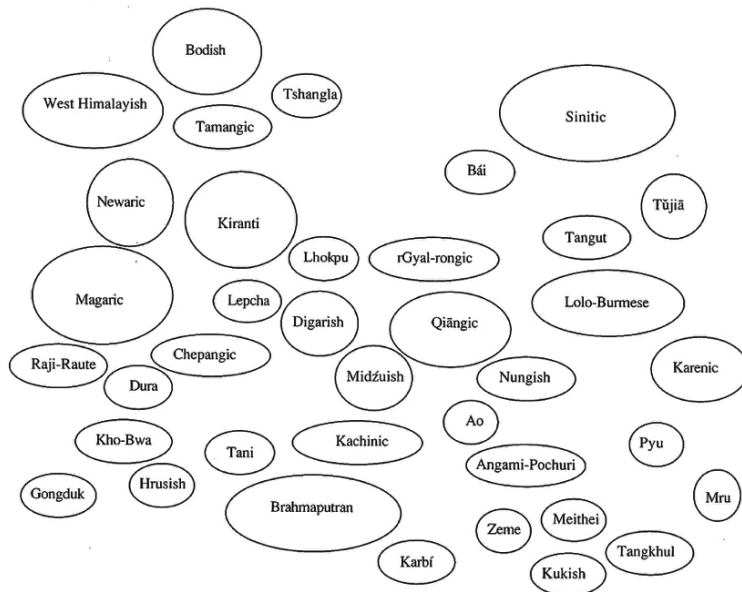


図3 van Driem (2001) によるチベット・ビルマ諸語のモデル

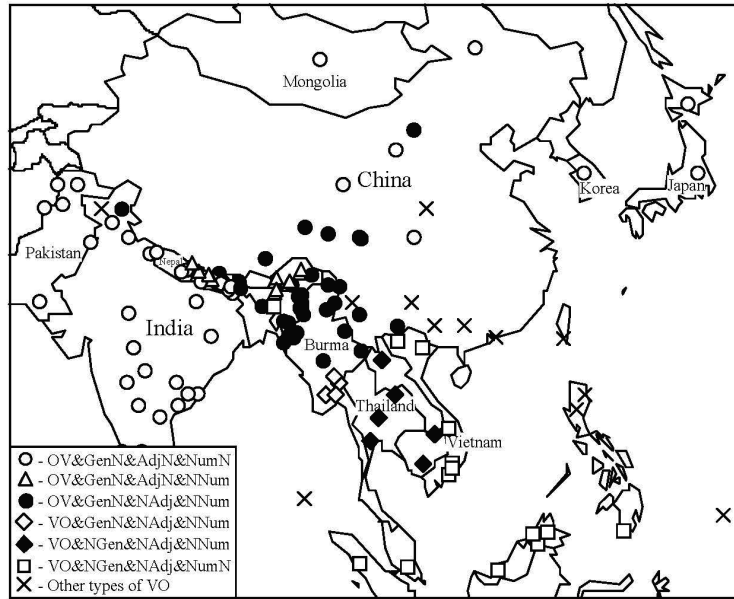


図4 アジア地域の基本語順の相関関係と地理的分布 (Dryer 2008: 73)

[類型論的特徴]

チベット・ビルマ諸語の類型論的な特徴をまとめる。まず語順についてであるが、大部分はSOV型である。例外的には白語やカレン諸語、ムル語などがあり、これらはSVO語順をとる。ただし、これらの例外的な言語は当該地域で話される有力な言語の影響により語順が変化したと考えられる²。形容詞を範疇として認定するかどうかは各言語によって異なるが、認められる場合は名詞に後置される場合と前置される場合の2パターン存在する。後置される場合はチベット・ビルマ諸語でも東側に分布し、前置される場合は西側に分布する傾向にある。図4はDryer (2008)の引用であるが、チベット・ビルマ諸語を含むアジア諸語全般の語順の相関関係についてその地理的分布を図示したものである。

この他、格標示については能格タイプと対格タイプの2種類がある。主にチベット・ヒマラヤ地域を中心とした西側に能格タイプが分布し、対格タイプは主として東側、特に中国雲南省以南から東南アジア大陸部に広く分布する傾向にある。

加えて、主にチベット・ビルマ諸語分布域の東側に分布する言語では類別詞が豊富である。チベット語の諸方言は反対に類別詞が少ない。

またチベット・ビルマ諸語分布域の東側に位置する言語は声調言語（多くは音節声調的）であることがよく見られる。他方、チベット語の諸方言は語声調的な特徴をもつ。また、中国青海省チ

² 中国雲南省で話される白語は周辺の漢語方言の影響を、ミャンマー東部で話されるカレン諸語はモン語あるいはタイ語などとの接触の結果、語順の変更が起きたと考えられる (Matisoff 1991 など)。

ベット語アムド方言など、声調を持たない言語も存在する（海老原 2008, 海老原 2019, ダムディン 2017 など）。このことを主な根拠として、チベット・ビルマ祖語の段階では無声調であったと推定される³。

1.3. 本稿の取り扱う範囲

なお、本稿では澤田英夫氏と分担し、チベット・ビルマ諸語全体の問題を取り扱うのではなく、中国国内とその周辺を中心としたチベット・ビルマ諸語の参照文法の紹介とその問題点の指摘を行う。（澤田氏の論考は本論集 pp. 121-147。）

2. 主としてチベット・ビルマ系から発信された有名な言語学用語/言語現象

本節では主にチベット・ビルマ諸語から発信された用語の中で、記述言語学あるいは言語類型論の世界において比較的有名な言語学用語や言語現象について、若干ながら取り上げたい。

2.1. sesquisyllable: 1.5 音節

まずは sesquisyllable からである。これは Matisoff (1973b) において示された東南部に分布するチベット・ビルマ諸語を中心とした新しい音節の概念である。

中国雲南省以南から東南アジア大陸部に分布する言語では2音節の語彙（複合語を含む）に対し、概ね iambic のストレスパターンが付与される。これにより、第1音節が弱化すると、母音が中舌化したり、声調が中和するなどする。そして、2音節語は全体として第2音節が中心に聞こえる。この現象について、あたかも最初の音節が半分にすり減ったように捉え、1.5 倍を意味する sesqui- を冠した sesquisyllable の名称がつけられたと考えられる。

[ビルマ語 Burmese; Okell 1969: 17]

- (1) $hkà + pa? > hkāba?, kāba?, gāba?$
 'waist' 'go round' 'belt'

(1) のビルマ語は、「腰」を意味する *hka* と「回る」を意味する *pa?* の複合により出来上がった「ベルト」の語を示している。Okell (1969) は3つの実現形の候補を示している。いずれの候補も第1音節の母音が弱化し (*ā*)、声調が中和している。この母音が弱化した部分を 0.5 音節と解釈して、全体を sesquisyllable とする分析である。

2.2. tonogenesis: 声調発生

上述した通り、チベット・ビルマ祖語は元来声調を持たない言語であったと推定されている。そこから下位語群に分岐する段階で、声調が発生したと考えられるが、この過程は tonogenesis (声調発生) と呼ばれている (Matisoff 1973b)。声調が発生するシステムについては、中国音韻史はもちろん、ベトナム語においても Haudricourt (1954) などによく知られているが、tonogenesis の用語自体はチベット・ビルマ諸語研究から広まったと言えるのではないだろうか。

³ Benedict (1972) ではチベット・ビルマ祖語の段階に2声調存在したと想定しているが、Matisoff (2003: 12) は祖語における声調の存在には懐疑的で、各言語の分化の過程で独自に声調を發展させたと考えている。

もっとも単純には分節音上の対立が消失した代償として、超分節音上の対立が生まれる過程であると捉えられる。以下は Haudricourt (1954) を単純化した説明である。

- (2) *ba > pa^L
*pa > pa^H

例えば、ある言語において ba と pa の二種の語彙が存在したとする。このうち、音節初頭の b が無声化し、p となった場合、分節音として両者ともに /pa/ の形式となる。このとき、元来の /ba/ が低い声調 (L) を、元来の /pa/ が高い声調 (H) を持つことにより、語形上の対立を持つことがある。この過程が tonogenesis と考えられる。

tonogenesis の発生メカニズムについて具体的に実証している研究としては Hyslop (2009) が挙げられるので、参照されたい。

2.3. creaky vowels/ breathy vowels: 緊喉母音/ 息漏れ母音

音声学の用語としての creaky vowel (緊喉母音) と breathy vowel (息漏れ母音) の存在は一般的にも知られるところである。しかし、チベット・ビルマ諸語において普通母音とこれらの発声上の特徴を有する母音との対立が集中的に存在することは特に重要であるといえよう。

特にチベット・ビルマ諸語においては西側にあたるタマン諸語 (Tamangic) などに普通母音と弛緩母音の対立が見られる。

[グルン語 Gurung; Glover 1971: 7]

- (3) /mi/: clear vowel with mid tone
/mih/: breathy vowel with low tone

(3) はタマン諸語の 1 つグルン語 (Gurung) の例である。Glover (1971) の表記では /i/ vs. /ih/ となっているが、普通の母音と息漏れをとまなう弛緩母音の対立となる。多くの場合、弛緩母音は低い声調を伴う。

他方、東南部のチベット・ビルマ諸語を中心に緊喉母音も分布している。緊喉母音の音声的な多様性については鈴木 (2011) に詳しいが、概して発声時に声帯の緊張が伴う母音を指す。英語では creaky vowel とすることが多いが、研究者によっては捉え方が異なり、laryngealized vowel とすることもある。このほか発声方法の捉え方によっては pharyngealized vowel⁴ とすることもある。

緊喉母音の由来は多元的である。そのうちの代表的なモデルは以下である。チベット・ビルマ諸語の形態素は 1 音節であることが多い。(4) に示すように、祖語の段階においてその音節末子音 (C₂) が阻害音であるとき、その阻害音が脱落した代償として、緊喉母音を発生させることがあると考えられている (戴 1990 など)。

- (4) *C₁VC₂ > C₁V

(5) に Hayashi (2016) からラオス北部で話されるアカ・ブリ語のデータ⁵を示す。

⁴ 咽頭化と緊喉母音の関係の実態については Iwasa (2003) などの記述を参照されたい。

⁵ 各分節音の右隣にある数字は声調を示している。これは Chao (1930) に端を発する 5 段表記法である。発話者の音域の最も高い部分を 5、最も低い部分を 1 とする。そしてデフォルトの音長では 55, 11 など数字を 2 個並列して表記する。も

[アカ・ブリ語; Hayashi 2016: 81]

- (5) a. /mɛ21la55/ 'tongue'
b. /a21la21/ 'hand'

(5a) と (5b) は擬似的な最小対として捉える。(5a) の第 2 音節は普通母音なのに対し、(5b) は緊喉母音である。後者の母音の方が発声時において喉頭部分に若干の緊張がある。この後者の語根である *la* は比較研究の結果、チベット・ビルマ祖語の **g-lak* (Matisoff 2003: 319) に遡ることができると考えられる。アカ・ブリ語ではこの音節末の *-k* が脱落した代償として、緊喉母音 *-a* に発展したと分析される。

2.4. conjunct/disjunct: 接合/離接

この用語もチベット・ビルマ諸語から広まったものと考えられよう。Hale (1980) がネワール語の記述に採用したのを皮切りに、西側に位置するヒマラヤ地域を中心に、チベット系・チアン系の一部の下位語群の諸言語の述語において conjunct/disjunct の対立があることが報告されてきた。前者は「発話者」⁶ と何らかの関与のある事態について述べる場合、後者は「発話者」とは直接的な関わりのない事態について述べる場合に用いられる。

以下の例は、中国四川省で話されるダバ語の視点表示システムについて論じた白井 (2006) からの引用である。白井 (2006) によると、ダバ語メト方言にも conjunct/disjunct の対立があり、disjunct を表示する *-a* が付加されると、その事態に「発話者」の関与がないことを表すようである。

[ダバ語メト方言; 白井 2006: 153]

- (6) a. 'ηa=rə 'je -a-ɦpi
[1. 単]=の 家 [方向]-焼ける
「私の家が焼けた」
b. 'jenɿ -ηore=rə 'je -a-ɦpi-a
昨日 [3. 複]=の 家 [方向]-焼ける-[離接]
「昨日、彼らの家が焼けた」

本来は conjunct/disjunct のシステムは evidentiality のシステムと異なると考えられ、両者の区別についてはこれまでも様々に議論されてきたが (Aikhenvald 2004, Creissels 2008, etc.), Tournadre (2008) によるチベット系諸語における conjunct/disjunct の分析の無効性の議論を経て、現在は egophoricity の分析に移行してきている (Floyed et al., eds. 2018 など)。

し短い音であれば 5 や 2 などと 1 個のみで表記する。例えば、55 は高く平らな声調 (高平調) を、35 は真ん中から最高音域までピッチが上がる声調 (上昇調) を、21 は低いところからさらに下がる声調 (低降調) を、それぞれ示す。

⁶ この「発話者」とは通常の「話し手」という意味とは別個の定義が与えられる。白井 (2006: 80) では以下のように記述される。

「接合/離接 (conjunct/disjunct) システムにおいては、(i) 陳述文における話し手、(ii) 疑問文における聞き手、(iii) 伝達文 (引用型埋め込み文が伝聞の文末標識を伴う文) における本来の話し手の三者が同じ扱いを受ける。」

(白井 2006: 80)

ここでは、この 3 者がともに「発話者」として同類の扱いを受けることに注意されたい。

2.5. mirativity: 驚嘆性

mirativity 「驚嘆性」とはある事態を発話時になってはじめて気づいたことを表す文法範疇として考えられている。元来は Akatsuka (1985) の “surprise” に対する分析を発端とすると考えられるが、mirativity という概念が広く用いられる契機となったのは DeLancey (1997) の研究であろう。この概念は情報構造、とりわけ evidentiality (証拠性) の問題と関連しながらも、独自のカテゴリーとして提案されたものである。以下のネパールで話されるマガール語の例を見られたい。

[マガール語 Magar; Grunow-Hårsta 2007: 175] (グロス表記は筆者による改変)

- (7) a. *thapa i-laj le*
 Thapa DEM-LOC COP
 ‘Thapa is here.’ (non-mirative)
- b. *thapa i-laj le-o le*
 Thapa DEM-LOC COP-NMZ IMPF
 [I realize to my surprise that] ‘Thapa is here!’

(a) の例は通常の陳述文で、「タパがここにいる」ことを端的に表している。一方で、(b) は、発話者が発話時になって初めてタパの存在に気づいて、「タパはそこにいたのか!」という驚きを示している。このような驚嘆を示す文法範疇が特にチベット・ビルマ諸語の中でも西側、特にヒマラヤ地域を中心に分布していると考えられており、同地域の参照文法書でも独立に記述されていることが多い⁷。

2.6. 中国語の独特の用語

このほか中国の参照文法書では、多くの中国独自の用語法がチベット・ビルマ諸語の記述にも適用されている。これらはいずれも漢語文法の枠組みを援用しているのである。ここでは試みに「賓語」(賓語)「補語」(補語)の用語について略述しておこう。

「賓語」は多くは統語論の記述の箇所で、「主語-賓語-動詞」のように語順解説に用いられるところから、日本語の「目的語」に相当すると考えられることが多い。例えば 刘ほか (2005) では「動作行為が及ぶ事物である」と述べられている。しかし、実際には「目的語」よりも広い範囲を指示していると考えねばならない。例えば、同じ 刘ほか (2005) でも以下のような通常「目的語」に組み入れられないものまでが「賓語」に入れられている。

- (8) a. *míngtiān wǒmen qù chángchéng*
 明日 私たち 行く 長城
 「明日私たちは長城に行きます。」(刘ほか 2005: 461 [グロスと日本語訳は筆者])
- b. *wàibiān yǒu rén*
 外 ある 人

⁷ 「驚嘆性」については Hill (2012) が特段認めなくても良いのではないかという主張を展開している。DeLancey (1997) の議論はチベット語ラサ方言の助動詞 ‘dug を元にして驚嘆性を主張しているが、それは直接に事態を認識していることを示しているだけで、驚嘆性を表しているのではないとするのが Hill (2012) の議論である。DeLancey (2012) は Hill (2012) に対して「驚嘆性はそれでも十分にチベット語地域の言語記述に十分寄与してきた」と反論している。

「外に人がいます。」(刘ほか 2005: 462 [グロスと日本語訳は筆者])

c. *tāmen zhù de fángjiānhàomǎ shì 308.*

彼ら 泊まる LINK 部屋番号 COP 308

「彼らが泊まる部屋は 308 号室です。」(刘ほか 2005: 463 [グロスと日本語訳は筆者])

(8) の下線を引いた名詞句はいずれも漢語文法では「賓語」とされる。(8a) は着点, (8b) は存在, (8c) はコピュラ文の名詞句であり, いずれも一般に「目的語」と分析されることはない。この点で「賓語」の用語法には注意が必要である。

続いて、「補語」について若干の説明を行う。日本語で「補語」というと, 学校英文法で言うところの「先行名詞の説明語句」のように捉えられる。しかし, 漢語文法の「補語」はこれとは全く異なるものである。

英語で書かれた漢語の文法である Yip and Rimmington (2016: 177) でも「補語」(complements) の概念を認め, 以下のように説明している。

“Complements are expressions that indicate in some way the result of the action of the verb or describe the way the action is or has been carried out. In the Chinese mind, they articulate a consequence that is observable in terms of outcome or manner and as such must logically follow the verb.”

漢語では動詞を単独で用いることは稀で, むしろ動詞の動作行為あるいは事態が生じた場合に結果としてどうなったのか, あるいはどのような様子で行われたのかなどを示す語句が述語動詞の直後に来ることが極めて一般的である。この語句のことを「補語」と呼ぶ。

同じく Yip and Rimmington (2016) から例を挙げておこう。なお, いずれの例のグロスと日本語訳も筆者による。

(9) a. *tā xiū hǎo le wǒ de qìchē*

3SG 修理する 良い ASP 1SG LINK 車

「彼/彼女は私の車を修理してくれた。」

(Yip and Rimmington 2016: 178 [グロスと日本語訳は筆者])

b. *nèi ge gūniang dāban de hěn piàoliang*

あれ CLF 女の子 おめかしする LINK とても きれいだ

「あの女の子はとてもきれいにおめかししている。」

(Yip and Rimmington 2016: 183 [グロスと日本語訳は筆者])

(9a) では *xiū* 「修理する」の後ろに *hǎo* 「良い」が置かれている。漢語では一般に「修理が完了した状態」を表すのに, *xiū* だけを用いることはしない。ほぼ必ずその結果としてどうなったのかを表す「補語」が必要で, これが後続する *hǎo* なのである。

(9b) も (9a) と近似している。少し異なるのは述語動詞 *dāban* 「おめかしする」の後ろにリンカー(LINKer)として *de* が置かれている点であるが, ここでは深く立ち入らないこととする。さらに後続する *hěn piàoliang* 「とてもきれいだ」があることに注目してほしい。漢語では単純に「おめかしする」だけを生起させるのではなく, 一般に「どの程度おめかししたのか」「おめかししてどうなったのか」を必ずと言って良いほど生起させる必要がある。この「とてもきれいだ」の

部分が「補語」ということとなる。

このような「補語」の用語法は一般に印欧語文法や学校英文法で用いられるそれと大きく異なるが、中国国内の漢語で書かれたチベット・ビルマ諸語の文法記述で頻出するので大変注意が必要である⁸。

3. 中国研究者の参照文法書の特徴と問題

3.1. チノ語の参照文法書について

3.1.1. 3種の記述文法

中国研究者の参照文法における特徴とその問題について、筆者の研究するチノ語を例にとって述べてみたい。チノ語は中国雲南省の最南部である西双版纳タイ族自治州の景洪市で話され、話者数の正確な人口はわからないが、総人口 23000 人の約半数から 6 割程度であると考えられる。

チノ語は悠楽方言と補遠方言の 2 種に大別されるが、そのうち悠楽方言が話者人口の 9 割を占めるとされる（蓋 1986）。現時点で包括的な記述がなされているのは悠楽方言のみであるが、これまで筆者のものを含めて 3 種の記述文法が公開されている（蓋 1986, 林 2009, 蔣 2010）。

蓋 (1986) は中国少数民族語言簡誌叢書の 1 冊である。チノ語の悠楽方言を中心に、音韻・形態・統語の 3 領域を簡便にまとめ、最後に語彙集を付したものである。チノ族は 1979 年に「最後」の少数民族として認定された経緯もあり、チノ語の全体像についてチベット・ビルマ諸語研究者から大きな注目を集めた一冊である。世界で初めて示された非常に貴重な研究であるが、簡易文法であり、また中国の伝統的な記述方法であることから、チノ語独特の特徴についてはつかみにくいことは否めない。

林 (2009) は博士論文で提示したチノ語文法の部分だけを切り出して、一冊の本として編んだものである。筆者としてはチノ語の持つ特徴を可能な限り明解に提示したつもりではあるが、紙幅の都合もあり、詳細な否定的証拠の提示や語彙集の公開が行えていない。

蔣 (2010) も博士論文として提示された記述文法の公刊によるものである。データ量が豊富で、テキストも語彙集も前二者に比べて充実している。ただし、記述方法に問題点も多い。この点は中国で公刊された参照文法に共通する問題でもあるので、以下で若干の指摘を行う。

3.1.2. 記述に対する姿勢や方法の違い：蔣 (2010)

蔣 (2010) については林 (2013) で書評をあげており（林 2013 に対する反応は蔣 2013 を参照）、詳細はそれに譲るが、記述上の問題点として大きく次の 2 点を指摘することができる。

- A: 音韻論に対する考え方：先達の研究をどう評価するか
- B: 語類の決定：意味をどう取り入れるか

蔣 (2010) でももちろん音韻論の記述を行なっているが、それは彼の指導教授であった戴慶廈氏が 1980 年代に行った分析をそのまま引き継いだものとなっている。そのため、十分な実態分析が行えていると思われたい箇所がある⁹。また中国の研究者はしばしば音声と音素を厳密に区分

⁸ 例えば、3 節で紹介するチノ語を記述した蔣 (2010: 228) では「打ち勝つ」「吹き倒される」「食べ終わる」の「勝つ」「倒す」「終わる」なども「補語」とされる。

⁹ 例えば、蔣 (2010) では *r/* を [ɹ] と記述し、それが摩擦音であるとしている。筆者は現地でのこの発音を確認できなかった。たとえ、正しかったとしても、この記号は摩擦音ではなく、接近音を示す。

せずに、文法書に記載することがあり、この点は一般的に気をつけておくべきことである。

さらにこれも中国の研究者でよく見られるのだが、語類の認定が基本的に意味をベースにした「伝統的」なものとなる。よく問題となるのが「形容詞」である。林(2009)では形容詞は基本形において「名詞化接頭辞+動詞性語根」の形態を持ったもののみを「形容詞」と呼んでいる。一方、蔣(2010)などではそのような形態統語的な基準は示されず、おそらく意味的な基準によって語類の判定を行なっている。このような意味的な基準は同系統の言語の比較を行う際に便利なこともあるが、各言語の形態統語的な特徴を描きだすことがなく、また不整合な記述がよく起こる。

3.2. 中国研究者の参考文法の長所と問題点

最近、中国国内の言語研究者による参考文法が数多く出版されている。1980年代から中国少数民族語言叢書シリーズとして中国の公定民族を中心に簡易文法が出版されてはきた。その後1990年代後半ごろから、「新発見」(新たに発見された)言語のシリーズが出版され、現在に至っている。一方で、2000年代に入り、中央民族大学(北京)の出身者を中心に少数言語の記述文法を博士論文として提出するものが増加し、その成果が「参考文法」のシリーズとして出版されてきている。

これらは誠に喜ぶべきことである。特に「参考文法」のシリーズを始め、近年の少数言語のモノグラフはデータが豊富である。非文などの否定的証拠はあまりないものの、基本的な構造に関する具体例に富んでおり、また語彙集やテキストについても情報量が多いと言える。この点は言語保持の観点からも重要な貢献をしているといえよう。

他方、問題点もある。中国の多くの参考文法では同じ記述の枠組み(大方は漢語文法を少し改変した程度のもの)を採用している。これらの多くの文法書では目次が荒く¹⁰、索引もない。したがって、この言語を知らない研究者からすると、どこに何が書かれてあるのかがすぐにはわか

¹⁰ 下の例は蔣(2010)のチノ語悠楽方言の参考文法の目次である。ここではわかりやすく日本語に改めた。注目すべきは全体的に大まかな節の区切り方となっているのだが、第5章以降は節の区切りがなくなってしまっている点である。この手の文法書に慣れるのに時間が必要かと思われる。

第1章 イントロダクション

第2章 音

2.1 声母, 2.2 韻母, 2.3 声調, 2.4 音節構造, 2.5 サンディー

第3章 語形成と借用語

3.1 語形成, 3.2 四字熟語(「四音格詞」), 3.3 借用語

第4章 語類

4.1 名詞, 4.2 代名詞, 4.3 数詞, 4.4 類別詞, 4.5 動詞, 4.6 形容詞, 4.7 副詞, 4.8 助詞, 4.9 接続詞, 4.10 感嘆詞

第5章 文法要素

第6章 単文

第7章 複文

第8章 モダリティ

付録1 テキスト

付録2 呪文, などなど, ことわざと俗語, 歌詞

付録3 チノ語分類語彙集

あとがき

もちろん、細かく目次の記載を行っている参考文法書もある。アチャン語梁河方言を記述した時(2009)や雲南省墨江県のカドゥオ語を記述した趙・朱(2011)はより詳細な目次となっており、参照しやすくなっている。

らないのである。

確かに同じ枠組みで記述されていることから、一つの参考文法書に慣れれば、同系統の言語の他の文法書も「引きやすい」利点もある。しかし、各言語の特徴が見えづらい点がある。例えば、前述した形容詞の例のように、語類の認定は伝統的に意味を基準として行っており、言語によっては不必要な設定や不明確な基準が散見される。具体的な問題についてはすでに 3.1.2 で述べた通りであるが、一般的な現象であると考えられる。

4. 中国周辺領域の良質な TB 参照文法書

中国周辺領域におけるチベット・ビルマ諸語の参照文法書と呼べるものは 1980 年ごろまでは Jin (1949) や高 (1958) のような古典的な枠組みに則ったものはいくつか見られる程度であった。その中でも Matisoff (1973a) は金字塔的作品と呼べるもので、長期間のフィールドワークから紡ぎ出された詳細なラフ語 [タイ北部] の文法記述は今でも目を見張るものがある。その後、中国においては 1950 年代の現地調査で得られたデータを元にした「中国少数民族語言簡誌叢書」のシリーズが編まれ、中国国内外の研究者がここに示されたデータを頻繁に引用するようになった。ただ、これはあくまで「簡易文法」であり、その言語の概要を漢語文法の枠組みで整理したものに過ぎないものが多く、詳細が不明な部分が少なくない。

中国周辺領域のチベット・ビルマ諸語における参照文法書は、その分析の深さや記述の合理性の観点からやはり日本発あるいは欧米系の研究者のものに良質な研究が見られる。例えば、加藤 (2004)、藤原 (2008)、Kurabe (2016) などは豊富なデータとともに、合理的な記述が提示されている。この点は欧米の研究でも同様で、Bartee (2007)、Lidz (2010)、Hyslop (2017) など最近では記述文法の公開が盛んに行われている。特にヒマラヤ地域のもものは Brill のシリーズが充実しており、高価ながらも良質な文法を読むことが可能となっている。

中国の研究者による文法記述も精緻化が図られるようになってきている。上述の通り、1990 年代には「新発見」叢書シリーズが発刊され、現在に至っている。また博士論文の公刊も増えてきている（「参考文法」シリーズ）。加えて、欧米諸国（あるいは香港など）で博士課程を経験する若手研究者も続々と現れ、Huang (2004)、Yu (2007)、Ding (2014)、Zhang (2016) などはその先鞭となる。中でも Huang (2004) や Yu (2007) は母語であるチアン語・リス語の記述であり、従来の母語話者による記述よりも更に一般の言語研究者に理解されやすいものとなっている。

5. おわりに

世界各地で少数言語の消滅の危機は認知されているが、中国国内においても危機言語（「瀕危語言」）への関心が高まりつつある。危機言語の研究プロジェクトへの補助金も多く、博士論文として参照文法を執筆し、優れたものは出版されてきている。また社会言語学的な言語の使用状況についても、詳細な報告（戴主编 2007 など）が続々と出版されている。

ただ、特に言語の使用状況に関する研究では、個人名はおろか、その性別・年齢・学歴をはじめとした個人情報や言語能力が記載されていることがある。これらの研究は、個人情報保護に厳しい昨今の国際的な水準からすると問題視されるだろう。記述言語学および言語類型論の観点から本地域の言語研究の成果を利用する場合、上記のことに留意しながら、分析・整理を進めたい

ところである。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016-2017年度）の成果の一部である。

参考文献

[DL] はダウンロード可能な文献を示す。

< 日本語文献 >

- 海老原志穂 2008 「青海省共和県のチベット語アムド方言」東京大学博士論文。
 —— 2019 『アムド・チベット語文法』東京：ひつじ書房。
 加藤昌彦 2004 「ポー・カレン語文法」東京大学博士論文。[DL]
 鈴木博之 2011 「チベット・ビルマ系言語から見た「緊喉母音」の多義性とその実態」『言語研究』140: 147-158。[DL]
 白井聡子 2006 「ダバ語における視点表示システムの研究」京都大学博士論文。
 ダムディンジョマ 2017 「チベット語アムド農民方言—音韻体系と文法の基本構造—」神戸市外国語大学博士論文。
 林範彦 2009 『チノ語文法（悠楽方言）の記述研究』神戸：神戸市外国語大学外国語研究所。[DL]
 藤原敬介 2008 「チャック語の記述言語学的研究」京都大学博士論文。

< 中国語文献 >

- 戴庆厦 (Dai Qingxia) 1990 〈藏缅语族松紧元音研究〉戴庆厦《藏缅语族语言研究》, 1-31, 昆明: 云南民族出版社。
 —— (主编) 2007 《基诺族语言使用现状及演变》北京: 商务印书馆。
 盖兴之 (Gai Xingzhi) 1986 《基诺语简志》北京: 民族出版社。
 高華年 (Gao Huanian) 1958 《彝語語法研究》北京: 科学出版社。
 蒋光友 (Jiang Guangyou) 2010 《基诺语参考语法》北京: 中国社会科学出版社。
 —— 2013 〈书评回应: 答林范彦先生〉《语言学论丛》第 47 辑, 365-367, 北京: 商务印书馆。
 林范彦 (Hayashi, Norihiko) 2013 〈书评: 《基诺语参考语法》〉(蒋光友著, 中国社会科学出版社, 2010)《语言学论丛》第 47 辑: 357-363, 北京: 商务印书馆。
 刘月华 (Liu Yuehua) 等 2005 《实用现代汉语语法》(增订本) 北京: 商务印书馆。
 时建 (Shi Jian) 2009 《梁河阿昌语参考语法》北京: 中国社会科学出版社。
 赵敏 (Zhao Min) · 朱茂云 (Zhu Maoyun) 2011 《墨江哈尼族卡多话参考语法》北京: 中国社会科学出版社。

< 欧文献 >

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
 Akatsuka, Noriko. 1985. "Conditionals and the Epistemic Scale." *Language* 61: 625-639.
 Barteel, Ellen. 2007. "A Grammar of Dongwang Tibetan." Ph.D. dissertation to UC Berkeley.
 Benedict, Paul K. 1972. "The Sino-Tibetan Tonal System." *Langues et Techniques, Nature et Société* Vol. I (Jacques Barrau et al., eds.), 25-34, Paris: Klincksieck.
 Chao, Yuen-Ren. 1930. 'ə sistim əv "toun-letəz"' [A system of "tone-letters"]. *Le Maître Phonétique* 30: 24-27.

- Creissels, Denis. 2008. 'Remarks on So-Called "conjunct/disjunct" systems.' Paper presented at the conference Syntax of the World's Languages III, Free University of Berlin, September 25–28.
<http://www.deniscreissels.fr/public/Creissels-conj.disj.pdf>
- DeLancey, Scott. 1997. "Mirativity: The Grammatical Marking of Unexpected Information." *Linguistic Typology* 1: 33–52.
- . 2012. "Still Mirative after All These Years." *Linguistics Typology* 16.3: 529–564.
- Ding, Picus Sizhi. 2014. *A Grammar of Prinmi: Based on the Central Dialect of Northwest Yunnan, China*. Leiden: Brill.
- van Driem, George. 2001. *Languages of the Himalayas* (2 volumes). Leiden: Brill.
- Dryer, Matthew. 2008. "Word Order in Tibeto-Burman Languages." *Linguistics of Tibeto-Burman Area* 31.1: 1–83. [DL]
- Floyed, Simeon, Elisabeth Norcliffe, and Lila San Roque, eds. 2018. *Egophoricity*. Amsterdam: John Benjamins.
- Glover, Warren. 1971. "Register in Tibeto-Burman Languages of Nepal: a Comparison with Mon-Khmer." *Papers in Southeast Asian Linguistics* 2 (W. Glover, M. Hari and E. Hope, eds.) (Pacific Linguistics A-29), 1–22, Canberra: Pacific Linguistics. [DL]
- Grunow-Hårsta, Karen. 2007. "Evidentiality and Mirativity in Magar." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 30.2: 151–194.
- Hale, Austin. 1980. "Person Markers: Finite Conjunct and Disjunct Forms in Newari." *Papers in Southeast Asian Linguistics* 7 (R. Trail, ed.) (Pacific Linguistics A-53), 95–106, Canberra: Pacific Linguistics. [DL]
- Haudricourt, André G. 1954. "De l'origine des tons en vietnamien." *Journal Asiatique* t. 242: 69–82.
- Hayashi, Norihiko. 2016. "A Phonological Sketch of Akha Buli —A Lolo-Burmese Language of Muang Sing, Laos—." *Research in Asian Languages* 10: 67–98, Kobe: Research Institute of Foreign Studies, Kobe City University of Foreign Studies.
- Hill, Nathan. 2012. "'Mirativity' Does Not Exist: *hdug* in 'Lhasa' Tibetan and Other Suspects." *Linguistic Typology* 16.3: 389–433.
- Huang, Chenglong. 2004. "A Reference Grammar of the Puxi Variety of Qiang." Ph.D. dissertation to City University of Hongkong.
- Hyslop, Gwendolyn. 2009. "Kurtöp Tone: A Tonogenetic Case Study." *Lingua* 119: 827–845.
- . 2017. *A Grammar of Kurtöp*. Leiden: Brill.
- Iwasa, Kazue. 2003. "Axi and Azha—Descriptive, Comparative, and Sociolinguistic Analyses of Two Lolo Dialects of China." Ph.D. dissertation to Kobe City University of Foreign Studies.
- Jin, Peng. 1949. "Etude sur le Jyarung." *Han Hiue* 3: 211–310. (Translated into Chinese as 《嘉戎语(杂谷脑方言)研究》 in 1988, and reprinted into 《金鹏民族研究文集》北京: 民族出版社, 1–95.)
- Kurabe, Keita. 2016. "A Grammar of Jinghpaw, from Northern Burma." Ph.D. dissertation to Kyoto University.
- Lidz, Liberty. 2010. "A Descriptive Grammar of Yongning Na." Ph.D. dissertation to University of Texas, Austin. [DL]
- Matisoff, James A. 1973a. *The Grammar of Lahu*. (University of California Publications in Linguistics, No. 75.) Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- . 1973b. Tonogenesis in Southeast Asia. *Consonant Types and Tone* (Larry M. Hyman, ed.) (Southern California Occasional Papers in Linguistics, No. 1), 71–95, Los Angeles: UCLA. [DL]
- . 1991. "Sino-Tibetan Linguistics: Present State and Future Prospects." *Annual Review of Anthropology* 20: 469–504. [DL]
- . 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley: University of California Press. [DL]
- Okell, John. 1969. *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. Vol. I. Oxford: Oxford University Press.
- Tournadre, Nicolas. 2008. "Arguments against the Concept of 'Conjunct'/'Disjunct' in Tibetan." *Chomolangma, Demawend und Kasbek: Festschrift für Roland Bielmeier zu seinem 65. Geburtstag* (B. Huber, M. Volkart and P. Wildmer, eds.), 281–308, Halle: IITBS.
- Yip, Po-Ching and Don Rimmington. 2016. *Chinese: a Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- Yu, Defen. 2007. *Aspects of Lisu Phonology and Grammar, a Language of Southeast Asia*. (Pacific Linguistics 588.) Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- Zhang, Sihong. 2016. *A Reference Grammar of Ersu: a Tibeto-Burman Language of China*. (LINCOM Studies in Asian Linguistics 85.) München: LINCOM.

インドおよび周辺地域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題

澤田英夫

Issues in the Reference Grammars of Tibeto-Burman Languages in India and Its Neighboring Area

SAWADA, Hideo

Keywords: Tibeto-Burman, word classes, adjective, clitic, case-marking

キーワード: チベット・ビルマ諸語, 語類, 形容詞, 接語, 格標示

1. はじめに
2. 「インド圏」のTB諸語
3. 「インド圏」のTB諸語に見られる特徴的な現象
4. 文法書のジャンル
5. 記述上重要な概念・言語現象
6. おわりに

1. はじめに

本稿は、AA研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」研究会において、メンバーである林範彦神戸市外国語大学教授と分担して行ったチベット・ビルマ(TB)系言語の参照文法書についての発表のうち、筆者が担当したインドおよび周辺領域についての発表内容に大幅に修正・加筆したものである。

2. 「インド圏」のTB諸語

本論集の林論文では、TB諸語の分布について、「本稿では試みにチベット・ヒマラヤ地域を含む部分をチベット・ビルマ諸語の西側に、中国雲南省・四川省・貴州省やビルマ中部・東部、およびタイ・ラオス・ベトナム北部を含む地域をチベット・ビルマ諸語の東側に位置するとする。」

澤田英夫. 2022. 「インドおよび周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 121-147. DOI: <https://doi.org/10.15026/116963>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

と述べている (p. 108)。林論文の図 1 で、破線の直線によって区切られた西側の地域、つまり中国青海省・チベット・ブータン・ネパール・カシミール・インド北部・北東部・バングラデシュ東部・ミャンマー西部などの地域で話される TB 系言語を、本稿では「インド圏」¹の TB 系言語と呼ぶことにする。

言語学関連の書誌学データベース Glottolog (Hammarström, Forkel, Haspelmath and Bank, eds. 2021) でシナ・チベット語族 Sino-Tibetan に分類される言語群の下位分類のうち、「インド圏」で話されている言語を含む TB 諸語の語群としては、チベット語群 Bodic/Tibetic, ブラフマプトラ語群 Brahmaputran, クキ・チン・ナガ語群 Kuki-Chin-Naga, ヒマラヤ語群 Himalayish, タニ語群 Macro-Tani, ディマール諸語 Dhimalish, コ・ブワ諸語 Kho-Bwa, ミジ諸語 Miji, クマン・マヨル諸語 Kman-Mayor, ディガル諸語 Digarish が挙げられる。

3. 「インド圏」の TB 諸語に見られる特徴的な現象

林論文の §1.2 では、TB 諸語全体からみた類型論的特徴を概述している。本稿では、「インド圏」の TB 諸語により顕著にみられる 2 つの特徴的な現象、動詞の人称/数一致と、文法的に条件づけられた動詞語幹の交替について記す。

3.1. 動詞の人称/数一致 Person/number agreement on verbs

TB 系言語全体でみると、動詞がその項の人称/数との一致を示すという現象を持つ言語は少数派に属すると言えるだろう。「インド圏」の TB 諸語のうちでこの現象を示す言語の属する語群としては、チベット語群、クキ・チン・ナガ語群、ヒマラヤ語群が挙げられる²。

3.1.1. 主語との一致を示す言語

クキ・チン・ナガ語群に属する Mizo 語や Tedim Chin 語, Thadou 語などでは、主語との一致を示す要素が動詞に前接される。Thadou 語の例を挙げる。(表 1, (1)-(3))

表1 (Thadou) Verbal Proclitic (Haokip 2014: 156, Table 4.13)

| THADOU | GLOSS |
|------------|------------------------------------|
| <i>ka=</i> | ‘first person exclusive proclitic’ |
| <i>i=</i> | ‘first person inclusive proclitic’ |
| <i>na=</i> | ‘second person proclitic’ |
| <i>a=</i> | ‘third person proclitic’ |

¹ 「インド圏」という呼称は、James Matisoff が TB 系言語の多様性を説明するために提案した 2 つの領域のうちの一つ Indosphere を訳したものである。もう一つの領域を Matisoff は Sinosphere と名付ける。

It is convenient to refer to the Chinese and Indian spheres of cultural influence as the “Sinosphere” and the “Indosphere”.
(Matisoff 2003: 6)

² この他に、ブラフマプトラ語群に属する Jinghpaw 語が、かつては主語/目的語の人称/数を標示する動詞文末助詞の体系を持っていたことが、ジンポー語聖書のテキストから明らかとなっている。(参考: Kurabe 2016: Ch.10 p.396-) ちなみに、「インド圏」外の TB 系言語で動詞が人称/数一致を示す言語としては、Qiang, Gyarong, Durong, Rawang および死語である西夏語 Tangut などが挙げられる。

- (1) (*kei=ĩn*) *hǎi ká=nè=è* (3) (*ámà=ĩn*) *hǎi á=ně=è*
 1=ERG mango **1CLT=cut=DECL** 3=ERG mango **3CLT=cut=DECL**
 ‘I am eating a mango.’ ‘He/she is eating a mango.’
 (#CLiTiC, DECLarative)
- (2) (*náj=ĩn*) *hǎi ná=nè=è*
 2=ERG mango **2CLT=cut=DECL** Thadou (Haokip 2014: 156)
 ‘You are eating a mango.’

一方、Dhimal 語や、チベット語群チベット・キナウル系に属する Kinnauri 語・Darma 語では、主語との一致を示す要素が動詞に後接される。Dhimal 語の一致要素の例を示す。(表 2, (4)–(6))

表2 〈Dhimal〉 Simple Agreement Paradigm (King 2014: 119, Diagram 7)

| | perfective | past | imperfective | future | inceptive |
|-----------------|-------------------|----------------|-------------------|-----------------|--------------------|
| 1s | <i>-hoi-ga</i> | <i>-gha</i> | <i>-kha</i> | <i>-ā/aŋ-ka</i> | <i>-khoi-ka</i> |
| 1d | <i>-hoi-niŋ</i> | <i>-nhiŋ</i> | <i>-khe-niŋ</i> | <i>-a-niŋ</i> | <i>-khoi-niŋ</i> |
| 1p | <i>-nha-hoi</i> | <i>-nha-hi</i> | <i>-nha-khe</i> | <i>-aŋ</i> | <i>-nha-khoi</i> |
| 2s | <i>-hoi-na</i> | <i>-nha</i> | <i>-khe-na</i> | <i>-a-na</i> | <i>-khoi-na</i> |
| 2d | <i>-hoi-niŋ</i> | <i>-nhiŋ</i> | <i>-khe-niŋ</i> | <i>-a-niŋ</i> | <i>-khoi-niŋ</i> |
| 2p | <i>-su-hoi-na</i> | <i>-su-nha</i> | <i>-su-khe-na</i> | <i>-su-a-na</i> | <i>-su-khoi-na</i> |
| 3 | <i>-hoi</i> | <i>-hi</i> | <i>-khe</i> | <i>-aŋ</i> | <i>-khoi</i> |
| 3c ³ | <i>-su-hoi</i> | <i>-su-hi</i> | <i>-su-khe</i> | <i>-su-aŋ</i> | <i>-su-khoi</i> |

- (4) *hane-khoi-ka.* (6) *cuŋ-nha-hoi.*
 go-INC-1s (#INceptive) be.cold-1p-PERF (#PERfective)
 I’m leaving. (King 2014: 120, ex.(298)) We are cold. (ibid.: 125, ex.(326))
- (5) *lo-hi.*
 come-P (#Past)
 [She] came. (ibid.: 122, ex.(311))

3.1.2. 主語・目的語との一致を示すもの

クキ・チン・ナガ語群に属する Daai 語の動詞の人称・数一致は、前節で見た同じ語群の言語のそれと 2 つの点で異なる。1) 主語だけでなく目的語との一致も示す。2) 一致要素が動詞に前接されず、独立語として生起する。(表 3, 4, (7)–(8))

³ 3 人称には数の区別がないが、3 人称の集団・集合による動作であることを強調する形態素 *-su* がある (King 2014: 127)。

表3 (Daai) Subject Agreement Paradigm (So-Hartmann 2009: 233, Table 9.1)

| | | 1 st Person | 2 nd Person | 3 rd Person |
|--------------------|-----------|-------------------------|------------------------|------------------------|
| Singular | | <i>kah</i> ⁴ | <i>nah</i> | <i>ah</i> |
| Dual/Plural | exclusive | <i>kah-nih</i> | <i>nah-nih</i> | <i>ah-nih</i> |
| | inclusive | <i>nih</i> | | |

表4 (Daai) Object Agreement Paradigm (So-Hartmann 2009: 239, Table 9.3)

| | | 1 st Person | 2 nd Person | 3 rd Person |
|--------------------|--|------------------------|---------------------------|------------------------|
| Singular | | <i>nah</i> | <i>ni:ng</i> ⁵ | – |
| Dual/Plural | | <i>jah</i> | <i>ni:ng-jah</i> | <i>jah</i> |

- (7) *Na:ng je=noh va mei:=üng nah nah shi=kti*⁶
 2s hare=ERG EMPH fire=INSTR **S.AGR:2S** **O.AGR:1S** burn=NON.FUT

‘You, the hare, you burned me with fire.’ (So-Hartmann 2009: 239)

- (8) *Ling=noh ah ui: jah ah vok sun akdo=a ah jah mbei*
 Ling=ERG POSS:3S dog CONJ:and POSS:3S pig DEM well=CF **S.AGR:3S** **O.AGR:3DU** feed.
 (#CONJunction, Classifier)

‘Ling fed his dog and his pig well.’ (So-Hartmann 2009: 240)

より複雑な一致の体系を持つことで知られるのが、Limbu 語、Hayu 語、Bantawa 語、Yakkha 語などヒマラヤ語群キランティ系に属する言語である。このグループでは、動詞の接頭辞・接尾辞によって、主語/目的語の人称/数、極性、時制/相、法などを標示する。このグループに共通する特徴は次の2つである。1) 人称/数を標示する接頭辞・接尾辞が複数個の-slot に生起する。2) 形式とそれが表す人称/数範疇の対応関係が1対1でない。

キランティ系言語の例として Yakkha 語を挙げる。Schackow (2015) によると、Yakkha 語の動詞は1つの接頭辞-slot と14の接尾辞-slot を持ち、このうち人称/数一致の要素は接頭辞-slot と9つの接尾辞-slot (slot 1, 3, 6, 13, 14 以外) に現れる。図1は接尾辞-slot に現れる人称/数一致要素を示したものである。この他に語幹の初頭子音と調音位置において同化する鼻音接頭辞 *N-* (3PL) がある。

⁴ So-Hartmann (2009) は Daai 語の例を正書法を用いて挙げている。母音表記の後の *-h* は */?* を表す (So-Hartmann 2009: 50)。

⁵ 母音表記の後の *:* は声調の1つである High tone を表す (So-Hartmann 2009: 49)。もう1つの声調である Low tone は表記されない。

⁶ *ü* は *u/w* を表す。また *sh* は *s* の有気音を表す (So-Hartmann 2009: 50)。

図1 (Yakkha) Templatic representation of indicative person/number suffixes (Schackow 2015: 219, Figure 8.1)

| | | | | | |
|-----------------------|-----------------------------------|---|--|-----------------------|-----------------------|
| 2 | 4 | 5 | 7 | 8 | 9 |
| - <i>nen</i> 1>2 | - <i>N</i> (copy) ⁷ | - <i>ci</i> ~ - <i>cin</i> DUAL <i>i</i> ~ - <i>in</i> 1/2PL | - <i>u</i> 3.P | - <i>N</i> (copy) | - <i>ci</i> 3NSG.P |
| 10 | 11 | 12 | (15) | (16) | |
| - <i>m</i> 1/2PL>3 | - <i>ŋ(a)</i> EXCL | - <i>ka</i> 2 | (= <i>na</i>) NMLZ.SG (= <i>ha</i>) NMLZ.NSG/ NMLZ.NC ⁸ | (= <i>ci</i>) NSG | |

表5 (Yakkha) Indicative person/number marking (intransitive and transitive) (Schackow 2015: 218, Table 8.11)

| A>P | TRANSITIVE | | | | | | 3SG | 3NSG | INTRANSITIVE |
|----------|------------------------------|----------------------------|--|-------------------------------|-----|------------------------------|---|--|----------------------------------|
| | 1SG | 1NSG | 2SG | 2DU | 2PL | | | | |
| 1SG | | | - <i>nen</i> (= <i>na</i>) | | | | - <i>u-ŋ</i> (= <i>na</i>) | - <i>u-ŋ-ci-ŋ</i> (= <i>ha</i>) | - <i>ŋ</i> (= <i>na</i>) |
| 1DU.EXCL | | | - <i>nen-cin</i> (= <i>ha</i>) | | | | - <i>ŋ-c-u-ŋ</i> (= <i>na</i>) | - <i>ŋ-c-u-ŋ-ci-ŋ</i> (= <i>ha</i>) | - <i>ŋ-ci-ŋ</i> (= <i>ha</i>) |
| 1PL.EXCL | | | - <i>nen-in</i> (= <i>ha</i>) | | | | - <i>u-m-ŋa</i> (= <i>na</i>) | - <i>u-m-ci-m-ŋ</i> (= <i>ha</i>) | - <i>i-ŋ</i> (= <i>ha</i>) |
| 1DU.INCL | | | | | | | - <i>c-u</i> (= <i>na</i>) | - <i>c-u-ci</i> (= <i>ha</i>) | - <i>ci</i> (= <i>ha</i>) |
| 1PL.INCL | | | | | | | - <i>u-m</i> (= <i>ha</i>) | - <i>u-m-ci-m</i> (= <i>ha</i>) | - <i>i</i> (= <i>ha</i>) |
| 2SG | - <i>ŋ-ka</i> (= <i>na</i>) | | | | | | - <i>u-ka</i> (= <i>na</i>) | - <i>u-ci-ka</i> (= <i>ha</i>) | - <i>ka</i> (= <i>na</i>) |
| 2DU | | | | | | | - <i>c-u-ka</i> (= <i>na</i>) | - <i>c-u-ci-ka</i> (= <i>ha</i>) | - <i>ci-ka</i> (= <i>ha</i>) |
| 2PL | | - <i>ka</i> (= <i>ha</i>) | | | | | - <i>u-m-ka</i> (= <i>na</i>) | - <i>u-m-ci-m-ka</i> (= <i>ha</i>) | - <i>i-ka</i> (= <i>ha</i>) |
| 3SG | - <i>ŋ</i> (= <i>na</i>) | | - <i>ka</i> (= <i>na</i>) | | | | - <i>u</i> (= <i>na</i>) | - <i>u-ci</i> (= <i>ha</i>) | (= <i>na</i>) |
| 3DU | | | | - <i>ci-ka</i> (= <i>ha</i>) | | - <i>i-ka</i> (= <i>ha</i>) | - <i>c-u</i> (= <i>na</i>) | - <i>c-u-ci</i> (= <i>ha</i>) | - <i>ci</i> (= <i>ha</i>) |
| 3PL | | (= <i>ha</i>) | - <i>N</i> ...- <i>ka</i> (= <i>na</i>) | | | | - <i>N</i> ...- <i>u</i> (= <i>na</i>) | - <i>N</i> ...- <i>u-ci</i> (= <i>ha</i>) | - <i>N</i> ... (= <i>ha=ci</i>) |

それぞれの人称/数一致要素が特定の人称/数/文法関係を表すことはむしろ少ない。例えば、スロット 2 の *-nen* (1>2) は主語が 1 人称で目的語が 2 人称であることを表し、スロット 10 の *-m* (1/2PL>3) は主語が 1/2 人称複数で目的語が 3 人称であることを表す。また、スロット 9 の *-ci* (3NSG.P) は目的語が 3 人称非単数であることを、スロット 12 の *-ka* (2) は主語・目的語のいずれかが 2 人称であることを、スロット 7 の *-cin* ~ *-ci* (DUAL) は主語・目的語のいずれかが双数であることを表す。これらが組み合わさって主語・目的語の人称/数を標示する。表 5 は、直説法の人称/数標示のパラダイムを示したものである。

具体的な用例をもとに、人称/数解釈のしかたの一例を示す。

- (9) a. *piʔ-nen=na*.
 give[PST]-1>2=NMLZ.SG
 ‘I gave it to you.’
- b. *piʔ-nen-in=ha*.
 give[PST]-1>2-PL=NMLZ.NSG⁹
 ‘I gave it to you (plural).’ OR
 ‘We (dual) gave it to you (plural).’ OR
 ‘We (plural) gave it to you (singular/dual/plural).’ (Schackow 2015: 221)

(9b) には、主語が 1 人称で目的語が 2 人称であることを表す *-nen* と、主語か目的語のいずれかが 1/2 人称複数であることを表す *-in* が現れる。この場合、1 人称主語と 2 人称目的語のいずれもが複数である可能性があり、もう一方の数は単数/双数/複数のいずれでもあり得るため、主語・目的語の数の解釈に幅が生じる。一方、(9a) では *-nen* のみが現れる。主語・目的語のいずれかが 1/2 人称複数を表す *-in* も、またいずれかが双数であることを表す *-cin* も共起しないことから、いずれも単数である読みが選択される。

上の例は、接辞の存在と解釈との間にグロスに表しきれないような依存関係が存在することを示している。個々の接辞が担う人称/数情報の合計と、実際の人称/数パラダイムの間をつなぐためには、このような接辞の存在と解釈の間の依存関係、また接辞の生起に関する接辞相互の依存関係（例えば、スロット 9 の *-ci* (3NSG.P) とスロット 10 の *-m* (1/2PL>3) は、いずれもスロット 7 の *-u* (3.P) が生起する場合のみ生起する）が与えられる必要があり、このことがこの言語の人称/数標示体系を複雑なものにしている。

⁷ キランティ系言語には、鼻音接尾辞あるいは鼻音を含む接尾辞が複数回生起する *affix copying* あるいは *nasal copying* と呼ばれる現象が見られる。このコピーは意味に影響を与えない (Schackow 2015: 83)。Yakha 語の場合、スロット 10 の *-m* があればそれが、なければスロット 11 の *-ŋ(a)* の鼻音が、スロット 9 に *-ci* が現れる場合スロット 8 に、スロット 5 に *-cin* ~ *-ci* が現れる場合スロット 4 に、それぞれコピーされる。Schackow はこの操作を、閉音節を作り出すための音韻的修正であろうと述べている (ibid.: 84)。

⁸ スロット 15 には随意的要素として名詞化子が現れ得る。動詞の S または P 項が単数の場合 *=na* が、双数・複数の場合 *=ha* が、それぞれ現れるため、広い意味での一致要素とみなすことができる (Schackow 2015: 226)。なお、「名詞化子」という術語については注 22 を参照。

⁹ 原典にグロス 1>2 が抜けていたので補った。また、グロス中の PL は図 1 の 1/2PL に当たる。

3.2. 文法的に条件づけられた動詞語幹の交替

TB 系言語に見られる動詞語幹の交替¹⁰には、キランティ系言語などに見られる音韻的に条件づけられたものの他に、文法的に条件づけられたものも存在する。よく知られているのは、古典チベット語の時制・法による語幹交替である。DeLancey (2003) からの例を表 6 に挙げる。

表6 古典チベット語の他動詞の時制・法による語幹交替 (DeLancey 2003: 210-211 の記述に基づく)

| 英訳 | 現在 | 過去 | 未来 | 命令 |
|--------|---------------|----------------|---------------|-----------------------------|
| finish | <i>sgrub</i> | <i>bsgrubs</i> | <i>bsgrub</i> | <i>sgrubs</i> |
| see | <i>lta</i> | <i>bltas</i> | <i>blta</i> | <i>ltos</i> |
| pursue | <i>snyegs</i> | <i>bsnyegs</i> | <i>bsnyeg</i> | <i>snyeg</i> |
| do | <i>byed</i> | <i>byas</i> | <i>bya</i> | <i>byos</i> (以上 p.210 より) |
| hit | <i>'debs</i> | <i>btab</i> | <i>gtab</i> | <i>thob</i> |
| make | <i>'chos</i> | <i>bzos</i> | <i>bzo</i> | <i>chos</i> |
| mince | <i>gtsab</i> | <i>btsabs</i> | <i>btsab</i> | <i>gtsabs</i> (以上 p.211 より) |

これとは全く異なる要因によるものとして、クキ・チン・ナガ語群の Asho, Sizang, Tiddim, Falam, Mizo, Daai, Mindat Cho, Hakha Lai, Thadou, Hyaw などの言語に広くみられる (VanBik 2009: 10)、主として生起する統語的環境による語幹交替がある。

表 7 は、So-Hartmann (2009) が示す、Daai 語の語幹 A (他のクキ・チン諸語の語幹 II に対応) および B (同じく語幹 I に対応) がどのような環境で現れるかの選択基準である。

表7 (Daai) Verb Stem Selection Pattern (So-Hartmann 2009: 106, Table 4.5)

| General pattern | Stem | | Alternate | Stem | |
|---------------------------|-------------|----------|--|-------------|----------|
| Clause Type | A | B | Condition | A | B |
| indicative (intransitive) | | X | causatives or applicatives | X | |
| indicative (transitive) | X | | focus shift | | X |
| | | | negative | | X |
| interrogative | | X | narrow focus (applicatives) | X | |
| imperative | | X | (applicatives) | X | |
| subjunctive | | X | | | |
| non-final clause chain | | X | (applicatives) | X | |
| non-final adverbial | X | | adverbials with <i>kkhai</i> or <i>lüphi</i> | | X |
| nominalization | X | | noun-verb compounding | | X |

¹⁰ 語根交替として扱う研究もある。

表の左側が節のタイプごとにみた一般的なパターンを、右側がその一般的なパターンに従わない場合の条件を表す。例えば、平叙文では主動詞が自動詞の場合語幹 B が、他動詞の場合語幹 A がデフォルトで用いられる。しかし、焦点標識 *ta* の後続や疑問詞疑問文の答えになることによって、文中のある要素が焦点となることが明らかな場合、他動詞文でも語幹 B が用いられる (So-Hartmann 2009: 99)。また、否定の場合にも語幹 B が用いられる (ibid.: 100)。疑問文・命令文の場合には主動詞が他動詞であっても語幹 B が用いられる (ibid.: 101)。ところが、動詞が迂言的な使役構文・適用構文で用いられる場合、動詞の自他・文のタイプ・極性のいかんにかかわらず語幹 A が用いられる (ibid.: 102)。表 7 の記述だけでは判断に迷うケースもありそうだが、ともかく語幹の選択にかかわる条件が簡単に一般化できるものでないことだけは間違いない。

So-Hartmann は、2 つの語幹の音韻的關係を 4 つのグループに分類した。表 8 は各グループから例を抽出したものである。

表 8 Daai 語の動詞語幹 A/B の音韻的關係のパターン (So-Hartmann 2009: 72-75 より)

| | Stem A | | Stem B | Gloss | |
|--------|---------------|---|-----------------|--------------|--------------|
| グループ 1 | <i>pee:t</i> | → | <i>pe</i> | 'give' | |
| | <i>oo:k</i> | → | <i>o</i> | 'drink' | |
| | <i>kyoot</i> | → | <i>kyo</i> | 'rot' | |
| | <i>tuk</i> | → | <i>tu</i> | 'stab' | (以上 p.72 より) |
| グループ 2 | <i>hneh</i> | ← | <i>hne:</i> | 'touch' | |
| | <i>kboh</i> | ← | <i>kboo:p</i> | 'clap hands' | |
| | <i>kyah</i> | ← | <i>kyap</i> | 'touch' | |
| | <i>kbeih</i> | ← | <i>kbee:</i> | 'slap' | (以上 p.73 より) |
| | <i>phyoh</i> | ← | <i>phyou:</i> | 'weed field' | |
| グループ 3 | <i>kphyan</i> | ← | <i>kphya:ng</i> | 'spread out' | (以上 p.74 より) |
| グループ 4 | <i>hnim</i> | ← | <i>hni:m</i> | 'kill' | |
| | <i>kheei</i> | ← | <i>khee:</i> | 'hatch' | (以上 p.75 より) |

グループ 1 は、語幹 A を基本形とし、1) 末子音を削除 2) 母音を短母音に 3) 声調を低声調に、という操作を加えて語幹 B を派生するパターンである。

グループ 2 は、語幹 B を基本形とし、1) 末子音を /-ɔ/ に変更するか、 /-ɔ/ を付加 2) 母音を短母音に 3) 声調を低声調に、という操作を加えて語幹 A を派生するパターンである。

グループ 3 は、語幹 B を基本形とし、1) 末子音 /-ŋ/ を /-n/ に 2) 高声調を低声調に、という操作を加えて語幹 A を派生するパターンである。

グループ 4 は、語幹 A : 語幹 B が低声調 : 高声調で対立するパターンで、どちらを基本形とすることもできるが、So-Hartman は語幹 A がグループ 2 や 3 と同じ低声調のみを持つことを根拠に、語幹 B を基本形とした (So-Hartmann 2009: 95)。

共時的にみて派生の向きが一方方向でないと分析されることから、2 語幹体系の成立の背後に複雑な歴史があるものと推測される。

4. 文法書のジャンル

本節では、「インド圏」のTB系言語の文法書の成立経緯からみたジャンルのうちで顕著なもの2つ、学位論文と政府関連刊行物について概述する。言語体系の全体を示したものを広く「文法書」として取り上げているため、参照文法書という本論集のテーマからははみ出す部分も少なからずあるが、ご容赦いただきたい。

4.1. 学位論文

南アジアの大学でTB系言語の記述文法を扱った博士論文の数について見ると、1960-80年代には Deccan College (インド, Maharashtra 州 Pune) の独壇場の感がある。2000年代に入ると、Manipur 大学 (インド, Manipur 州), North-Eastern Hill 大学 (インド, Meghalaya 州), Tribhuvan 大学 (ネパール, Kathmandu) など、「インド圏」のTB系言語の使用地域にある大学の博士論文の数が増加し、特に Manipur 大学の躍進が目覚ましい。TB系言語の使用地域の外ではあるが Jawaharlal Nehru 大学 (インド, Delhi) にも4本の博士論文が提出されている。

南アジアの外では、Leiden 大学 (オランダ), Oregon 大学 (アメリカ), LaTrobe 大学 (オーストラリア), Bern 大学 (スイス) などの大学でTB系記述文法を扱った博士論文が多い。

近年、各国の大学で博士論文のインターネット公開が進んできた。インドでは2016年、教育省大学助成委員会が大学の研究者に論文や学位論文の電子版の提出を義務付け、それを公開するリポジトリを構築するという法規を告示し、大学助成委員会下の autonomous inter-university centre である Information and Library Network (INFLIBNET) Centre によって学位論文公開リポジトリ Shodhganga が構築された。これによって博士論文へのアクセスが格段に容易になった。

4.2. 政府関連の機関から刊行されたもの

4.2.1. インド諸語中央研究所が刊行した文法書

インド諸語中央研究所 Central Institute of Indian Languages (CIIL) は、インドの人的資源開発省 Ministry of Human Resource Development 言語局 Language Bureau の一部として1969年に設立された。そのスタンスは、下記の設置目的・目標によく現れている。

CIIL: Aims and Objectives

- Advices and Assists Central as well as State Governments in the matters of language.
- Contributes to the development of all Indian Languages by creating content and corpus.
- Protects and Documents Minor, Minority and Tribal Languages.
- Promotes Linguistic harmony by teaching 15 Indian languages to non-native learners.

<http://www.ciil.org/aboutAims.aspx> より。

中央および州政府の言語政策についての助言と支援、コンテンツ・コーパス作成によりインド諸言語の発展に対して貢献すること、主要言語の教育の促進と並んで、少数民族言語の保護と記録が挙げられている。

この目標に向けて、これまでに25冊、うちTB系言語については15冊の文法書を刊行している。(Ao, Kokborok, Purik, Sema, Angami, Lotha, Mishmi, Apatani, Karbi, Tangkhul Naga, Mising, Mao Naga, Hmar, Khezha, Konyak. このうち、最初の11冊には CIIL Grammar Series というシリーズ名が

与えられている。) TB 系言語に関してはこの他、11 冊の *Phonetic Reader*, 8 冊の辞書がある。その他、民話集・子守歌集や研究書も出版している。

CIIL Grammar Series の立ち上げ(シリーズ 1 冊目の *Ao Grammar* は 1975 年に刊行された)に当たって書かれたと思われる、当時の所長 E. Annamalai の序文 *Preface* には、地域の多数派と少数民族の間の双方向コミュニケーションを増やす必要があり、そのために少数民族の言語を学ぶ多数派の人々の助けとするべく、この文法書シリーズを読本・辞書・教授マニュアルを含めたパッケージの一部として企画されたことが記されている。(Sastri 1984: vii, 同シリーズの他の文法書をいくつか見た限り、基本的に同じ序文が掲載されているようである。)

同じく序文に記された以下の内容は、このシリーズの性格をよく表している。

- ・文法書の構成は、文法的形式より文法的機能に重きを置く。これは学習者がすでに知っていて表現したい文法的機能が学習言語でどのような形式で表されるかを容易に見つけられるようにするためである。(名詞の文法性や、動詞の時制など、当該言語にあるとは限らない範疇を項目として立てているのはこの一例であろう。)
- ・主に教学を目的とするため、理論的な議論や正当化は最小限に留める。
- ・文法書は名詞形態論と動詞形態論のカテゴリーに大きく分けられる。形容詞の記述は名詞形態論の後、副詞の記述は動詞形態論の後に続く。
- ・統語論の章では、表層レベルでの構成素順序を記述する。(当時のインドにおける生成文法に対する意識が透けて見える文言である。)
- ・文法のデータは、フィールドで主に 1 人のインフォーマントから、語彙・文リストを用いたエリシテーションによって得たもの。

ここに挙げた文法書の構成は、インドの大学の大学院生が執筆した博士論文のいくつかにも踏襲されており、その影響力は未だ大きいものがあると思われる。

4.2.2. Arunachal Pradesh 州政府関連の言語便覧

インドの Arunachal Pradesh 州は、1951 年から 1972 年まで東北辺境地区 North East Frontier Agency (NEFA) と呼ばれ、連邦領であった時期を経て 1987 年に現行の名称となった。この地域の少数民族言語の概要を記した言語便覧が NEFA の調査局 Research Department から 1963-1972 年の間に 4 冊 (Galong, Dafla, Nocte, Galo), Arunachal Pradesh 州政府の調査局 Directorate of Research から 1976-2004 年の間に 16 冊 (Hill Miri, Miji, Tagin, Sherdukpen, Jugli, Lungchang, Bugun, Bokar, Tutsa, Nah, Pailibo, Nishing, Mungshang, Aashing, Ramo, Tangam) 刊行されていることが確認できる¹¹。Badu (1994) *Pailibo Language Guide* には Arunachal Language Series 31 の名称が見られるが、他の書籍には見られず、シリーズの全容は謎である。

5. 記述上重要な概念・言語現象

本節では、TB 系言語の包括的な記述文法を扱った博士論文で、インターネット上でファイルが公開されているもののうち下記の 19 本を取り上げ、そこで言語記述上重要な概念や注目され

¹¹ この他にも、同州の情報・公共関係局長 The Director of Information and Public Relations を発行者として Sulung 語の便覧が刊行されている。

る言語現象がどのように扱われているかを比較検討する。

1. **Kurtöp [Hyslop]***¹² Hyslop, Gwendolyn. 2011. "A Grammar of Kurtöp." (チベット語群ツァンラ・チベット系)
2. **Bunan [Widmer]*** Widmer, Manuel. 2014. "A Descriptive Grammar of Bunan." (チベット語群チベット・キナウル系)
3. **Darma [Willis]*** Willis, Christina M. 2007. "A Descriptive Grammar of Darma: An Endangered Tibeto-Burman Language." (チベット語群チベット・キナウル系)
4. **Jinghpaw [Kurabe]** Kurabe, Keita. 2016. "A Grammar of Jinghpaw, from Northern Burma." (ブラフマプトラ語群ジンポー・ルイ系)
5. **Kadu [Sangdong]** Sangdong, David. 2012. "A Grammar of the Kadu (Asak) Language." (ブラフマプトラ語群ジンポー・ルイ系)
6. **Atong [van Breugel]*** van Breugel, Seino. 2008. "A Grammar of Atong." (ブラフマプトラ語群ボド・ガロ系)
7. **Moyon [K. H. Devi]** Devi, Kongkham Hemabati. 1989. "A Descriptive Study of the Moyon Language." (クキ・チン・ナガ語群古クキ系)
8. **Daai [Hartmann]** So-Hartmann, Helga. 2009. *A Descriptive Grammar of Daai Chin*.¹³ (クキ・チン・ナガ語群周辺クキ・チン系)
9. **Thadou [Haokip]** Haokip, Marykim. 2014. "Grammar of Thadou-Kuki: A Descriptive Study." (クキ・チン・ナガ語群周辺クキ・チン系)
10. **Zou [L. H. Singh]** Singh, Lukram Himmat. 2013. "A Descriptive Grammar of Zou." (クキ・チン・ナガ語群周辺クキ・チン系)
11. **Khezha [Kapfo]** Kapfo, Kedusto. 1992. "Khezha: A Descriptive Analysis." (クキ・チン・ナガ語群アングミ・アオ系)
12. **Inpui [W. P. Devi]** Devi, Waikhom Pinky. 2014. "A Descriptive Grammar of Inpui." (クキ・チン・ナガ語群ゼメ系)
13. **Karbi [Konnerth]** Konnerth, Linda. 2014. "A Grammar of Karbi." (クキ・チン・ナガ語群カルビ系)
14. **Dhimal [King]*** King, John Timothy. 2008. "A Grammar of Dhimal." (ディマール語群)
15. **Bantawa [Doornenbal]** Doornenbal, Marius Albert. 2009. "A Grammar of Bantawa: Grammar, Paradigm Tables, Glossary and Texts of a Rai Language of Eastern Nepal." (ヒマラヤ語群キランティ系)
16. **Hayu [Michailovsky]*** Michailovsky, Boyd. 1981. "Grammaire de la langue hayu (Nepal)." (ヒマラヤ語群キランティ系)
17. **Yakha [Schackow]** Schackow, Diana. *A Grammar of Yakha*.¹⁴ (ヒマラヤ語群キランティ系)

¹² *を付した博士論文は、後に書籍として出版されている。詳細は、本論集所収の澤田英夫・林範彦(編)「チベット・ビルマ諸語の参照文法書目録 [抜粋版]」(pp. 149-181)を参照。

¹³ 2008年にLondon大学SOASに提出された博士論文であり、後にSTEDT Monograph Series 7として出版およびインターネット公開された。今回参照したのは後者である。

¹⁴ 2014年にチューリヒ大学に提出された博士論文であり、後にLanguage Science PressのStudies in Diversity Linguisticsシリーズの1巻として出版およびインターネット公開された。今回参照したのは後者である。

18. **Lepcha [Plaisier]*** Plaisier, Heleen. 2006. “A Grammar of Lepcha.” (ヒマラヤ語群¹⁵)

19. **Galo [Post]** Post, Mark W. 2007. “A Grammar of Galo.” (タニ語群)

5.1. 語類/品詞

最初に、形態論・統語論の両方で重要な概念である語類 word class あるいは品詞 part of speech にかかわるいくつかの点について検討する。

5.1.1. 語類の提示のしかた

まず、語類そのものが文法書の中でどのように提示されているかを観察する。

その言語の語類にどのようなものがあるかを示す最も参照性の高い方法は、当然ながら、語類を概観する、word classes や parts of speech といった見出しを持つ章・節を設けることである。今回選択した文法書 19 本のうち、語類について概観する章・節を設けているものは 12 本あった。

Kurtöp [Hyslop], Jinghpaw [Kurabel], Kadu [Sangdong], Atong [van Breugel], Daai [Hartmann], Zou [L. H. Singh], Karbi [Konnerth], Bantawa [Doornenbal], Hayu [Michailovsky], Yakkha [Schackow], Lepcha [Plaisier], Galo [Post]

これらの文法書では、自立的に用いられ、句の中核的要素となる形式（しばしば「語彙的形式」と呼ばれる）だけでなく、句の中核的要素に付随する形式（「文法的形式」と呼ばれることがある）をも語類分類の対象とする。後者の付属的・付随的形式の取り扱いには文法書によって差異が見られ、形態論的自立性のステータスに沿って大まかに分類するものから、より詳細な機能的分類を行うものまである¹⁶。一次的分類として極めて多くの語類を区別している例として、Atong [van Breugel] の例を表 9 に挙げる。

¹⁵ Glottolog によると、Lepcha 語はヒマラヤ語群の中では系統の近い言語と下位グループを作らない孤立した言語である。

¹⁶ Galo [Post] では、語の派生や屈折にかかわる接辞も含めて機能的類 functional classes として扱い、noun, adjective, verb などの語彙的類 lexical classes と区別する (Post 2007: 54–55)。

表9 (Atong) List of word classes (van Breugel 2008: 83, Table 19)

| OPEN WORD CLASSES | CAN FUNCTION AS PREDICATE HEAD? |
|-----------------------------|--|
| Verbs | YES |
| Nouns | YES |
| Adverbs | no |
| CLOSED WORD CLASSES | |
| Type 1 adjectives | YES |
| Type 2 adjectives | YES |
| Time words | no |
| Postpositions | no |
| Demonstratives | YES |
| Deictic-only demonstratives | no |
| Interrogatives | some |
| Indefinite proforms | no |
| Discourse connectives | no |
| Numerals | no |
| Classifiers | no |
| The additive conjunction | no |
| Personal pronouns | YES |
| The generic pronoun | no |
| Proclauses | no |
| Onomatopoeia | no |
| Interjections | no |
| The prohibitive word | no |

語類を概観する章・節を持たない文法書の中にも、語の集合を表す「名詞」「動詞」などの名称を見出しとする章・節で、その名称が語のクラスを表すという言明を含むものがある。

Bunan [Widmer] の 4-14 章の章立ては、以下のようになっている。

- Ch.4 **Nouns** and nominal morphology
- Ch.5 **Pronouns** and **demonstratives**
- Ch.6 **Adjectives**
- Ch.7 **Quantifiers**
- Ch.8 **Adverbs**
- (Ch.9 The structure of the noun phrase)
- Ch.10 Discourse clitics and discourse particles
 - (10.1 Introduction)
 - 10.2 **Discourse clitics**
 - 10.3 **Discourse particles**
- Ch.11 Interjections and Conventionalized communicative expressions
 - (11.1 Introduction)

- 11.2 **Interjections**
- (11.3 Authoritative use of kinship terms)
- 11.4 **Conventionalized communicative expressions**
- Ch.12 **Verbs**
- (Ch.13 Epistemic marking and syntactic agreement)
- Ch.14 **Copulas**

太字にした名称については、当該の章・節にそれらの名称の表すものが lexical class(es) (Widmer 2014: 174, 267, 313, 315, 370, 399, 794), a distinct word class (ibid.: 330) あるいは class(es) of lexemes (ibid.: 396, 577) の名称であるという言明が含まれている。ゆえにこれらの章・節がそれぞれ個別の語類について述べたものであるとみなして差し支えないであろう。ただし、複数の章・節の記述を読み通さない限りこの言語の語類を把握できないわけだから、語類を概観する章・節を持つ文法書よりも参照性の点で一步劣る点は否めない。

以下の文法書については、一部の名称に対してしか上記の言明が見られず、カッコ内の内容についても、特定の範疇を表すものとして用いられるかどうか定かでないものが含まれる。

Darma [Willis] (“word class”)

Moyon [K. H. Devi] (“class of word”)

Thadou [Haokip] (“class of word, word class, class of substantives, form classes”)

Khezha [Kapfo] (“category of word”)

Inpui [W. P. Devi] (“grammatical category”)

このような語類の非明示的な取り扱い、これらの文法書が暗黙のうちに既存の文法観や枠組を前提としていることを意味するように思われる¹⁷。

5.1.2. 名詞代用表現：語類か、下位類か

人称・指示・疑問・不定などの名詞代用表現は、一つのクラスにまとめられる場合も、複数のクラスに分けられる場合もあるが、ここでは便宜的に一括して扱うことにする。

今回対象とする文法書の名詞代用表現の取り扱いは、以下のように分類できる。

A. 名詞 noun/ (仏) nom¹⁸と異なる独立した語類 (代名詞 pronoun/ (仏) pronom) として扱うもの。

Bunan [Widmer], Kadu [Sangdong], Atong [van Breugel], Daai [Hartmann], Zou [L. H. Singh], Yakkha [Schackow], Lepcha [Plaisier] (Darma [Willis], Moyon [K. H. Devi], Thadou [Haokip], Khezha [Kapfo], Inpui [W. P. Devi], Dhimal [King])

() 内に入れたのは、前節で語類を明示的に宣言していないものとみなした文法書である。いずれも代名詞というクラスを設定してはいるが、前述した理由によりこれらが語類であると断定す

¹⁷ Dhimal [King] についてもこのことが当てはまると言えるだろう。この文法書の Nominal Morphology の章 (p.49-) に nouns, adjectives, numerals, classifiers, pronouns の名称を含むタイトルを持つ節が、Verbal Morphology の章 (p.101-) に copulas および manner adverb の名称を含むタイトルを持つ節が、それぞれ現れてはいるが、これらが類や範疇の名称であるといった記載が一切ない。そもそも nominal morphology, verbal morphology にも定義を与えていない。

¹⁸ 本稿で取り上げる文法書のうち、Hayu [Michailovsky] だけがフランス語で書かれている。

ることはできない。

人称・数・性・話し手―聞き手からの近さなど比較的少数の素性による範列的な系をなす、その範列的な系を反映した固有の形態的特徴を持つ、などを独立した語類として扱う根拠としていると思われる。

以下の文法書では、代名詞と名詞をそれぞれ独立した語類として立てつつ、いずれも動詞の項となれるという共通性を示すために、両語類を包摂する名詞的 nominal という上位類を設定している。

Bantawa [Doornenbal], Hayu [Michailovsky]

B. 名詞の下位類とするもの

Jinghpaw [Kurabe]

動詞の項となれるという統語特徴を根拠に、人称代名詞 personal pronouns, 指示詞 demonstratives, 疑問-不定詞 interrogative-indefinites をいずれも名詞の下位類とする (Kurabe 2016: 153)。

C. 代用表現 pro-forms の下位類とするもの

Kurtöp [Hyslop], Karbi [Konnerth], Galo [Post]

これらの文法書では、各種の名詞的・副詞的代用表現をまとめて pro-forms というラベルを付けている。ただし、いずれの文法書でも pro-forms は語類であるとは明記されておらず、(personal) pronoun や demonstrative が独立した語類をなすという言明も、他の語類の下位類をなすという言明もないため、これらが語類として扱われているかどうかについては断定できない。

統語的特徴を重視するならば、名詞の代用表現は名詞の下位類とするのが妥当だと筆者は考えるが、今回検討したほとんどの文法書でそうっていない。範列的な系をなすことと、それを反映した固有の形態的特徴をより重視しているふしがある。あるいは、文法書の著者の母語あるいは教育を受けた言語の影響があるかもしれない。

5.1.3. 名詞の属性を表す修飾要素

次に、名詞の属性を表す名詞修飾要素として機能する語がどのように範疇化されているかについて観察する。

このような機能を持つ語の類に対して与えられることの多いラベルは形容詞 adjective/ (仏) adjectif であり、今回取り上げた文法書の多くにこのラベルが見られるが、実際に語類のラベルとして用いられているかどうかは文法書ごとに異なる。

A. 属性を表すという意味的特徴と、特定の構造的・分布的特徴を持つ語の類として、「形容詞」という語類を立てているもの

Galo [Post]¹⁹

¹⁹ Post が構造的・分布的特徴として挙げているものは次の4つ。1) 語根の複合あるいは接辞付加された語根を持つ 2) ADJP または PRED の主要部となる 3) 名詞化された形 (関係節) が名詞修飾に用いられる 4) 節末の陳述要素の主要部と

B. 属性を表す名詞修飾要素として機能する語類「形容詞」を立てているもの 前節同様, §5.1.1で語類を明示的に宣言していないとみなした文法書を()内に入れて示す。

Kurtöp [Hyslop], Bunan [Widmer], Zou [L. H. Singh], Bantawa [Doornenbal], Hayu [Michailovsky], Yakkha [Schackow], Lepcha [Plaisier] (Darma [Willis], Moyon [K. H. Devi], Khezha [Kapfo], Inpui [W. P. Devi], Dhimal [King])

C. 属性を表す名詞修飾要素として機能する語類「形容詞」を立てている一方で、それが動詞の下位類であるという記述も行っているもの

Atong [van Breugel]²⁰, Daai [Hartmann] (Thadou [Haokip])

D. 属性を表す名詞修飾要素として機能する語の類を、動詞の下位類とするもの

Jinghpaw [Kurabe], Karbi [Konnerth]

E. 属性を表す名詞修飾要素を、独立した語ではなく複合名詞の構成要素とみなすもの

Kadu [Sangdong]²¹

各文法書がこのような語の類をどのように扱っているかが、対象言語の当該類の特徴に大きく依存することは言うまでもない。ゆえに、各言語の当該類が持つ特徴を抽出してみよう。

各言語の当該類に属する語が示す特徴として、次の3つの素性を立てる。

[±D] (Derived) 当該類に属する語が、動詞に名詞化子 *nominalizer*²²あるいは限定修飾標識 *attributive marker* を付加したものであれば [+P], そうでなければ [-P]。

[+D] と [-D] の2つの当該類を持つ Atong の例を以下に挙げる。

- (10) a. [+D] : *təy gaʔ=gaba* (water **good=ATTR**) (van Breugel 2008: 105, ex.(67) より) 「良い水」
(#ATTRibutive)
b. [-D] : *nok picam* (house **old**) (ibid.: 108, ex.(69) より) 「古い家」

[±P] (distinct Predication structure) 当該類に属する語が述語として用いられる際に通常の動詞と同じ形式を取れば [-P], 通常の動詞と異なる形式を取れば [+P]。以下 Atong の例。

- (11) a. 主節の述語が通常の自動詞
[*nok [aŋ] {muʔ}=gaba {gurum -ok}*]
house 1s stay=ATTR collapse -cos (#Change Of State)

なれる (Post 2007: 204, Table 5.1)。このうち 1) は名詞と共通する特徴であり, 3), 4) は動詞と共通する特徴である。

²⁰ 後述するように、性質の異なる Type 1 adjective と Type 2 adjective の2類を立てており、そのうちの Type 1 が自動詞の下位類であると述べている (van Breugel 2008: 83, 85, 88)。

²¹ Sangdong によれば、動態動詞が名詞を修飾する際には名詞化子 *=panáq* による名詞化を必要とし、状態動詞はそのままの形で被修飾名詞に直接後続する。Sangdong は後者を N+V の複合名詞であると分析する (Sangdong 2012: 192–193)。仮に、状態動詞が被修飾名詞から独立した語だとすると、後述する素性は [-D, -P, +A] となる。

²² 数学・論理学で *operator* を「演算子」と和訳するのにならってこのように訳した。

‘The house in which I lived has collapsed.’ (van Breugel 2008: 553, ex. (833)²³)

b. 主節の述語が [+D] の属性語

[ue gawi] {səl-a}

DST girl beautiful-DCL (#DiStal, DeCLalative)

‘That girl is beautiful.’ (van Breugel 2008: 105 ex. (66))

a. と同様 TAM 要素が付加されるので [-P]

c. 主節の述語が [-D] の属性語

[ie nok] {hapsan}

PRX house same (#PRefIX)

‘This house is the same.’ (van Breugel 2008: 111 ex. (83))

a. と異なり TAM 要素が付加されないの [+P]

[±A] (distinct Attribution form) 当該類に属する語が名詞を修飾する際に、名詞修飾節の述語動詞と同じ形式を取れば [-A]、異なる形式を取れば [+A]。以下 Atong の例。

- (12) a. [+D] の属性語：(10a) の名詞修飾語は、(11a) の関係節の述語と同じ接語 =gaba を取っているの、[-A]。
 b. [-D] の属性語：(10b) の名詞修飾語は、(11a) の関係節の述語と異なり接語 =gaba を取らないので、[+A]。

上記3つの素性に従って、4. に属する Kadu 以外の各言語に見られる当該類を位置づけたものが表 12 である。

表12 名詞の属性を表す名詞修飾要素の素性分析

| | -P | | | +P | | |
|----|---|-----------------------------------|----------------------------------|--|-----------|--|
| | -A (1) | ?A ²⁴ (2) | +A (3) | -A (4) | ?A (5) | +A (6) |
| +D | Karbi, Galo Atong ^I , Daai [%] , | (Moyon, Khezha ²⁵) | Zou ²⁶ , (Inpui) | Yakkha [%] , (Darma [%] , Dhimal) | Lepcha | Bunan [%] |
| -D | (Thadou) | | Daai [#] , Jinghpaw* | | | Yakkha [#] , Bunan [#] , (Darma [#]), Atong ^{II} , Kurtöp, Bantawa, Hayu |

²³ Atong [van Breugel] では各用例の1行目に形態素分析しない表示が挙がっているが、本稿の引用では省略した。また、句境界 [] と述部境界 {} 以外の構造表示も省略した。以下の例文についても同じ。

²⁴ [±A] の値が未決定である言語があるのは、それを扱う文法書に通常の動詞を述語とする名詞修飾節の記述が見当たらなかったためである。

²⁵ Khezha [Kapfo] では、修飾語が1音節の場合は前接辞 ke- を伴うが、2音節以上では前接辞を伴わない。音節数による現象なので、[-D] の別類を立てない。

²⁶ Zou [L. H. Singh] では、名詞修飾構造に、修飾語が抽象的意味を表す動詞前接辞 a- (L. H. Singh 2013: 112) を伴う形式 (ex. mi əvom (man black) ‘black man’) と、伴わない形式 (ex. mi-vom (man-black) ‘black man’) の両方の例が挙がっている

Daai [Hartmann], Yakkha [Schackow], Darma [Willis], Bunan [Widmer] の 4 言語については, % を付した類と # を付した類が並立しており, 各文法書はいずれも前者 ([+D]) をより優勢とみなしている。後者 ([-D]) は概して要素数が少なく (Widmer 2014: 325, Schackow 2015: 161), 言語によっては頻度が少なかったり (Willis 2007: 297), 他の語類に属する形式からの転用によるものを含んでいたり (Widmer 2014: 326) する。* を付した Jinghpaw の当該類 ([-D]) は [+D] のカウンターパートを持たないが, 前述した # を付した類と同様のことが当てはまる²⁷。

述語および名詞修飾要素としての振る舞いの観点から見ると, 素性 [+A], [+P] のいずれかを持つ表 12 の (3)-(6) 列に位置づけられた類は, 一般の動詞と異なる文法的特徴を持っていると言える。この場合, その類を動詞とは独立した語類 (形容詞) とみなす根拠がある。逆に素性 [-A], [-P] の両方を持つ表 12 の (1) 列に位置づけられた類は, 動詞類の下位類とするのが妥当であろう²⁸。

属性語の帰属に関して, ここで行った素性に基づく判定と, 実際に文法書が行った決定の間にずれがあるものがいくつかある。それについて補足する。

Galo [Post] ここでは動詞の下位類とするのが妥当であると判定したが, Post は形容詞という独立した語類を立てている。

これは彼が語類の決定に音節数や意味など様々な要因を考慮に入れているためであろうと推察する。

Thadou [Haokip] ここでは動詞の下位類とするのが妥当と判定したが, Haokip は形容詞としてしている。ただし, 形容詞類が文法的に動詞類に類似すると述べている (Haokip 2014: 116)。

Atong [van Breugel] [+D], [-D] の 2 類を持つ。前者は動詞の下位類とするのが妥当, 後者は独立した語類とみなす根拠あり, というのがここでの判定だが, van Breugel は前者も Type 1 adjective としている。ただしこれが動詞の下位類という記述も行っている。

Daai [Hartmann] Atong 同様 [+D], [-D] の 2 類を持つ。うち後者は明らかに少数派²⁹である。ここでの判定もおおむね Atong の場合と同じだが, So-Hartmann は両者を含む形容詞という語類を立てつつ, それが動詞の下位類であるという記述もしている。

少数ながら [-D] の形式が存在することで, 動詞の下位類と断定してしまうことを避けたのかもしれない。

Jinghpaw [Kurabe] ここでの判定は独立した語類とする根拠があるというものであったが Kurabe は動詞の下位類として扱っている。

ジンポー語のこの類が少数のメンバーからなることに加え, 一般の動詞同様の構造を取って節の述語となれること ([-P]) を根拠にしているのであろう。

(ibid.: 144)。後者は複合語のように見えるが, Zou [L. H. Singh] のスペーシングとハイフネーションが一貫していないため, 正確なところはわからない。

²⁷ Jinghpaw [Kurabe] は動詞を扱う章で, “Jinghpaw has a small set of adjectives, which, on the basis of its negatability, can be shown to be a subclass of verbs ...” (Kurabe 2016: 225) と述べている。

²⁸ [-P] でかつ [±A] の値が未決定である列 (2) の言語については判断を保留せざるを得ない。

²⁹ 色彩の形容詞 (So-Hartmann 2009: 113) と, 2, 3 の例外的な形容詞 (ibid.: 112, fn.1)。

5.2. 自立度からみた形態素の下位分類

5.2.1. 拘束形態素の区分

本稿で取り上げる文法書の対象言語は、いずれも意味的実質を持った言語形式に付加される拘束形態素を持つ。この節で検討するのは、本稿で取り上げる文法書が、そうした拘束形態素に下位類を認めているかどうかという点である。

今回取り上げた文法書の半数以上が、拘束形態素に接辞 *affix* と接語 *clitic* の 2 類を認めている。このうち、本文中の特定の個所で接語と接辞の相違点を明示しているのは、下記の 6 つである。

Kurtöp [Hyslop], Bunan [Widmer], Atong [van Breugel], Karbi [Konnerth], Yakkha [Schackow], Galo [Post]

これらの文法書で接語を接辞から分かつ特徴として言及されるのは、句レベルで付加される要素であること（接辞は語レベルで付加される）(Kurtöp [Hyslop], Atong [van Breugel], Karbi [Konnerth])³⁰、ホストとなる形式の文法的範疇が比較的自由であること（接辞のホストはいずれかの範疇に特定されている）(Atong [van Breugel], Yakkha [Schackow], Galo [Post])、およびそれ自体が文法語であること（接辞は文法語をなさない）(Atong [van Breugel], Galo [Post]) である。

上記の諸特徴はいずれも形態統語的なものであり、音韻的なものは含まれていない。本稿で取り上げる文法書のうちで、接語と接辞の間に音韻論的観点から見た違いがあることを示しているのは Yakkha [Schackow] のみであった。Schackow は、形態音韻規則の中に、規則が適用される音韻的領域が接尾辞は含むが後接語は含まないもの、接尾辞と後接語の両方を含むもの、両方を含むもの 3 種類があると述べている。

表13 (Yakkha) Summary of phonological domains (Schackow: 62)

| | prefix | stem(s) | suffixes | clitics |
|-------|---------------|-------------------|----------|---------|
| (1) | | stress assignment | | |
| (2-a) | voicing/N_ | | | |
| (2-b) | | voicing/V_V | | |
| (3) | vowel harmony | | | |

表 13 (1) の強勢付与 *stress assignment* 規則³¹は語幹＋接尾辞の領域に適用され、後接語（と接頭辞）の存在は規則の適用に影響を与えない。一方、(2-b) の母音間有声化 *voicing/V_V* 規則は語幹＋接尾辞＋後接語の領域に適用される。接語と接辞の間に差異を示す音韻的現象がこの地域の TB 系言語に広く見られるわけではなく、Yakkha 語がこの点で特別な部類に属するのかもしれない³²。

Bunan [Widmer] は接語の特徴づけについて述べる節 (§4.4) で Aikhenvald (2002) の接語の定義に

³⁰ 表現は異なるが、Galo [Post] が接語の特徴として句を作用域とすることを挙げているのも、これに近い。

³¹ デフォルトでは第 1 音節に主強勢が置かれるが、語の非最終音節に閉音節がある場合、そのうち最後のものに主強勢が移る (Schackow 2015: 57)。

³² 後述する Hayu [Michailovsky] でも、動詞接尾辞と動詞後接語の間に、境界の前後に立つ子音素の音声の実現に関して違いが見られることを述べている。Yakkha 語も Hayu 語もヒマラヤ語群キランティ系の言語であることは興味深い。

従う旨言明しているが、全ての接語を統一的な特徴のセットに基づいて定義することはできず、むしろ各形式の接語としての認定は異なる特徴に基づき、接辞寄りのものもあれば独立語寄りのものもあると述べている (Widmer 2014: 191)。また、接語と認定した形式ごとにいずれのパラメータが認定の根拠であるかを示している。

下記の文法書については少々説明を要する。

Hayu [Michailovsky]

語類 *parties du discours* のうち文法的類 *grammaticaux* を動詞接尾辞 *suffix verbal*、非動詞接尾辞 *suffix non-verbal*、後置詞 *postposition*、助詞 *particule* の4下位類に分けており、Michailovsky 自身がこれら下位類を相対順序 (接尾辞 - 後置詞 - 助詞) と機能によって区分したものであると述べているが、一方で、動詞要素と共起する接尾辞・後置詞・助詞の間に音韻的な違いが見られることも示している³³。しかし、非動詞要素と共起する接尾辞・後置詞・助詞の間には、同様の違いは見られない³⁴(Michailovsky 1981: 174)。

下記の文法書は接語と接辞を区別してはいるが、接語の特徴づけに関するまとまった記載を持たず、個々の接語について記述した部分で、当該形式が接語と認定される根拠を示すにとどまっている。

Jinghpaw [Kurabe], Daai [Hartmann], Thadou [Haokip], Dhimal [King], Bantawa [Doornenbal]

下記の文法書は接語を接辞から区別しているものの、接語一般についても、特定の接語についても、接語と認定される根拠を示していない。

Kadu [Sangdong]

いくつかの言語が、強勢を持つ独立語としても強勢を持たない拘束形態素としても生起する形式を持つことは記しておくべきであろう。Bunan [Widmer] の基数詞 (Widmer 2014: 344-346, §7.3.1.2)・コピュラ (ibid.: 597, ex.(779); 599, ex.(786)), Yakkha [Schackow] の指示詞 (Schackow 2015: 94)・感嘆の助詞 (ibid.: 521) などは、それぞれの文法書で独立語としても接語としても生起する要素と分析される。

下位類を認めていない場合、拘束形態素は接辞のみということになる。本稿で取り上げる文法書のうち拘束形態素として接辞のみを認めるのは、下記のものである。

Darma [Willis], Moyon [K. H. Devi], Zou [L. H. Singh], Khezha [Kapfo], Inpui [W. P. Devi], Lepcha [Plaisier]

このうち Darma [Willis] は数詞の短縮形や複数標識が接語である可能性について言及してはいるが、接語という類を明確に立ててはいない。

³³ 語根-接尾辞の境界と、語と語の境界とで、その前後に立つ子音素の音声的実現のしかたが異なる。語-後置詞は一まとまりの抑揚曲線を持つことから単一の語を構成しているとみることができ、前述した子音素の音声的実現のしかたからみると、語-後置詞間の境界は語間の境界と同種のものである。この点で動詞と共起する後置詞は動詞接尾辞と助詞の中間のステータスを持っている (Michailovsky 1981: 174)。

³⁴ 非動詞語根-接尾辞の境界も、非動詞語-後置詞の境界も、その前後に立つ子音素の組の実現の仕方は語間の境界と同じということである。

5.2.2. 境界の表示

次に、前節でみた自立度に基づく形態素の下位類の境界表示について観察する。

表 14は、拘束形態素とそのホストの間の境界が各文法書のグロス付き例文中でどのように表示されているかをまとめたものである。参照のため、語³⁵の前後の境界も合わせて記した³⁶。

表14 自立度による形態素下位類とその境界表示のしかた

| | 接辞 | 境界 接語 | 語 | 言語 [著者] |
|----|--------|-----------|------|--|
| a. | — | = | スペース | Kurtöp [Hyslop], Bunan [Widmer], Atong [van Breugel], Karbi [Konnerth], Galo [Post], Kadu [Sangdong], Daai [Hartmann], Thadou [Haokip] |
| b. | — | = スペース | スペース | Yakkha [Schackow] |
| c. | (境界なし) | — | スペース | Hayu [Michailovsky] |
| d. | — | スペース | | Jinghpaw [Kurabe] |
| e. | — | | スペース | Dhimal [King], Bantawa [Doornenbal] |
| f. | — | | スペース | Darma [Willis], Zou [L. H. Singh], Khezha [Kapfo], Inpui [W. P. Devi], Lepcha [Plaisier] |
| g. | (境界なし) | | スペース | Moyon [K. H. Devi] |

接辞は伝統的に語内部の要素とみなされてきた単位であり、ホストとの境界は、語内の形態素の境界を表すのに通常用いられる - で表示される。また、語の前後の境界はどの文法書においてもスペースで表示されている。

表 14の a. は、自立度による形態素下位類それぞれの境界を 3 種類の表示によって区別する、最も自然かつ合理的なやり方と言える。接語とホストとの間の境界には = が用いられる。

b. の Yakkha [Schackow] で接語の境界を = とスペースの 2 種類としたのは、Schackow が接語という術語に (i) 範疇的に制限されない接辞 affixes that are categorically unrestricted と (ii) 音韻的に拘束された語 phonologically bound word³⁷の 2 つの読みを認めていることに関係している (Schackow 2015: 60 fn.16)。前者とホストの間の境界を = で表示し、後者は独立して生起可能でかつ句の主要部ともなり得る要素であることから、独立語と同様に前後の境界をスペースで表す。

c. の Hayu [Michailovsky] に関しては、補足が必要である。まず、形態論を扱う章で語根 + 接辞からなる単位の内部分析を行っているが、それを統語論を扱う章の例文に反映させていない。Hayu 語が極めて複雑な動詞形態論を持つため、例文の表記が煩雑になることを避けたためではないかと推察される。接辞の境界を表記しないのはこのような理由による。通常接辞の境界を表す - は、ここでは後置詞の境界を表す。例を挙げる。

³⁵ 接辞・接語との比較検討の対象となり得るのは、ほとんどの場合単純語である。

³⁶ 本稿で取り上げる文法書の中で略号・記号一覧に境界を挙げている文法書は意外に少なく、Jinghpaw [Kurabe], Atong [van Breugel], Lepcha [Plaisier], Galo [Post] のみである。

³⁷ Schackow は例として指示詞 demonstrative を挙げる (Schackow 2015: 60 fn.16)。この他に感嘆の助詞 lai もこれに該当する (ibid.: 522)。

- (13) kem-he blɔ nom
 maison-dans tigre-∅ il-est

“Il y a un tigre dans la maison.” (Michailovsky 1981: 190, ex.(5.12-3))³⁸

d. はそれ自体で文法語を成さないもの（接辞）と成すもの（接語・語）を異なる表記で表し分けたものである。ちなみに Jinghpaw [Kurabe] が接語と認定するのは、格標示の拘束形態素 (Kurabe 2016: 190) のみである。一方, e. は拘束形態素（接辞・接語）とそうでないもの（語）を異なる表記で表し分けたものである。

f, g. は接語という類を立てない文法書である。g. の Moyon [K. H. Devi] は c. 同様、語の内部構造を示していない。

5.2.3. 格を標示する形態素の自立度

最後に、形態素の機能類と、自立度による下位類との関係の一例として、格を標示する形態素のケースを取り上げる。本稿で取り上げる文法書の対象言語ではいずれも、格標示形式が格標示される要素に後続する。

表 15 は、本稿で取り上げる文法書が記述する有標の格標示形式の名称と、当該形式が接尾辞・後接語・独立語のどれに当たるかをまとめたものである。

表 15 の格名称の表記としては、完全名称に対応する Leipzig Glossing Rule 略号表上の略号を採用し、同略号表に載っていない名称については各文法書を参考に適宜表記を割り当てた。（表の下に LGR 非準拠の略号の一覧を示した。）このため、出典のグロス略号とは必ずしも合致していないことがある。（例：Atong [van Breugel] では comitative のグロス略号として &CO を用いるが、表では LGR 準拠の略号 COM に改めた。また、INST, INSTR を LGR 準拠の略号 INS に統一した。）類似の格概念に対して文法書間で異なる名称を用いている場合は、そのままにした。（例：comitative, associative, sociative）

接辞と接語を区別した上で格標示形式のあるものを接辞であるとする Thadou [Haokip], Bantawa [Doornenbal], Dhimal [King] の太字箇所は疑問の余地がある。

Thadou [Haokip] は ERG のみを後接語として扱い、他の格標示形式は接尾辞としている。確かに Haokip は ERG が名詞句の主名詞に後続する数詞に付加される例を挙げており (Haokip 2014: 126, ex.(79)), この例は ERG が名詞句レベルで付加される根拠とみなせる。

- (14) **tsápáj t^hǔm-hò=in** haí á=nè=ùv=è
 child **three-PL=ERG** mango 3CLT=eat PL=DECL⁴⁰
 ‘The three children ate a mango.’ (Haokip 2014: 126, ex.(79))

しかし、Haokip は INST, LOC, COM についても同様の例を挙げており (ibid.: 126 (81), (82); 127 (85); 128 (91), (92)), ERG だけを別扱いする理由はない。少なくとも OBL 以外、おそらく全ての格標示

³⁸ 訳も語・後置詞に対するものとなっており、この点で厳密に言えば例文は「グロス付き」ではない。また、対訳行中のハイフンが語-後接語の境界表示の他、複数の語からなる訳語の区切りにも用いられており、用法に一貫性を欠く。

³⁹ Yakkha [Schackow] で Group II に属する case marker で、ホストに拘束されることも、強勢を伴って独立語として用いられることもある。また、標識としてだけでなく単独で副詞として用いられることもある。ここに挙げた以外に、direction/manner, temporal ablative の役割を表す形式がある。

⁴⁰ 正しくは 3CLT=eat=PL=DECL となるはずだが、原典通りにした。

表15 自立度の観点から見た各文法書の対象言語の格標示形式

| 言語 [著者] | 総称 | 接尾辞 | 後接語 | 独立語 |
|----------------------|------------------------------|---|---|--|
| Kurtöp [Hyslop] | case marker | | ERG, LOC, ABL, GEN | |
| Bunan [Widmer] | case marker | | ERG, DAT, ALL, LOC, ABL, GEN, COM, <i>TERM</i> , <i>ADESS</i> , <i>INTESS</i> | |
| Jinghpaw [Kurabe] | case marking clitic | | ACC, AGT, ALL, LOC, ABL, GEN, COM, <i>PER</i> | |
| Kadu [Sangdong] | nominal relational marker | | TOP, <i>A.AG</i> , ALL, LOC, ABL, COM, <i>CMP</i> , BEN, REASON | |
| Atong [van Breugel] | case marker | | ACC, INS, DAT, ALL, LOC, ABL, GEN, COM, <i>PER</i> , <i>SIM</i> | |
| Daai [Hartmann] | case marker | | ERG, INS, DAT, LOC, VOC | |
| Hayu [Michailovsky] | postposition の一部 | | ERG, INS, LOC, ABL, GEN, <i>SOC</i> , <i>TERM</i> , <i>CMP</i> | |
| Galo [Post] | postposition | | ACC, <i>NAGT</i> , DAT, LOC, ABL, GEN | |
| Thadou [Haokip] | case marker | INS, OBL, LOC, COM | ERG | |
| Bantawa [Doornenbal] | case suffix | ERG, DAT, ALL, LOC, ABL, GEN, COM, VIA, CMP, VOC | | |
| Karbi [Konnerth] | role marker | | COM, INS, ABL | <i>NSUBJ</i> , LOC |
| Yakkha [Schackow] | case marker | | ERG, INS, LOC, ABL, GEN, COM | <i>CMP</i> , BEN, <i>SIM</i> etc. ³⁹ |
| Dhimal [King] | case marker | INS, DAT, LOC, EL, GEN, CIRC | | ALL, COM |
| Darma [Willis] | role marker | | | ERG, INS, DAT, LOC, ABL, POSS, COM, BEN, <i>MAL</i> , <i>EQU</i> |
| Moyon [K. H. Devi] | noun inflectional suffix の一部 | ACC, NOM, INS, LOC, ABL, GEN, <i>ASSOC</i> | | |
| Zou [L. H. Singh] | case suffix | ACC, <i>AGT</i> , INS, DAT, LOC, ABL, GEN, COM | | |
| Khezha [Kapfo] | case marker | ACC, NOM, INS, LOC, ABL, <i>SOC</i> , BEN | | |
| Inpui [W. P. Devi] | case marker | ACC, NOM, INS, DAT, LOC, ABL, GEN, <i>ASSOC</i> | | |
| Lepcha [Plaisier] | case ending | DAT, LOC, ABL, GEN, COM, <i>LAT</i> | | |

#Anti.Agent, ADESSive, AGenTive, ASSOCIative, CIRCumlocative, CoMParative, ELative, EQUative, INTereSSive, LATive, MALefactive, MOBilitative, Non-AGenTive, Non-SUBject, PERlative, SIMilative, SOCiative, TERMinative, VIAlative

形式が後接語であろうと推測される。もし接尾辞であるのなら、これらの格標示形式が主名詞に付加されないのはおかしい。

Dhimal [King] では、格標識のうち 2 つが語ではなく句のレベルで機能し、ゆえに接語の性質を示すと述べているが (King 2014: 74), 残念なことにはどの格標識が接語であるかを明記しておらず、接辞・接語の境界表示にいずれも - を用いているために表記から判断することもできない。King は名詞句構造の概観も与えていないため推測するしかないが、主名詞が量化子・限定用法の形容詞・属格句・限定用法の指示代名詞のいずれかを伴った単位が明らかに名詞句をなすと考えるなら、INST (§3.5.3), DAT (§3.5.6), LOC (§3.5.2), CIRC (§3.5.5) の各節に、当該格標識が名詞句の主名詞に付加される例が見られるので、この 4 つとも接語の資格を持つことになる。残る GEN と EL の格標識だけが接辞であるとは考えにくく、おそらく COM と ALL を除く全ての格標識は接語であろうと推測できる。

Bantawa [Doornenbal] は等位接続された 2 つの名詞のうち後の名詞に LOC が付く例を挙げている (Doornenbal 2009: 80 (130b))⁴¹。このことから、少なくとも Bantawa 語の格標識 LOC は名詞句レベルで付加された要素、すなわち接語である。こちらも、接辞と認定した全ての格標示形式が実際は後接語である可能性が高い。接尾辞だとしたら、等位接続された名詞の両方に格標識が現れなければならないはずである。

ちなみに、接語という下位類を立てず、格標示形式を接尾辞とみなす文法書のうち、Moyon [K. H. Devi] と Khezha [Kapfo] には主名詞に後続する量化要素に格標示形式が付加される例が (K. H. Devi 1989: 121 ex.d.; Kapfo 1992: 171 ex.27), Zou [L. H. Singh] と Lepcha [Plaisier] には等位接続名詞句の後名詞に格標示形式が付加される例が (L. H. Singh 2013: 189 ex.(115a); Plaisier 2006: 146), それぞれ挙げられている。

筆者の推測が正しいとすると、本稿で取り上げる文法書の対象言語に見られる格標示形式の自立度からみた分布は表 16 のようになる。太字の文法書は、表 15 から扱いが変更されたものである。

表16 自立度の観点から見た各文法書の対象言語の格標示形式 (修正版)

| | 言語 [著者] | 接尾辞 | 後接語 | 独立語 |
|----|--|-----|-----|-----|
| a. | Kurtöp [Hyslop], Bunan [Widmer], Jinghpaw [Kurabe], Kadu [Sangdong], Atong [van Breugel], Daai [Hartmann], Hayu [Michailovsky], Galo [Post], Thadou [Haokip], Bantawa [Doornenbal] | | ○ | |
| b. | Karbi [Konnerth], Yakkha [Schackow], Dhimal [King] | | ○ | ○ |
| c. | Darma [Willis] | | | ○ |
| d. | Moyon [K. H. Devi], Zou [L. H. Singh], Khezha [Kapfo], Inpui [W. P. Devi], Lepcha [Plaisier] | ○ | | |

⁴¹ 厳密にいうと、この例の等位接続名詞句 *buktan k'onki sinraŋ-b'en-da* (cave and tree-foot-LOC) 'in caves and at the foot of trees' において、*buktan* (cave) と *sinraŋ-b'en* (tree-foot) を接続する要素 *k'onki* は時間的順序付けを表す接続詞なのだが、そうであったとしても LOC の作用域に *buktan* が含まれることには変わりがない。

接辞と接語を区別する a. と b. では、格標示形式は接語あるいは独立語に分類される。接語を立てない c. と d. では、格標示形式は Darma [Willis] を除いて接辞に分類されているが、ここでの「接辞」はいわば拘束形態素の総称であり、等位接続名詞句や、主名詞が末位に立たない名詞句における振る舞いを見る限り、格標示形式が名詞句全体を作用域とするのは確かであろう。

格標示形式が接語と独立語に分類される b. のケースでは、項の格標示を行う形式は接語であり、独立語はどちらかというとき周遍的な格を標示することが多い。Yakkha [Schackow] はその典型的な例である。これに対して、反例と言えるのが Karbi [Konnerth] で、2 項動詞の P 項・3 項動詞の T 項および人間的 R 項⁴²を標示するのに用いられる標識 *-phān* ‘non-subject’⁴³および 3 項動詞の場所的 R 項を標示するのに用いられる標識 *-lòng* ‘locative’⁴⁴が共に関係子名詞 relator noun⁴⁵に分類され、一方、どちらかといえば周遍的な格とみなされる共格 comitative/具格 instrumental/起格 ablative を標示する形式 *=pen* が接語に分類される、という「逆転」が起こっている。

- (15) lasi [lasó arni=*pen*=ke]₁ [hála hī'ipī aphān=*ke*]₂ pe-avē-dèt-lò ...
therefore this day=*from*=TOP that witch NSUBJ=TOP CAUS-not.exist-PFV-RL
(#ReaLis)
'from that very day on, he killed the witch, ...' (Konnerth 2014: 497, ex.(733) 最初の節のみ⁴⁶)

6. おわりに

本稿のもととなった発表を行った研究プロジェクトのテーマである「参照文法書（の）研究」に沿ったトピックとして、本稿では記述文法を扱った博士論文 19 本を取り上げ、記述上重要な概念や言語現象のいくつかについて比較検討を行った。この作業を通して浮かび上がるのは、「概念規定」と「明示性」という、なにを今更と言われても不思議でない 2 つのキーワードである。ただ、全ての記述文法がこの要件を十全に満たしているわけでもなさそうである。

§5.1 で扱った語類は、文法現象を記述するに当たっての根幹の一部をなす分類概念である。記述者は対象言語の語類にどのようなものを立てたのかを明確にする必要があるし、また、ある形式類を語類とみなすのか、あるいは語類の下位類とみなすのか、という点についても同様のことが言える。これらが明示的に示され、容易に一覧できるようにしてあった方が、参照者としてはありがたい。ただ、単に明示的であればいいというものでは勿論なく、前提として、語類そのものが対象言語の言語事実即して、明確な基準に基づいて規定されている必要がある。

§5.2 で扱った接語は、種々雑多な要素を含む非均質な類であることが知られている。また、対象言語の音韻語・文法語との兼ね合いを考慮して定義を与えられるべき単位である。記述者自身がどういう定義に従っているかを明らかにした上で用いるべき概念であることは疑いない。接語の定義そのもの、あるいはその出所を明らかにせず、記述者が常識と思っているものに委ねてし

⁴² Karbi [Konnerth] の記述によると、3 項動詞の項のうち最も動作主らしいものを A 項、受領者・位置・着点らしいものを R 項、転移物として最も容易に概念化されるものを T 項と規定している (Konnerth 2014: 438)。

⁴³ Karbi [Konnerth] では接頭辞を伴わない形でこの形態素に言及しているが、用例をみると、所有接頭辞を伴った *a-phān* (POSS-NSUBJ) などの形式か、指示詞と複合した形式で用いられている (ibid.: 480-485)。

⁴⁴ こちらも Karbi [Konnerth] の用例では、所有接頭辞を伴った *alòng* という形式で用いられている (ibid.: 486-489)。

⁴⁵ 注22を参照。

⁴⁶ 原典では例文の 1 行目に形態素分析しない表示が挙がっているが、本稿の引用では省略した。また、[] で括られた 2 つの名詞句がさらに枠線で囲われているが、それも省略した。

まうと、その「常識」が言語普遍的なものとも、広く読者に了解されているとも限らないため、議論が破綻をきたすおそれがある。

接語と接辞の区別を立てたのであれば、互いに異なる境界表示によって両者を区別するのが、明示性の観点からみて当然の対応である。そうしない場合、あるいは両者を判別しがたいという意識が働いているのかもしれない。考えられる理由として、当該の拘束形態素が語を作用域とするのか、あるいは句を作用域とするのかが判然としないケースが存在する状況を想定することができる⁴⁷。一方、接語と独立語の境界に同じ表示を用い、接辞の境界と区別する動機としては、独立語であるが接語化することもある形式の存在が考えられる⁴⁸。いずれにせよ、境界表示のしかたが、類そのものや分類の仕方に対するなにかの情報を含んでいる可能性もありそうである。

ついでながら、格を標示する拘束形態素が名詞句を作用域とするかどうかを判断するためには、名詞句の構造が規定され明示されている必要があるのだが、文法書の全てが名詞句構造を文章や図示で示しているわけではない。この点についても、一般化された名詞句構造についての言明、願わくば図示が望ましい。同じことは動詞述語構造などについても当てはまる。

限られたデータから1つの言語の包括的な全体像を記述するのみならず、「概念規定」と「明示性」への配慮を行きわたらせるのは、困難を伴う作業である。しかし、それをクリアした文法書が、よりレベルの高い「参照文法書」足り得るのではないかと考える。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016–2017年度）の成果の一部である。

参考文献

< 本稿で比較検討の対象とした記述文法 >

[DL] はダウンロード可能なもの。

van Breugel, Seino. 2008. "A grammar of Atong." Ph.D. thesis, Bundoora: LaTrobe University. 760pp. [DL]

Devi, Kongkham Hemabati. 1989. "A Descriptive Study of the Moyon Language." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. 406pp. [DL]

Devi, Waikhom Pinky. 2014. "A Descriptive Grammar of Inpui." Ph.D. thesis, Silchar: Assam University. 236pp. [DL]

Doornenbal, Marius Albert. 2009. "A Grammar of Bantawa: Grammar, Paradigm Tables, Glossary and Texts of a Rai Language of Eastern Nepal." Doctoral thesis, Leiden University. 513pp. [DL]

Haokip, Marykim. 2014. "Grammar of Thadou-Kuki: A Descriptive Study." Ph.D. thesis, New Delhi: Jawaharlal Nehru University. [DL]

⁴⁷ §5.2.3では、拘束形態素である格標示がおおむね名詞句を作用域とする接語であろうと推測した。名詞句の主名詞に後続する修飾要素や量化要素などの要素や、等位接続名詞句の末尾の名詞に格標示が付加されているのであれば、名詞句を作用域とする根拠が形式的に与えられるとみなせる。しかし、もしもそのような構造が当該言語で利用可能でなければ、根拠を意味解釈のみに求めることを余儀なくされるであろう。

⁴⁸ 本稿 p.20 の Bunan [Widmer], Yakkha [Schackow] の事例を参照。表 14 b. でみたように、Yakkha [Schackow] は音韻的に拘束された語（拘束形式となることもある）を独立語と同様にスペースで区切り、範疇的に制限されない接辞（常に拘束形式で、=によって境界表示される）から区別する。

- Hyslop, Gwendolyn. 2011. "A Grammar of Kurtöp." Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. xxxix+729pp. [DL]
- Kapfo, Kedusto. 1992. "Khezha: A Descriptive Analysis." Ph.D. dissertation, University of Mysore. xiv+372+vi pp. [DL]
- King, John Timothy. 2008. "A Grammar of Dhimal." Doctoral thesis, Leiden University. 667pp. [DL]
- Konnerth, Linda. 2014. "A Grammar of Karbi." Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. 793pp. [DL]
- Kurabe, Keita. 2016. "A Grammar of Jinghpaw, from Northern Burma." Doctoral dissertation, Kyoto University. xi+688pp.
- Michailovsky, Boyd. 1981. "Grammaire de la langue hayu (Nepal)." Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley. 324pp. [DL]
- Plaisier, Heleen. 2006. "A Grammar of Lepcha." Doctoral thesis, Leiden University. 226pp. [DL]
- Post, Mark W. 2007. "A Grammar of Galo." Ph.D. thesis, Bundoora: LaTrobe University. 947pp. [DL]
- Sangdong, David. 2012. "A Grammar of the Kadu (Asak) Language." Ph.D. thesis, Bundoora: LaTrobe University. 706pp. [DL]
- Schackow, Diana. 2015. *A Grammar of Yakkha*. (Studies in Diversity Linguistics 7.) Berlin: Language Science Press. 578pp. [DL]
- Singh, Lukram Himmat. 2013. "A Descriptive Grammar of Zou." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. ix+248+iii pp. [DL]
- So-Hartmann, Helga. 2009. *A Descriptive Grammar of Daai Chin*. (STEDT Monograph Series 7.) Berkeley: Center for Southeast Asia Studies. 392pp. [DL]
- Widmer, Manuel. 2014. "A Descriptive Grammar of Bunan." Ph.D. dissertation, Universität Bern. 910pp. [DL]
- Willis, Christina M. 2007. "A Descriptive Grammar of Darma: An Endangered Tibeto-Burman Language." Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin. 629pp. [DL]

その他

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2002. "Typological Parameters for the Study of Clitics, with Special Reference to Tariana." Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald, eds. *Word: A Cross-Linguistic Typology*, 42–78, Cambridge University Press.
- Delancey, Scott. 2003. "Classical Tibetan." Thurgood, Graham and Randy LaPolla, eds. *The Sino-Tibetan Languages*, 255–269, London: Routledge.
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman, System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*. (University of California Publications in Linguistics, No. 135.) Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Sastry, G. Devi Prasada. 1984. *Mishmi Grammar*. (CIIL Grammar Series 11.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. xi+132pp.
- VanBik, Kenneth. 2009. "Proto Kuki-Chin: A Reconstructed Ancestor of the Kuki-Chin Languages." (STEDT Monograph Series 8.) University of California, Berkeley.

林範彦 2022 「中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02), 107–120, 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Department of Linguistics, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. "The Leipzig Glossing Rules: Conventions for Interlinear Morpheme-by-Morpheme Glosses." (Last Change: May 31, 2015.)

Hammarström, Harald, Robert Forkel, Martin Haspelmath, and Sebastian Bank, eds. 2021. *Glottolog 4.4*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <https://doi.org/10.5281/zenodo.4761960> (Available online at <http://glottolog.org>, Accessed on 2021-09-10.)

チベット・ビルマ諸語の参照文法書目録 [抜粋版]

澤田 英夫・林 範彦

Bibliography of Descriptive Grammars of Tibeto-Burman Languages

SAWADA, Hideo and HAYASHI, Norihiko

- ・チベット・ビルマ諸語の文法全体を取り扱った文法書のうち、アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第4回研究会で本稿の著者である澤田および林が報告を行った2017年までに出版されたものを中心に系統別・言語ごとにまとめたものである。
- ・掲載した文献の中には、著者未見のものが数多く含まれていることをお断りしておく。
- ・系統分類の大枠は、Glottolog (<http://glottolog.org>) (2017年時点)のシナ・チベット Sino-Tibetan 語族の一つ下の階層に基づいている。この措置は、主として Glottolog が系統分類に関する網羅的かつ最もアクセスしやすいデータであることによる、多分に便宜的な措置であることをお含みおきいただきたい。
- ・各言語見出し下の項目は、著者名のローマ字表記昇順—出版年昇順に配列し、頭に番号を付した。当該言語に項目が1つしかない場合も、番号 [1] を付してある。
- ・日本語・中国語文献の著者名にはローマ字表記を付した。
- ・表題・シリーズ名・出版社名には適宜 [英訳] あるいはローマ字表記を付した。
- ・博士論文とそれをもとにした書籍がある場合、行間を空けずに併記した。
- ・[DL] はダウンロード可能な文献を示す。



【チベット語群】 Bodic/ Tibetic

《チベット系》 Bodish

(1) チベット語 Tibetan

A. ラサ方言 Lhasa Tibetan

- [1] Bell, Charles Alfred. 1905. *Manual of Colloquial Tibetan*. Calcutta: Baptist Mission Press. 158pp.
- [2] Bell, Charles Alfred. 1919. *Grammar of Colloquial Tibetan (2nd Edition)*. Calcutta: The Bengal Secretariat Book Depot. 224pp.
- [3] Bell, Charles Alfred. 1939. *Grammar of Colloquial Tibetan (3rd Edition)*. Alipore, Bengal: Superintendent, Government Printing, Bengal Government Press. 184pp. (Reprinted in 1996, London: Curzon.)
- [4] Bhattacharya, Vidhushekahra. 1939. *Bhoṭa-prakāśa: A Tibetan Chrestomathy, with Introduction, Skeleton Grammar, Notes, Texts and Vocabularies*. Calcutta: University of Calcutta. lix+578pp.
- [5] Buéso, Gilbert. 1998. *Parlons Tibétain*. Paris: L'Harmattan. 356pp.
- [6] Chang, Kun and Betty Shefts Chang. 1964. *A Manual of Spoken Tibetan (Lhasa Dialect)*. Seattle: University of Washington Press. xii+286pp.
- [7] Csoma de Kőrös, Alexander. 1834. *A Grammar of the Tibetan Language: Prepared, under the Patronage of the Government and the Auspices of the Asiatic Society of Bengal*. Calcutta: Baptist Mission Press. xii+204+40pp.
- [8] Denwood, Philip. 1999. *Tibetan*. (London Oriental and African Language Library 3.) Amsterdam, Philadelphia: Benjamins. xviii+372pp.
- [9] Kitamura, Hajime. 1977. *Tibetan (Lhasa Dialect)*. (Asian and African Grammatical Manual 12.) Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies. 102pp.
- [10] Goldstein, Melvyn C. and Nawang Nornang. 1970. *Modern Spoken Tibetan: Lhasa Dialect*. Seattle: University of Washington Press. xx+407pp.
- [11] Rerich, Jurij Nikolajevic. 1961. *Tibetskij jazyk*. (Jazyki zarubeznogo vostoko i afriki.) Moskva: Izdatel'stvo Vostocnoj Lit. 151pp.
- [12] Tournadre, Nicolas and Sangda Dorje. 2003. *Manual of Standard Tibetan*. Ithaca, New York: Snow Lion. 543pp.
- [13] Tsetan Chonjore. 2003. *Colloquial Tibetan: A Textbook of the Lhasa Dialect*. Dharamsala: Library of Tibetan Works & Archives. 378pp.
- [14] 金鹏 Jin, Peng (主编). 1983. 《藏语简志》 [A brief description of Tibetan]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 198pp.

B. カム方言 Kham Tibetan

- [1] Häsler, Katrin. 1999. "A Grammar of the Tibetan Dege (Sde.dge) Dialect." Ph.D. dissertation, Universität Bern. xv+280pp.

C. アムド方言 Amdo Tibetan

- [1] 海老原志穂 Ebihara, Shiho. 2008. 「青海省共和県のチベット語アムド方言」 [A descriptive study on the Amdo dialect of Tibetan spoken in Gonghe County, Qinghai Province]. 東京大学博士論文 [Doctoral dissertation, The University of Tokyo]. 659pp.
- [2] Norbu, Kalsang, Karl A. Peet and Kevin Stuart. 2000. *Modern Oral Amdo Tibetan: A Language Primer*. (Studies in Linguistics and Semiotics 5.) Lewiston: Edwin Mellen Press. xviii+340pp.
- [3] Roerich, George. 1958. *Le parler de l'Amdo: étude d'un dialecte archaïque du Tibet*. Roma: Instituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente. 159pp.
- [4] ダムディン・ジョマ Rtamgrin Sgrolma. 2017. 「チベット語アムド農民方言—音韻体系と文法の基本構造—」 [The phonological system and basic grammatical structure of the Amdo farmers' dialect of Tibetan]. 神戸市外国語大学博士論文 [Doctoral dissertation, Kobe City University of Foreign Studies]. 196pp. [DL]

D. チベット文語/古典チベット語 Written Tibetan/Classical Tibetan

- [1] Bacot, Jacques. 1928. *Une grammaire tibétain classique: les slokas grammaticaux de Thonmi Sambhota, avec leurs commentaires*. (Annales du Musée guimet, Bibliothèque d'Etudes Vol. 37.) Paris: Paul Geuthner.
- [2] Bacot, Jacques. 1946–1948. *Grammaire du tibétain littéraire and Index Morphologique (Langue Littéraire et Langue Parlée)*, 2 vols. Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient. Tome 1: 86pp.; Tome 2: 151pp.
- [3] Bernard, Theos. 1946. *A Simplified Grammar of the Literary Tibetan Language*. Santa Barbara: Tibetan Text Society. ix+65pp.
- [4] Goldstein, Melvyn C., Gelek Rimpoche and Lobsang Phuntshog. 1991. *Essentials of Modern Literary Tibetan: A Reading Course and Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press. xxiii+493pp.
- [5] Gser-tog Sku-p'reñ Lña-pa Blo-bzañ Ts'ul-l'rims Rgya-mts'o. 1959. *Grammar of Classical Tibetan*. 280pp.
- [6] Hannah, Herbert Bruce. 1912. *A Grammar of the Tibetan Language: Literary and Colloquial*. Calcutta: Baptist Mission Press. 416pp. (Reprint in 1978, Delhi: Motilal Banarsidass.)
- [7] Lalou, Marcelle. 1950. *Manuel élémentaire de Tibétain Classique (méthode empirique)*. Paris: Imprimerie Nationale. 111pp.

- [8] 星泉 Hoshi, Izumi. 2016. 『古典チベット語文法：『王統明鏡史』（14世紀）に基づいて』 [A grammar of Classical Tibetan based on *the Clear Mirror of Royal Genealogies* (the 14th century)]. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 [ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies]. xviii+294pp. [DL]

E. その他のチベット語方言など Other Tibetan dialects

- [1] Barteo, Ellen Lynn. 2007. “A Grammar of Dongwang Tibetan.” Ph.D. dissertation, University of California, Santa Barbara. 568pp.
- [2] Bielmeier, Roland. 1985. *Das Märchen vom Prinzen Cobzan: eine tibetische Erzählung aus Baltistan; Text, Übersetzung, Grammatik und westtibetisch vergleichendes Glossar.* (Beiträge zur tibetischen Erzählforschung 6.) Sankt Augustin: VGH Wissenschaftsverlag. 253pp.
- [3] Bstan-'dzin-dpal-'byor, Rdo-rin Bka'-blon. 1979. *A Detailed Commentary on the Fundamental Principles of Tibetan Grammar as Set Forth in the Work of Thonmi Sambhota.* New Delhi: Ngawang Sopa. 77pp.
- [4] Causemann, Margret. 1989. *Dialekt und Erzählungen der Nangchenpas.* (Beiträge zur tibetischen Erzählforschung 11.) Bonn: VGH Wissenschaftsverlag. 413pp.
- [5] Das, Sarat Chandra. 1915. *An Introduction to the Grammar of the Tibetan Language, with the Texts of Situhi Sum-rTags, Dag-je Sal-wai Mé-long and Situhi Shal-Luñ.* Darjeeling: Darjeeling Branch Press. (Reprinted in 1972, Delhi: Motilal Banarsidass.)
- [6] Francke, August Hermann. 1901. “Sketch of Ladakhi Grammar.” *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 70: 1–63. (Reprint under the title: *Ladakhi and Tibetan grammar.* in 1979, Delhi: Seema Publications.)
- [7] Henderson, Vincent C. 1903. *Tibetan Manual.* Calcutta: Inspector General of Chinese Imperial Maritime Customs. ii+2l.+118+129pp.
- [8] Herrmann, Silke. 1989. *Erzählungen und Dialekt von Dinri.* (Beiträge zur tibetischen Erzählforschung 9.) Bonn: VGH Wissenschaftsverlag. 500pp.
- [9] Huber, Brigitte. 2002. “The Lende Sub-Dialect of Kyirong Tibetan: A Grammatical Description with Historical Annotations.” Ph.D. dissertation, Universität Bern.
- [10] Huber, Brigitte. 2005. *The Tibetan Dialect of Lende (Kyirong): A Grammatical Description with Historical Annotations.* (Beiträge zur tibetischen Erzählforschung 15.) Bonn: VGH Wissenschaftsverlag. xiii+345pp.
- [11] Jäschke, Heinrich August. 1883. *Tibetan Grammar.* London: Trübner. 126pp. (Reprint with addenda by A. H. Francke, assisted by W. Simon in 1929. Berlin: de Gruyter; also with supplement of readings with vocabulary by John L. Mish. 1954. New York: Frederick Ungar Publishing Co.)

- [12] Kelly, Barbara. 2004. "A Grammar and Glossary of the Sherpa Language." *Tibeto-Burman Languages of Nepal: Manange and Sherpa* (Carol Genetti, ed.), Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University, 193–324.
- [13] Kretschmar, Monika. 1986. *Erzählungen und Dialekt der Drokpas aus Südwest-Tibet*. (Beiträge zur tibetischen Erzählforschung 8.) Sankt Augustin: VGH Wissenschaftsverlag. 596pp.
- [14] Kretschmar, Monika. 1995. *Erzählungen und Dialekt aus Südmustang*. (Beiträge zur tibetischen Erzählforschung 12.) Bonn: VGH Wissenschaftsverlag. 230pp.
- [15] Rangan, K. 1979. *Purki Grammar*. (CIIL Grammar Series 5.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. xvii+158pp.
- [16] Read, A. F. C. 1934. *Balti Grammar*. (James G. Forlong Fund, XV.) London: The Royal Asiatic Society. 108pp.
- [17] Schmidt, Ya. 1839. *Grammatika tibetskogo jazyka*. Sanktpeterburgü: Izdannaya Imperatorskoj Akademiei Nauk. 230pp.
- [18] Schroeter, Friedrich Christian Gotthelf (edited by W. Carey). 1826. *A Grammar of the Bhotanta Language*. Serampore. 526pp. (Reprinted under the title *A Grammar of the Bhotanta, or, Boutan Language* in 2000, New Delhi: Asian Educational Services.)
- [19] Sharma, D. D. 1989. "Nyamkad (Nyam-kat)." *Tribal Languages of Himachal Pradesh: Part One*. New Delhi, India: Mittal Publications, 97–196.
- [20] Sharma, D. D. 1989. "Spitian." *Tribal Languages of Himachal Pradesh: Part One*. New Delhi, India: Mittal Publications, 1–96.
- [21] Sharma, D. D. 1989. "Tod (Stod)." *Tribal Languages of Himachal Pradesh: Part One*. New Delhi, India: Mittal Publications, 261–346.
- [22] Sharma, D. D. 1994. *A Comparative Grammar of Tibeto-Himalayan Languages (of Himachal Pradesh & Uttarakhand)*. (Studies in Tibeto-Himalayan Languages 4.) New Delhi: Mittal Publications. xi+286pp.
- [23] Sharma, Devi D. 1998. *A Concise Grammar and Dictionary of Brok-skad*. (Studies in Tibeto-Himalayan Languages 6: Tribal Languages of Ladakh, Part 1.) New Delhi: Mittal Publications. xv+185pp.
- [24] Sharma, Devi D. 2004. *A Descriptive Grammar of Purki & Balti*. (Studies in Tibeto-Himalayan Languages 6: Tribal Languages of Ladakh, Part 3.) New Delhi: Mittal Publications. xx+244pp.

《南チベット系》 **Southern Tibetic**

(1) ゾンカ語 Dzongkha

- [1] Byrne, Quintin. 1990. *A Colloquial Grammar of the Bhutanese Language*. Allahabad: Pioneer Press. 92pp.
- [2] van Driem, George. 1998. *Dzongkha*. (Languages of the Greater Himalayan Region 1.) Leiden: Research School of Asian, African and Amerindian Studies (CNWS), Leiden University. xv+489pp.

《ツァンラ-東チベット系》 **Tsanglic-East Bodish**

(1) ブムタン語 Bumthang

- [1] van Driem, George. 1995. *Grammar of Bumthang: A Language of Central Bhutan*. Dzongkha Development Commission, Royal Government of Bhutan. 62pp.
- [2] van Driem, George. 2015. "Synoptic Grammar of the Bumthang Language: A Language of the Central Bhutan Highlands." *Himalayan Linguistics: Archive* 6: 1-77.

(2) クルテツプ語 Kurtöp

- [1] Hyslop, Gwendolyn. 2011. "A Grammar of Kurtöp." Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. xxxix+729pp. [DL]
- [2] Hyslop, Gwendolyn. 2016. *A Grammar of Kurtöp*. (Brill's Tibetan Studies Library Vol. 18.) Leiden: Brill. 458pp.

(3) ツァンラ語 Tsangla

- [1] Andvik, Erik E. 1999. "Tshangla Grammar." Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. xvii+734pp.
- [2] Andvik, Erik E. 2010. *A Grammar of Tshangla*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 3: Brill's Tibetan Studies Library Vol. 5/3.) Leiden: Brill. 506pp.
- [3] Hofrenning, Ralph W. 1959. *First Bhutanese Grammar: Grammar of Gongar [=Tsangla], Language of East Bhutan*. Chicago. 13pp.
- [4] 张济川 Zhang, Jichuan. 1986. 《仓洛门巴语简志》 [A brief description of Tshangla]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 214pp.

《カイケ-ガレ-タマン系》 **Kaike-Ghale-Tamangic**

(1) マナング語 Manange

- [1] Hildebrandt, Kristine A. 2004. "A Grammar and Glossary of the Manange Language." *Tibeto-Burman Languages of Nepal: Manange and Sherpa* (Carol Genetti, ed.), Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University, 2-189. [DL]

(2) グルン語 Gurung

- [1] Glover, Jessie R. and Gurung, Deu Bahadur. 1979. *Conversational Gurung*. (Pacific Linguistics, Series D-13.) Canberra: Australian National University. vii+216pp.
- [2] Glover, Warren William. 1974. *Sememic and Grammatical Structures in Gurung (Nepal)*. (Summer Institute of Linguistics: Publications in Linguistics 49.) Norman, Oklahoma: The Summer Institute of Linguistics and the University of Texas at Arlington. xxiii+232pp.

(3) カイケ語 Kaike

- [1] Regmi, Ambika. 2013. *A Grammar of Magar Kaike*. (Languages of the World/ Materials 496.) München: Lincom. 209pp.

(4) タマン語 Tamang

- [1] Lee, Sung-Woo. 2011. "Eastern Tamang Grammar Sketch." MA thesis, Graduate Institute of Applied Linguistics. xvii+176pp. [DL]
- [2] Poudel, Kedar Prasad. 2002. "A Descriptive Study of Tamang." Ph.D. dissertation, Kirtipur: Tribhuvan University. 415pp.
- [3] Poudel, Kedar Prasad. 2006. *Dhankute Tamang Grammar*. (Languages of the World/ Materials 454.) München: Lincom. 181pp.
- [4] Yoncan, Amrit. 1997. *Tamang Vyakaran* [Tamang Grammar]. Kathmandu: Royal Nepal Academy.

(5) タカリ語 Thakali

- [1] Georg, Stefan. 1996. *Marphatan Thakali: Untersuchungen zur Sprache des Dorfes Marpha im Oberen Kāli-Ganṇḍaki-Tal/Nepal*. (LINCOM Studies in Asian Linguistics 02.) München: Lincom. 420pp.

《チベット・キナウル系》 Tibeto-Kanauri

(1) ブナン語 Bunan

- [1] Widmer, Manuel. 2014. "A Descriptive Grammar of Bunan." Ph.D. dissertation, Universität Bern. 910pp. [DL]
- [2] Widmer, Manuel. 2017. *A Grammar of Bunan*. (Mouton Grammar Library Vol. 71.) Berlin: De Gruyter Mouton. xxvi+777pp.

(2) ビャンスイ語 Byangsi

- [1] Sharma, Suhnu Ram. 2001. "A Sketch of Byangsi Grammar." *New Research on Zhangzhung and Related Himalayan Languages* (Yasuhiko Nagano and Randy J. Lapolla, eds.), Osaka: National Museum of Ethnology, 271-341.
- [2] Sharma, Suhnu Ram. 2007. *Byangsi Grammar and Vocabulary*. Pune: Deccan College Postgraduate and Research Institute. ix+151pp.

- [3] Trivedi, G.M. 1991. *Descriptive Grammar of Byansi: A Bhotiya Language*. Calcutta: Anthropological Survey of India, Government of India. 233pp.

(3) ダルマ語 Darma

- [1] Krishan, Shree. 2001. "A Sketch of Darma Grammar." *New Research on Zhangzhung and Related Himalayan Languages* (Yasuhiko Nagano and Randy J. Lapolla, eds.), Osaka: National Museum of Ethnology, 347–400.
- [2] Willis, Christina Marie. 2007. "A Descriptive Grammar of Darma: An Endangered Tibeto-Burman Language." Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin. 629pp. [DL]
- [3] Willis, Christina Oko. 2019. *A Grammar of Darma*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 22: Brill's Tibetan Studies Library Vol. 22.) Leiden: Brill.

(4) キナウル(カナウル)語 Kinnauri (Kanauri)

- [1] Bailey, Grahame T. 1909. "A Brief Grammar of the Kanauri Language." *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 63: 661–687. (Reprinted in 1938, *Studies in North Indian Languages*, London: Lund Humphries. 79–105.) [DL]
- [2] Sharma, D.D. 1988. *A Descriptive Grammar of Kinnauri*. (Studies in Tibeto-Himalayan Languages 1.) Delhi: Mittal Publications. xvi+203pp.
- [3] Takahashi, Yoshiharu. 2001. "A Descriptive Study of Kinnauri (Pangi Dialect): A Preliminary Report." *New Research on Zhangzhung and Related Himalayan Languages* (Yasuhiko Nagano and Randy J. LaPolla, eds.) (Senri Ethnological Reports 19), Osaka: National Museum of Ethnology, 97–120. [DL]
- [4] Takahashi, Yoshiharu. 2021. "A Grammatical Manual for the Kinnauri Language (Pangi Dialect)." *Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 4: Link Languages and Archetypes in Tibeto-Burman* (Yasuhiko Nagano and Takumi Ikeda, eds.), 325–373, Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University.

(5) パッタニ語 Pattani

- [1] D.D. Sharma. 1982. *Studies in Tibeto-Himalayan Linguistics: A Descriptive Analysis of Paṭṭani (A Dialect of Lahaul)*. (Panjab University Indological Series 28.) Hoshiapur, New Delhi: Mittal Publications. 242pp.

(6) ロンポ語 Rongpo

- [1] Sharma, Suhnu Ram. 2001. "A Sketch of Rongpo Grammar." *New Research on Zhangzhung and Related Himalayan Languages* (Yasuhiko Nagano and Randy J. Lapolla, eds.), 195–270, Osaka: National Museum of Ethnology.

(7) シャンシュン語 Zhangzhung

- [1] Haarh, Erik. 1968. *The Zhang-zhung Language: A Grammar and Dictionary of the Unexplored Language of the Tibetan Bonpos*. Aarhus og Munksgaard: Aarhus Universitetsforlaget. 43pp.

(8) ラヴルン語 Lavrung

- [1] 黄布凡 Huang, Bufan. 2007. 《拉坞戎语研究》 [A study on the Lavrung language]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京：民族出版社 [The Nationalities Press]. 352pp.
- [2] 尹蔚彬 Yin, Weibin. 2007. 《业隆拉坞戎语研究》 [A study on Yelong Lavrung language]. (中国少数民族语言方言研究丛书.) 北京：民族出版社 [The Nationalities Press]. 395pp.

【ビルマ・チアン語群】 Burmo-Qiangic**《ロロ・ビルマ系》 Lolo-Burmese/ Yipho-Burmese/ Ngwi-Burmese****〈ロロ系〉 Loloish/ Ngwi**

(1) イ語 Yi

A. イノ語

- [1] 曲木铁西 Qumu, Tiexi. 2009. 《彝语义诺话研究》 [Research on the Yino Yi language]. (中国少数民族语言研究丛书.) 北京：民族出版社 [The Nationalities Press]. 337pp.

B. ノス語

- [1] 陈士林 Chen, Shilin, 边仕明 Shiming Bian, 李秀清 Xiuqing Li. 1985. 《彝语简志》 [A brief description of Yi]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京：民族出版社 [The Nationalities Press]. 2+275pp.
- [2] 陈康 Chen, Kang, 巫达 Da Wu. 1998. 《彝语语法》 [A grammar of the Yi language]. 北京：中央民族大学出版社 [The Central University of Nationalities Press]. 328pp.
- [3] Fu, Mao-chi (Fu Maoji). 1950. "A Descriptive Grammar of Lolo." Ph.D. dissertation, University of Cambridge. 382pp.
- [4] Fu, Maoji. 1997. "A Descriptive Grammar of Lolo." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 20: 1-242. [DL]
- [5] 高华年 Gao, Huanian. 1958. 《彝语语法研究》 [A study on Yi grammar]. 北京：科学出版社 [Science Press]. iv+161pp.
- [6] Gerner, Matthias. 2013. *A Grammar of Nuosu*. (Mouton Grammar Library Vol. 64.) Berlin, Boston: De Gruyter Mouton. 543pp.
- [7] 李民 Li, Min, 马明 Ming Ma. 1987. 《凉山彝语语法》 [Grammar of Liangshan Yi]. 成都：四川民族出版社 [Sichuan People's Publishing House]. 2+208pp.
- [8] 张余蓉 Zhang, Yurong, 蔡堃 Kun Cai. 1995. 《现代凉山彝语语法》 [Modern grammar of Liangshan Yi]. 北京：中央民族大学出版社 [The Central University of Nationalities Press]. 164pp.

- C. サニ語 Sani
- [1] 马学良 Ma, Xueliang. 1951. 《撒尼彝语研究》 [Research on the Sani Yi language]. (语言学专刊 2.) 北京: 中国社会科学院 [Chinese Academy of Social Sciences]. 371pp.
- D. 山苏彝语 Shansu Yi
- [1] 许鲜明 Xu, Xianming, 白碧波 Bibo Bai. 2013. 《山苏彝语研究》 [Studies on the Hlersu language]. 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 2+2+466pp.
- (2) ラル語 Lalu
- [1] 王国旭 Wang, Guoxu. 2011. 〈新平彝语腊鲁话研究〉 [A study of Lalu Yi of Xinping County]. 中央民族大学博士论文 [Doctoral dissertation, Beijing: The Central University of Nationalities]. 280pp.
- (3) ラロ語 Lalo
- [1] Björverud, Susanna. 1998. *A Grammar of Lalo*. Doctoral thesis, Department of East Asian Languages, Lund University. xii+175pp.
- (4) ロロボ語 Lolopho
- [1] Merrifield, Judith Thomas. 2010. “Yao’an Lolo Grammar Sketch.” MA thesis, Graduate Institute of Applied Linguistics. 206pp. [DL]
- (5) モアン語 Mo’ang
- [1] 周德才 Zhou, Decai. 2014. 《未昂语研究》 [A study of the Mo’ang language]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 2+6+334pp.
- (6) タル語 Taliu
- [1] 周德才 Zhou, Decai. 2004. 《他留话研究》 [A study of the Taliu language]. 昆明: 云南民族出版社 [Yunnan Nationalities Press]. 297pp.
- (7) アカ語 Akha
- [1] Dellinger, David Whitley. 1969. “Akha: A Transformational Description.” Ph.D. thesis, Canberra: Australian National University. 271pp. [DL]
- (8) リス語 Lisu
- [1] Hope, Edward R. 1974. *The Deep Syntax of Lisu Sentences: A Transformational Case Grammar*. (Pacific Linguistics, Series B-34.) Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University. viii+184pp.
- [2] 徐琳 Xu, Lin, 木玉璋 Yuzhang Mu, 盖兴之 Xingzhi Gai. 1986. 《傈僳语简志》 [A brief description of Lisu]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 155pp.

- [3] Yu, Defen. 2007. *Aspects of Lisu Phonology and Grammar, a Language of Southeast Asia*. (Pacific Linguistics 588.) Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University. 254pp.

(9) ガチユオ語 Kazhuo/ Katso

- [1] 木仕华 Mu, Shihua. 2003. 《卡卓语研究》 [A study of the Kazhuo language]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 350pp.
- [2] Donlay, Chris. 2015. “A Functional Grammar of Khatso.” Ph.D. dissertation, University of California, Santa Barbara. xxviii+868pp. [DL]
- [3] Donlay, Chris. 2019. *A Grammar of Khatso*. Berlin: de Gruyter. xxii+606pp.

(10) ハニ語系

A. ビヨ語 Biyo

- [1] 经典 Jing, Dian. 2015. 《墨江碧约哈尼语参考语法》 [A reference grammar of Mojiang Biyo Hani]. (中国少数民族语言参考语法研究系列丛书 [Chinese Minority Languages Reference Grammar Series].) 北京: 中国社会科学出版社 [China Social Sciences Press]. 515pp.

B. ツォソ語 Cosuo

- [1] 白碧波 Bai, Bibo, 许鲜明 Xianming Xu et al. 2015. 《搓梭语研究》 [A study of Cosao]. 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 437pp.

C. ハニ語 Hani

- [1] 戴庆厦 Dai, Qingxia, 段颢乐 Kuangle Duan. 1995. 《哈尼语概论》 [An introduction to Hani language]. (云南少数民族语言文库.) 昆明: 云南民族出版社 [Yunnan Nationalities Press].
- [2] 李永燧 Li, Yongsui. 1986. 《哈尼语简志》 [A brief description of Hani]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 210pp.
- [3] 李永燧 Li, Yongsui. 1990. 《哈尼语语法》 [A grammar of Hani]. 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 230pp.

D. カドー語 Kaduo

- [1] 赵敏 Min, Zhao, 朱茂云 Maoyun Zhu. 2011. 《墨江哈尼族卡多话参考语法》 [A reference grammar of Mojiang Kaduo]. (中国少数民族语言参考语法研究系列丛书 [Chinese Minority Languages Reference Grammar Series].) 北京: 中国社会科学出版社 [China Social Sciences Press]. 308pp.

E. サドゥ語 Sadu

- [1] 白碧波 Bai, Bibo. 2012. 《撒都语研究》 [A study of Sadu]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 396pp.

F. シモロ語 Ximoluo

- [1] 戴庆厦 Dai, Qingxia, 蒋颖 Jiang, Ying, 崔霞 Xia Cui, 乔翔 Xiang Qiao. 2009. 《西摩洛语研究》 [A study of Ximoluo]. (中国少数民族语言研究丛书.) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 417pp.

G. ウォニ語 Woni

- [1] 杨艳 Yang, Yan. 2016. 〈哈尼语窝尼话研究〉 [A study of the Woni language of Hani]. 上海师范大学博士论文 [Doctoral dissertation, Shanghai Normal University]. 397pp.
- [2] 杨艳 Yang, Yan. 2021. 《哈尼语窝尼话研究》 [A study of the Woni language of Hani]. (云南省哲学社会科学创新团队成果文库 [The new finding series of philosophy and social sciences of Yunnan Province].) 北京: 社会科学文献出版社. 461pp.

(11) チノ語 Jino

- [1] 盖兴之 Gai, Xingzhi. 1986. 《基诺语简志》 [A brief description of Jino]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 189pp.
- [2] 林範彦 Hayashi, Norihiko. 2009. 『チノ語文法（悠楽方言）の記述研究』 [A descriptive study on the grammar of the Jino language (Youle dialect)]. 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所 [Research Institute, Kobe City University of Foreign Studies]. xiii+184+21pp.
- [3] 蒋光友 Jiang, Guangyou. 2010. 《基诺语参考语法》 [A reference grammar of Jino]. (中国少数民族语言参考语法研究系列丛书 [Chinese Minority Languages Reference Grammar Series].) 北京: 中国社会科学出版社 [China Social Sciences Press]. 378pp.

(12) クツォン語 Kucong

- [1] 常俊之 Chang, Junzhi. 2011. 《元江苦聪话参考语法》 [A reference grammar of Yuanjiang Kucong]. (中国少数民族语言参考语法研究系列丛书 [Chinese Minority Languages Reference Grammar Series].) 北京: 中国社会科学出版社 [China Social Sciences Press]. 364pp.

(13) ラフ語 Lahu

- [1] 李春风 Li, Chunfeng. 2014. 《邦朵拉祜语参考语法》 [A reference grammar of Bangduo Lahu]. (中国少数民族语言参考语法研究系列丛书 [Chinese Minority Languages Reference Grammar Series].) 北京: 中国社会科学出版社 [China Social Sciences Press].
- [2] Matisoff, James Alan. 1967. "A Grammar of the Lahu Language." Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.

- [3] Matisoff, James A. 1973. *The Grammar of Lahu*. (University of California Publications in Linguistics 75.) Berkeley and Los Angeles: University of California Press. li+673pp.

(14) ザウゾウ語 Zaozou

- [1] 孙宏开 Sun, Hongkai, 黄成龙 Chenglong Huang, 周毛草 Maocao Zhou. 2002. 《柔若语研究》 [A study of the Zaozou language]. 北京：中央民族大学出版社 [The Central University of Nationalities Press]. 308pp.

〈ビス系〉 **Bisoid**

(1) ビス語 Bisu

- [1] 徐世璇 Xu, Shixuan. 1998. 《毕苏语研究》 [A study of Bisu]. 上海：上海远东出版社 [Shanghai Far East Publishing House]. 272pp.

(2) サンコン語 Sangkong

- [1] 李永燧 Li, Yongsui. 2002. 《桑孔语研究》 [A study of Sangkong]. 北京：中央民族大学出版社 [The Central University of Nationalities Press]. 403pp.

〈ビルマ系〉 **Burmish**

(1) アチャン語 Achang

- [1] 戴庆厦 Dai, Qingxia (编著). 1985. 《阿昌语简志》 [A brief description of Achang]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京：民族出版社 [The Nationalities Press]. 135pp.
- [2] 时建 Shi, Jian. 2007. 《梁河阿昌语参考语法》 [A reference grammar of Lianghe Achang]. (中国少数民族语言参考语法研究系列丛书 [Chinese Minority Languages Reference Grammar Series].) 北京：中国社会科学出版社 [China Social Sciences Press]. 426pp.

(2) ビルマ語 Burmese

- [1] 五十嵐智昭 Igarashi, Tomoaki. 1943. 『ビルマ語文法』 [Burmese grammar]. 東京：旺文社 [Obunsha]. 155pp.
- [2] Latter, Thomas. 1845. *A Grammar of the Language of Burmah*. Calcutta: Thacker and Company, and Osterr, Lepage and Company; London: Smith, Elder and Company, and Osterr, Lepage and Company. 203pp. [DL]
- [3] Lonsdale, Arthur Walter. 1899. *Burmese Grammar and Grammatical Analysis*. Rangoon: British Burma Press. 461pp.
- [4] Mathias, Jenny and San San Hnin Tun. 2016. *Burmese: A Comprehensive Grammar*. (Routledge Comprehensive Grammars.) London, New York: Routledge. 502pp.
- [5] Maun Maun Njun, I.A. Orlova, Je. V. Pusitskij and I.M. Tagunova. 1963. *Birmanskij jazyk*. Moskva: Vostochnaja literatura. 122pp.

- [6] Myint Soe. 1999. "A Grammar of Burmese." Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. 724pp. [DL]
- [7] 岡野賢二 Okano, Kenji. 2007. 『現代ビルマ語文法』 [A grammar of Modern Burmese]. 国際語学社 [Kokusai Gogakusha]. 175pp.
- [8] Okell, John. 1969. *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*, 2 vols. London: Oxford University Press. 498pp.
- [9] 汪大年 Wang, Danian, 楊国影 Guoying Yang (主编). 2016. 『实用缅甸语语法』 [A practical grammar of Burmese]. 北京: 北京大学出版社 [Beijing University Press]. 380pp.
- (3) ラチッ(ラシ)語 Lacid (Lashi)
- [1] 戴庆厦 Dai, Qingxia, 李洁 Jie Li. 2007. 《勒期语研究》 [A study of Leqi]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 中央民族大学出版社 [The Central University of Nationalities Press]. 356pp.
- (4) ロンウォー(マル)語 Lhaovo (Maru)
- [1] Abbey, Walter Bulmer Tate. 1899. *Manual of the Maru Language: Including a Vocabulary of Over 1000 Words*. Rangoon: American Baptist Mission Press. 59pp.
- [2] Clerk, F. V. 1911. *A Manual of the Lawngwaw or Maru Language: Containing the Grammatical Principles of the Language, Glossaries of Special Terms, Colloquial Exercises, and Maru-English and English-Maru Vocabularies*. Rangoon: American Baptist Mission Press. xiii+243pp.
- [3] 戴庆厦 Dai, Qingxia. 2005. 《浪速语研究》 [A study of Langsu]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 262pp.
- (5) ペラ語 Pela
- [1] 戴庆厦 Dai, Qingxia, 蒋颖 Ying Jiang, 孔志恩 Zhi'en Kong. 2007. 《波拉语研究》 [A study of Pela]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 348pp.
- (6) シェンダオ語 Xiandao
- [1] 戴庆厦 Dai, Qingxia, 丛铁华 Tiehua Cong, 李洁 Jie Li, 蒋颖 Ying Jiang. 2005. 《仙岛语研究》 [A study of Xiandao]. 北京: 中央民族大学出版社 [The Central University of Nationalities Press]. 335pp.
- (7) ツァイワ(アツィ)語 Zaiwa (Atsi)
- [1] 徐悉艰 Xu, Xijian, 徐桂珍 Guizhen Xu. 1984. 《景颇族语言简志(载瓦语)》 [A brief description of the Zaiwa language of the Jingpo people]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 176pp.

- [2] Lustig, Anton. 2002. “Zaiwa Grammar.” Doctoral thesis, Leiden University.
- [3] Lustig, Anton. 2010. *A Grammar and Dictionary of Zaiwa*, 2 vols. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 11: Brill’s Tibetan Studies Library Vol. 5/11.) Leiden: Brill. xxvi+1076+xii+562pp.
- [4] 朱艳华 Zhu, Yanhua, 勒排早扎 Zaosha Lepai / 戴庆厦 Dai, Qingxia 审订. 2013. 《遮放载瓦语参考语法》 [A reference grammar of Zhefang Zaiwa]. (中国少数民族语言参考语法研究系列丛书 [Chinese Minority Languages Reference Grammar Series].) 北京: 中国社会科学出版社 [China Social Sciences Press]. 435pp.

《ナ・チアン系》 Na-Qiangic

(1) アルス語 Ersu

- [1] Zhang, Sihong. 2013. “A Reference Grammar of Ersu: A Tibeto-Burman Language of China.” Ph.D. thesis, James Cook University. 851pp. [DL]
- [2] Zhang, Sihong. 2016. *A Reference Grammar of Ersu: A Tibeto-Burman Language of China*. (LINCOM Studies in Asian Linguistics 85.) München: Lincom. 602pp.

(2) ダオフ語 Daofu

- [1] 多尔吉 Duo'erji. 1998. 《道孚语格仕扎话研究》 [A study of Geshizha variety of the Daofu (Horpa) language]. 北京: 中国藏学出版社 [The Chinese Tibetology Press]. 4+298pp.

(3) グイチョン語 Guiqiong

- [1] Li, Jiang. 2015. *A Grammar of Guiqiong: A Language of Sichuan*. (Brill’s Tibetan Studies Library Vol. 15.) Leiden: Brill. xiii+452pp.

(4) ナシ語 Naxi

- [1] Lidz, Liberty A. 2010. “A Descriptive Grammar of Yongning Na (Mosuo).” Ph.D. dissertation, Austin: University of Texas at Austin. 958pp. [DL]

(5) プミ語 Pumi

- [1] Daudey, Henriëtte. 2014. “A Grammar of Wadu Pumi.” Ph.D. thesis, Bandoora: LaTrobe University. 652pp. [DL]
- [2] Ding, Sizhi. 1998. “Fundamentals of Prinmi (Pumi): A Tibeto-Burman Language of Northwestern Yunnan, China.” Ph.D. thesis, Canberra: Australian National University. 770pp. [DL]
- [3] Ding, Picus Sizhi. 2014. *A Grammar of Prinmi: Based on the Central Dialect of Northwest Yunnan, China*. (Brill’s Tibetan Studies Library Vol. 14.) Leiden: Brill. xxii+384pp.
- [4] 蒋颖 Jiang, Ying. 2015. 《大羊普米语参考语法》 [A reference grammar of Dayang Pumi]. (中国少数民族语言参考语法研究系列丛书 [Chinese Minority Languages Reference Grammar Series].) 北京: 中国社会科学出版社 [China Social Sciences Press]. 640pp.

(6) チアン語 Qiang

- [1] Huang, Chenglong. 2004. "A Reference Grammar of the Puxi Variety of Qiang." Ph.D. thesis, University of Hong Kong. xx+341pp. [DL]
- [2] 黄成龙 Huang, Chenglong. 2007. 《蒲溪羌语研究》 [A study of Puxi Qiang]. (中国少数民族语言方言研究丛书.) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 351pp.
- [3] LaPolla, Randy J. and Chenglong Huang. 2003. *A Grammar of Qiang with Annotated Texts and Glossary*. (Mouton Grammar Library Vol. 31.) Berlin: Mouton de Gruyter. xvii+445pp.

(7) ギャロン語 rGyalrong

- [1] Jacques, Guillaume. 2004. "Phonologie et morphologie du Japhug (rGyalrong)." Thèse en vue de l'obtention du Doctorat de Linguistique, Université de Paris 7 - Denis Diderot. 529pp. [DL]
- [2] Jacques, Guillaume. 2008. 《嘉绒语研究》 [Study on the rGyalrong language]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 472pp.
- [3] Jacques, Guillaume. 2021. *A Grammar of Japhug*. (Comprehensive Grammar Library 1.) Berlin: Language Science Press. [DL]
- [4] 長野泰彦 Nagano, Yasuhiko. 2018. 『嘉戎語文法研究』 [A study of the rGyalrong grammar]. 東京: 汲古書院 [Kyuko Shoin].
- [5] Nagano, Yasuhiko. 2022. *rGyalrong: A Comprehensive Grammar*. Tokyo: Fukyosha.
- [6] Prins, Marielle Clazina. 2011. "A Web of Relations: A Grammar of rGyalrong Jiāomùzú (Kyom-kyo) Dialects." Doctoral thesis, Leiden University. 630pp. [DL]
- [7] Prins, Marielle Clazina. 2016. *A Grammar of rGyalrong, Jiāomùzú (Kyom-kyo) Dialects*. (Brill's Tibetan Studies Library Vol. 16.) Leiden: Brill. xxiv+781pp.

(8) 西夏語 Tangut

- [1] Jacques, Guillaume. 2011. "Esquisse de phonologie et de morphologie historique du tangoute." Thèse d'habilitation, Paris. xii+373pp.
- [2] Jacques, Guillaume. 2014. *Esquisse de phonologie et de morphologie historique du tangoute*. (Languages of Asia Vol. 12.) Leiden: Brill. 379pp.
- [3] Keping, K. B. 1985. *Tangutskij jazyk*. Moscow: NAUKA. 370pp.
- [4] Sofronov, Mikhail Viktorovich. 1968. *Grammatika tangutskogo jazyka*, 2 vols. Moscow: NAUKA. 275pp.

(9) ダバ語 Zhaba, nDrapa

- [1] 龚群虎 Gong, Qunhu. 2007. 《扎巴语研究》 [A study of Zhaba]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 285pp.

【ヌン語群】 Nungish

(1) アノン語 Anong

- [1] 孙宏开 Sun, Hongkai, 刘光坤 Guangkun Liu. 2005. 《阿依语研究》 [A study of the Anong language]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 280pp.
- [2] Sun, Hongkai and Guangkun Liu. 2009. *A Grammar of Anong: Language Death Under Intense Contact*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 9: Brill's Tibetan Studies Library Vol. 5/9.) Leiden: Brill. xiv+394pp.

(2) トゥルン語 Trung/ Dulong

- [1] 孙宏开 Sun, Hongkai. 1982. 《独龙语简志》 [A brief description of Drung]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 248pp.
- [2] Perlin, Ross Adam. 2017. "A Grammar of Trung." Ph.D. dissertation, Universität Bern.
- [3] Perlin, Ross Adam. 2019. *A Grammar of Trung*. Santa Barbara: Himalayan Linguistics, University of California, Santa Barbara. xi+457pp. [DL]

【ペー語群】 Macro-Bai

(1) ペー語 Bai

- [1] Wiersma, Grace. 1990. *A Study of the Bai (Minjia) Language along Historical Lines*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley. 428pp. [DL]
- [2] 徐琳 Xu, Lin, 赵衍荪 Yansun Zhao. 1984. 《白语简志》 [A brief description of Bai]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 177pp.
- [3] 杨晓霞 Yang, Xiaoxia. 2014. 〈白语白石话参考语法〉 [A reference grammar of the Baishi Bai language]. 厦门大学博士论文 [Doctoral dissertation, Xiamen University].
- [4] 赵金灿 Zhao, Jincan. 2010. 〈云南鹤庆白语研究〉 [A study of the Heqing Bai language in Yunnan]. 中央民族大学博士论文 [Doctoral dissertation, Beijing: The Central University of Nationalities]. 302pp.
- [5] 赵金灿 Zhao, Jincan. 2011. 《鹤庆白语研究》 [A study of the Heqing Bai language]. (云南民族大学学术文库.) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 352pp.
- [6] 赵燕珍 Zhao, Yanzhen. 2012. 《赵庄白语参考语法》 [A reference grammar of the Zhaozhuang Bai language]. (中国少数民族语言参考语法研究系列丛书 [Chinese Minority Languages Reference Grammar Series].) 北京: 中国社会科学出版社 [China Social Sciences Press]. 303pp.

【トゥチャ語群】 Tujia

(1) トゥチャ語 Tujia

- [1] Brassett, Cecilia, Philip Brassett and Meiyang Lu. 2006. *The Tujia Language*. (Languages of the World/ Materials 455.) München: Lincom. 218pp.
- [2] 田徳生 Tian, Desheng, 何天貞 Tianzhen He, 陈康 Kang Chen. 1986. 《土家语简志》 [A brief description of Tujia]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 209pp.

【カレン語群】 Karenic

《中央カレン》 Central Karen

(1) ゲーバー語 Geba Karen

- [1] Naw Hsar Shee. 2008. "A Descriptive Grammar of Geba Karen." MA thesis, Chiang Mai: Payap University. 281pp. [DL]

(2) 東カヤー語 Eastern Kayah

- [1] Solnit, David B. 1997. *Eastern Kayah Li: Grammar, Texts and Glossary*. Honolulu: University of Hawaii Press. xxviii+385pp.

(3) マヌマノー語 Manumanaw Karen

- [1] Wai Lin Aung. 2013. "A Descriptive Grammar of Kayah Monu." MA thesis, Chiang Mai: Payap University. 210pp. [DL]

《北部カレン》 Northern Karen

(1) ラタ語 Lahta Karen

- [1] Naw, Hsa Eh Ywar. 2013. "A Grammar of Kayan Lahta." MA thesis, Chiang Mai: Payap University. 190pp. [DL]

《周辺カレン》 Peripheral Karen

(1) ポー・カレン語 Pwo Karen

- [1] 加藤昌彦 Kato, Atsuhiko. 2004. 「ポー・カレン語文法」 [A Pwo Karen Grammar]. 東京大学博士論文 [Doctoral dissertation, The University of Tokyo]. xxvi+603pp. [DL]

《南部カレン》 Southern Karen

(1) スゴー・カレン語 Sgaw Karen

- [1] Gilmore, David. 1898. *A Grammar of Sgaw Karen*. Rangoon: American Baptist Mission Press. 122pp.

- [2] Wade, Jonathan. 1842. *The Grammar of the Sgaw and Pho Karen Language*. Tavoy.

【ブラフマプトラ語群】 Brahmaputran

《ジンポー・ルイ系》 Jingpho-Luish

(1) ジンポー語 Jinghpaw

- [1] 戴庆厦 Dai, Qingxia, 徐悉艰 Xijian Xu. 1992. 《景颇语语法》 [The grammar of Jinghpaw]. 北京：中央民族学院出版社 [Central Institute for Nationalities Publishing House]. 521pp.
- [2] 戴庆厦 Dai, Qingxia. 2012. 《景颇语参考语法》 [A reference grammar of Jinghpaw]. (中国少数民族语言参考语法研究系列丛书 [Chinese Minority Languages Reference Grammar Series].) 北京：中国社会科学出版社 [China Social Sciences Press]. 482pp.
- [3] Kurabe, Keita. 2016. “A Grammar of Jinghpaw, from Northern Burma.” Doctoral dissertation, Kyoto University. xi+668pp.
- [4] 刘璐 Lu, Liu. 1985. 《景颇族语言简志》 [Brief description of the Jingpo language of the Jingpo people]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京：民族出版社 [The Nationalities Press]. 126pp.

(2) シンポー語 Singpho

- [1] Morey, Stephen. 2010. *Turung: A Variety of Singpho Language Spoken in Assam*. (Pacific Linguistics 614.) Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University. 700pp.

(3) チャック語 Chak

- [1] 藤原敬介 Huziwaru, Keisuke. 2008. 「チャック語の記述言語学的研究」 [A descriptive linguistic study of the Cak language]. 京都大学博士論文 [Doctoral dissertation, Kyoto University]. lix+942pp.

(4) カドゥー語 Kadu

- [1] Sangdong, David. 2012. “A Grammar of the Kadu (Asak) Language.” Ph.D. thesis, Bandoora: LaTrobe University. 706pp. [DL]

《コニャク系》 Konyak

(1) コニャク語 Konyak

- [1] Nagaraja, K. S. 2010. *Konyak Grammar*. (CIIL Publication 594.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. 192pp.

(2) チャン語 Chang

- [1] Hutton, J. H. 1987. *Chang Language: Grammar and Vocabulary of the Language of the Chang Naga Tribe*. (Revised and Edited by Satkari Mukhopadhyay.) Delhi: Gian Publishing House, Shakti Nagar. vi+121pp.

(3) ボム語 Phom

- [1] Bano, Atiqua. 2008. "A Descriptive Study of Phom Language." Ph.D. thesis, Shillong: North-Eastern Hill University. 330pp. [DL]

(4) ムクロム語 Muklom

- [1] Ngemu, T. 1977. *Moklum Language Guide*. Shillong: The Janambhumi Press. 66pp.

(5) パンワ語 Pangwa

- [1] Rekhung, Winlang. 1988. *Jugli Language Guide*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 60pp.
- [2] Rekhung, Winlang. 1988. *Lungchang Language Guide*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 68pp.
- [3] Rekhung, Winglang. 1999. *Mungshang Language Guide*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 112pp.

(6) ノクテ語 Nocte

- [1] Das Gupta, Kamalesh. 1971. *An Introduction to the Nocte Language*. Shillong: Philology Section, Research Department, North East Frontier Agency. 127pp.

(7) トットサ語 Tutsa

- [1] Rekhung, Winlang. 1992. *Tutsa Language Guide*. Itanagar: Director of Research, Government of Arunachal Pradesh. 124pp.

(8) ハクン・タンサ語 Hakhun Tangsa

- [1] Krishna Boro. 2017. "A Grammar of Hakhun Tangsa." Doctoral dissertation, Eugene: University of Oregon. xxx+622pp.

《ボド・ガロ系》 Bodo-Garo

(1) ボロ(ボド)語 Boro (Bodo)

- [1] Bhattacharya, Pramod Chandra. 1965. "A Descriptive Analysis of the Boro Language." Ph.D. thesis, University of Gauhati. xxiv+380pp. [DL]
- [2] Bhattacharya, Pramod Chandra. 1977. *A Descriptive Analysis of the Boro Language*. Gauhati: Department of Publication, Gauhati University. 24+380pp.

(2) コクボロク(トリブラ)語 Kokborok (Tripura)

- [1] Pai, Pushpa (Karapurkar). 1976. *Kokborok Grammar*. (CIIL Grammar Series 3.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. xviii+144pp.

(3) デオリ語 Deori

- [1] Jacquesson, François. 2005. *Le deuri: Langue tibéto-birmane d'Assam*. (Collection linguistique de la Société de linguistique de Paris 88.) Leuven: Peeters. xxviii+422pp.

(4) ガロ語 Garo

- [1] Burling, Robbins. 1961. *A Garo Grammar*. (Deccan College Monograph Series 25.) Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute. x+95pp.
- [2] Burling, Robbins. 2004. *The Language of the Modhupur Mandi (Garo)*. New Delhi: Bibliophile South Asia, in association with Promilla & Co. Publishers. xii+406+470+239pp. [DL]
- [3] Ingtly, Angela R. Watre. 2008. "Garo Morphology: A Descriptive Analysis." Ph.D. thesis, Shillong: North-Eastern Hill University. 324pp. [DL]

(5) アトン語 Atong

- [1] van Breugel, Seino. 2008. "A Grammar of Atong." Ph.D. thesis, Bandoora: LaTrobe University. 760pp. [DL]
- [2] van Breugel, Seino. 2014. *A Grammar of Atong*. (Brill's Studies in South and Southwest Asian Languages Vol. 5.) Leiden: Brill. xl+660pp.

(6) ラバ語 Labha

- [1] Joseph, U. V. 2007. *Rabha*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 1: Brill's Tibetan Studies Library Vol. 5/1.) Leiden: Brill. xxxi+858pp.

【クキ・チン・ナガ語群】 Kuki-Chin-Naga

《中央クキ・チン系》 Central Kuki-Chin

(1) ボム語 Bawm

- [1] Schwerli, Verena. 1979. "A Grammar of the Bawm Language." Ph.D. dissertation, Ithaca: Cornell University. 346pp.
- [2] Reichle, Verena. 1981. *Bawm Language and Lore: Tibeto-Burman Area*. (Europäische Hochschulschriften: Reihe XXI: Linguistik 14.) Frankfurt am Main: Peter Lang. 255pp.

(2) フマール語 Hmar

- [1] Dutta Baruah, P. N. and V. L. T. Bapui. 1996. *Hmar Grammar*. (Tribal Language Publications: Hmar.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. vii+157pp.

(3) ミゾ(ルシャイ)語 Mizo (Lushai)

- [1] Chhange, Lalnunthangi. 1993. "Mizo Syntax." Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. 234pp.
- [2] Chhange, Lalnunthangi. 2000. *Mizo Syntax*. (LINCOM Studies in Asian Linguistics 34.) München: Lincom. 260pp.
- [3] Lorrain, J. Herbert and Fred. W. Savidge. 1898. *A Grammar and Dictionary of the Lushai Language (Dulien Dialect)*. Shillong: Assam Secretariat Government Printing Office. 346pp. (Reprint under the title *The Lushai Grammar and Dictionary* in 1984, Delhi: Cultural Publishing House.)

《マラ系》 **Maraic**

(1) マラ(ラケル)語 Mara (Lakher)

- [1] Arden, Michelle J. 2010. "A Phonetic, Phonological, and Morphosyntactic Analysis of the Mara Language." MA thesis, San Jose State University. 179pp. [DL]
- [2] Lorrain, Reginald Arthur. 1951. *Grammar and Dictionary of the Lakher or Mara Language*. Gauhati, Assam: Department of Historical and Antiquarian Studies, Government of Assam. x+372pp.

《古クキ系》 **Old Kuki**

(1) チョテ語 Chothe

- [1] Singh, Hidam Brojen. 2000. "A Descriptive Grammar of Chothe." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. xiii+317pp.
- [2] Singh, Hidam Brojen. 2008. *Chothe Grammar: A Descriptive Grammar of Chothe*. New Delhi, India: Akansha Publishing House. xxii+233pp.

(2) コイレーン語 Koireng

- [1] Singh, Chungkham Yasawanta. 2010. *Koireng Grammar*. New Delhi & Guwahati: Akansha Publishing House. 250pp.
- [2] Waikhom, Kunjalata Devi. 2013. "A Descriptive Grammar of Sadu Koireng." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. 385pp. [DL]

(3) モヨン語 Moyon

- [1] Devi, Kongkham Hemabati. 1989. "A Descriptive Study of the Moyon Language." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. 406pp. [DL]
- [2] Kosha, Donald. 2010. "A Descriptive Grammar of Moyon." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. vii+257pp. [DL]

(4) タラオ語 Tarao

- [1] Singh, Chungkham Yashwanta. 2002. *Tarao Grammar*. New Delhi: Akansha Publishing House. xii+147pp.

《周辺クキ・チン系》 **Peripheral Kuki-Chin**

(1) スィムテ語 Simte

- [1] Naorem, Brojen Singh. 2009. "Simte Grammar." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. 247pp. [DL]

(2) スィイン(スィザン)語 Siyin (Sizang)

- [1] Sarangthem, Bobita. 2010. "Sizang (Siyin) Grammar." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. 293pp. [DL]

(3) ゴー語 Zou (Zo)

- [1] Singh, Lukram Himmat. 2013. "A Descriptive Grammar of Zou." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. ix+248+iii pp. [DL]
- [2] Tungdim, Philip Thangliênông. 2012. "A Descriptive Grammar of the Zo Language." Ph.D. thesis, New Delhi: Jawaharlal Nehru University. xxiii+295pp.

(4) カラム語 Kharam

- [1] Singh, Khaidem Dutta. 2014. "A Descriptive Study of Kharam: An Endangered Language of Northeastern India." Ph.D. thesis, Silchar: Assam University. 243pp. [DL]

(5) ティディム語 Tedim

- [1] Cing, Zam Ngaih. 2017. "A Descriptive Grammar of Tedim Chin." Ph.D. thesis, Shillong: North-Eastern Hill University. 296pp. [DL]
- [2] 大塚行誠 Otsuka, Kosei. 2011. 「ティディム・チン語（ミャンマー連邦）の文法記述」 [A grammatical description of Tedim Chin, Myanmar]. 東京大学博士論文 [Doctoral dissertation, The University of Tokyo]. 527pp.

(6) タード語 Thadou

- [1] Haokip, Marykim. 2014. "Grammar of Thadou-Kuki: A Descriptive Study." Ph.D. thesis, New Delhi: Jawaharlal Nehru University. 321pp. [DL]

(7) アショー語 Asho

- [1] Zakaria, Muhammad. 2017. "A Grammar of Hyow." Ph.D. thesis, Singapore: Nanyang Technological University. xxx+851pp. [DL]

(8) ダーイ語 Daai

- [1] So-Hartmann, Helga. 2009. *A Descriptive Grammar of Daai Chin*. (STEDT Monograph Series 7.) Berkeley: University of California, Berkeley. 392pp. (Publication of Ph.D. thesis, School of Oriental and African Studies, University of London, 2008.) [DL]

《アンガミ・アオ系》 **Angami-Ao**

(1) アンガミ語 Angami

- [1] Giridhar, P.P. 1980. *Angami Grammar*. (CIIL Grammar Series 6.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. viii+107pp.
- [2] Kuolie, Duovituo. 2004. "Structural Description of Tenyidie: A Tibeto-Burman Language of Nagaland." Ph.D. thesis, Poona: Deccan College. x+299pp.
- [3] Kuolie, Duovituo. 2006. *Structural Description of Tenyidie: A Tibeto-Burman Language of Nagaland*. Kohima, Nagaland: Ura Academy Publication Division. 288pp.

(2) ケジャ語 Khezha

- [1] Kapfo, Kedusto. 1992. "Khezha: A Descriptive Analysis." Ph.D. dissertation, University of Mysore. xiv+372+vi pp. [DL]
- [2] Kapfo, Kedutso. 2005. *The Ethnology of the Khezhas and the Khezha Grammar*. (CIIL Publication 531.) Mysore: Central Institute of Indian languages. xviii+312pp.

(3) マオ・ナガ語 Mao Naga

- [1] Giridhar, P.P. 1994. *Mao Naga Grammar*. (CIIL Silver Jubilee Publication Series.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. x+502pp.

(4) スイミ(セマ)語 Simi (Sema)

- [1] Sreedhar, Mangadan Veetil. 1980. *Sema Grammar*. (CIIL Grammar Series 7.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. x+195pp.

(5) アオ語 Ao

- [1] Clark, E. W. 1893. *The Ao-Naga Grammar with Illustrations, Phrases and Vocabulary*. Shillong: Assam Secretariat Printing Office. 196pp. (Republished in 1981, Delhi: Gian Publishing House.)
- [2] Coupe, Alexander Robertson. 2006. *A Grammar of Mongsen Ao*. (Mouton Grammar Library Vol. 39.) Berlin: Mouton de Gruyter. xxiii+526pp.
- [3] Gowda, K. S. Gurubasave. 1975. *Ao Grammar*. (CIIL Grammar Series 1.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. 76pp.

(6) ロタ語 Lotha

- [1] Acharya, K. P. 1983. *Lotha Grammar*. (CIIL Grammar series 10.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. xvi+166pp.

(7) バラ語 Para

- [1] Barkman, Tiffany. 2014. "A Descriptive Grammar of Jejara (Para Naga)." MA thesis, Chiang Mai: Payap University. 245pp. [DL]

《ゼメ系》 Zemeic

(1) ロンメイ(カブイ, インプイ)語 Rongmei (Kabui, Inpui)

- [1] Devi, Waikhom Pinky. 2014. "A Descriptive Grammar of Inpui." Ph.D. thesis, Silchar: Assam University. 236pp. [DL]
- [2] Ibopishak Singh, P. 1990. *Kabui (Rongmei) Grammar*. Imphal: Directorate for the Development of Tribals and Backward Classes, Govt. of Manipur. xv+214pp.
- [3] Tiwari, Surendra Kumar. 1971. "A Descriptive Grammar of Kabui." Ph.D. thesis, Poona: Deccan College. 296pp.

《タンクール・マリン系》 **Tangkhul-Maring**

(1) タンクール語 Tangkhul

- [1] Arokianathan, S. 1987. *Tangkhul Naga Grammar*. (CIIL Grammar Series 16.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. xvi+164pp.
- [2] Devi, Khuraijam Jayshree. 2014. “Tangkhul Grammar (A Descriptive Model).” Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. 327pp. [DL]
- [3] Devi, Takhellambam Bijaya. 2014. “Descriptive Grammar of Kabrang Tangkhul.” Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. 223pp. [DL]
- [4] Pettigrew, William. 1918. *Tangkhul Naga Grammar and Dictionary*. Shillong: Assam Secretariat Printing Office. 476pp. (Republished in 1979 by Tangkhul Naga Baptist Convention, Ukhrul, Manipur.)

《カルビ系》 **Karbic**

(1) カルビ(ミキル)語 Karbi (Mikir)

- [1] Grüßner, Karl-Heinz. 1978. *Arleng Alam, Die Sprache der Mikir: Grammatik und Texte*. (Beiträge zur Südasiensforschung 39.) Wiesbaden: Franz Steiner. 236pp. (An enlargement of the author's thesis, Heidelberg.)
- [2] Jeyapaul, V. Y. 1987. *Karbi Grammar*. (CIIL Grammar Series 15.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. xii+171pp.
- [3] Konnerth, Linda. 2014. “A Grammar of Karbi.” Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. 793pp. [DL]
- [4] Konnerth, Linda. 2020. *A Grammar of Karbi*. (Mouton Grammar Library Vol. 82.) Berlin: De Gruyter Mouton. xxix+664pp.

《メイテイ(マニプル)語》 **Meithei (Manipuri)**

- [1] Chelliah, Shobhana Lakshmi. 1992. “A Study of Manipuri Grammar.” Ph.D. dissertation, The University of Texas at Austin. 584pp.
- [2] Chelliah, Shobhana Lakshmi. 1997. *A Grammar of Meithei*. (Mouton Grammar Library Vol. 17.) Berlin, New York: Mouton de Gruyter. xxv+539pp.
- [3] Devi, Madhubala P. 1979. “Manipuri Grammar.” Ph.D. thesis, Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute. xviii+249pp. [DL]
- [4] Pettigrew, William. 1912. *Manipuri (Meitei) Grammar*. Allahabad: Pioneer Press.
- [5] Primrose, Arthur John. 1887. *A Manipuri Grammar, Vocabulary, and Phrase Book*. Shillong: Assam Secretariat Press. viii+102pp.

- [6] Shankara Bhat, Darbhe N. and M. S. Ningomba. 1997. *Manipuri Grammar*. (LINCOM Studies in Asian Linguistics 4.) München: Lincom. ix+343pp.
- [7] Singh, Chungkham Yashwanta. 2000. *Manipuri Grammar*. New Delhi: Rajesh. xii+242pp.
- [8] Thoudam, Purna C. 1980. "A Grammatical Sketch of Meiteiron." Ph.D. thesis, New Delhi: Jawaharlal Nehru University. 252pp. [DL]

【ヒマラヤ語群】 Himalayish

《キランティ系》 Kiranti

(1) リンブ語 Limbu

- [1] van Driem, George. 1987. *A Grammar of Limbu*. (Mouton Grammar Library Vol. 4.) Berlin: Mouton de Gruyter. xxviii+565pp.
- [2] Tumbahang, Govinda Bahadur. 2007. "A Descriptive Grammar of Chhatthare Limbu." Ph.D. Dissertation, Tribhuvan University. 375pp. [DL]
- [3] Tumbahang, Govinda Bahadur. 2011. *A Grammar of Limbu*. Kirtipur: Centre for Nepal and Asian Studies. 360pp.

(2) クルン語 Kulung

- [1] Tolsma, Gerard J. 1999. "A Grammar of Kulung." Doctoral thesis, Leiden University. x+243pp.
- [2] Tolsma, Gerard J. 2006. *A Grammar of Kulung*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 4: Brill's Tibetan Studies Library Vol. 5/4.) Leiden: Brill. 286pp.

(3) バンタワ語 Bantawa

- [1] Doornenbal, Marius Albert. 2009. "A Grammar of Bantawa: Grammar, Paradigm Tables, Glossary and Texts of a Rai Language of Eastern Nepal." Doctoral thesis, Leiden University. 513pp. [DL]
- [2] Rai, Novel Kishore. 1985. "A Descriptive Study of Bantawa." Ph.D. thesis, Poona: Deccan College. 315pp. [DL]

(4) チャムリン語 Chamling

- [1] Rai, Vishnu Prasad Singh. 2012. "A Grammar of Chamling." Ph.D. dissertation, Universität Bern. 206pp.
- [2] Rai, Vishnu Prasad Singh. 2013. *A Grammar of Chamling*. Kathmandu: Sahadev Maharjan. xi+206pp.

(5) プマ語 Puma

- [1] Sharma, Narayan Prasad. 2014. "Morphosyntax of Puma, a Tibeto-Burman Language of Nepal." Ph.D. thesis, University of London. 486pp. [DL]

- (6) アトパレ語 Athpare
[1] Ebert, Karen Heide. 1997. *Athpare Grammar*. (LINCOM Studies in Asian Linguistics 1.) München: Lincom.
- (7) チンタン語 Chintang
[1] Paudyal, Netra Prasad. 2015. "Aspects of Chintang Syntax." Ph.D. thesis, Universität Zürich. xiii+305pp.
- (8) ヤッカ語 Yakkha
[1] Schackow, Diana. 2014. "A Grammar of Yakkha." Doctoral dissertation, Universität Zürich. 578pp.
[2] Schackow, Diana. 2015. *A Grammar of Yakkha*. (Studies in Diversity Linguistics 7.) Berlin: Language Science Press. 622pp. [DL]
- (9) ヤンプ語 Yamphu
[1] Rutgers, Roland. 1998. *Yamphu: Grammar, Texts & Lexicon*. (Languages of the Greater Himalayan Region 2.) Leiden: Research School of Asian, African and Amerindian Studies (CNWS), Leiden University. xx+632pp.
- (10) ジェルン(ジェロ)語 Jerung (Jero)
[1] Ogenort, Jean-Robert. 2005. *A Grammar of Jero, with a Historical Comparative Study of the Kiranti Languages*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 3: Brill's Tibetan Studies Library Vol. 5/3.) Leiden: Brill. xxv+404pp.
- (11) ワムブレ(ウムブレ)語 Wambule (Umbule)
[1] Ogenort, Jean Robert. 2002. "The Wambule Language." Doctoral thesis, Leiden University. xxix+615pp.
[2] Ogenort, Jean Robert. 2004. *A Grammar of Wambule: Grammar, Lexicon, Texts and Cultural Survey of a Kiranti Tribe of Eastern Nepal*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 2: Brill's Tibetan studies library, Vol. 5/2.) Leiden: Brill. xxix+900pp.
- (12) スンワル語 Sunwar
[1] Borchers, Dörte. 2008. *A Grammar of Sunwar: Descriptive Grammar, Paradigms, Texts, and Glossary*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 7: Brill's Tibetan Studies Library Vol. 5/7.) Leiden: Brill. 315pp.
[2] Rapacha, Lal B. 2005. "A Descriptive Grammar of Kirānti-Kōits." Ph.D. thesis, New Delhi: Jawaharlal Nehru University. 644pp. [DL]
- (13) ハユ(ヴァユ, ワユ)語 Hayu (Vayu, Wayu)
[1] Michailovsky, Boyd. 1981. "Grammaire de la langue hayu (Nepal)." Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley. 324pp. [DL]

(14) トゥルン語 Thulung

- [1] Allen, Nicholas Justin. 1975. *Sketch of Thulung Grammar*. New York: Cornell University China-Japan Program.
- [2] Lahaussais, Aimée. 2002. "Aspects of the Grammar of Thulung Rai: An Endangered Himalayan Language." Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley. 384pp. [DL]

(15) ドゥミ語 Dumi

- [1] van Driem, George. 1993. *A Grammar of Dumi*. (Mouton Grammar Library Vol. 10.) Berlin: Mouton de Gruyter. 452pp.

《カム・マガル系》 Kham-Magar

(1) カム語 Kham

- [1] Thāpā Magar, H. B. 1993. *An Introduction to the Kham Magaranti Language - Khām Magarānti Bhāṣāko Paricay*. Kathmandu: Mrs Sitā Devī Thāpā Magar.
- [2] Watters, David E. 1998. "The Kham Language of West-Central Nepal (Takale Dialect)." Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. 839pp.
- [3] Watters, David E. 2002. *A Grammar of Kham*. (Cambridge Grammatical Descriptions.) Cambridge: Cambridge University Press. 480pp.

(2) マガル語 Magar

- [1] Grunow-Hårsta, Karen A. 2008. "A Descriptive Grammar of Two Magar Dialects of Nepal: Tanahu and Syangja Magar." Ph.D. dissertation, University of Wisconsin-Milwaukee. 642pp.
- [2] Subba, Subhadra. 1972. "Descriptive Analysis of Magar: A Tibeto-Burman Language." Ph.D. thesis, Poona: Deccan College. x+255pp. [DL]

(3) ブジェル語 Bujhyal

- [1] Regmi, Dan Raj. 2007. "The Bhujel Language." Ph.D. dissertation, Kirtipur: Tribhuvan University. 513pp.

(4) ドゥラ語 Dura

- [1] Schorer, Nicolas. 2016. *The Dura Language: Grammar and Phylogeny*. (Brill's Tibetan Studies Library Vol. 17.) Leiden: Brill. xviii+456pp.

《ネワール系》 Newari

(1) ネワール語 Newar

- [1] Genetti, Carol Elaine. 1990. "A Descriptive and Historical Account of the Dolakha Newari Dialect." Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. 383pp.
- [2] Genetti, Carol. 1994. *A Descriptive and Historical Account of the Dolakha Newari Dialect*. (Monumenta Serindica 24.) Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies. 278pp.

- [3] Genetti, Carol. 2007. *A Grammar of Dolakha Newar*. (Mouton Grammar Library Vol. 40.) Berlin, New York: Mouton de Gruyter. xv+595pp.
- [4] Hale, Austin and Kedar P. Shrestha. 2006. *Newār (Nepāl Bhāsā)*. (Languages of the World/Materials 256.) München: Lincom. 272pp.
- [5] Joshī, Sundar K. 1984. “A Descriptive Study of the Bhaktapur Dialect of Newari.” Ph.D. thesis, Poona: Deccan College. xvi+405pp. [DL]

(2) タンミ語 Thangmi

- [1] Turin, Mark. 2006. “A Grammar of the Thangmi language: With an Ethnolinguistic Introduction to the Speakers and Their Culture.” Doctoral thesis, Leiden University. 801pp. [DL]
- [2] Turin, Mark. 2011. *A Grammar of the Thangmi Language: With an Ethnolinguistic Introduction to the Speakers and Their Culture*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 6: Brill’s Tibetan Studies Library Vol. 5/6.) Leiden: Brill. 1000pp.

(3) バラム語 Baram

- [1] Kansakar, Tej R., Yogendra P. Yadava, Krishna Prasad Chalise, Balaram Prasain, Dubi Nanda Dhakal and Krishna Paudel. 2011. *A Grammar of Baram*. Kathmandu: Central Department of Linguistics and National Foundation for Development of Indigenous Nationalities. xiii+286pp.

《レプチャ(ロン)語》 Lepcha (Rong)

- [1] Mainwaring, G.B. 1876. *A Grammar of the Róng (Lepcha) Language as It Exists in the Dorjeling and Sikim Hills*. Calcutta: Baptist Mission Press. 166pp. (Reprinted in 1971, New Delhi: Mānjūsrī Pub. House.)
- [2] Plaisier, Heleen. 2006. “A Grammar of Lepcha.” Doctoral thesis, Leiden University. 226pp. [DL]
- [3] Plaisier, Heleen. 2007. *A Grammar of Lepcha*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 5: Brill’s Tibetan Studies Library Vol. 5/5.) Leiden: Brill. 273pp.
- [4] Sinhā, Prabhakar. 1966. “A Descriptive Grammar of Lepcha.” Ph.D. thesis, Poona: Deccan College. xvi+393pp. [DL]
- [5] Tāmsáng, Kharpo. 1978. *Róngringthrim: A Grammar of the Lepcha Language*. Kalimpong: Lyangsong Tamsang.

【タニ語群】 Macro-Tani

(1) ミラン語 Milang

- [1] Yankee Modi. 2017. “The Milang Language: Grammar and Texts.” Ph.D. dissertation, Universität Bern. 705pp. [DL]

(2) アパタニ語 Apatani

- [1] Abraham, P. T. 1985. *Apatani Grammar*. (CIIL Grammar Series 12.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. xii+187pp.

(3) ボカル(ラモ)語 Bokar (Ramo)

- [1] Badu, Tapoli. 1994. *Pailibo Language Guide*. (Arunachal Language Series 31.) Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 92pp.
- [2] Badu, Tapoli. 2004. *Ramo Language Guide*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 111pp.
- [3] Megu, Shri Arak. 1990. *Bokar Language Guide*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 150pp.
- [4] Megu, Arak. 2003. *Aashing Language Guide*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 97pp.
- [5] 欧阳觉亚 Ouyang, Jueya. 1985. 《珞巴族语言简志(崩尼-博嘎尔语)》[A brief description of the Language of Lhoba people (Bengni-Bogaer language)]. (中国少数民族语言简志丛书 [Brief Descriptions of Minorities Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 121pp.

(4) ナー語 Nah

- [1] Pertin, Kabuk. 1994. *Nah Language Guide*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 106pp.

(5) タギン語 Tagin

- [1] Das Gupta, K. 1983. *An Outline on Tagin Language*. Shillong: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 70pp.

(6) ガロ語 Galo

- [1] Das Gupta, Kamalesh. 1963. *An Introduction to the Gallong Language*. Shillong: North-East Frontier Agency. 138pp.
- [2] Das Gupta, Kamalesh. 1972. *Galo Language Guide*. Shillong: North-East Frontier Agency. 76pp.
- [3] Post, Mark W. 2007. "A Grammar of Galo." Ph.D. thesis, Bandoora: LaTrobe University. 947pp. [DL]

(7) ニシ(ダフラ)語 Nishi (Dafla)

- [1] Das Gupta, Kamalesh. 1969. *Dafla Language Guide*. Shillong: Philological Section, Research Department, North East Frontier Agency. 114pp.
- [2] Goswami, S. N. 1995. *Nishing (Bangni) Language Guide*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. xi+109pp.

- [3] Hamilton, R. C. 1900. *An Outline Grammar of the Dafla Language: as Spoken by the Tribes Immediately South of the Apa Tanang Country*. Shillong: Assam Secretariat Printing Office. vi+127+i pp.
- [4] Simon, Ivan Martin. 1976. *Hill Miri Language Guide*. Shillong: Philological Section, Research Department, Government of Arunachal Pradesh. 101pp.
- (8) タンガム語 Tangam
- [1] Badu, Tapoli. 2004. *Tangam Language Guide*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 64pp.
- [2] Post, Mark W. 2017. *The Tangam Language: Grammar, Dictionary and Texts*. (Brill's Tibetan Studies Library Vol. 19.) Leiden: Brill. xix+301pp.
- (9) ミスイン語 Mising
- [1] Needham, Jack F. 1886. *An Outline Grammar of the Shaiyâng Miri Language*. Shillong: Assam Secretariat Press. 155pp.
- [2] Prasad, Bal Ram, G. Devi Prasada Sastry and P. T. Abraham. 1991. *Mising Grammar*. (CIIL Grammar Series 17.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. xii+132pp.

【ディマール語群】 Dhimalish

- (1) ディマール語 Dhimal
- [1] King, John Timothy. 2008. "A Grammar of Dhimal." Doctoral thesis, Leiden University. 667pp. [DL]
- [2] King, John T. 2009. *A Grammar of Dhimal*. (Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 8: Brill's Tibetan Studies Library Vol. 5/8.) Leiden: Brill. xv+612pp.

【コ・ブワ語群】 Kho-Bwa

- (1) ブグン語 Bugun
- [1] Dondrup, Rinchin. 1990. *Bugun Language Guide*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. vi+101pp.
- (2) 東プロイク語 Eastern Proik
- [1] 李大勤 Li, Daqin. 2004. 《苏龙语研究》 [A study of Sulung]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 263pp.
- [2] Tayeng, Aduk. 1990. *Sulung Language Guide*. Shillong: The Director of Information and Public Relations, Arunachal Pradesh. 72pp.

(3) 西プロイク語 Western Puroik

- [1] Ismael Lieberherr. 2017. "A Grammar of Bulu Puroik." Ph.D. dissertation, Universität Bern. 698pp. [DL]

(4) ドゥフンビ語 Duhumbi

- [1] Bodt, Timotheus Adrianus. 2017. "Grammar of Duhumbi (Chugpa)." Ph.D. dissertation, Universität Bern. 1047pp.
- [2] Bodt, Timotheus Adrianus. 2020. *Grammar of Duhumbi (Chugpa)*. (Brill's Tibetan Studies Library Vol. 23; Languages of the Greater Himalayan Region Vol. 23.) Leiden: Brill. xxvi+763pp.

(5) シェルドゥクペン語 Sherdukpen

- [1] Dondrup, Rinchin. 1988. *A Hand Book on Sherdukpen*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 78pp.
- [2] François Jacquesson. 2015. *An Introduction to Sherdukpen Language*. Bochum: Brockmeyer. xi+275pp.

【クマン・マヨル語群】 Kman-Mayor

(1) クマン語 Kman

- [1] 李大勤 Li, Daqin. 2002. 《格曼语研究》 [A study of the Geman language]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 324pp.

【ミジ語群】 Miji

(1) サジャロン(ミジ)語 Sajalong (Miji)

- [1] Simon, I. M. 1979. *Miji Language Guide*. Shillong: Philological Section, Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh. 84pp.

【ミシュミ語群】 Mishmic

(1) トーラ(タラオン, ディガール)語 Tawra (Taraon, Digaru)

- [1] 江荻 Jiang, Di, 李大勤 Daqin Li, 孙宏开 Hongkai Sun. 2013. 《达让语研究》 [A study of the Taraon language]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 415pp.
- [2] Sastry, G. Devi Prasada. 1984. *Mishmi Grammar*. (CIIL Grammar Series 11.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. xii+212pp.

(2) イドゥ語 Idu

- [1] 江荻 Jiang, Di. 2005. 《义都语研究》 [A study of the Yidu language]. (中国新发现语言研究丛书 [Newly Found Minority Languages in China Series].) 北京: 民族出版社 [The Nationalities Press]. 289pp.

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」(2016-2017年度)の成果の一部である。

ブルシャスキー語の文法書について

吉岡 乾

Reference Grammars on Burushaski

YOSHIOKA, Noboru

Keywords: Burushaski, reference grammar, descriptive linguistics

キーワード: ブルシャスキー語, 参照文法, 記述言語学

1. ブルシャスキー語・概説
2. 文法書・スケッチ一覧
3. 記述上の諸問題

1. ブルシャスキー語・概説

ブルシャスキー語は、パキスタン北部やインド北西部を中心に話されている、系統的孤立語 (language isolate) である (図1)。話者の中核をなしている民族はブルシヨ人と呼ばれる人々であり、話者人口は概算で10万人に上る。一般に使用されている文字はない。

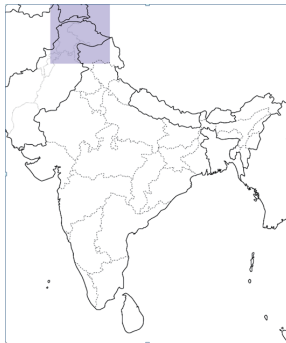


図1 南アジアの中での位置

吉岡乾. 2022. 「ブルシャスキー語の文法書について」. 渡辺己・澤田英夫(編) 『参照文法書研究』. (アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 183–199. DOI: <https://doi.org/10.15026/116965>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

1.1. 地理・方言

その主な分布地域は3つの飛び地で構成されている（図2）。



図2 ブルシャスキー語の分布図

その1箇所めは、パキスタンのギルギット・バルティスタン州(旧 北部地域)ギズル県のヤスイン谷（図3、左）であり、ブルシャスキー語の分布の中では最も西に位置している。

2箇所めは、その東に直線距離で100–150kmほど離れた位置でフンザ川を挟んで向かい合っている同州フンザ県フンザ谷とナゲル県ナゲル谷、並びに、フンザ谷上流に位置するゴジャール谷（図3、右）であり、3つの飛び地の中で最も話者人口、地域内での話者率の高い地域になっている。

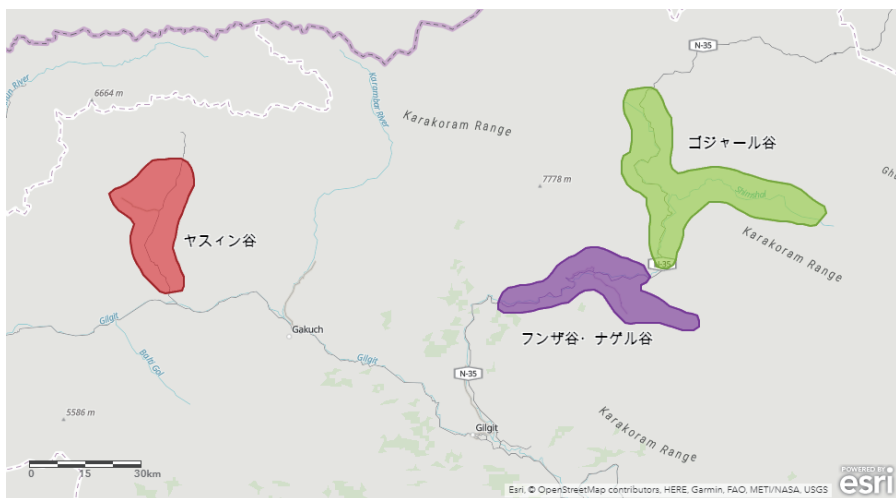


図3 パキスタン北部のブルシャスキー語が話されている谷

3箇所めはインドのジャンムー・カシミール州スリナガル市の中央東にあるダル湖の西、ハリ・

パルバト城の東の麓に位置する、ボタ・ラージ地区（図4）である。ここは19世紀後半に移民したブルショ人（バルティ人も含む）の居住区であり、他にもスリナガル市郊外などに同民族は住んでいるものの、それらの地区の中で一番、言語保存度が高いであろうと考えられる場所である。ボタ・ラージ地区のブルシャスキー語話者は2017年現在で、400-500人ほどである。



図4 スリナガル市の中のボタ・ラージ地区の位置

次に示している図5は、筆者による、2019年までの現地調査に基づいての、暫定的なブルシャスキー語の方言分類である。調査した限りでの分類であるため、地域によって疎密差がある上、他の研究との間の照合を行っていないものであることも念頭に置いた上で参照されたい。東西で言語的に大きな隔たりがあることから、ここでは、ヤスィン（とその周辺の）方言を「西ブルシャスキー語」、それ以外の方言をまとめて「東ブルシャスキー語」と呼んでいる。参考までに、Backstrom (1992: 40) によると、その東西間の基礎語彙共通度は70%程度であり、東ブルシャスキー語内でのフンザ・ナゲル間の共通度は95%程度と算出されている。

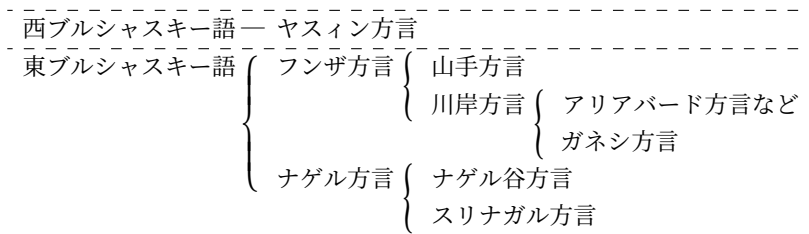


図5 ブルシャスキー語の方言

但し、図5ではすっぱりと切り分けてはいるが、フンザ谷で話されているガネシ方言は、フンザ方言の中では最もナゲル方言的な特徴が強い。これはガネシ村が、フンザ谷とナゲル谷とを結ぶ主要な道路の関所的な位置にあり、ナゲル谷との接点であるためであると考えられる。一方でスリナガル方言は、フンザ方言的な特徴も有している。19世紀後半のこの地区への移民の内訳は、ナゲル谷出身のブルシャスキー語話者が最も多く、次にスカルドゥ周辺のバルティ人（バルティ語話者）、それに次いでフンザ谷のブルシャスキー語話者、という比率だったらしい。そのために、スリナガル方言はナゲル方言がベースになっているのだと考えられる。

1.2. 文法概要

ブルシャスキー語は膠着性の強い言語で、接尾辞と接頭辞とを用いる。数の上では接尾辞が多いものの、周辺言語で接頭辞が用いられることが殆どない¹のと比べて、圧倒的に多くの接頭辞を用いている²。語順は基本的にSV/AOVで、主要部後置型の pro-drop 言語である。格関係が接尾辞で示され、語順の自由度は高い。周辺言語との目立った異なりとして、名詞クラスが大きく4つに分かれることも挙げられる：ヒト男性、ヒト女性、具象物、抽象物。

音韻的にはインド的特徴である無気・有気の対立（但し無声子音のみ）や反舌音系列があり、周辺の音素として鼻母音も見受けられる。音節構造はCVCを基本としていて、語頭音節オンセットでのCr-や語末音節コーダでの-CCという子音クラスタもあるが、数も種類も少ない。（弁別的）アクセントはピッチ型で、高いか高くないかの2段階しかない。基本的には1単語に1つだけ高ピッチアクセントが落ちる。

ブルシャスキー語の形容詞類（数詞を含む）は名詞に近い振る舞いをし、品詞を大きく分けると格接尾辞を取れる名詞類、人称接尾辞を取れる動詞類、どちらも取れない不変化詞類の3つに分けられる。コピュラと動詞は異なった活用をする。連用修飾をする「副詞」を独自に立てる必要性はない。

語形成は接辞法によるものが多く、複合や重複などは少ない。但し、オノマトペ形成やいわゆる「反響語（echo word）」形成には部分重複（変形重複）が多用される。名詞類の形成には専ら接尾辞が用いられるが、動詞類（や多様な動詞語幹）の形成には接尾辞と同程度に、接頭辞も用いられる。

格配列としては能格言語であり、意味上の時間性（未来 vs 非未来）と人称とで部分的に分裂している。接尾辞によって形式上で区別される格の数が多く、一次格として絶対格（ゼロ）、能格、属格、与格、奪格、二次格として10個以上の場所格がある。

動詞の形式はムードを取る文末用の形式と、脱動派生される「分詞」類とに分けられる。一括りにした「分詞」の中にも、連体修飾用の形式、接連結用の形式、準体的に用いられる形式などがあり、名詞類的屈折をするものも不変化のものもある。

¹ 最短でも西に直線距離で180kmほど離れたカティ語（印欧語族インド・イラン語派ヌーリスタン語派）には、化石的な場所格標識 *p-* がある。

² その所為もあってか、3,000km以上北に離れたケット語（接頭辞使用が同等に多い能格言語）や、否定接頭辞 *a-* などを持つサンスクリットなどとの系統関係が度々唱えられて来ている。

2. 文法書・スケッチ一覧

以下に示すのは、文法書・文法スケッチとして書かれたと理解できる文献のリストである。必ずしも参照文法書とは呼べないものもあるが、ここでは「音韻と（一定量以上の）文法の記述があるもの」を判断基準にしている。そのため、現地で無批判にありがたがられている人物の著書であっても、散発的な文法事項を乱雑に並べ連ねただけのものなどは、結果として除外されていることを断っておく。特に、研究書として重要と思われるものに関しては、太字にして示す。

2.1. 東ブルシャスキー語

東ブルシャスキー語のほうが、西ブルシャスキー語よりも研究は長く、多い。それは、東のほうが方言変種が多いからというだけでなく、少なくとも近年の社会状況で考えれば、環境として調査がし易いか否かという点も研究量の差として現れているためではないだろうか。

- **Lorimer, D. L. R. 1935–38. *The Burushaski Language. vol.I: Introduction and Grammar (1935a); vol.II: Texts and Translations (1935b); vol.III: Vocabularies and Index (1938). Oslo: H. Aschehoug & Co. (W. Nygaard).***

ブルシャスキー語の文法書としては最初のもの。3巻本。音素を立てず、音声表記での記録となっている。これを縄田(1992)³は誤って音素表記と読んだため、そこでは音韻の非常に複雑な言語に見える。フンザ方言を中心に記録しており、ヤスィン方言も巻末に章を割いて多少触れている。

- **Klimov, G. A. i D. I. Edel'man. 1970. *Jazyk Burushaski (Язык Буршаски)*. Moskva: Izdatel'stvo «Nauka».**
活格型言語類型で有名な Klimov と、ヌーリストン語派の研究で有名な Edel'man との共著による、東洋学研究所の文法ブックレットシリーズの1冊。音素が立てられる。語彙集なし。恐らくフンザ方言。

- **Berger, Hermann. 1998. *Die Burushaski-Sprache von Hunza und Nager. Teil I: Grammatik (1998a); Teil II: Texte mit Übersetzungen (1998b); Teil III: Wörterbuch (1998c)*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.**

3巻本。記述の精度・分量の上で、ブルシャスキー語の文法書の中では最も良い。但し、押し並べて段落番号を付けた地の文で説明して行くスタイルなので、章の中の構成が極めて分かり辛い。例文も地の文に収まっていて、グロスはない。フンザ方言とナゲル方言の両方を見ている。

- **Munshi, Sadaf. 2006. “Jammu and Kashmir Burushaski: Language, Language Contact, and Change”. Unpublished Ph.D. dissertation, The University of Texas, Austin.**
スリナガル出身でカシミール語を母語とする、アメリカで教育を受けた研究者によるスリ

³ 縄田(1992)は実質的に、Lorimer(1935a)の要約である。

ナガル方言の記述。全体として社会言語学に関心が強いのか、文法記述としては不十分な部分が間々見受けられる。グロスあり。語彙集なし。

- Yoshioka, Noboru. 2012. “A Reference Grammar of Eastern Burushaski”. Unpublished Ph.D. dissertation, Tokyo University of Foreign Studies.
筆者の博士論文。フンザ方言を中心にしている、ナゲル方言は副次的に触れている。英語の質にかなり難がある。
- Yoshioka, Noboru. 2015. “Hunza Burushaski”. In Toshihide Nakayama, Noboru Yoshioka, and Kosei Otsuka, eds.. *Grammatical Sketches from the Field 2*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. pp.143–178.
筆者によるフンザ方言の文法スケッチ。実際に書いたのは博論よりも前。
- Munshi, Sadaf. 2019. *Srinagar Burushaski: A Descriptive and Comparative Account with Analyzed Texts*. Leiden, Boston: BRILL.
スリナガル方言の文法記述。Munshi (2006)と比較して、社会言語学偏重は薄れた。グロスあり。アクセント表記なし。物語テキスト2篇、対話1篇あり。語彙集なし。

2.2. 西ブルシャスキー語

西ブルシャスキー語の研究は、言ってしまうと最初の1本しかない。筆者も調査にまだ2度しか行けていない（2007年、2019年）。

- Berger, Hermann. 1974. *Das Yasin-Burushaski (Werchikwar)*. *Grammatik, Texte, Wörterbuch*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
西ブルシャスキー語の唯一と言える文法書。上述のBerger (1998)と同じく、押し並べて段落番号を付けた地の文で説明して行くスタイル。文法パートは正味、50ページのみ。音素を立てている。グロスはない。語彙集あり。
- Grune, Dick. 1998. *Burushaski. An Extraordinary Language in the Karakoram Mountains*. Pontypridd, Wales: Joseph Biddulph Publisher.
先行研究のポイントをまとめたようなブックレット。デネ・カフカス大語族理論にブルシャスキー語を含めたい様子が窺える。一方で、バスク語との関係をもほのめかしている。
- Tiffou, Étienne. 1999. *Parlons bourouchaski. État présent sur la culture et la langue des Bourouchos (Pakistan)*. Paris: L'Harmattan.
語学書の中に文法スケッチがある。基本は西ブルシャスキー語で、少しだけフンザ方言に関する記述もある。テキストにグロス（逐語訳）あり。語彙集あり。この著書に限らず筆者は「受動文」があると訴えているが、現地（東・西双方）では一切確認できていない⁴。

⁴ 挙げられている例文は非文と判断された。なお、東西ブルシャスキー語ネイティブ達はいずれも、ウルドゥー語でも受動表現を使わないし、人によっては非文と判断して来る。

(⇒§3.3.2)

- Shafi, Muhammad Wazir. 2006. *Brōshāskī Razōn: A Book on Brōshāskī Grammar* (In Yasin Dialect). Karachi: University of Karachi.

パキスタンのカラチ大学で教育を受けたであろうネイティヴ⁵による、ヤシン方言の記述。無理に専門用語をブルシャスキー語で付けようとしている箇所もある。ただし解説はほとんどなく、説明のない語形一覧表の羅列が続く。グロスなし。語彙集(?)あり。

3. 記述上の諸問題

本章では、各文法書を見比べる中での目立った問題点を洗い出してみる。便宜的に、ざっくりと音声・音韻周り、形態論周り、統語も関わるもの、付属語彙集で分けてみたが、ここで扱いたい問題は、ひとまず、全部で7つである。

3.1. 音声・音韻論, 表記

3.1.1. 謎の音素 *y*

東ブルシャスキー語の音素として、Lorimer 以来、慣習的に *y* で表記されている音がある。これは「【先に研究を進めた】シナー語とも共通しておらず、ブルシャスキー語以外で出会ったことがない」(Lorimer 1935a: 6)⁶と記述される音であり⁷, Lorimer は「暫定的にこれを『反り舌の *y* (cerebral *y*)』だと見做す」(*ibid.*)と記録した。

Klimov i Edel'man (1970) はフンザ川上流で話されているイラン語派のワヒー語にある音と比定して、この音を *ÿ* と表記したが、音価について詳しくは述べず、但し通時的にインド・ヨーロッパの反り舌破裂音が **ɣ̥* を経て今の音になったのではないかという推測をしている。要するに、よく分からない。ワヒー語の記述で普通 *ÿ* と書かれるのは [y] である (*y* と書くのは [ɣ])。

Berger (1998a: 22) では、「*y* はブルシャスキー語特有の摩擦音である。反り舌の歯擦音と硬口蓋-舌背面との同時調音であり、言い換えれば *ç* 【[s]】とドイツ語の *Ich* 音 【[ç]】との同時調音である」とされている。ブルシャスキー語の音韻・形態に関する通時的な変遷を扱った Berger (2008) で新しいことが述べられているかとも期待したが、結局、西ブルシャスキー語にはない、形態音韻論的に脱落が多いといった、ちよとした観察で直ぐに分かることや、Klimov i Edel'man (1970) で挙げられていた古いインド・アーリヤ語との対応関係のようなものを少し挙げているのみであった⁸。

Tiffou (1999: 120) もやはり、「[y] は世界の他の言語には全く見られない音である。もしかしたら全く違う音の異音かも知れない。厳密に書き表すのは難しい。湿音性が高く聞こえる (Le son

⁵ 後に登場するブルシャスキー語調査アカデミー(Burushaski Research Academy)なる組織も、カラチ大学に付設という形で存在している。中心人物は、(ころころ名前を変えているのだが) Nasir ud-Din Nasir Hunzai 氏。Shafi 氏の来歴は不明だが、恐らくそのアカデミーのお膝元から出て来ていると見て良いだろう。

⁶ 以下、本稿内での、日本語以外で記述された研究の和訳は、全て筆者による。

⁷ 隣接するドマーキ語(印欧語族インド・イラン語派インド語派中央インドグループ)でもこの音の使用があるが、ブルシャスキー語からの借用語に限られるかも知れない。但し、Lorimer (1939: 23) も指摘するように、必ずしも今のブルシャスキー語で対応する語がない単語にも含まれている。なお、シナー語は、インド語派北西インドグループ。

⁸ なお、Hermann Berger は2005年に亡くなっているため、氏の新しい研究が今後これ以上出て来ることはまずない。

donne une impression de mouillure) けど、反り舌調音の独特の響きも有している」と、分析を手放している。

Munshi (2006, 2019) や Čašule (2010) といった一部の研究者は、この音を反り舌接近音の ɟ としているが、明らかにウルドゥー語などのその音とは異なっているし、借用の際にウルドゥー語の ɟ が一律、q に置き換えられてしまっている事実とも話が巧く合わない。

実際に現地で発音を観察すると、舌尖は下前歯の後に置かれたままで、舌の後ろの方が盛り上がっている。Yoshioka (2012) など筆者は、この音を ɟ̠ として記述してきている。但し一方で、形態音韻論上の振る舞いとしては、確実に反り舌の素性を持っているため、表記の上では他の反り舌音 (t, tʰ, d, ɖ, ɟ, ɟ̠, j) と共通させて下点を持たせた、y 表記を継承して用いている。

3.1.2. 表記法

§3.1.1 のような問題がいつまでも継続する理由の1つには、IPA を用いて音価を示すということが近年までされていなかった点を指摘できるだろう。Lorimer (1935-38), Klimov i Edel'man (1970) は活版印刷だったので、フォントの都合などもあったのかも知れないが、近年の欧米での研究 (Berger や Tiffou など) でも IPA で音価を併記しないのは、不誠実ではないだろうか。そのように音価が不明瞭なだけならまだしも、Klimov i Edel'man (1970) 以降、音素を立ててからの表記法も各々が独自に作っているため、さらに混乱を招いている (表1)。

表1 研究者ごとの表記法の異なり

| IPA | Lorimer | Klimov i Edel'man | Berger | Tikkanen (1991) | Tiffou | Willson (1999) | Munshi (2006) | Shafi | Yoshioka | Munshi (2019) |
|-----------|----------------|-------------------|---------|-----------------|---------|----------------|---------------|-----------------------|----------|---------------|
| ts | ts | c | č | č | c | ts | c | ć | c | c |
| tsʰ | ts | ch | čh | čh | ch | tsh | chʰ | čh | ch | ch |
| te | č | č | č | č | č | ch | č | ch | č | č |
| teʰ | č | čh | čh | čh | čh | chh | čhʰ | chh | čh | čh |
| dʒ | j | ǰ | j | j | j | j | j | j | j | ǰ |
| tʃ | č | č | č | č | č | tʃ | č | č | č | č |
| tʃʰ | č | čh | čh | čh | čh | tʃh | čhʰ | čh | čh | čh |
| ɕ | š | š | ś | ś | š | sh | ś | ś | š | ś |
| ʃ | š | š | š | š | š | sh | š | šh | š | š |
| ŋ | ŋ | ŋ | ñ | ŋ | ŋ | ng | ŋ | ñ | ŋ | ŋ |
| ɣ | ɣ | ɣ | ǰ | ɣ | ɣ | gh | ɣ | ǰ | ɣ | ɣ |
| §3.1.1 | ɣ | ǰ | ɣ | ɣ | ɣ | ɣ | ɟ | — | ɣ | ɟ |
| 「良い」 | šu.a ~ šu'a | šua | śuá | śuá | šuá | shwa | śua | shōwa | śuá | šua |
| 「I do it」 | ečl.ba ~ ečlba | eča ba | éca baa | éca baa | eča baa | échabaa | eča ba | (echaba) ⁹ | écabaa | eča baa |
| 大文字 | あり | あり | なし | なし | あり | あり | なし | あり | なし | なし |

表記法の流れとしては、ハーチェックなどの装飾記号を用いた①Klimov i Edel'man (1970) ⇒ Tiffou (1999) など ⇒ Yoshioka (2012) などという流れと、②Berger (1974) など ⇒ Tikkanen (1991) などという流れの2つが主流で、Willson (1999) などのような、補助記号を使うよりも複数文字を連ねることで表す (英語重視的な) 表記法は、余り好まれていない。Shafi (2006) なんかは完全にメタル・

⁹ 氏の書記法でフンザ方言を書くとしたらこうなるであろう、という形。西ブルシャスキー語で「I do it」は形が異なり、筆者の表記法で書くとしたら *écam ba* となる。

ウムラウト的であり、説明不十分のその表記法はオリジナリティが強く、実用性や実態を見落としているようですらある（著書名も参考されたい）。表記法という意味では、Burushaski Research Academy (2006)などが用いるのを始めとして、アラビア文字ベースのブルシャスキー文字も何種類かあるが、それぞれの内部で既に体系的でなかったり、母音の表記ルールがあやふやであったりして、どれも実用には向いていない¹⁰。

3.2. 形態論

3.2.1. 語形名称の不統一

研究上、各語族にはそれぞれに独特な用語用法が発達して行く傾向というのがあると思われる。一方で系統的孤立語は、その伝統が構築され難い（相応の人数と時間、或いは天才を要する）と言えるかも知れない。周囲を僅かな語族が包囲しているような孤立語であれば、その語族の伝統に多大な影響を蒙った記述がされて行くかも知れないが、少なくとも周囲を多種多様な語族に囲まれているブルシャスキー語に関しては、記述に用いる用語用法も多元的に入り混じっている感じが否めない。

広く一般的に見られるシンプルそうな機能を専用を持っている語形は、例えば「現在完了」、「属格」など、無難な名称が妥当に使われ、研究者間でのズレが生じ難い。一方で、（特に印欧語に見られないような）馴染みのない機能を持った変化形や、曖昧模稜とした機能を果たしているように見える形態素に対しては、各研究者の知識の下地に合わせる形で分析が異なり、結果が異なって、バラエティ豊かな命名がされてしまう。或いは、機能を想起させない名前を付けて済ませてしまうことすらある。

分析に関しては別の機会に回すこととして、ここでは変化形の名称に関して触れる。表2で、各文法書での各形式の名称を示した。和訳することで各用語の持つニュアンスを消してしまうのを避けるため、ここでは英露独仏の原文のままですしたのを了承されたい。空欄はその形式についての言及がないこと、「(無名)」は形式自体は登場するものの、名称が充てられていないことを意味している。この通り、文法総覧をしている筈でありながら、空欄（記述漏れ）が多く見受けられる。先に §2で Lorimer (1935-38) と Berger (1974, 1998) を推した理由は、この辺りにも垣間見ることができる。

枠線を付けたのは番号付けをして逃れているもの、下線を付したのは形式名（日本語の「テ形」、「ガ格」のような）で述べているものである。後者に関しては、特段の用法解説などがあれば構わない手法かとも思うが、果たしてそれほどの記述がなされているかと言えば、分析できなかったから誤魔化したのではないかと疑える程度しか述べられていないのが実情である。

¹⁰ ただし、そんな書記法を用いて約300ページ分に亘ってクルアーン（コーラン）をブルシャスキー語訳した書籍 (Hunzai 2007) というものも存在し、大規模資料であるのに判読性が低いことが惜しまれる。

表2 各文法書における動詞 *ét-* 「それをする」 の変化形の名称 (定形直説法/定形非直説法/非定形)

| | Lorimer | Klimov i Edel'man | Berger | Grune | Tiffou | Munshi | Yoshioka |
|-----------------|--|---|--------------------------------|----------------|--------------------|---------------------|---|
| <i>écam</i> | future | будущее | Futur | future | futur | future | future |
| <i>écabáa</i> | present | настоящее | Präsens | present | présent | present habitual | present |
| <i>écabáyam</i> | imperfect | прошедшее длительное | Imperfekt | (無名) | imparfait | past habitual | past imperfect |
| <i>étam</i> | preterite | прошедшее | Präteritum | <u>past II</u> | <u>aoriste 1</u> | simple past | simple past |
| <i>étabáa</i> | perfect | перфект | Perfekt | (無名) | parfait | | present perfect |
| <i>étabáyam</i> | pluperfect | преждепрошедшее | Plusquamperfekt | (無名) | plus-que-parfait | past perfect | past perfect |
| <i>éta</i> | | | Konativ | <u>past I</u> | <u>aoriste 2</u> | | prospective |
| <i>étiša</i> | form in <i>-š</i> (injunctive, optative) | | <u>š-Optativ</u> ¹¹ | | (3人称) impératif | optative | optative ¹² |
| <i>écamce</i> | conditional | согласительное | Konditional | | conditionnel | potential | conditional |
| <i>étas</i> | infinitive | инфинитив | Infinitiv | noun form | <u>nominal 5</u> | infinitive | infinitive |
| <i>étum</i> | static participle | <u>герундий I</u> | <u>m-Partizip</u> | | <u>nominal 3</u> | | perfect participle |
| <i>écume</i> | present participle | причастие настоящего времени | Präsenspartizip | | <u>nominal 1</u> | | imperfect participle |
| <i>éçar</i> | final | (основа настоящего времени с последогом) | Finalis | | <u>nominal 2</u> | | finalis |
| <i>nétan</i> | past participle active | причастие прошедшего времени | Absolutiv | consecutive | <u>nominal 4</u> | participial form | conjunctive participle ¹³ |
| <i>étabáte</i> | (無名) | | (無名) | | | | complex converb |
| <i>étiš</i> | form in <i>-š</i> (injunctive, optative) | герундий II | <u>š-Infinitiv</u> | | | | optative infinitive |

3.2.2. d-接頭辞

§3.2.1 では語形の機能分析と命名について見たが、次に見るのは派生接辞の機能分析の問題である。ブルシャスキー語の動詞語幹派生テンプレート (図6) には、屈折要素である人称接頭辞よりも外側に付く、不変化の派生接頭辞 *d-* (図6の [-3] に入る) が存在する。表3では、参考として、*d-* を取らない語幹と取る語幹とで、目的語一致をした場合の変化がどうなるのかを示した。

¹¹ 他に、*m-Optativ* と *áa-Optativ* という形式を認めている。前者は格言などにのみ窺える、極めて頻度の低い形式であり、Yoshioka (2012) では落としている。後者に関しては、Yoshioka (2012) では、命令形 + *-á* として分析している。

¹² 表2の Yoshioka は Yoshioka (2012) の記述であり、2019年現在は、この語形 *étiša* を「接続法」形と考えている。同様に、表の末尾の *étiš* は「接続法不定詞」とする。Berger (1998) の言う *m-Optativ* (実形式としては *étum* となるが、完了分詞とは別物である) を、「希求法」と呼ぶこととした。

¹³ 節連結機能に特化した副動詞形式を「接続分詞 (conjunctive participle)」と呼ぶのは、南アジア言語学の慣習に則ったものである。機能面に注目して言えば、*participle* とするより、*converb* とするほうが妥当だろう。他の研究でこれを *participle* (причастие) としているのも、同様の理由が背景にあるだろう。

| | | | | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|---------|----------|---------|----------|------------|-------------|
| -4 否定 | -3 完結 | -2 人称 | -1 使役 | 0 語根 | +1 複数 | +2 相 | +3 人称 | +4 法/助動 | +5 人称/条件 |
|----------|----------|----------|----------|---------|----------|---------|----------|------------|-------------|

図6 動詞テンプレート (囲み線は語幹) (Yoshioka 2012: 103, 一部改変)

| | |
|---|---|
| -4: a-/oó-/aú- 否定 | +2: -ĉ 未完了 |
| -3: d-完結, n- 接続分詞 | +3: 一人称 |
| -2: @-/@-/@- 人称(タイプ I/II/III) ¹⁴ | +4: -Ø 現在法, -m 非現在法, -š 希求法 -i/-in 命令法 (SG/PL), 助動コピュラ |
| -1: s- 使役 | +5: 直説法人称, 希求法人称, -ce(q) 反実仮想, -á 念押し |
| 0: 語根 | |
| +1: -ya 複数 | |

表3 人称接頭辞を持つ d- なし動詞と d- あり動詞の対象活用例

| | | | |
|-------|---------|---------|------------|
| @-ř- | 「送る」 | d-@-ř- | 「送ってくる」 |
| áar- | 「私を送る」 | dáar- | 「私を送ってくる」 |
| góor- | 「君を送る」 | dukóor- | 「君を送ってくる」 |
| éer- | 「彼を送る」 | déer- | 「彼を送ってくる」 |
| móor- | 「彼女を送る」 | dumóor- | 「彼女を送ってくる」 |

接辞の位置関係に関しては、実際にそういうものであるからと納得すれば良いだけの話であるが、ここで問題として注目したいのは、その接頭辞 *d-* の意味機能である。少し紙幅を取るが、各文法書での（形式ではなく）機能について把握しかねているさまを以下に抜き出して示す。より絞って当たりを付けている研究もあるが、それに関しては Yoshioka (2012) で詳細に検討しているので、本稿では割愛する。

d*-全般に関しては、手持ちのサンプル全てをまとめてその意味や機能を明らかにすることが、どうしてもできなかった。とても重要なことだとは分かっているが、今後の研究で解決されるべき課題を残してしまっている。(Lorimer 1935a: 226)

[機能についての記述なし] (Klimov i Edel'man 1970)

d- 接頭辞の機能は、現代語ではもはや一つに決められるものではない。意味的に異なる *d-* なし形式と *d-* あり形式の動詞対は僅かしかなく、そこから共時的な共通機能を見出すことはできない。(Berger 1974: 32)

¹⁴ 「@」は人称接頭辞のロットを表すのに用いている。人称接頭辞は、譲渡不能名詞の所有主、感情形容詞の感情主、ならびに、一部の他動詞の目的語と一致を果たす。ブルシヤスキー語の人称接頭辞には、母音の開き・長さに関連して、3つの異なるタイプがあり、語幹ごとにいずれのタイプの人称接頭辞を用いるかが決まっている。表記上、そのタイプの違いを「@」に後続するハイフンによって区別しており、「@-」がタイプ I、「@:」がタイプ II、「@:]」がタイプ III を示す。

一次他動詞に *d*-接頭辞を付加して作られる動詞（人称接頭辞を持たない）は、必ず自動詞である。一次他動詞に付加されて結果としてこれらの自動詞を作るが、*d*-接頭辞の機能は散発的に過ぎない。*d*-の有無で作られる約20の動詞ペアは、意味的に僅かな異なりしか持たないか、全く同じ意味を有している。*d*-接頭辞によるこれらの動詞対が惹き起こす意味変化は、共時的にはっきりと見出せる共通機能というものを少しも示していない。片や、*d*-なし語幹対を持たない他の全ての *d*-動詞について言えば、*d*-は無意味な、拘束的に付加して動詞語幹を作るものでしかない。(Berger 1998a: 110)

d-動詞は過半数が静的（状態を述べる）、或いは受動的な意味合いを持っている。(Grune 1998: 13)

ブルシャスキー語は、*d*-という動詞接頭辞で、しばしば他動詞から自動詞を派生させることができる。ものの分析によれば、その動詞前接辞の根本的な機能は、動詞の表す事行全体から行為者概念を除去することであるらしい。(Tiffou 1999: 171)

d-接頭辞の意味的、形態論的実情は不明である。歴史的に見て重要な、他の動詞では失われてしまった形態論的単位の残存であるかも知れない。(Munshi 2006: 196-97)

先行研究で述べられている機能の中で、受動機能と言われているのは適確ではなく、寧ろ逆役や結果化として理解されるべきであろう。行為者／主語を焦点化する、他動詞化するといった機能【これらはどちらも、Anderson (2007) による】は *d*-接頭辞には合致していない。アスペクト・語彙アスペクト的な観点で言えば、*d*-は動詞語基に完結性を付与しているが、これは中核機能というより副作用であるだろう。(Yoshioka 2012: 280)

どうだろうか。よく分からないと述べているものから、何を述べているのかよく分からないものまで入り混じっているが、いずれにしてもよく分からないのは確かである。

ブルシャスキー語の動詞語幹派生は今では生産力を失っているため、これ以上 *d*-のサンプルが増えることはないだろう。*d*-動詞について、*d*-という要素が内在しているという語構成自体の認識も薄れたのか、*d*-@-*t*「打つ」という動詞が、再分析されて @-*dél*-となっている例も確認されている。今後、解決は可能なのだろうか。

3.3. (形態)統語論

音韻論、形態論という、比較的扱い易そうな分野ですら、各文法書の記述は自由奔放で、その密度や精度には大きなブレがある。その現状は、自戒も込めて、ブルシャスキー語の記述研究は成熟しているとは言えない。見比べたところで、対比がまともに成立しそうな側面という意味ですら選択肢に限りがある。いずれの文法記述においても共通して言えることの一つは、統語論に割かれているページが多くない、ということだ。形態がかなり膠着的で総合性が高く、語順も省略もかなり自在という意味では、自ずと形態論が重視されるのも分かるが、それにしても少ない。「文法書」未満の「文法スケッチ」となると、余計に統語論が蔑ろにされている。

例えばブルシャスキー語の副動詞は、形式上では20種類以上の語形があり、相対時間、指示転換、因果関連付けの有無などで、様々に使い分けをするのだが、過半数の文法記述が副動詞を全

く取り扱っていない。(多くの研究者の母語である) 欧米の言語で貧弱だからであろうか¹⁵。

以下では、数少ない統語論関連の記述の中から、分裂能格性とヴォイスに関してどう書かれているか、いないか、を対比してみることにする。

3.3.1. 分裂能格性

冒頭の概説でも述べたが、ブルシヤスキー語の能格は分裂している。それがどのように分裂しているかについては、これもまた各文法書で意見が分かれている。

他動詞主格・動作主格 (transitive nominative and agential) は、その名詞が、①偶発的な例外を除いた過去語基の時制(過去, 完了, 大過去, 過去分詞, 状態分詞能動)の他動詞の主語である時, ②時制に関わらず動詞 *henas* 「知る」の主語である時, ③他の動詞(特に *senas* 「言う」)の現在語基の時制の場合の主語である時も時折用いられ, ④あらゆる他動詞のあらゆる時制で許可されていて, ⑤状態分詞受動と共に用いられる際には動作主を表していると見做されるであろう。(Lorimer 1935a: 64)¹⁶

能-斜格 (эргативно-косвенный падеж)¹⁷は、独自の標識 *-e* を持っている: *hiles-e* 【少年】, *hayur-e* 【馬】, *den-e* 【年】。その機能は, a) 他動詞の過去時制形において(例: *Behram-e yüljien yecimi* 「バフラムは夢を見た」)だけでなく, *henas* 「知る」と *senas* 「言う」の(或いはその他の全ての動詞でも不規則的に)全ての時制の主語の標示, b) 所有の修飾語標示(例: *Habaš-e padša* 「アビシニア【エチオピア】の王」), b) 間接目的語(例: *hi than-e* 「或る場所に」)やその他の標示である。(Klimov i Edel'man 1970: 41)

1人称単数人称代名詞は、他動詞節であっても未来形と条件形で語尾なし形になる。しかし、ナゲル方言では未来形に能格が用いられ、フンザ方言でも散発的に見受けられる。1人称単数現在では、未来の意志を表す現在形(例: *muú je mámar han cháne waaqíáane máar éága éca baa* 「私はあなたがたに今、事実に基づく話をします」)で *je* 「私」【語尾なし形】が現れる。2人称単数・複数は他動詞未来形で語尾なしも能格形も可能である(例: *un/úne achícuma* 「お前は私に与えるだろう」)が、1人称複数は語尾なしだけである(例: *mi gósan* 「私はお前に言うだろう」)。同じ格配列は条件形にも適用される。(Berger 1998a: 64を要約)

この言語は、「主語」一致の種類として、接尾辞一致の語形で表される能格項と絶対格項とがあるという事実を示す、格標示と一致との分裂を示している。この言語の能格性の面白い点は、地理的周辺の能格性の多くが完了相のみに観察される(先行研究では『分裂能

¹⁵ 副動詞に関しては、目下、Tikkanen (1995)とYoshioka (2012)を見て頂ければ良いかと思う。二つの記述には用法のズレや出現形式の差があるが、これらよりも詳しく書いている研究は管見の及ぶ限りでは、ない。

¹⁶ Tiffou and Morin (1982)や、Dixon (1994)も恐らく、このLorimer (1935a)の記述を参照して、ブルシヤスキー語の分裂能格が「過去 vs 非過去」に基づくものだと判断している。

¹⁷ KlimovとEdel'manは、能格と属格など、同形の格接尾辞を機能によって別物とは扱っていない。同一形態素の中の、別機能としている。一方で、ヒト女性クラスの名詞の単数形は、特別な属格 *-mo* を持っているとする。格を形から立てるか、(Yoshioka (2012) などのように) 体系から立てるかの違いが反映されている。ここに示されている3つの機能の内、bとbは能-斜格の、「斜格」的な機能ということになるだろう。

格性』と名付けられている) 一方で、この言語の能格は時制・相に関わらず常に標示されていることである。(Munshi 2006: 143)

能格性の消失は、1人称単数の未来・条件表現(ナゲル方言を除く)と、2人称単複両方の未来・条件表現に見られる。条件形と未来形は、未完了接尾辞-*ɛ*と非現在接尾辞-*m*の両方を共有している。ここで言う未来表現は未来形と未来の読みの現在形(「(今)~するところだ」)の双方を指す。しかし、未来の読みの現在形はしばしば能格性を保持するし、純然たる未来形の場合も能格標識を取ることができるようだ。【どちらを取っても構わない、という条件下では】絶対格主語の場合と能格主語の場合とで、文に意味的な差はない。(Yoshioka 2012: 247-248を要約)

Lorimer と Klimov & Edel'man はほぼ同じで、基本的に完了語幹動詞の場合に能格標識が用いられるけど、あらゆる場合に可能性はあると述べている。片や、Berger と筆者もほぼ同じで、1, 2人称の未来・条件で絶対格主語が現れる可能性が高い、といった主張である。

そんな中、Munshi は分裂能格性を真っ向から否定している。敢えて「地理的周辺¹⁸の分裂能格性」を引き合いに出して否定しているので、もしやスリナガル方言だけ異なっているのかとも思えたのだが、筆者が2016年8-9月に行った同方言の現地調査では、他の東ブルシャスキー語との違いが見受けられなかった。Munshi (2019) でも分裂性に関しては一切触れられていない。ブルシャスキー語が *pro-drop* 言語で1, 2人称は代名詞が省略されることが多いとはいえ、ここまで分析が異なると、研究全体が疑わしくすら見えてくる。

3.3.2. ブルシャスキー語受動の謎

ブルシャスキー語には受動態がない。但し、他の言語に訳すと主に受動表現となりそうな表現というものはある。「それらを『受動』と呼ぶなら」という括弧付きで、各文法書が受動を記述しているのかと思うと、実はそうではないものもある。少し長くなるが、抜き出してみた。

他動詞の特別な受動活用形というものはないが、受動的な意味の状態分詞が実動詞や動詞 *mna:s* 【「なる」】などと用いられる場合があり、その産物が受動時制と同等と言えるかも知れない (Lorimer 1935a: 238)

[記述なし] (Klimov i Edel'man 1970)

*m-*分詞は補助動詞と共に一種の迂言的完了、つまり大過去を構成する。他動詞の場合にはその補助動詞は明らかに目的語と一致を見せる。したがって、規則的に受動構文を作ることが可能で、その場合にはいわゆる動作主が能格で表現されることになる(例: *jáa ité kitaap gátánum bilá* 「その本は私に読まれている」)。これを能動として用いることは稀であるが、なくはない(例: *úne yeénum báa* 「お前はもう知っている」)。(Berger 1998a: 168,

¹⁸ ところでこれは、スリナガルの周辺なのだろうか。東ブルシャスキー語の本拠地であるフンザ・ナゲルの周辺なのだろうか。なお、東ブルシャスキー語に完全に取囲まれているインド語派のドマーキ語は、人称(3人称 vs 非3人称)でしか分裂しない。

一部例を省略)

幾つかの動詞で、ブルシャスキー語には受動表現がある。これには一定の制約があり、原則的に動作主がヒトではなく、動作の遂行が決断、或いは意図的行為によって惹き起こされてはならない。受動表現は基本的には統語、もしも動詞が取るなら接頭辞と、絶対格標示の名詞に一致する接尾辞によって特徴付けられる。以下の対比は能動文と受動文との異なりを描写するものである：*tíše phária dówaljai* 「風が鴨を飛ばせた」、*tíše phária dówaljaien* 「鴨が風に飛ばされた」。これらの表現が互いに排他的か、同時に使用可能であるかは明らかではない。(Tiffou 1999: 192)

[記述なし] (Munshi 2006)

多くの言語と同様、ブルシャスキー語の完了分詞も受動的な読みを持つ。一方で未完了分詞には能動的な読みしかない。従って完了分詞は時に、コピュラと共に用いられて、一見受動表現っぽい構文を作る(例：*khóle akhí girmínun bilá* 「ここにそう書かれている」)。この構造は行為者主語の節であるとは考えられないが、一方で単純に、頻度が低い、主語が非ヒト／無情物に制限されている、などといった特徴を持つ受動節であると見做すこともできないだろう。目下、完了分詞を以下のような修飾語として捉え、次のように再建される存在文からちょっと省略されているだけの、単なるコピュラ述語節だと捉えるべきだろう(*khóle akhí girmínun jumláan bilá* 「ここにそう書かれた一文がある」)。(Yoshioka 2012: 90-91)

[記述なし] (Munshi 2019)

Lorimer が言っていること、Berger が言っていること、筆者が言っていることは、細かな表現の差こそあれ、概ね同じであるだろう。詰まり、完了分詞とコピュラなどの組み合わせで、「VされたXがある」⇒「XがVされた」という読みができるだろう、ということである。

それと、Tiffou が示している西ブルシャスキー語の能動・受動の対立とは、全くの別物である。Tiffou の言っているものは、能格項の行為者、絶対格項の受動者はそのままで、動詞の主語標識である人称接尾辞だけを取り替えることで、ヴォイスの変換が可能であるという主張である。もしもこれが事実であったならば、動詞の自他の対立が崩れるし、格の名称もまた異なったものになるであろうし、そのような文法構造が実際にあるのだろうか、2007年に西ブルシャスキー語の調査を行ったのだが、後者の例はどのインフォーマントに聞いても非文と判断された。東ブルシャスキー語でも並行的な例を作文してみたが、結果は同じであった。そもそも、能動文と受動文との違いはこうであると断言した次の文(互いに排他的か否か～)が、既に意味不明である。引用した部分以降も更に、対比した例文の解説が続いているのだが、いずれにしても正しい記述ではなさそうである。

3.4. 語彙集

文法記述そのものではないが、幾つかの文法書には、語彙集が付いている。単品で辞書として出版されている Burushaski Research Academy (2006, 2009, 2014) や、Willson (1999) などもあるが、

幾つか問題点がある。

主要な問題点は、人称接頭辞の扱い。ブルシャスキー語の名詞の一部、形容詞の一部、動詞の一部は、人称接頭辞を必要とする。その人称接頭辞は品詞を超えて共通しているものなのだが、動詞における結合価などとの絡みで、母音の開き・長さによる3つのタイプが存在する。それらの異なりを示しつつ、語彙集の中でどう示すかが1つの悩みどころとなっている。上に挙げた2つや Shafi (2006) などは、3人称単数ヒト男性クラスで一致させた形式で示しているが、そのクラスでは形態音韻論的に他の人称・クラスの語形と大幅に形の変わる語があることや、中動化するのを見てもその形で人称接頭辞が固定化されている動詞語幹というものもあり、厄介である。一方で、言語学的教育を経て来た研究者たちは、人称接頭辞を空所にして示しているのだが、示しかたが抽象的で、慣れるまでに時間が掛かるかも知れない。人称接頭辞のタイプの異なりの示しかたも、研究者によって多様である（誰一人同じではない）。

更に、人称接頭辞とも絡む問題ではあるが、見出し語をアルファベット順に並べる場合に、関連性の高い動詞語幹が散り散りになってしまう問題もある。同一語根から派生されている語幹であっても、派生接頭辞が付いているとそれだけで分散するし、派生の過程で無声化、無気化、閉鎖音化なども起こるため、互いに遠く離れてしまう。Berger (1974, 1998) や Yoshioka (2012) は語根で集約する手を使っているが、結局そうすると実現形語幹の見出し位置からも案内を出さなければならぬし（辞書を引く側としては二度手間になるし、紙幅も嵩む）、形態音韻的变化を逆算してどういう形式を語根として再建するかが、別の問題を生み出す。

思い付いた活用形を別の見出し語として並べているように見える Burushaski Research Academy (2006-14) の論外さを看過しても、借用語の意図的な排除、品詞情報、屈折形情報などなど、文法の問題と関連したりしなかったりしつつ、やはり語彙集の問題は尽きない。

謝辞

本研究は科学研究費補助金 JK15H05380 の助成を受けたものである。また、本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016-2017年度）の成果の一部である。

参考文献

- Anderson, Gregory D. S. 2007. "Burushaski Morphology." *Morphologies of Asia and Africa* (Alan S. Kaye, ed.), 1233-1275, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Backstrom, Peter C. 1992. "Burushaski." *Languages of Northern Areas* (Peter C. Backstrom and Carla F. Radloff, eds.), 31-54, Islamabad: National Institute of Pakistani Studies Quaid-i-Azam University, and Summer Institute of Linguistics.
- Burushaski Research Academy, ed. 2006-2014. *Burūshaskī-Urdū Lughat: Jilde 1 [Alif tā Ğ] (الف تا خ)* (بروشسکی - اردو لغت، جلد اول [الف تا خ]) (2006); *Jilde 2 [D tā Gh] (د تا غ)* (جلد دوم [د تا غ]) (2009); *Jilde 3 [F tā Y] (ف تا ی)* (جلد سوم [ف تا ی]) (2014). Karachi: University of Karachi.
- Čašule, Ilija. 2010. *Burushaski as an Indo-European "Kentum" Language* (Languages of the World 38.) München: Lincom Europa.
- Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hunzāi, Ghulām ud-Dīn Ghulām. 2007. *al-Qur'ān al-Karīm: Burūshaskī Tarjūmah* (القرآن الكريم: بروشسکی ترجمہ). Gilgit: Oxford Gilgit Printers, Gilgit Kashmir Printers.
- Lorimer, D. L. R. 1939. *The Dumāki Language. Outlines of the Speech of the Doma, or Bērīcho, of Hunza*. (Publications de la Commission d'Enquête Linguistique IV.) Nijmegen: Dekker & van de Vegt N. V.

- 縄田鉄男 1992 「ブルシャスキー語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典 第3巻』, 845-850, 東京:三省堂.
- Tiffou, Étienne and Yves-Charles Morin. 1982. "A Note on Split Ergativity in Burushaski." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 45/1: 88-94.
- Tikkanen, Bertil. 1991. "A Burushaski Folktale, Transcribed and Translated: the Frog as a Bride, or, the Three Princes and the Fairy Princess Salaasir." *Studia Orientalia* 67: 65-125.
- . 1995. "Burushaski Converbs in their South and Central Asian Areal Context." Martin Haspelmath and Ekkehard König, eds. *Converbs in Cross-Linguistic Perspective. Structure and Meaning of Adverbial Verb Forms —Adverbial Participles, Gerunds—*, 487-527, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Willson, Stephen R. 1999. *Basic Burushaski Vocabulary*. Islamabad: National Institute of Pakistan Studies Quaid-i-Azam University, and Summer Institute of Linguistics.

ウラル諸語の参照文法書について

松本 亮

On Reference Grammars of Uralic Languages

MATSUMOTO, Ryo

Keywords: reference grammar, Uralic languages, Finish, Nenets, Russian grammar

キーワード: 参照文法書, ウラル諸語, フィンランド語, ネネツ語, ロシア語文法

1. ウラル諸語の参照文法書の地域的特徴
2. フィンランド語の記述文法書
3. ロシアにおける文法記述の状況
4. まとめ

1. ウラル諸語の参照文法書の地域的特徴

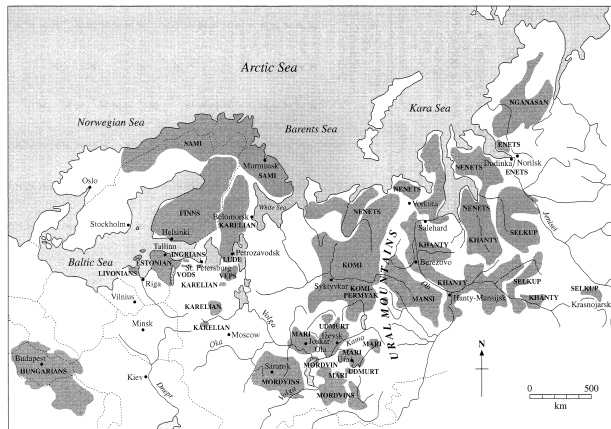


図1 ウラル諸語の分布 (Marcantonio 2002)

松本亮. 2022. 「ウラル諸語の参照文法書について」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 201-211. DOI: <https://doi.org/10.15026/116966>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

ウラル諸語は、図1の分布に見るように、西のハンガリー語やフィンランド語、エストニア語から東はネネツ語やセリクブ語など、ユーラシア大陸に広く広がっている。ハンガリー語、フィンランド語、エストニア語は、現在ではそれぞれの言語を主たる公用語とする国家があり、言語学的な研究も進んでいると言える状態であるが、その他のウラル諸語はこれまでロシアの国内における少数派言語としての地位でしかない。話者数は表1に示してあるように言語によって大きな差があり、モルドヴァ語、マリ語、ウドムルト語のように自治共和国を持ち、十分な話者数を誇る言語から、マンシ語やエネツ語のような消滅に瀕した言語までである。しかしいずれにも共通するのは、ロシア語の影響を受けた言語使用状況であることと、言語の記述についても主にロシア式の文法記述が中心的に見られることである。確かに、同じウラル語族であるハンガリーやフィンランドの言語学者による研究にも古い歴史があるが、参照文法書という点から見ると、特にソ連による影響が強い時代が長く続いたことを考えれば、世界的な新しい言語学の潮流を受けた参照文法書は近年になってからであると言えよう。

以下では、まず2節でフィンランド語の参照文法書を取り上げ、3節でネネツ語の参照文法書について述べる。いわば、フィンランド語の文法記述は日本におけるそれと同じような立場、つまり非ロシア的記述の例として挙げるものである。そして、ネネツ語は、ロシア的記述の例、特に、少数民族言語として母語話者よりも非母語話者であるロシア人によって文法記述がなされてきた例として取り上げる。

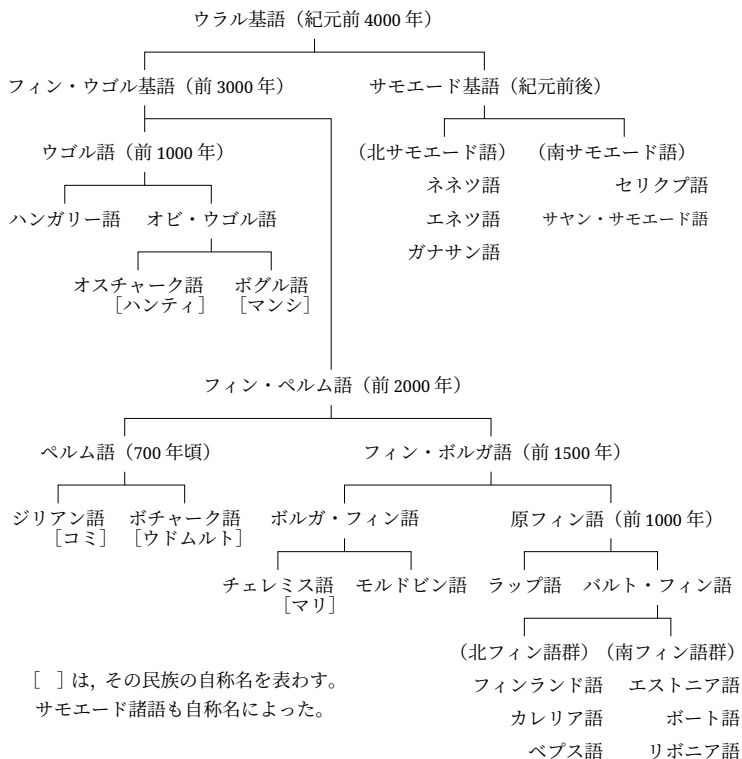


図2 ウラル諸語の系統関係 (小泉 1991 pp.2-3 に基づく)

表1 ウラル諸語の話者数と母語保持率

(上の5言語は wikipedia より、それ以外は2012年のロシア国勢調査より)

| | 民族人口 | 全話者数 | 民族語保持 | 保持率 |
|---------|---------|------------------------|-----------|-----|
| ハンガリー語 | | 13,000,000 | | |
| フィンランド語 | | 5,400,000 | | |
| エストニア語 | | 1,100,000 | | |
| サーミ語 | | 30,000 | | |
| リーヴ語 | | <i>extinct in 2013</i> | | |
| | | | (データなし) | |
| カレリア語 | 60,815 | 25,605 | (21,017) | 35% |
| ヴェプス語 | 5,939 | 3,613 | (2,362) | 40% |
| ヴォート語 | 64 | 68 | (14) | 22% |
| イジョール語 | 266 | 123 | (68) | 26% |
| モルドヴァ語 | 744,237 | 392,941 | (362,885) | 49% |
| エルジャ | 57,008 | 36,726 | (36,202) | 64% |
| モクシャ | 4,767 | 2,025 | (1,864) | 39% |
| 草原マリ語 | 547,605 | 365,127 | (345,262) | 63% |
| 山地マリ語 | 23,559 | 23,062 | (22,470) | 95% |
| ウドムルト語 | 552,299 | 324,338 | (298,628) | 54% |
| コミ語 | 228,235 | 156,099 | (137,934) | 60% |
| ジリヤン | | | | |
| ペルム | 94,456 | 63,106 | (58,693) | 62% |
| ハンティ語 | 30,943 | 9,584 | (8,865) | 29% |
| マンシ語 | 12,269 | 938 | (834) | 7% |
| ネネツ語 | 44,640 | 21,926 | (19,567) | 44% |
| エネツ語 | 227 | (36) | (36) | 16% |
| ガナサン語 | 862 | 125 | (93) | 11% |
| セリクブ語 | 3,649 | 1,023 | (945) | 26% |

2. フィンランド語の記述文法書

フィンランド語の文法書のうち、主に英語（や日本語）で参照が可能なものに以下のものがある。①は Routledge の Descriptive Grammar シリーズということもあり、参照文法書に適した内容、構成となっている。他の言語の記述と比較できるということも有用と言える。②はウラル諸語の個々の言語について書かれた辞典的な構成で、それぞれの文法記述の量は多くないため、網羅的で参照可能かという点から見ると、足りない点は否めない。しかし、従来の文法記述とは異なるような視点からの記述も見られ、興味深い内容である。③はもともとフィンランド語で書かれている文法の英語訳であるが、最もよくみられる文法内容となっていて、特にフィンランド語を学

習する際の文法書 (④, ⑤, ⑥) の構成, 内容ともほぼ同じとなっている。

- ① Sulkala, Helena, Merja Karjalainen (1992) *Finnish*, Routledge (Descriptive Grammar Series), London and New York.
- ② Abandolo, Daniel (1998) “Finnish” in *The Uralic Languages* ed. by D. Abandolo, Routledge, London and New York.
→ *Colloquial Finnish*, Routledge (1998) でも同じ分析
- ③ Karlsson, Fred (2008) *Finnish—An Essential Grammar* (2nd ed.), Routledge (Essential Grammar Series), London and New York.
← (2009) *Suomen Peruskielioppi* (Neljäs, laajennettu ja uudistettu painos), SKS, Helsinki.
- ④ White, Leila (2008) *A Grammar Book of Finnish* (2nd ed.), Finn Lectura, Helsinki.
← (2008) *Suomen Kielioppia Ulkomaalaisille* (7. painos), Finn Lecture, Helsinki.
- ⑤ 小泉保 (1983) 『フィンランド語文法読本』, 大学書林, 東京.
- ⑥ 吉田欣吾 (2010) 『フィンランド語文法ハンドブック』, 白水社, 東京.

例えば, ①と③の文法記述の構成を対比してみると表2のようになる。

表2 文献①と③の間の相関

| ①Sulkala & Karjalainen (1992) | ③Karlsson (2008) |
|--------------------------------|--|
| | (Ch1. Introduction) |
| Syntax | (Syntax) |
| 1.1. General questions | Ch7 Sentence structure |
| 1.2. Structural questions | Ch8 The nominative case and the partitive case |
| 1.3. Coordination | Ch9 The genitive case, possessive suffixes and the accusative case |
| 1.4. Negation | Ch10 The six local cases |
| 1.5. Anaphora | Ch11 Other cases |
| 1.6. Reflexives | Ch19 Comparison of adjectives |
| 1.7. Reciprocals | |
| 1.8. Comparison | |
| 1.9. Equatives | |
| 1.10. Possession | |
| 1.11. Emphasis | |
| 1.12. Topic | |
| 1.13. Heavy shift | |
| 1.14. Other movement processes | |
| 1.15. Minor clause types | |
| 1.16. Word classes | |

| | |
|--|--|
| 2. Morphology | |
| 2.1. Inflection Noun inflection Pronouns Verb morphology Adjectives Postpositions/prepositions Numerals/quantifiers Clitics (1.16. Word classes, 2.2. Derivational morphology) (1.16. Word classes) | Ch3 Word structure Ch5 The declension of nominals Ch13 Pronouns Ch6 The conjugation of verbs, Ch14 Tenses, Ch15 Moods, Ch16 The passive, Ch17 Infinitives, Ch18 Participles = Ch5 The declension of nominals (Ch20 Other word classes – 20.2/3) Ch12 Numerals (Ch20 Other word classes – 20.5 Enclitic particles/6 Discourse particles) Ch20 – 20.1 Adverbs Ch20 – 20.4 Conjugation |
| 2.2. Derivational morphology 2.2.6. Complex formations | Ch 21 Word formation 21.1 General 21.2 Derivation 21.3 Compounding |
| 3. Phonology | Ch2 Pronunciation and sound structure |
| 3.1. Phonological units (segmental) 3.2. Phonotactics 3.3. Suprasegmentals (length, stress, pitch, intonation) 3.4. Morphophonology (segmental) 3.5. Morphophonology (suprasegmental) | (= 2.7 Vowel harmony) (= 2.3 Short and long sounds, 2.6 Stress and intonation) = Ch4 Two important sound alternations |
| 4. Ideophones and interjections | |
| 5. Lexicon | |
| | Ch22 The colloquial spoken language |

表2は、文献①を基準に、文献③がどの部分で対応して記述されているかを示している。

統語に関しては、①は文法的なトピック別に分けているのに対し、③は文の構造および名詞の文法格の用法や動詞の不定形（文末述語以外に使われる、不定詞、分詞、動名詞などの形態）の用法に従ってまとめられているため、それぞれに相応する記述箇所を見つけることは、文法記述の全体を知らないとかなり難しいと言える。形態論は、①は統語的な特徴から分離して語形変化（形態）を詳細に取り上げているのに対し、③は、特に動詞形態論については、その統語的な意味や用法を記述しているため、その結果形態論がかなり多く記述されているように見えている。また③では名詞と形容詞を形態的な特徴から分けずにまとめられ、文の構造に関する記述の中の「名詞句」の説明において統語的な特徴から形容詞を名詞と分けている。また、主たる語形成方法の派生と複合については、③は派生と複合を別項目で扱うのに対し、①では複合を派生の語形

成のなかで捉えている。また、クリティックの扱いに関しても違いがある。

上にあげた文法書の間でいくつかみられる細かい違いの一つに、不定詞の取り扱いがある。フィンランド語では、他の多くのウラル諸語と異なり、不定詞にいくつかの形式があると書かれることが多い。その記述の差と、機能的な違いを表3に示している。

表3 フィンランド語動詞の“不定詞”の分類の相違

| 受動語幹 | 単独 | 小泉 | Karlsson | White | Sulkala, Abandolo | |
|-----------|----|----|----------|------------------------|----------------------|--------------------|
| -A | | のみ | 第1不定詞 | A infinitive (1st) | the 1st infinitive | the 1st infinitive |
| -e-ssA/-n | ○ | × | 第2不定詞 | E infinitive (2nd) | the 2nd infinitive | the 2nd infinitive |
| -mA | ○ | × | 第3不定詞 | MA infinitive (3rd) | the 3rd infinitive | the 3rd infinitive |
| -minen | ○ | | 第4不定詞 | 4th infinitive | the deverbal noun | the 4th infinitive |
| -mA | | | 動作主分詞 | the agent construction | the agent participle | (なし) |

※ Sulkala, Abandolo は第3不定詞が動作主分詞としても使われるとする

ウラル諸語の中でも、言語学的研究対象としての記述文法書、そして第二言語として習得を目的とした学習書としての網羅的文法書が揃っていると言えるフィンランド語であるが、記述方法の違いにより、特定の文法項目について参照したいときは容易でない面もあることがわかる。

3. ロシアにおける文法記述の状況

3.1. ロシア式記述文法の分類

次に、ロシア国内のウラル諸語の記述文法書を例に、ロシアにおける少数言語の文法記述の歴史とそのタイプ分類についてみて行く。20世紀に入ってから、ロシア国内の非ロシア語民族の言語が調査、研究され、文字表記方法を持たない言語も記述されるようになり、徐々に言語学的文法書や、言語教育のための教科書、そして様々な対ロシア語の辞書類が出されてきた。これらは、ロシア語文法の枠組みによって記述されており、文法の捉え方にもロシア文法的（より広く印欧語的）な言語観に基づいていると言える。

参照文法書に近い、言語学的な資料となる記述のタイプを分類すると、おおよそ以下のように分けられる。

- I 言語辞典の文法記述
- II 辞書と簡易文法
- III 文法書（規範文法的？）→ 方言ごとの文法記述もある
- IV 民族語教育教材としての文法書や辞書（+会話本）
- V 近年のロシア外の文法記述手法に倣った記述

まず、I-IVのタイプは、いわばロシアにおける伝統的言語記述による文献類といえるだろう。モルドヴァ語や、マリ語、コミ語などのように比較的話者が多い言語では、研究者や言語教育に携わる人が多くなるため、それぞれの文献で著者が異なり、相互に記述内容や分析方法、文法書としての構成などを比べるてみると違いもあると思われる。しかし、少数言語となると研究者の数は限られているので、ただ形式が異なるだけで内容はほぼ同じであるということはいくつか見られる。

表4 ロシアの言語辞典における各言語の記載項目一覧

| I 語族, 言語グループ, 方言のグループ | |
|-----------------------------------|---|
| 1 名称 | 4 系統的分類の原則と変異 |
| 2 位置と代表言語 | 5 言語分化の歴史—大語族の場合 |
| 3 おおよその話者数 | 6 典型的な音声—文法の特徴 |
| II 言語に関する内容 | |
| 1.1.0. 概論 | 2.3.0. 意味的文法（言語の形態的類型について） |
| 1.1.1. 名称の種類 | 2.3.1. 品詞分類の基準；一般的な意味のカテゴリ—的な表現方法（概要） |
| 1.1.2. 系統的内容 | 2.3.2. 名詞類語彙の特徴 |
| 1.1.3. 分布 | 2.3.3. 数の範疇とその表現 |
| 1.2.0. 言語地理的内容 | 2.3.4. 格の意味とその表現；所有の範疇とその表現 |
| 1.2.1. 方言構成の概要 | 2.3.5. 動詞類語彙の特徴 |
| 1.3.0. 社会言語学的内容 | 2.3.6. デイクティックとその表現方法；名詞と動詞における人称・名詞の定語, 動詞あるいは文の時制範疇, 指示と位置的, アナフォラ, 否定の表現 |
| 1.3.1. コミュニケーション機能の状況と言語のランク | 2.3.7. 語の意味的文法的順 |
| 1.3.2. 標準語化の段階 | 2.4.0. パラダイム図表 |
| 1.3.3. 学習・教育の状況 | 2.5.0. 形態統語論的内容 |
| 1.4.0. 文字 | 2.5.1. 語形の類型的構造（言語の形態論的發展）；接辞・接中の傾向；変な形態的語順 |
| 1.5.0. 簡易言語史 | 2.5.2. 語形成の基本的な方法と原則 |
| 1.6.0. 外的言語接触による構造内的現象 | 2.5.3. 単純文の典型的構造 |
| 2.0.0. 言語学的内容 | 2.5.4. 複文の基本的構成方法原則；複文の種類；基本的語順の原則 |
| 2.1.0. 音韻的内容 | 2.6.0. 借用語彙の元言語, 量, 役割 |
| 2.1.1. 音素一覧と特殊カテゴリー | 2.7.0. 方言の体系 |
| 2.1.2. プロソディ | |
| 2.1.3. 音素のプロソディの位置的音声実現形 | |
| 2.1.4. 音節；長さ対立の存在と状況 | |
| 2.2.0. 形態論的内容 | |
| 2.2.1. 形態素/語の音韻的構造；音節と形態素の関係 | |
| 2.2.2. 形態的単位とカテゴリの音韻的対立の存在 | |
| 2.2.3. 音交替のタイプ（形態素レベル） | |
| III 方言 | |
| 1 言語の名称 | 3 分布—可能な限り話者数 |
| 2 方言群における位置付け（文語・標準語との関係, 言語学的特徴） | 4 機能的負荷 |

Iの言語辞典タイプは、これまでに『ソ連邦内民族の言語』や『世界の言語』といったタイトルで、少数民族のみならず、対象となる全ての言語を収録している文献がある。時代や、シリーズにより多少の記載項目に違いがあるが、一番最近に出されているものは表4にあるように、その記述すべき項目が一覧として挙げられている。これらの構成は、ロシア語の文法（ロシア・アカデミ文法など）に準ずるものと見ることができる。ここでの利点は、まず、RoutledgeのDescriptive Grammarシリーズと同じように様々な言語について共通の視点から比較するときには有益である。また、言語を記述しようとするときに、何を書くべきか、何に気をつけるべきかについても良い指針となりえる。完全な理想版というわけではないが、一つの基準とすることができるだろう。また、シリーズによっては、最後に短い言語テキストの例も収録されている（ロシア語訳がついているだけで、音韻分析や形態論的分析などは皆無ではある。）ただ、辞典形態を取ることにより、個々の言語に当てられた紙面は多くなく（細かいフォントで詰まっはいるが10-20ページ程度）、広く網羅的に記述しているため、例や細かい点などは割愛されている。

次にIIは、全ての言語でそうであるとは言えないが、特に少数言語においては、文法記述付きの辞書が用意されていることがある。数万語規模の比較的大きい辞書の最後に付録として簡易文法がつけられている例であり、60-100ページくらいにも及ぶ量と内容についてもIタイプの記述よりも豊かである。多くの語彙や文の例、変化のパラダイムも載っていることが特徴的である。次に見るIIIタイプの文法書が、例等が増えて全体的な分量が多いがために使いづらいというのであれば、このIIタイプにあたるとより手早く文法全体をつかむことができる。

IIIのタイプは、上のIとIIが十分な1冊の文献となった規模で、記述内容も、例文の数も多い重厚なタイプと言える。文法項目や構成はほとんど変わらないため、IやIIに慣れていればだいたいどこに何について書いているかの推測はしやすい。しかし、語や例文の示し方に工夫は見られず、説明文の中に連続で並べられるものが多く、形態素に分けて示す例もほとんどなく、ロシア語の対訳が後続するだけである。そのため、分量が増えた分、見にくさも増えるという印象がつきまとう。

IVのタイプには、小学生や中学生レベルの少数民族の子供たちを対象とした教科書から、そういった民族語を教える立場になる語学教師向けに作られた文法書がある。言語学的な研究というよりも、言語教育的な面が強いため、参照文法書と呼べるようなものは多くないが、語学的な観点から文法をみる際にはわかりやすく有益と言える。また、教師向けの文法書は名詞や動詞のパラダイムの変化タイプ別の例示も多い。

最後に、Vのタイプは、これまで見たロシア内での慣例に基づいて記述される文法ではなく、英米やドイツ、フィンランドなどの西欧の言語学的な記述によった文法書で、ロシア人ではない研究者のものもあるが、ロシア人でも西欧的な枠組みで書かれた文法もある。日本における言語学や記述文法の立場からは、親しみやすい記述といえるかもしれない。数は決して多いとは言えないが、(ソ連崩壊後)近年いくつか出版されている。

3.2. サモエード諸語を例に（ネネツ語の文法記述の歴史）

ここでは、サモエード諸語を例に、参照文法書の状況を見てみたい。

表5は、サモエード諸語に属する現在話者のいる4言語の文法書の状況をまとめたものである。話者の多いネネツ語やセリクブ語では、他と比べて様々な文法書が出されているのに対し、消滅に瀕したガナサン語やエネツ語はそれほど記述自体が多いとは言えない。

表5 サモエード諸語について文法書の状況

| Type | ガナサン語 | エネツ語 | ネネツ語 | セリクブ語 |
|------|-------|------|------|-------|
| I | ○ | ○ | ○ | ○ |
| II | ×? | △ | ○ | △? |
| III | ○ | ○ | ○ | ○ |
| IV | △ | △ | ○ | ○ |
| V | × | ○ | ○ | △ |

次に、多くのタイプの文法書があるネネツ語の文献について見てみる。下に、各タイプごとの文法書をいくつか挙げている。

Type I

Терещенко Н. М. 1966. Ненецкий язык // *Языки народов СССР. том 3: Финно-угорские языки*, М., Наука.

———. 1993. Ненецкий язык // *Языки мира: Уральские языки*, М.: Наука.

Type II

Терещенко Н. М. 1965. *Ненецко-русский словарь*, М., Наук.

Type III

Терещенко Н. М. 1947. *Очерк грамматики ненецкого (юрако-самоедского) языка*. Л.: Учпедгиз.

Type IV

Куприянова З. Н., Бармич М. Я., Хомич Л. В. 1985. *Ненецкий язык. Учебное пособие для педагогических училищ. Издание 4-е, переработанное*. Л., Просвещение.

Алмазова А. В. 1961. *Самоучитель ненецкого языка*. Л. Учпедгиз.

(Прокофьев Г. Н. 1936. *Самоучитель ненецкого языка*. Л. Учпедгиз.)

Терещенко Н. М. 1959. *В помощь самостоятельно изучающим ненецкого языка (опыт сопоставительной грамматики ненецкого и русского языков)*, Л. Учпедгиз.

Type V

Nikolaeva, Irina. 2014. *A Grammar of Tundra Nenets*, Mouton de Gruyter.

Salminen, Tapani 1998. "Nenets" in *The Uralic Languages ed. by D. Abondolo*, Routledge, London and New York.

(———. 1997. *Tundra Nenets Inflection*, SUS, Helsinki.)

(———. 1998. *Morphological Dictionary of Tundra Nenets*, SUS, Helsinki.)

文法記述の枠組みは、I-IV のロシア伝統式と、V タイプの Salminen 式で、特に形態論で大きく異なる。Salminen 式の形態分析は形態音韻論的な点をかなり重視して分析するのに対して、ロシア伝統方式では形式的な形態分析で名詞や動詞の活用タイプを分類している。

表6は、これら二つの分析の間の、具体的な違いを示している。

表6 ネットの名詞・動詞の形態分析の違い

| | ロシア伝統式 (I-IV) | Salminen 式 (V) |
|-----------------------|--|--|
| ・ 名詞・動詞の曲用変化タイプ | | |
| 規則型 | 母音語幹型 子音語幹型 | 母音語幹 子音語幹 |
| 語幹末音交替型 | /ʌ/型 = [ʔ]-[n]/[v] /ɸ/型 = [ʔ]-[d/s]/[ɸ] | 混合語幹 glide 語幹 |
| ・ 動詞の時制 | 不定・過去・未来 | アオリスト・過去 |
| ・ 動詞の法 mood | 6 種類 | 16 種類 |
| ・ 動詞の non-finite form | 動名詞 (11 種類) 形動詞 (4 種類) 副動詞 (3 種類) | 不定詞 (2 種類) 分詞 (4 種類) ジェラント gerund 従属形 subordinate 否定分詞 connegative |
| ・ 動詞のアスペクトの扱い | いわゆる“アスペクト”接辞 習慣相, 完了相など 注: 他動詞・自動詞は別の項目 | 動詞の派生形として扱う 未来, (受動), 他動詞・自動詞もここに |

名詞と動詞の形態変化のタイプ分類には、共通して語末の子音の交替が挙げられる。ロシア伝統式では、語末子音交替のパターンで分類するが、Salminen 式はより規則的な変化をするものを母音語幹動詞と子音語幹動詞とに分け、数としては少ない例外的な変化をするものを混合語幹と glide 語幹に分けている。

一方、動詞の文法カテゴリーを示す形態については大きな違いが見られる。例えば時制のちがいは、Salminen 式では未来を認めてないことによる（時制の名称は異なるが指している接辞は同一）。これは、未来を表す接辞は動詞語幹に直接つき、人称語尾は現在と過去の時と同じであることによるが、実は過去形も現在形の末尾に過去を示すクリティックのようなものがつくだけで作られる。形態的な条件だけではなく、他の要素を考慮に入れた結果、異なる分析がなされているといえよう。他にも、示しているように、動詞の法（ムード、モダリティ）、不定形の分類方法にも大きな差があることがわかる。文法記述する研究者によってここまで大きな差があるということは、参照する際にも気をつけなければならない点であると言える。またロシア国内の他の少数言語がネット語と似たような文法枠組みで記述されてきていることを考え合わせると、他の諸言語においても、前提となる伝統的なロシア語文法記述枠組みから解き放たれた、より客観的な視点から再度文法を考え直す必要があるとも言えよう。

4. まとめ

以上、ウラル諸語の文法記述について、フィンランド語文法を例に西歐式記述を、そしてネネツ語文法を例にロシア式記述を見てきた。双方において異なる特徴も確かにあるが、共通して言えることはどのような枠組みで書かれているかという、文法の枠組み全体像を見なければならぬ、という点であろう。言語研究では、ある文法特徴について他言語の例を参照して対照させることがよくあるが、その記述された文法は書き手の持つ文法概念が強く反映されていることに気をつけねばならない。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016–2017年度）の成果の一部である。

参考文献

- Marcantonio, Angela. 2002. *The Uralic Language Family—Facts, Myths and Statistics*. Oxford and Boston: Blackwell.
- 小泉保 1991 『ウラル語のはなし』東京：大学書林。

バントゥ諸語の参照文法書

バントゥ諸語研究における参照文法書の位置づけ

米田 信子

Reference Grammar of Bantu Languages

The Role of Reference Grammars in the Study of Bantu Languages

YONEDA, Nobuko

Keywords: Bantu languages, reference grammar, missionaries, linguists, microvariation

キーワード: バントゥ諸語, 参照文法書, 宣教師, 言語学者, マイクロバリエーション

1. はじめに：バントゥ諸語概要
2. バントゥ諸語研究の変遷と参照文法書
3. 日本のバントゥ諸語研究と参照文法書
4. バントゥ諸語の参照文法書の可能性
5. おわりに

1. はじめに：バントゥ諸語概要

本稿では、バントゥ諸語研究の変遷とそのなかでの参照文法書の位置づけ、また日本におけるバントゥ諸語研究と参照文法書の動向を報告し、参照文法書の重要性と今後の展開の可能性について述べる。

バントゥ諸語は、アフリカ4大語族のひとつであるニジェール・コンゴ語族に属する言語群である。西アフリカに位置するカメルーンと東アフリカに位置するケニアを結ぶライン以南の全域に広く分布しており、その数は500–600言語（小森・米田2014）と言われている。

バントゥ諸語は慣例的にA83, N13, JD531のようにローマ字と2桁あるいは3桁の数字を用いて分類される。これはGuthrie (1967–71) が始めた分類で、バントゥ諸語が話されている地域を15のゾーンに分けてローマ字をあて、各ゾーン内の言語が10番台、20番台といった語群にまとめられている。Guthrie以降少しずつ修正が加えられ、現在では図1のような17のゾーンに分けられるのが一般的である。

バントゥ諸語は、(i) 名詞クラスとそれを基盤にした文法呼応システム、(ii) 膠着性の高い動詞



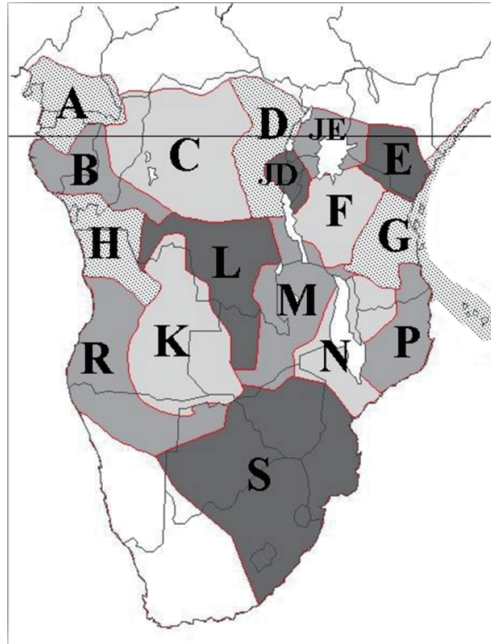


図1 バントゥ諸語のゾーン区分 (米田他 2012: 151)

構造，という特徴を共有しており，広域に分布しているにも拘らず類似性が高いことで知られている。比較研究のために，名詞クラスには Meeussen (1967: 97) が再建したバントゥ祖語の名詞クラスを基にした共通のクラス番号が付けられている。再建されたバントゥ祖語の名詞クラスと各名詞クラスの接頭辞および呼応接辞を表 1 に示す。最も多くの名詞クラスを有している言語のひとつであるガンダ語 [JE15] の例と合わせて挙げる。

このような分類や共通のクラス番号が存在していることからわかるように，バントゥ諸語には広く共有されている研究基盤がある。アフリカ諸語のなかでは最も多くの研究がなされている語群であり，現在では隔年で開催される「国際バントゥ諸語学会 (International Conference on Bantu Languages)」という語群の名前を冠する国際学会を有するまでになっている。

しかしながら，「参照文法書」と呼べるものが存在する言語は全体の 10% 程度にすぎない。文法スケッチや語彙集が存在する言語や部分的に調査や分析が行われた言語を加えても，全体の半分にも遠くおよばないという状況である。

2. バントゥ諸語研究の変遷と参照文法書

バントゥ諸語研究の始まりは植民地時代である。この節では，植民地時代とそれ以降とに分けてバントゥ諸語研究の変遷をまとめる。

表1 名詞クラスと名詞クラス接頭辞・主語接辞・目的語接辞（米田他 2012: 153）

| | | バントゥ祖語 | | ガンダ語 | | |
|-------|----------|----------|-------|----------|------|-------|
| 人称 | | 主語接辞 | 目的語接辞 | | 主語接辞 | 目的語接辞 |
| 1SG | | *n- | *n- | | N- | N- |
| 2SG | | *u- | *ku- | | o- | ku- |
| 1PL | | *tu- | *tu- | | tu- | tu- |
| 2PL | | *mu- | *mu- | | mu- | mu- |
| 名詞クラス | 名詞クラス接頭辞 | 主語接辞 | 目的語接辞 | 名詞クラス接頭辞 | 主語接辞 | 目的語接辞 |
| 1 | *mu- | *u-, *a- | *mu- | (o)mu- | a- | mu- |
| 2 | *ba- | *ba- | *ba- | (a)ba- | ba- | ba- |
| 3 | *mu- | *gu- | *gu- | (o)mu- | gu- | gu- |
| 4 | *mi- | *gi- | *gi- | (e)mi- | gi- | gi- |
| 5 | *j- | *dj- | *dj- | (e)ri- | li- | li- |
| 6 | *ma- | *ga- | *ga- | (a)ma- | ga- | ga- |
| 7 | *ki- | *ki- | *ki- | (e)ki- | ki- | ki- |
| 8 | *bj- | *bj- | *bj- | (e)bi- | bi- | bi- |
| 9 | *n- | *ji- | *ji- | (e)n- | e- | e- |
| 10 | *n- | *jj- | *jj- | (e)n- | zi- | zi- |
| 11 | *du- | *du- | *du- | (o)lu- | lu- | lu- |
| 12 | *ka- | *ka- | *ka- | (a)ka- | ka- | ka- |
| 13 | *tu- | *tu- | *tu- | (o)tu- | tu- | tu- |
| 14 | *bu- | *bu- | *bu- | (o)bu- | bu- | bu- |
| 15 | *ku- | *ku- | *ku- | (o)ku- | ku- | ku- |
| 16 | *pa- | *pa- | *pa- | wa- | wa- | wa- |
| 17 | *ku- | *ku- | *ku- | ku- | ku- | ku- |
| 18 | *mu- | *mu- | *mu- | mu- | mu- | mu- |
| 19 | *pj- | *pj- | *pj- | | | |
| 20 | | | | (o)gu- | gu- | gu- |
| 21 | | | | | | |
| 22 | | | | (a)ga- | ga- | ga- |
| 23 | | | | e- | e- | e- |
| 24 | (*i-) | ? | ? | | | |

2.1. 植民地時代

植民地時代のバントゥ諸語研究は、宣教師による記述研究と言語学者による比較研究、というまとめ方ができる。

2.1.1. 宣教師による研究

バントゥ諸語の研究は、19世紀末の植民地時代に宣教師たちによって始められた。キリスト教の宣教が始まった時期でもある。宣教師たちが赴任地やその周辺で話されている言語の語彙収集や文法調査を行ったのが始まりである。これらは現地語での布教と聖書翻訳のためのものであったが、「未知の言語」の全体像を理解することをめざしていた点で、参照文法書と目的を共有するものである。

20世紀前半には、宣教師による語彙集や文法書がいくつも出版されている。言語学の訓練を特別に受けているわけではない宣教師たちによる言語の記述には、当然ながら質的にばらつきが見られる。明らかに間違っている分析や聞き取れていないところ、また宣教師自身の母語に影響されていると思われるところなども少なくない。しかしながら、文献資料が絶対的に不足しているアフリカ諸語の研究にとって当時の文法スケッチや語彙集は貴重な言語資料である。

宣教師のなかには優れた言語学の知識を有する者もいた。最も有名なのは Clement Doke と E. O. Ashton である。南部アフリカで宣教活動をしていた Doke は、弟子たちと共に、ランバ語 [M54] (Doke 1922, 1937), ズールー語 [S42] (Doke 1927), ショナ語 [S10] (Fortune 1955), 南ソト語 [S33] (Doke and Mofokeng 1957) など多くの南部バントゥ諸語の文法書を書いている。Ashton が宣教活動を行っていたのは東アフリカで、彼女はスワヒリ語 (Ashton 1947) とガンダ語 (Ashton et al. 1954) の参照文法書を書いている。いずれの参照文法書も、これらの言語の研究には現在でも必ず引用される言語学的価値の高い参照文法書である。Doke や Ashton はのちに言語学の教鞭をとることになったほど言語学に長けていたが、彼ら以外にも言語学の知識を有する宣教師は少なくなかったようである。

このような例があるため宣教師と言語学者を明確に区別することが難しい場合もあるが、この時代に書かれた語彙集や文法書の多くが宣教師たちによるものであることはまちがいないだろう。この時期に書かれた参照文法書の例として、東部バントゥ諸語 (図1の D, E, F, G, JD, JE, M, N, P) の参照文法書を挙げる (小森・米田 1998)。

- [D28] ホロホロ語 (Coupez 1955)
- [E51] ギクユ語 (McGregor 1905, Le Bernhard 1908)
- [E55] カンバ語 (Last 1885, Farnswaorth 1954)
- [E71] ポコモ語 (Krafft 1904)
- [F21] スクマ語 (Koenen n.d.)
- [F22] ニャムエジ語 (Jonson 1949)
- [F23] スンブツ語 (Capus 1898)
- [G11] ゴゴ語 (Cordell 1898)
- [G12] カグル語 (Last 1886)
- [G23] シャンバラ語 (Rösler 1912)
- [G42] スワヒリ語 (Ashton 1947)

- [G65] キング語 (Wolff 1905)
- [JE11] ニョロ語 (Maddox 1938)
- [JE13] ンコレ-ギガ語 (Taylor 1985)
- [JE15] ガンダ語 (Ashton et al. 1954)
- [JE22] ハヤ語 (Betbeder 1936)
- [JE24] ケレウェ語 (Hurel, 1909)
- [JE251] クッヤ語 (Sillery 1936)
- [JE32] ルヒヤ語 (Appleby 1961), マサバ語 (Purvis 1907), ブクス語 (Huntingford 1924)
- [JE41] ロゴオリ語 (Rees 1915)
- [JE42] グシイ語 (Beavon 1921–30)
- [M25] サファ語 (Voorhoeve, n.d.)
- [N12] ンゴニ語 (Ebner, 1951)
- [N13] マテング語 (Ebner 1957)
- [N31] チェワ語 (Watkins 1937)
- [P21] ヤオ語 (Hetherwich 1902, Sandeson 1922, Ebner 1958)
- [P22] ムェラ語 (Harries 1950.)
- [P25] マビハ語 (Harries 1940)
- [P31] マクワ語 (Woodward 1926)

JE は、東アフリカで最初に宣教師たちが布教を始めた地域である。また N12 が話されている地域は、タンザニア南部のキリスト教宣教師の拠点となっているところである。これら以外の言語も含め、植民地時代に文法スケッチや参照文法書が書かれた言語の分布とキリスト教の宣教師たちの活動地域は見事に重なっている。

しかしながら、残念なことにこれらの文献がすべて現存しているわけではない。この時代のものはカーボン複写やガリ版印刷のものも多く、それらのうちのかなりがすでに紛失しているようである。例えば [N13] のマテング語の文法スケッチは、ドイツのベネディクトゥス修道会の宣教師によって書かれたもので、タンザニアの修道会宣教師本部のアーカイブに保管されていることになっているが、確認したところ現物は見つからなかった。念のためドイツの修道会のアーカイブにも確認したが、そこにも存在しなかった。貴重な資料が紛失してしまっていることは大変遺憾なことである。残っている場合でも、カーボン複写やガリ版印刷のものは劣化が激しく、ページをめくることができないものもある。これらの保存については、デジタル化するなど早急に手を打つ必要がある。

2.1.2. 言語学者による研究

20 世紀の前半には言語学者によるバントゥ諸語研究が本格化してきた。主に、英国、ドイツ、ベルギーなど植民地の宗主国出身の言語学者たちによる研究である。「マインホフの法則」と呼ばれる音韻規則 (Meinhof 1913)、ガズリーのバントゥ諸語分類 (Guthrie 1967–71)、バントゥ祖語の再建 (Meeussen 1967) など、現在に続くバントゥ諸語研究の基盤となっている研究がこの時期に出てきた。

当時の言語学者たちの興味は、個別言語よりもバントゥ諸語全体に向けられていた。したがって、この時代の研究の中心は、Meeussen (1959) によるルンディ語 [JD62] の記述研究などの例外もある

が、個別言語の記述ではなくバントゥ諸語の比較である。何をもち「バントゥ諸語」とみなすかというバントゥ諸語の基準や共通する特徴の分析、分類や系統の分析、バントゥ祖語の再建といった比較言語学の重要な研究がこの時代に生まれている。

2.2. 独立以降

アフリカ諸語の研究は、植民地支配の宗主国という関係からヨーロッパの研究者たちを中心に進められてきたが、独立以降、すなわち 1960 年代以降は、アメリカでもバントゥ諸語の研究が行われるようになった。

植民地時代の研究が現地調査に基づくものであったのに対し、独立以降のアメリカでの研究は、アフリカで調査を行うのではなく、主にアフリカ出身の留学生からデータを収集する形で行われた。またアメリカのバントゥ諸語研究は、特定の理論的枠組みで特定の現象のみを扱うという研究が中心で、対象とする現象を理論的に説明して一般化することに重きが置かれてきた。そのため、その言語の全体像を明らかにすることや記述研究にはあまり関心が向けられてこなかった。20 世紀後半にアメリカで出版された個別言語の参照文法書（に類する）研究としては、Byarushengo et al. (1977) によるハヤ語 [JE22]、Kimenyi (1980) によるルワンダ語 [JD61]、Mchombo (2000) によるチェワ語 [N31] などがあるが、それ以外には個別言語の記述研究はほとんど行われていない。このような傾向、すなわち主にアメリカ国内でデータ収集をする点と記述研究よりも特定の現象の一般化が好まれる点は、現在も変わっていない。

個別言語の記述研究が盛んになってきたのは、「消滅の危機に瀕する言語」に関心が集まり始めた 20 世紀末になってからである。アメリカでのアフリカ諸語の研究はこの時期になっても特定のテーマに絞ったものが中心であったが、ヨーロッパや日本では、20 世紀末以降バントゥ諸語の参照文法書が博士論文として次々に提出されるようになった。また参照文法書までの記述はできなくても、文法スケッチがジャーナルや論文集に投稿されるようになった。2003 年に出版された *The Bantu Languages* (Nurse and Philippson eds. 2003) には、バントゥ諸語の歴史や音韻、形態、テンス・アスペクトといった諸項目と共に、14 言語の文法スケッチが収録された。

かつては言語学者の仕事はバントゥ諸語の比較であり、個別言語の記述をするのは宣教師の仕事であったが、20 世紀が終わろうとする頃になってようやく言語学者（あるいは言語学者を目指す研究者たち）による個別言語の記述研究が活気づいてきた。

この時期の文法スケッチや参照文法書が植民地時代のものとは決定的に異なっているのは、これらが言語学の訓練を受けた研究者たちによって書かれているという点である。特に参照文法書は「博士論文」であり、その質は担保されている（はずである）。20 世紀末から 21 世紀にかけてヨーロッパで博士論文として提出されたものには、カグル語 [G12] (Petzell 2007)、ンデングレコ語 [P11] (Ström 2013)、ンダンバ語 [G52] (Edelsten and Lijongwa 2010)、マ ندا語 [N11] (Bernander 2017) などがある¹。この時期には、日本でも 8 本の参照文法書が博士論文として提出されている（これにつ

¹ これらはいずれもタンザニアの言語である。3.2 で述べる日本の博士論文でも、バツァ語 [S402] (南アフリカ) を除けばすべてタンザニアの言語であり、あきらかにタンザニアに偏っている。タンザニアは言語の数が多いことも確かだが、研究対象言語がこれだけタンザニアに集中しているのは「偶然」ではなく、スワヒリ語の存在が関係していると思われる。スワヒリ語は辞書や教材が揃っているだけでなく、イギリスのロンドン大学、スウェーデンのヨーテボリー大学、オランダのライデン大学、日本の大阪大学などで履修することも可能である。バントゥ諸語の研究者が最初にアクセスする言語は、たいていスワヒリ語である。調査地に入る前に調査媒介言語を習得できることは調査者にとっては大きなメリットである。さらにタンザニアの治安の良さも無関係ではないだろう。

いては3.2で述べる)他, SIL International²のメンバーによる参照文法書が複数出版されている。

「消滅の危機に瀕する言語」に注目が集まるなか, 20世紀の終盤からはアフリカ諸国の大学でも母語話者によるバントゥ諸語の記述研究が活発になってきた。タンザニアのダルエスサラーム大学ではアフリカ諸語の参照文法書や語彙集を作成するプロジェクト Languages of Tanzania が立ち上がり, 18言語の語彙集とニャンボ語 [JE21] の参照文法書 (Rugemalira 2005) が出版された。またナミビアでも1990年の独立以降, ヘレロ語 [R31], クワニャマ語 [R21], シンドンガ語 [R22], シンブクシュ語 [R333] などの文法スケッチや参照文法書が続けて出版されている。これらはいずれも母語話者によって (共著の場合は著者のひとりが母語話者) 書かれたものである。

3. 日本のバントゥ諸語研究と参照文法書

2節では世界のバントゥ諸語研究の歴史を述べてきたが, この節では, 日本のバントゥ諸語研究の変遷を見ていく。バントゥ諸語が最初に日本に紹介されたのは, おそらく新村 (1933) の『言語學概説』である。しかしながら日本で本格的にバントゥ諸語研究が行われるようになったのは, それから30年以上も経った後, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (以下 AA 研) が設立された1964年である。以下, 現在までの日本のバントゥ諸語研究の流れを3つのフェーズに分け, それぞれの時期の特徴を見ていくことにする。

3.1. 第一期：声調

日本におけるバントゥ諸語の言語研究の先駆けとなったのは, 湯川恭敏, 加賀谷良平, 梶茂樹らによる調査・研究である。第一期は, この3人によって声調に関する研究が精力的に行われた。

バントゥ諸語の多くが複雑な声調システムを持っているにも拘らず, 欧米の研究者は声調の分析をほとんど行っていなかった。今でこそバントゥ諸語の例文に声調が記された論文が増えてきたが, かつては例文に声調の記号が付けられている論文はほぼ皆無であった。これは宣教師による記述に限ったことではなく, 言語学者による文法記述でも同じである。参照文法書においても, 音韻論の章で声調の説明がなされているものはあっても, それ以外の章の例文には声調が示されていなかった。日本の研究者によるバントゥ諸語の声調に関する一連の研究は, それまでのバントゥ諸語研究を補完するものであり, バントゥ諸語研究において声調の研究が不可欠なものであることを世界に示した。

また, 現地調査で自らデータを収集するという日本のアフリカ諸語研究の基本的スタイルも, この時代にこれらの先駆者たちによって確立された。湯川がアフリカで語彙と基本文法の調査を行ったバントゥ諸語の数は130以上にものぼる。のちに湯川は, それら基礎語彙の比較からバントゥ諸語間の遠近関係を判定し, バントゥ諸語の分岐の歴史に関する仮説を提示しているが (湯川 2011), ひとりの研究者によって調査された言語の数としては, 他に類を見ない。

声調というひとつのテーマに絞って多数のバントゥ諸語の調査をしてきた湯川や加賀谷の研究とは対照的に, ひとつの言語に集中して語彙や文法だけでなく文化人類言語学的研究まで含めてその言語全体を研究対象にしたのが, 梶によるテンボ語に関する一連の研究である (梶 1984, 1985 他)。それらの研究の中で梶が最も力を入れてきたのも声調の分析である。まったく異なる

² 聖書の少数民族の言語への翻訳を行うキリスト教系 NGO 団体で, 聖書翻訳を目的に言語研究者による言語調査・研究を行っている。フィールド言語学の訓練を行うコースも開講しており, 言語学者の育成も行っている。

アプローチではあるが、対象言語の全体像を把握することから始めるという点は、3人に共通する研究方針である。一見「声調」という特定の現象に限っているように見える湯川や加賀谷の研究も、声調の調査の前提として、共通の調査票を用いて約2400項目の語彙調査と基本文法調査を必ず行っている。バントゥ諸語において声調は、語彙のレベルで対立があるだけでなく文法機能も担っており、声調の調査にとって文法の理解は不可欠である。

この時期に参照文法書が書かれていないのは意外な気もするが、湯川と加賀谷の編集によってAA研から出版された *Bantu Vocabulary Series* というバントゥ諸語のシリーズ本（全15巻）では、各巻に対象言語の語彙に加えて文法スケッチも収録されている。このシリーズは、現在でも世界中のバントゥ諸語研究において最も頻繁に引用されている文献のひとつである。

3.2. 第二期：参照文法書

バントゥ諸語研究の先駆者たちの教えを受けた世代が活動の中心になったのが、日本のバントゥ諸語研究の第二期である。2.2で述べた20世紀末から今世紀にかけてのヨーロッパと同様、日本でもこの時期の博士課程のバントゥ諸語研究は個別言語の記述研究が中心となった。個別言語の記述研究の成果は参照文法書となり、博士論文として提出されるようになってきた。これが日本におけるバントゥ諸語の参照文法書のスタートである。研究対象になった言語は、マテング語 [N13]（米田2000）、ケレウェ語 [JE24]（小森2003）、マリラ語 [M24]（角谷2004）、バツァ語 [S402]（神谷2006）、ベンデ語 [F12]（阿部2006）、ルツ語 [E61]（品川2008）、マア語 [G221]（安部2016）、スワヒリ語マクンドゥチ方言 [G43c]（古本2018）である。

いずれも、音韻論から形態論、統語論、すなわち小さい単位から大きな単位へという流れで対象言語を網羅的に記述している。扱っている項目はいずれも類似しているが、社会言語学的な記述や文化人類言語学的な記述にどのくらいの分量を割いているか、また章立ての細かさといったあたりにそれぞれの論文（あるいは著者）の個性が出ている。声調の扱いについては、角谷(2004)のように音韻論の章で説明するというのが一般的だと思われるが、米田(2000)は、マテング語の声調の概要を音韻の章で説明した上で、名詞と動詞の声調についてはそれぞれ名詞の章と動詞の章で形態論の一部として扱っている。また、阿部(2006)は「声調論」、品川(2008)は「音調論」という独立した章を立てて、それぞれベンデ語とルツ語の声調を一括して説明をしている。このような違いは見られるが、バントゥ諸語における声調の重要性を説いてきた先駆者たちの教えがこれらの記述研究に活かされていると言えるだろう。2012年には、個別言語の記述研究のエッセンスをまとめた『アフリカ諸語文法要覧』が出版された（塩田編2012）。このなかには9つのバントゥ諸語の文法スケッチが収録されている。

3.3. 第三期：参照文法書からのスタート

現在は、日本のバントゥ諸語研究の第三期と位置付けることができる。第三期にあたる現在の日本のバントゥ諸語研究には、個別テーマの研究と比較・対照研究という2つの流れが見られる。

まず個別テーマの研究である。情報構造、動詞の派生形、関係節、テンス・アスペクト体系といった個別言語の特定の現象に絞った研究が数多く出てくるようになった。その多くは、博士論文を書きながら特に気になった現象であり、言語の全体像を見たからこそ出てきた個別テーマである。

次に比較・対照研究である。バントゥ諸語間の比較研究については、2016年度からAA研の共同研究プロジェクトとして「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型論的研究」が始

まった。4節でも述べるが、このプロジェクトは、国際的な共同研究にも発展している。また日本語をはじめとするバントゥ諸語以外の諸言語との対照研究については、国立国語研究所の共同研究など現在多数進行中である。いずれも共同研究が中心だが、自分が担当する個別言語のデータを責任を持って共同研究に提供することができるのは、その言語の参照文法書を書き、言語の全体像を理解しているからこそである。

このように、個別テーマの研究にしても、比較・対照の共同研究にしても、第三期のバントゥ諸語研究は、参照文法書が土台となり、参照文法書からスタートした研究である。これは日本に限らずバントゥ諸語研究の世界的な動向でもある。

4. バントゥ諸語の参照文法書の可能性

バントゥ諸語の参照文法書は、日本においても世界においても、20世紀末から活性化してきた。さらに現在では、参照文法書を土台とした研究が世界のさまざまなところで展開している。その代表的なものが形態統語論的現象のマイクロバリエーション研究である。

この研究を牽引してきたのが、2014年から始まったロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)を拠点とする国際プロジェクト *Morphosyntactic variation in Bantu: Typology, contact and change* (以下SOAS国際プロジェクト)である。このプロジェクトでは、バントゥ諸語の形態統語論的現象に関する142種類のパラメーターを定め(Guérois et al. 2017)、50以上のバントゥ諸語からデータを収集してデータベースを作成した。このプロジェクトは2018年に終了したが、現在もプロジェクトが作成したデータベースを基にしたマイクロバリエーション研究の成果が次々に発表されている。

また、SOAS国際プロジェクトの海外協力メンバーを中心に、ベルギー、フィンランド、スウェーデン、南アフリカ、タンザニア、日本でもマイクロバリエーション研究のプロジェクトが進められている。3節で述べたAA研の共同研究プロジェクトもそのひとつである。日本のプロジェクトでは、各メンバーが研究対象としている言語のデータを142種類のパラメーターの観点から比較検討してきた。その成果として、2019年には12の言語のデータをまとめたデータ集(Shinagawa & Abe 2019)を出版した。

バントゥ諸語の比較研究は、長年にわたって語彙や音韻を中心に行われてきたが、こうしたミクロなレベルで文法現象の比較研究を行うことで、文法的に類似性が高いと言われてきたバントゥ諸語のなかに見られるバリエーションが少しずつ明らかになっている。

このような比較研究が可能になった理由のひとつとして、比較が可能なところまで個別言語の記述研究が蓄積されてきたことが挙げられる。今世紀に入ってバントゥ諸語の参照文法書の数は確実に増えてきた。個別言語の参照文法書は、今現在も若い研究者たちの博士論文によって積み上げられている。マイクロバリエーション研究は、まさにこのような参照文法書を基盤にした研究であり、SOAS国際プロジェクトの研究は、個別言語の地道な記述研究の重要性を改めて認識させるものになった。

しかしながら、同時に、SOAS国際プロジェクトのマイクロバリエーション研究からは、現在もなおバントゥ諸語の参照文法書がいかに不足しているか、ということも見えてきた。確かに個別言語の記述研究は蓄積されてきたが、それでもSOAS国際プロジェクトでデータを用いることができた言語の数は50強である。これはバントゥ諸語全体から見れば1割程度にすぎない。しかも142のパラメーターの80%以上にデータを提供できた言語は、現在のところ35言語しかない。

142のパラメーターのなかには参照文法書で扱える範囲を超えた、特定の現象について踏み込んだ調査が必要なものも多く含まれている。また近年になって取り上げられるようになった現象に関するもの(例えば情報構造に関するパラメーターなど)もある。そのような現象をこれまでの参照文法書が扱っていないのは仕方がない、というよりもむしろ当然のことでもある。したがって、80%以上の項目にデータを提供できない参照文法書が必ずしも不十分な記述であるというわけではない。

しかしながら、これら142のパラメーターは、最新のものも含めてこれまでのバントゥ諸語研究のなかで取り上げられてきた興味深いバリエーションが見られる現象である。言い換えれば、これらのパラメーターは、少なくとも今後のバントゥ諸語の記述研究では「確認すべき現象」であり、今後は参照文法書に加えられられていくべき項目である。その意味で、SOAS国際プロジェクトのマイクロバリエーション研究は、参照文法書の数だけでなく内容もさらに発展させる必要があることを示唆するものである。

もちろんパラメーターにデータを当てはめることが参照文法書の目的ではないことは言うまでもない。個別言語にはそれぞれ独自の特徴があり、書くべきことは言語によって異なっているだろう。しかしながら、バントゥ諸語の参照文法書で扱われるべき「基本」の部分は共通するはずである。そしておそらくSOAS国際プロジェクトが提案したパラメーターは、今後その「基本」に組み込まれていくものと思われる。先に述べたとおり、バントゥ諸語研究には、分類や名詞クラス番号といった共有されている研究基盤がある。したがってこれらのパラメーターを個別言語の調査において共通の調査項目に発展させていくことは十分に可能だろう。これからバントゥ諸語の調査を行う研究者にとっては、これらのパラメーターを検討することでバントゥ諸語全体の特徴が見えてくるだろうし、それを通してさらに調査すべき現象も見えてくるだろう。マイクロバリエーション研究によって、参照文法書も、またそれらを用いた研究も、より充実したものになっていくことが期待される。

5. おわりに

本稿では、バントゥ諸語研究の変遷と参照文法書の位置づけを見てきた。バントゥ諸語研究の動向も、また参照文法書の扱われ方も、時代とともに変化してきた。その結果として、現在は参照文法書の蓄積を土台としたマイクロバリエーション研究が主流になっている。この研究は、参照文法書の重要性を再認識させるものであり、同時に、参照文法書のさらなる蓄積の必要性を我々に示している。

バントゥ諸語に限らず、アフリカ諸語の研究者の数は世界的に見ても極めて少ない。全世界の言語の約4分の1がアフリカ大陸の言語であることを考えれば、アフリカ諸語の研究者の数は現在の何十倍もいてしかるべきであるが、研究者の数は圧倒的に不足している。このような状況である限り、アフリカ諸語研究の国際的な研究連携は必須である。幸いにして、バントゥ諸語の研究では国際的な研究ネットワークができていく。今後この研究ネットワークはさらに拡大・強化していくと思われるが、その研究ネットワークにおいて貢献していくためには、個別言語の網羅的な記述研究が必須である。たとえ特定の現象のみのデータが求められる場合であっても、それは同じである。そのデータが適切であることが判断できるのは、その言語の全体像を知っているからに他ならない。

言語の記録の点からも、また言語研究のさらなる展開の点からも、バントゥ諸語研究における

参照文法書の重要性がますます高まっていくことは疑いの余地がないだろう。そして、その質の充実も、さらに問われるようになるものと思われる。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016-2017年度）の成果の一部である。

参考文献

- Appleby, L. L. 1961. *A First Luyia Grammar*. Nairobi: East African Literature Bureau.
- Ashton, E. O. 1947. *Swahili Grammar, Including Intonation*. 2nd edn. Harlow: Longman.
- Ashton, E. O., E. M. K. Kulira, E. G. M. Ndawula, and A. N. Tucker. 1954. *A Luganda Grammar*. London: Longman, Green and Co. Ltd.
- Bernander, Rasmus. 2017. "Grammar and Grammaticalization in Manda - An Analysis of the Wider TAM Domain in a Tanzanian Bantu Language." Ph.D dissertation of University of Gothenburg.
- Betbeder, Paul and John Jones. 1949. *A Handbook of the Haya Language*. Bukoba: White Fathers Printing Press.
- Byarushengo, E. Rugwa, Alessandro Duranti and Larry M. Hyman. 1977. *Haya Grammatical Structure*. (Southern California Occasional Papers in Linguistics 6.) Los Angeles: University of Southern California.
- Capus, A. 1898. "Grammaire de shisumbwa." *Zeitschrift für Afrikanische und Oceanische Sprachen* 4: 1-123.
- Coupez, André. 1955. *Esquisse de la Langue Holoholo*. (Annales de Musée Royal du Congo Belge 8. Sciences de l'Homme. Linguistique 12.) Tervuren: Commission de Linguistique Africaine.
- Doke, C. M. 1922. *The Grammar of the Lamba Language*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.
- . 1927. *Text-Book of Zulu Grammar*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- . 1938. *Textbook of Lamba Grammar*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- Doke, C. M. and S. M. Mofokeng. 1957. *Textbook of Southern Sotho Grammar*. London: Longman, Green and Co. Ltd.
- Ebner, E. 1951. *Grammatik der Neu-Ki-Ngoni Sprache*. Mission Magagura Tanzania.
- Edelsten, Peter and Chiku Lijongwa. 2010. *A Grammatical Sketch of Chindamba*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Farnswaorth, E. M. 1954. *A Kamba Grammar*. African Inland Mission.
- Fortune, G. 1955. *An Analytical Grammar of Shona*. London: Longman, Green and Co. Ltd.
- Guérois, Rozenn, Hannah Gibson and Lutz Marten. 2017. *Parameters of Bantu Morphosyntactic Variation: Master List*.
- Guthrie, Malcom. 1967. *The Classification of the Bantu Languages*. London: Dawsons of Pall Mall.
- . 1967-1971. *Comparative Bantu*. I-IV. Farnborough: Gregg International.
- Harries, L. 1940. "An Outline of the Mawiha Grammar." *Bantu Studies* 14: 91-146.
- . 1950. *A Grammar of Mwera*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- Hetherwich, A. 1902. *A Handbook of the Yao Language*. London: Society for Promoting Christian Knowledge.
- Hurel, Eugène. 1909. "La language Kikerewe." *Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen* 12: 1-113.
- Jonson, Erland. 1949. *Kinyangwezi Grammatik*. Tabora: Swedish Free Mission.
- Kimenyi, A. 1980. *A Relational Grammar of Kinyarwanda*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Maganga, Clement and Thilo C. Schadeberg. 1992. *Kinyamwezi: Grammar, Text, Vocabulary*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.

- Meinhof, Carl. 1906. *Grundzüge einer vergleichenden Grammatik der Bantusprachen*. Berlin: Reimer.
- . 1913. “Dissimilation der Nasalverbindungen im Bantu.” *Zeitschrift für kolonialsprechen* 3: 272–278.
- Meeussen, A. E. 1959. *Essai de Grammaire Rundi*. Tervuren: Musée Royal de L’Afrique Centrale.
- . 1967. “Bantu Grammatical Reconstruction.” *African Linguistica* 3: 79–121.
- . 1980. *Bantu Lexical Reconstructions*. Tervuren: Musée Royal de L’Afrique Centrale.
- Möhlig, Wilhelm J. G. and J. U. Kavari. 2008. *Reference Grammar of Herero (Otjiherero)*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Nurse, Derek and Gérard Philippon, eds. 2003. *The Bantu Languages*. London: Routledge.
- Petzell, Malin. 2007. “A Linguistic Description of Kagulu.” Ph.D dissertation of University of Gothenburg.
- Rubongoya, L. T. 1999. *A Modern Runyoro-Rutooro Grammar*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Rugemalira, J. M. 2005. *A Grammatical Sketch of Runyambo*. Dar es Salaam: University of Dar es Salaam.
- Sillery, A. 1936. “A Sketch of the Kikwaya Language.” *Bantu Studies* 6: 273–307.
- Shinagawa, Daisuke and Yuko Abe, eds. 2019. *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu*. Fuchu: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- Ström, Eva-Marie Bloom. 2013. “The Ndegeleko Language of Tanzania.” Ph.D dissertation of University of Gothenburg.
- Taylor, C. 1985. *Nkore-Kiga* (Croom Helm Descriptive Grammars). New Hampshire: Croom Helm.
- Voorhoeve, J. n.d. *A Grammar of Safwa*. Leiden: Afrika Instituut, Universiteit.
- Watkins, Mark Hanna. 1937. *A Grammar of Chichewa*. (Supplement to *Language*, Language Dissertations 24.)
- Woodward, H. W. 1926. “An Outline of Makua Grammar.” *Bantu Studies* 2: 269–325.
- Zimmermann, W. and P. Hasheela. 1998. *Oshikwanyama Grammar*. Windhoek: Gamsberg Macmillan Publishers.
- 安部麻矢 2016 「マア語 (Ma’a/Mbugu) の記述研究—文法と社会言語学的考察」京都大学博士論文。
- 阿部優子 2006 「バンデ語 (バントウF12, タンザニア) の記述研究」東京外国語大学博士論文。
- 梶茂樹 1984 「テンボ語動詞の形態論的構造」『アジア・アフリカ言語文化研究』28: 1–47。
- 1985 「テンボ語の動詞の活用」『アジア・アフリカ言語文化研究』29: 91–131。
- 角谷征昭 2004 「マリラ語の記述研究」広島大学博士論文。
- 神谷俊郎 2006 「バツァ語の記述研究：その音声・音韻・文法」東京外国語大学博士論文。
- 小森淳子 2003 「ケレウェ語の記述研究—文法・接触による変容・言語文化」京都大学博士論文。
- 小森淳子・米田信子 1998 「東アフリカ言語社会文献目録」『スワヒリ & アフリカ研究』8: 150–192。
- 2014 「総説—言語・言語学」日本アフリカ学会(編)『アフリカ学事典』, 96–107, 京都: 昭和堂。
- 塩田勝彦(編) 2012 『アフリカ諸語文法要覧』広島: 溪水社。
- 品川大輔 2008 「ルツ語 (Bantu, E61) 動詞形態論：記述言語学的研究」名古屋大学博士論文。
- 新村出 1933 『言語學概説』東京: 資文館。
- 古本真 2018 「スワヒリ語マクンドゥチ方言の文法：名詞と動詞を中心とした記述と分析」京都大学博士論文。
- 湯川恭敏 2011 『バントウ諸語分岐史の研究』東京: ひつじ書房。
- 米田信子 2000 「マテンゴ語の記述研究 (バンツ系, タンザニア) —動詞構造を中心に」東京外国語大学博士論文。
- 米田信子・小森淳子・神谷俊郎 2012 「バントウ諸語概説」塩田勝彦(編)『アフリカ諸語文法要覧』, 151–155, 広島: 溪水社。

以下は、2.1 で紹介した文献のうち現物が確認できていないものである。

- Beavon, E. A. 1921–30. “A Gusii Grammar.” (typed only) S. D. A. Mission.
- Cordell, O. T. 1941. *Gogo Grammar*. Londres.
- Ebner, Elzear P. 1957. *Grammatik der kiMatengo-Sprache*. Liparamba.

- Ebner, E. 1958. *Grammatik der Ki-Yao Sprache*. (n.p.)
- Huntingford, G. W. B. 1924. *Grammar of Lubukusu*. (ms).
- Koenen, Rev. M. n.d. *New KiSukuma Grammar*. Mwanza.
- Krafft, H. 1904. *Grammatik der Pokomo-Sprache*. Neukirchen.
- Le Bernhard, R. P. 1908. *Grammaire Gikouyou*. Nairobi Mission Catholique.
- Last, J. T. 1885. *Grammar of the Kamba Language*. London.
- . 1886. *Grammar of the Kaguru Language*. London.
- Maddox, H. E. 1938. *An Elementary Lunyoro Grammar*. London: Society for Promotion Christian Knowledge.
- McGregor, A. Wallace. 1905. *Grammar of the Kikuyu Language*. London.
- Purvis, J. B. 1907. *Lumasaba Grammar*. London.
- Rees, E. J. 1915. *Grammar of Luragoli*. Kiamosi.
- Rösler, O. 1912. "Shambala-grammatik." *Arch. Stud. d Kol* 8: 1–52.
- Sandeson, G. M. 1922. *A Yao Grammar*. (2nd ed.) London.
- Wolff, R. 1905. *Grammatik der Kinga-Sprache*. Berlin: Berlin Mission.

C. M. Doke によるランバ語の参照文法

テンス・アスペクト分析にみられる問題点

牧野友香

Reference Grammar of Lamba by C. M. Doke Focusing on His Analysis on Tense and Aspect System

MAKINO, Yuka

Keywords: reference grammar, Bantu languages, Lamba, tense and aspect

キーワード: 参照文法, バントゥ諸語, ランバ語, テンス・アスペクト

1. はじめに
2. Doke による 2 つの文法書の構成とそれぞれの特徴
3. Doke によるランバ語のテンス・アスペクト解釈の問題点
4. 新たなテンス・アスペクト体系の提案
5. おわりに

1. はじめに¹

ランバ語はニジェール・コンゴ語族バントゥ諸語に属する言語である。以下の分布図の 23 番で示されている地域が、ザンビアにおいてランバ語が話されている地域である。ザンビア中央部のほかコンゴ民主共和国のアウトカタンガ州でも話される。話者数は 198,000 人である (Eberhard et al. 2019)。

牧野友香, 2022. 「C. M. Doke によるランバ語の参照文法: テンス・アスペクト分析にみられる問題点」. 渡辺己・澤田英夫 (編) 『参照文法書研究』. (アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 227-246. DOI: <https://doi.org/10.15026/116968>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

¹ 本研究は平成 29 年度日本学術振興会特別研究員奨励費「ベンバ語およびその周辺言語におけるテンス・アスペクト体系における比較研究」(JP17J00068) の成果の一部である。

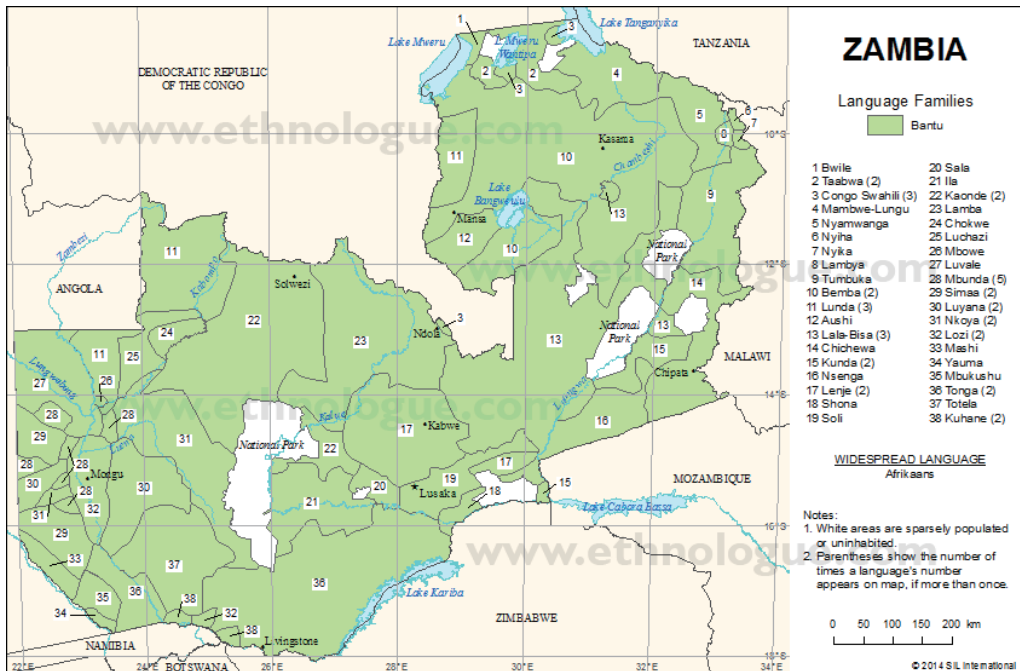


図1 ザンビアの言語分布図 (Eberhard et al. 2019)

ランバ語には、Clement Martyn Doke によって翻訳された聖書 (Doke 1959) がある。Doke は植民地時代の宣教師であり、言語学者でもある。ズルー語や南ソト語など、南部アフリカのバントゥ諸語の辞書や文法書などを数多く残している² (Doke 1927a, Doke 1954, Doke & Mofokeng 1957 など)。当時は聖書の翻訳が一大プロジェクトであり、文法書は聖書翻訳のために書かれていた時代であった。Doke は、ランバ語については以下の2つの文法書を残している。

1922. *The Grammar of the Lamba Language*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.

1938. *Textbook of Lamba Grammar*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.

上記の2つが書かれるより少し前に、Arthur Cornwallis Madan によっても文法書が書かれている。Madan (1908) は、ララ語とランバ語はかなり類似していると断りを入れたうえで、ララ語の文法のみを記述している (Madan 1908: A2)。巻末に付いている語彙集はララ語のもののみであるが、民話³はララ語、ランバ語、ビサ語の3言語のものが集録されている。

1908. *Lala-lamba Handbook: A short Introduction to the South-Western Division of the Wisa-Lala Dialect of Northern Rhodesia, with Stories and Vocabulary*. Oxford: the Clarendon Press (Reprinted by Nabu Press in 2013).

² Doke は言語についてだけでなく、ランバの人々の慣習や信仰を記録した *The Lambas of Northern Rhodesia: A Study of their Customs and Beliefs* (1931年 Negro University Press 出版) も残しており、これにも簡単な文法スケッチがついている。

³ 民話や諺については Doke も収集を行っており、例えば Doke (1930, 1934, 1939) がある。

ランバ語の辞書については、Doke が編纂した British Museum Press 出版の 1957 ページからなる *Lamba-English Dictionary* があるが、入手困難のようである。現時点で手に入るのは 179 ページからなる語彙集 (Doke 1963) のみである。Madan (1913) による、ランバ語、ララ語、ビサ語の 3 言語と一緒に収録されている辞書もある。これは Nabu Press によって再出版されたものが入手可能である。

Doke, Clement, M.

出版年不明. *Lamba-English Dictionary*. London: British Museum Library.

1963. *English-Lamba Vocabulary*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.

Madan, Arthur, C.

1913. *Lala-Lamba-Wisa & English: English & Lala-Lamba-Wisa Dictionary*. Oxford: the Clarendon Press (Reprinted by Nabu Press in 2011).

文法書や語彙集のほかには、音声の分析をした Doke (1927b) や、近年出てきた動詞の声調の研究に Bickmore (1995)、湯川 (1995) がある。

本稿では、Doke (1922) と Doke (1938) をそれぞれ紹介した後に、テンス・アスペクト (以下 TA) 体系に焦点を当てた節を設けている。筆者が現地調査で得たデータ⁴をもとに、Doke による TA 体系の解釈の一部を訂正し、ランバ語の新しい TA 体系の提案を行う。

2. Doke による 2 つの文法書の構成とそれぞれの特徴

表 1 は、1922 年出版の *The Grammar of the Lamba Language* と 1938 年出版の *Textbook of Lamba Grammar* それぞれの章立てを並べたものである。それぞれの章に割かれているページ数も示してある。最初に音声、音韻についての説明があり、品詞分類に入る前にランバ語の構造について概略が入る。品詞それぞれについての章が続いた後、借用語、統語の章と続くが、Doke (1938) は借用語の章に入る前に改めて語の構造についてのまとめの章が入る。

Doke (1938) のほうが総じてボリュームがあるが、索引があるため参照が可能である。ただし、以下に挙げるように Doke (1938) は章につけられている名前が独特で、名前から内容を予想するのが難しい場合がある。例えば XVIII 章の Foreign Acquisition は、「第二言語獲得」と訳しそうになるが、これは借用語について書かれた章である。Doke (1922) では XV 章 Lamba Borrowings がこれに当たる。Doke (1922) のほうが、目次から探したい文法項目がどこに書かれているのかという見当はつけやすいかもしれない。

Doke (1938) で独特な名前が付けられている章はほかにもある。例えば XX 章以降の The Syntax of で始まる章では、XX 章は The Syntax of Substantive, XXI 章は The Syntax of Qualificative, XXII 章は The Syntax of Predicate, XXIII 章は The Syntax of Descriptive となっている。以下各章について簡単に説明するが、XXI 章以外は章の名前からは想像しにくい内容となっている。

⁴ 本稿で提示しているデータは、特に明記しない限り、平成 29 年度特別研究員奨励費「ベンバ語およびその周辺言語におけるテンス・アスペクト体系における比較研究」(JP17500068) の助成を受けて筆者が現地で行った調査によって収集したものである。ザンビア中部のコッパーベルト州の州都ンドラの中心部からほど近い場所にて、当時 60 代の女性 E.M 氏を調査協力者としてデータ収集を行った。E.M 氏は、初等教育から高等教育まで教育を修めており、ケニアへの留学経験もある。ランバ語のほかには、地域共通語であるベンバ語と英語を話す。

表1 Doke (1922) と Doke (1938) の章立て比較

| Doke (1922) <i>The Grammar of the Lamba Language</i> | | | Doke (1938) <i>Textbook of Lamba Grammar</i> | | |
|--|-------------------------------|------|--|--|------|
| Introduction | | 1p | Introduction | | 3p |
| I | Phonology | 13p | I | The Phonetic Structure of the Lamba Language | 41p |
| II | Euphonic Concord | 2p | II | The Structure of the Lamba Language | 7p |
| III | The Noun | 18p | III | The Noun | 47p |
| | | | IV | The Noun (continued) | 18p |
| IV | Adjective and Concord | 7p | V | The Pronoun | 26p |
| V | Pronoun and Demonstratives | 20p | VI | The Adjective | 7p |
| | | | VII | The Relative | 3p |
| | | | VIII | The Numeral | 6p |
| | | | IX | The Possessive | 12p |
| VI | The Verb | 24p | X | The Verb – Derivation | 72p |
| VII | The Monosyllabic Verbs | 3p | XI | The Verb – Conjugation | 67p |
| VIII | Verb Auxiliaries | 12p | XII | The Copulative | 24p |
| IX | Derivative Verbs | 18p | | | |
| X | The Perfect Stem | 5p | XIII | The Adverb | 20p |
| XI | The Adverb | 4p | XIV | The Ideophone | 16p |
| XII | Onomatopœia | 4p | XV | The Conjugation | 9p |
| XIII | Interjections | 1p | XVI | The Interjection | 6p |
| XIV | Prepositions and Conjugations | 2p | XVII | The Classification of Formatives | 18p |
| | | | XVIII | Foreign Acquisitions | 4p |
| XV | Lamba Borrowings | 2p | XIX | The Lamba Sentence | 7p |
| XVI | Syntax | 21p | XX | The Syntax of Substantive | 16p |
| 総ページ数 | | 157p | XXI | The Syntax of Qualificative | 16p |
| | | | XXII | The Syntax of Predicate | 15p |
| | | | XXIII | The Syntax of Descriptive | 12p |
| | | | XXIV | Idiom | 7p |
| | | | Index | | 8p |
| | | | 総ページ数 | | 487p |

まず XX 章 The Syntax of Substantive である。この章では文の意味役割の分析や、主語や目的語が複数ある場合のコンコード、補文や埋め込み文についての説明がなされている。次の XXI 章 The Syntax of Qualificative では、修飾要素が複数並ぶ場合についての説明がなされている。続く XXII 章 The Syntax of Predicate では、接続詞によって導かれる複文などについて説明がなされている。XXIII 章の The Syntax of Descriptive では、場所や時間、理由、譲歩、条件、目的などがランバ語ではどのように表現されるかが述べられている。構造というより意味の側面からの説明がなさ

れた章だと言える。動詞の意味分類についてもここで触れられている。qualificative 「修飾する、限定する」や substantive 「名詞、名詞的なもの」は別として、predicate 「述語、述部」、descriptive 「記述的な、描写的な」という単語では抽象的過ぎて、上記のような内容が書かれているとは想像しにくい。

Doke (1922) と Doke (1938) とでは、書かれた目的も異なっている。ズルー語の文法書 (Doke 1927) が教育において成果を収めたことから、Doke (1938) はこれにならった構成が組まれている (Doke 1938: vii)。例えば上述の XXIII 章の The Syntax of Predicate が場所や理由、譲歩や条件などがどのようにランバ語で表されているかという観点で説明されているのは、学習者の視点に立った説明を試みた故かもしれない。Doke (1938) は序文において、Doke (1922) には多大な誤解がありバントゥ諸語本来の姿をとらえることができなかったと述べている (Doke 1938: iv)。しかしながら Doke (1938) も、言語の記述というよりは学習書としての側面が強く、バントゥ諸語の本来の姿を記述し損ねていると言えるかもしれない。

Doke (1922) と Doke (1938) とでは表記法も異なっている。まず長母音の表記である。Doke (1922) では長母音に関しては母音の長短の区別について説明している節 (Doke 1922: 14) でしか表記の区別がなされていなかったのが、Doke (1938) では長母音に $\bar{\quad}$ (マクロン) が表示されることにより、長短の区別が文法書全体を通して区別されるようになった (cf. (1))

次に動詞の表記である。(1) は Doke (1922) と Doke (1938) に共通して見られた「その草は枯れるだろう」という意味の文である。(1a) には Doke (1922) の表記を、(1b) には Doke (1938) の表記をそれぞれ原文のまま斜体で示している。(1c) は筆者による形態素分析である。Doke (1922) では、(1a) で示しているように動詞が 8 クラス主語接辞の *fī*、遠い未来の出来事を表す TA 接辞 *ka-*、動詞語幹 *fwa* 「死ぬ」とそれぞれ分かち書きされているのに対して、(1b) の Doke (1938) ではこれらの要素がつなげて書かれている⁵。

- (1) a. *ifyani* *fī ká fwa* (Doke 1922: 66)
 b. *ifyāni* *fīkafwa* (Doke 1938: 267)
 c. *i-fi-ani* *fi-ka-fu-a*
 AV-8NP-grass 8SM-REM.FUT-die-BF⁶

「その草は枯れるだろう (The grass will die)」

Doke (1938) は、(1a) のような分かち書きの表記よりも (1b) のようにつなげて書く表記のほうが

⁵ ランバ語にはほかのバントゥ諸語と同様に「名詞クラス」と呼ばれる名詞の分類があり、名詞は 18 種類のグループに分けられる。主語接辞、目的語接辞、名詞修飾語は、それぞれ名詞クラスに呼応した形で現れる。例文のグロスで名詞の前に示している数字は、その名詞が属する名詞クラスを表し、名詞以外についている数字は呼応している名詞が属する名詞クラスを表す。主語接辞と目的語接辞は人称 (単数は sg, 複数には pl) またはクラス番号で表す。Doke (1922) や Doke (1938) で付けられているグロスは、以下のようにほぼ英訳に近い。形態素分析はなされていないが、呼応関係は下線で示されている。このようなグロスは全編通してではなく、ランバ語の構造について説明している章や文の要素について考察している章でしか付けられていない。

(i) *Nāwona utuni tunini tusanu.*
 I-saw small-birds them-little them-five
 "I saw five small birds." (Doke 1938: 42)

この節では Doke (1922, 1938) の解釈を中心に述べているが、各 TA 形式についての説明は、牧野 (2019) と重なる部分が多い。詳しくは牧野 (2019) を参照されたい。

⁶ AV は Augment Vowel の略、NP は Noun Prefix の略である。そのほかの記号・略号については略語一覧を参照のこと。

広く受け入れられていると考え、分ち書きを改めたと述べている (Doke 1938: vi)。動詞を接辞ごとに分ち書きする書記法は、南部のバントゥ諸語などでは一部見られるが (cf. ヘレロ語, ツワナ語), あくまで *fikafwa* はこれでひとつの動詞であり, つなげて書くほうが言語の実態を正確に表している (cf. 米田 2012: 49-50)。

3. Doke によるランバ語のテンス・アスペクト解釈の問題点

これ以降の節では, ランバ語の TA 体系に焦点を当てる。まず Doke (1922, 1938) による独特の用語法について代案を提示する。Doke (1922, 1938) からかなりの時間が経過していることも考慮して, 各 TA 形式が現存しているかどうか, 新たな形式がないかの確認も行う。

まず, ランバ語の動詞構造は以下の通りである。() 内の要素は任意であるが, それ以外の要素は必須である。

(前主語接辞-)主語接辞-TA 接辞-(目的語接辞-)動詞語根(-派生接辞)-語尾

以下の表 2, 表 3 にはそれぞれ Doke (1922, 1938) による TA のパラダイムを示している (Doke 1922: 71, Doke 1938: 273, 297)。SM は主語接辞 (subject marker) の略, VR は動詞語根 (verb root) の略である。TA に関わる要素は太字で示している。各形式には番号を割り振っている。Doke (1922) の表 2 には 28 形式, Doke (1938) の表 3 には 30 形式ある。

表2 Doke (1922: 71) の TA パラダイム⁷

| | | Simple | Continuous (<i>-li+uku-</i>) | Progressive (<i>chi-</i>) | Perfect |
|----------|-----------|--|---|---|---------------------------------------|
| Past | Remote | | ①SM- a-li uku-VR-a | | ③SM- a-li-VR-ile |
| | Immediate | ④SM- a-VR-a | ②(SM- a-li) uku-VR-ile) | | ⑤SM- a-li SM- a-VR-a |
| | Historic | ⑥ ka-SM-VR-a ⑦ ka-SM-VR-ile | ⑧ ka-SM-li uku-VR-a ⑨(ka-SM-li) uku-VR-ile) | ⑩ ka-SM-chi-VR-a ⑪(ka-SM-chi-VR-ile) | |
| Present | | | ⑫SM- li uku-VR-a ⑬SM- li uku-VR-ile | ⑭SM- chi-VR-a ⑮SM- chi-VR-ile | ⑯SM- li-VR-ile |
| Future | Immediate | ⑰SM- aku-VR-a | ⑱SM- aku-li uku-VR-a ⑲SM- aku-li uku-VR-ile | ⑳SM- aku-li uku-chi-VR-a ㉑(SM- aku-li) uku-chi-VR-ile) | |
| | Remote | ㉒SM- ka-VR-a | ㉓SM- ka-li uku-VR-a ㉔(SM- ka-li) uku-VR-ile) | ㉕SM- ka-li uku-chi-VR-a ㉖(SM- ka-li) uku-chi-VR-ile) | |
| Habitual | | ㉗SM- la-VR-a | | | |

⁷ Doke (1922) ではモダリティを表すと考えられる接辞 *nga-* が用いられた形式を挙げているが, ここでは省いている。

表3 Doke (1938: 273) の TA パラダイム

| | | Simple | | | Progressive (<i>chi-</i>) | |
|----------|-----------|-----------------|------------------------------|--|-----------------------------|------------------------------|
| | | Indefinite | Continuous (-li uku-, -a) | Perfect (-li uku-, -ile) | Continuous (-a) | Perfect (-ile) |
| Past | Remote | ③SM-a-li-VR-ile | ①SM-a-li uku-VR-a | ③SM-a-li-VR-ile | | |
| | Immediate | ④SM-a-VR-a | | ②SM-a-li uku-VR-ile | | |
| | Historic | | ⑧ka-SM-li uku-VR-a | ⑦ka-SM-VR-ile ⑨ka-SM-li uku-VR-ile | ⑩ka-SM-chi- VR-a | ⑪ka-SM-chi- VR-ile |
| Present | | ⑫SM-li uku-VR-a | | ⑬SM-li uku-VR-ile | ⑭SM-chi-VR-a | ⑮SM-chi- VR-ile |
| Habitual | | ⑰SM-la-VR-a | | | | |
| Future | Immediate | ⑱SM-aku-VR-a | ⑱SM-aku-li uku-VR-a | ⑲SM-aku-li uku-VR-ile | ⑳SM-aku-li uku-chi-VR-a | ㉑SM-aku-li uku-chi-VR-ile |
| | Remote | ㉒SM-ka-VR-a | ㉒SM-ka-li uku-VR-a | ㉒SM-ka-li uku-VR-ile | ㉒SM-ka-li uku-chi-VR-a | ㉒SM-ka-li uku-chi-VR-ile |

縦に並べているのがテンスである。ランバ語のテンスは、過去も未来もそれぞれ時間区分が複数に分かれる。このような現象は、バントゥ諸語において特に顕著であるとされている (Dahl 1985: 121)。問題となるのは、まず過去と未来の時間区分の境界線がどこにあるのか、過去テンスの中に並べられている Historic が何を指しているのかという点である。横に並べているのはアスペクトであり、Simple, Indefinite, Continuous, Progressive, Perfect がある。しかし並び方からみてわかるように Doke (1922) の表 2 と Doke (1938) の表 3 とではこれらアスペクトの扱いが異なっている。

§2 で指摘した Doke (1922, 1938) の独特な用語の使い方は、ランバ語の TA 体系をみるうえでも問題となる。例えば 'Perfect' は、Doke (1922) と Doke (1938) とでは指しているものが異なる。Doke (1922, 1938) は接辞 *chi-* によって表される形式を Progressive と呼んでいる。Progressive とは、現代の用語法に照らし合わせると「発話時 (あるいは参照点) において続いている動作を表す」(Comrie 1977: 32-40, cf. Dahl 1985: 90-95, Bybee et al. 1994: 126) ものである。しかしながら、後述するように Progressive という用語では接辞 *chi-* の機能を十分に表しきれていない。ランバ語のテンス・アスペクト体系を再記述するにあたり Doke の用語法をそのまま用いてしまうと、多大な誤解が生じかねない。再記述のためには、現代の用語法と参照ができるようにする必要がある。

このように Doke (1922) と Doke (1938) の不一致、用語の使い方の問題があるが、時間の経過によって出てきた問題もある。Doke (1922, 1938) では報告されていたが現存していない形式や、Doke (1922, 1938) では報告されていなかった新しい形式がある。

以下、これらの問題について詳しくみていく。なおこれ以降、動詞の各形式については、表 2 および表 3 に付した数字によって示す。

3.1. 時間区分

ここでは, Doke (1922, 1938) では明示されていなかったランバ語の時間区分の特定, および現在テンスの捉え方について考察を行う。

3.1.1. 未来

まず未来テンスの時間区分の境界線からみる。以下の (2) は, TA 接辞 *ka-* と語尾 *-a* によって表される形式②の例である。Doke (1922) では Remote Future の Simple, Doke (1938) では Remote Future Indefinite とされている。この形式は, 発話当日の翌日以降に起こる出来事を表す。そのため (2a) や (2b) のように *mailo* 「明日」, *uyu úmwaka* 「来年」とは共起するが, (2c) のように *leelo* 「今日」とは共起しない。

- (2) a. *ichiβusa chanji chi-ka-pend-a ili ibuuku mailo*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-read-BF 5.this 5.book tomorrow
 「私の友達は明日この本を読むだろう」
- b. *ichiβusa chanji chi-ka-pend-a ili ibuuku uyu úmwaka*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-read-BF 5.this 5.book 3.this 3.year
 「私の友達は来年この本を読むだろう」
- c. **ichiβusa chanji chi-ka-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-read-BF 5.this 5.book today
 (int. 私の友達は今日この本を読むだろう)

一方 Immediate Future の Simple あるいは Indefinite とされている TA 接辞 *aku-*, 語尾 *-a* によって表される形式⑦は, これから起こる出来事の中でも, 発話当日に起こるものを表す。(3a) のように *leelo* 「今日」とは共起するが, (3b) のように *mailo* 「明日」とは共起しない。

- (3) a. *ichiβusa chanji chi-aku-pend-a ili ibuuku leelo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-read-BF 5.this 5.book today afternoon
 「私の友達は今日の午後この本を読むだろう」
- b. **ichiβusa chanji chi-aku-pend-a ili ibuuku mailo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-read-BF 5.this 5.book tomorrow
 (int. 私の友達は今日の午後この本を読むだろう)

このように, ランバ語の未来テンスは形式②によって明日以降の未来の出来事が表され, 形式⑦によって発話当日のこれから起こる出来事が表される。つまり, ランバ語の未来の時間区分は今日 (Hodiernal) と明日以降 (Post-Hodiernal) に二分されるということである。

3.1.2. 過去

次に, 過去テンスの時間区分である。TA 接辞 *a-* と *li-*, 語尾 *-ile* の組み合わせによって表される形式③は, Doke (1922) では Remote Past Perfect, Doke (1938) では Remote Past Indefinite あるいは Remote Past Perfect とされている。この形式は, 発話当日の前日以前に起こった出来事を表す。

(4a) のように *mailo* 「昨日」⁸ とは共起可能であるが、(4b) のように *leelo* 「今日」とは共起不可能である。

- (4) a. *ichíbusa chanji chi-a-li-pend-ile ili ibuuku mailo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-ANT-read-ANTF 5.this 5.book yesterday
 「私の友達は昨日この本を読んだ」
 b. **ichíbusa chanji chi-a-li-pend-ile ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-ANT-read-ANTF 5.this 5.book today
 (int. 私の友達は今日この本を読んだ)

以下の (5) は、Doke (1922) では Immediate Past Perfect, Doke (1938) では表 3 にはないが Compound Immediate Past とされている形式⑤である。コピュラ動詞の過去形のうしろに、TA 接辞 *a-* と語尾 *-a* が付加した形式④ (形式④については後述) が続くことによって表される。この形式は、発話当日に起こった出来事を表す。(5a) のように *leelo* 「今日」とは共起するが、(5b) のように *mailo* 「昨日」とは共起しない。

- (5) a. *ichíbusa chanji chi-a-li chi-a-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be 7SM-PST-read-BF 5.this 5.book today
 「私の友達は今日この本を読んだ」
 b. **ichíbusa chanji chi-a-li chi-a-pend-a ili ibuuku mailo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be 7SM-PST-read-BF 5.this 5.book yesterday
 (int. 私の友達は昨日この本を読んだ)

(4) で *mailo* 「昨日」と共起した形式③は、以下の (6a) のように昨日よりもはるか前の過去の出来事も表すことができる。Doke (1922, 1938) にある前主語接辞 *ka-* と基本語尾 *-a* によって表される、Historic Past とされている形式⑥は、(6b) に示すようにこの文脈には適さない。(7) のように、従属節の形式③によって遠い過去の出来事であることが示されていなければ前主語接辞 *ka-* の形式は使われない。さらに、(7) をみると発話の前日の出来事を表すのに対しても前主語接辞 *ka-* が使われているため、はるか昔の出来事を想定させる Historic という呼び方では誤解を招く。

- (6) a. *ichíbusa chanji chi-a-li-pend-ile ínkalata shine uyu úmwaka*
 7.friend 7.my 7SM-PST-ANT-read-ANTF 10.letters 10.four 3.this 3.year
 「私の友達は去年手紙を 4 通読んでいる」
 b. **ichíbusa chanji ka-chi-pend-a ínkalata shi-ne uyu úmwaka*
 7.friend 7.my NAR-7SM-read-BF 10.letter 4.four 3.this 3.year
 (int. 私の友達は去年手紙を 4 通読んでいる)
- (7) *ichíbusa chanji ka-chi-pend-a ili ibuuku ulu chi-a-lek-ile uku-lishi-a*
 7.friend 7.my NAR-7SM-read-BF 5.this 5.book when 7SM-PST-stop-ANTF INF-play-BF

⁸ *mailo* は発話当日の「±1日」を表すことのできる直示表現である。*mailo* が過去を表す述部に現れる場合においては「昨日」を、未来を表す述部に現れる場合には「明日」を表す。

ingoma mailo

10.drums yesterday

「私の友達は昨日太鼓を叩き終わってからこの本を読んだ」

つまり、前主語接辞 *ka-* によって表される Historic と呼ばれていた形式は、昨日よりも遠い過去の時間を区分しているというわけではない。前の文によって過去のどの時点にあるのかが明示されていないと使うことができない、依存テンスである。

このように、ランバ語では発話当日に起こった出来事が複合形式⁹⑤によって表され、発話当日より前日に起こった出来事はその遠さに関わらず形式③で表される。つまり、ランバ語の過去テンスは発話当日 (Hodiernal) と昨日以前 (Pre-Hodiernal) の二区分のみであり、Historic Past の形式はこの時間区分とは無関係である。

3.1.3. 現在

Doke (1922, 1938) が Habitual と呼んでいる TA 接辞 *la-* と語尾 *-a* から成る形式⑦は、以下の (8) のように習慣的な出来事を表す。

(8) *ichifusa chanji chi-la-pend-a Chinese inshiku shonse*

7.friend 7.my 7SM-PFV-read-BF Chinese 10.day 10.all

「私の友達は毎日中国語を読む」

Doke (1922, 1938) の表 2, 3 をみると、Habitual は Past, Present, Future と並列して縦に並べられており、Present と Habitual をそれぞれ別に扱っていることがわかる。確かに (8) の *la-* は習慣を表している。しかしながら、*la-* は以下の (9) のような意味も表す。(9) は、「書く」という行為の始まりや終わりを取り立てて述べているわけではなく、ただひとまとまりの出来事を述べている。これは Perfective (完結相) (Comrie 1977: 17–18) の特徴である。

(9) *a-la-lemb-a inkalata*

3sgSM-PFV-write-BF 10.letter

「その人は手紙を書く」

バントゥ諸語には、Habitual と Perfective を形式によって区別する言語が多い。例えば TA 接辞 \emptyset 、基本語尾 *-a* から成る形式によって Perfective が表され、これに接尾辞 *-ang* が付け足されることによって Habitual が表されるブクス語のようなケースである (Nurse 2008: 135–136)。しかしながらランバ語には、TA 接辞 \emptyset と基本語尾 *-a* からなる形式は存在せず¹⁰、ブクス語の接尾辞 *-ang* に相当する接辞も存在しない。ランバ語では、Perfective と Habitual を区別する他の形式もないため、両者は (8), (9) のように同じ形式によって表されることになる。さらに形式⑦は、(8), (9) にみるように長い時間 (期間) におよぶ出来事を表しており、その中には発話時が含まれている (cf. Comrie 1985: 37–38)。検討の余地はあるかもしれないが、今のところ形式⑦を現在テンスの Perfective として扱うのが最も適切であると考えられる。

⁹ 複数の動詞が組み合わさることによって TA を表す形式を本稿では複合形式と読んでいる。

¹⁰ 否定や従属節では TA 接辞 \emptyset と基本語尾 *-a* からなる形式が現れるが、TA 接辞 *la-* が否定や従属節では現れることができない。いずれにせよ Perfective と Habitual を形式によって区別することはできない。

3.2. 用語の代替案の提示

ここでは、TA 体系の理解において誤解を招きかねない Doke (1922, 1938) 独特の用語法について説明し、Comrie (1977) や Dahl (1985), Nurse (2008) の定義と照らし合わせながら代替案の提示を行う。

3.2.1. Doke (1922, 1938) の Progressive

まず、Doke が Progressive と呼んでいる TA 接辞 *chi-* の用法についてである。表の形式では⑩と⑪、⑭と⑮、⑳と㉑、㉓と㉔が該当する。Comrie (1977) の定義によれば、Progressive は本来、発話時（あるいは参照点）において進行している動作を表すものである (Comrie 1977: 32-40)。しかし Doke (1922, 1938) が Progressive としている TA 接辞の *chi-* が表すのは、「まだ～している」という意味である。つまり *chi-* によって表されるのは、過去のある時点で起こり発話時まで切れ目なく保持されている状況である (Nurse 2008: 145)。これは Progressive とは区別して Persistent (持続相) (Nurse 2008: 145-148) と呼ぶのがバントゥ諸語研究においては一般的である。

(10) *ichiβusa chanji chi-∅-chi-imb-a na βukuumo*
7.friend 7.my 7SM-PRS-PES-sing-BF and now
「私の友達はいまだに歌っている」

(11) *ichiβusa chanji chi-∅-chi-laal-ile na βukuumo*
7.friend 7SM-my 7SM-PRS-PES-sleep-ANTF and now
「私の友達はいまだに寝ている」

3.2.2. Doke (1922) の Perfect

表 2 の形式③と複合の形式⑤は、Doke (1922) では Perfect とされている。Perfect (完了相) とは、Comrie (1977) や Dahl (1985) などの定義では、過去に起こった出来事による結果状態が発話時まで続いている、あるいは過去に起こった出来事が発話時と関連性を持つことを表す用語である (Comrie 1977: 52, Dahl 1985: 133-138, Bybee et. al 1994: 54, Nurse 2007: 165, Nurse 2008: 95, 154-155)。しかし、以下のようにカギが発話時の前日以前になくなったことを表した形式③の例 (12a), カギが発話当日になくなったことを表した形式⑤の例 (12b) は、いずれも「しかし今は（そのカギは）見つかっている」という文を後続させることができる。

(12) a. *imfungulo i-a-li-luβ-ile ukufuma uyu umulungu pano*
9.key 9SM-PST-ANT-get_lost-ANTF since 3.this 3.week but
i-a-βon-ik-a βukuumo
9SM-PST-see-NEUT-BF 14.now
「カギは先週からなかったが、今はもう見つかっている」

b. *imfungulo i-a-li i-a-luβ-a pano i-a-βon-ik-a βukuumo*
9.key 9SM-PST-be 9SM-ANT-get_lost-BF but 9SM-PST-see-NEUT-BF 14.now
「カギはなくなったが、今はもう見つかっている」

つまり、カギをなくしたという出来事によって起こった「カギがない」状態は、発話時にはす

でに解決しているということであり、過去の出来事に発話時との関連性は存在しない。よって形式③と⑤のいずれも現代の用語法でいう Perfect (Comrie 1977 など) の定義からは外れている。

ランバ語で過去に起こった出来事による結果状態が発話時まで続いている、あるいは過去に起こった出来事が発話時と関連性を持つことを表す形式には、まず TA 接辞 *a-* と語尾 *-a* によって表される形式④がある。この形式は、Doke (1922) では Immediate Past Simple, Doke (1938) では Immediate Past Indefinite と呼ばれている。Doke (1922, 1938) で Present Perfect とされている TA 接辞 *li-* と語尾 *-ile* によって表される形式⑥も同じ状況を表す。(13) のように、カギがなくなったことを形式④あるいは形式⑥で表すと、「でも (カギは) 今はもう見つかっている」という文を後続させられなくなる。つまり形式④と形式⑥によって表されるカギがなくなった状態は、発話時まで続いているということになる¹¹。

- (13) a. **imfungulo i-a-luβ-a* *pano i-a-βon-ik-a* *βukuumo*
 9.key 9SM-PST-get_lost-BF but 9SM-PST¹²-see-NEUT-BF 14.now
 (int. カギはなくなったが、今はもう見つかっている)
- b. **imfungulo i-ø-li-luβ-ile* *ukufuma uyu umulungu pano*
 9.key 9SM-PRS-ANT-get_lost-ANTF since 3.this 3.week but
i-a-βon-ik-a *βukuumo*
 9SM-PST-see-NEUT-BF 14.now
 (int. カギは先週からなかったが、今はもう見つかっている)

3.2.3. Doke (1938) の Perfect

Doke (1938) が用いている Perfect も、Comrie (1977) による定義には沿っていないうえに、上述の Doke (1922) で使われていた Perfect とも意味合いが異なる。ランバ語では、コピュラ動詞 *li* が、不定詞を作る接頭辞 *uku-* が付いた動詞に後続される形式 (以下 *luku-* 形式¹³) と、コピュラ動詞はとらずに TA 接辞として *chi-* をとる Persistent ((10), (11)) は、両形式とも語尾に *-a* をとるか *-ile* をとるかが動詞によって異なる。Doke (1938) では語尾に *-a* をとる形式を Continuous とし、それと対になる語尾に *-ile* をとる形式に Perfect を用いている。以下の (14), (15) は明日以降の未来を表す TA 接辞 *ka-* が *luku-* をとった例である。(14) のように *pend* 「読む」の場合は語尾に *-a* を、(15) のように *laal* 「寝る」の場合は語尾に *-ile* をとる。Doke (1938) が Perfect としているのは (15) の語尾に *-ile* をとる方の形式である。Persistent の *chi-* が語尾に *-ile* をとった (16) も、Doke (1938) は Progressive (本稿で Persistent が適当だとしたもの) の Perfect としている¹⁴。

- (14) *ichibusa chanji chi-ka-li* *uku-pend-a ili* *ibuuku mailo ulúcheelo*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-be INF-read-BF 5.this 5.book tomorrow morning
 「私の友達は明日の朝もこの本を読んでいるだろう」

¹¹ *a-* 形式と *li-* 形式の違いについては牧野 (2019) でも触れているが、詳細な議論は紙面を改めて行う。

¹² 本稿では *a-* 形式の TA 接辞 *a-* は (5) や (6) などの例にある過去を表す接辞 *a-* と同じものとしているが、TA 接辞 *a-* 単独で用いられる場合には、発話時 (参照点) よりも前に出来事が起こっているということが示されるのみである。

¹³ 本稿ではコピュラ動詞 *li* と不定詞を作る接頭辞 *uku-* が融合したものと分析しているが、Doke (1922, 1938) は単に TA 接辞 *luku-* と分析している。

¹⁴ Doke (1938) の Perfect は、Doke (1922) では Stative と呼ばれている (Doke 1922: 67–70)。

- (15) *ichiβusa chanji chi-ka-li uku-laal-ile mailo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-be INF-sleep-ANTF tomorrow afternoon
 「私の友達は明日の午後もまだ寝ているだろう」
- (16) *ichiβusa chanji chi-chi-laal-ile na βukuumo*
 7.friend 7SM-my 7SM-PES-fall_asleep-ANTF and now
 「私の友達はいまだに寝ている」 (= (11))

(15), (16) をみると、Perfect という呼び方はここでも適切とは言えない。また、Doke (1922) の使い方をみてもわかるように、Perfect は Perfective と混同されがちである。このようなほかの観点との誤解を避けるため、Nurse は Perfect の代わりに Anterior という用語を使うことを推奨している (Nurse 2007: 165, Nurse 2008: 154)。よって本稿でも Anterior という呼び方を採用する。なお、Bybee et al. (1994) は発話時より前に起こった結果状態が発話時まで続いているものを Resultative とし、発話時より前になされた動作が発話時と関連性を持っているものを Anterior としているが (Bybee et. al 1994: 61, 63, cf. Dahl 1985: 134–135)、本稿では両者を区別しない。これは、形式④と形式⑩ともに結果状態の継続も発話時と関連性のある過去に起こった動作のどちらも表すことができるからである。

Doke (1922) では Continuous, Doke (1938) では Continuous あるいは Perfect とされていた *luku-* 形式は、参照点において継続している動作や状態を表すため、語尾が *-a* か *-ile* かにかかわらず Imperfective と呼ぶのが適切である¹⁵。TA 接辞に *chi-* をとり「まだ～している」という意味を表す Persistent の形式も、動詞によって語尾に *-a* をとるか *-ile* をとるかが決まる。そのため、Doke (1938) はここでも語尾に *-ile* をとる後者を Perfect と呼んで、語尾に *-a* をとる Continuous と対比させているが、この使い方も同様に適切ではないと思われる。

3.3. 現存していない形式

Doke (1922, 1938) によると、*luku-* 形式は表 2, 表 3 にも示しているようにテンスにかかわらず語尾に *-a* と *-ile* のどちらもとれることになっている。しかし筆者のデータでは、(17) のように過去テンスの *luku-* 形式が語尾に *-ile* をとる形式②は非文である。過去テンスにおいて *luku-* 形式が語尾にとるのは (18a) のように *-a* のみである。*pend* 「読む」のような動作動詞では (18a) のように過去のある時点において「読む」という動作が進行中であったことが表される。*laal* 「寝る」では以下の (18b) ように状態ではなく過去の習慣が表される。

- (17) **ichiβusa chanji chi-a-li uku-laal-ile ulu n-a-i-ile*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be INF-fall_asleep-ANTF when 1sgSM-PST-go-ANTF
mu-ku-chi-βon-a
 LOC-INF-7OM-see-BF
 (int. 私の友達は私が(昨日以前に) 会いに行ったとき寝ていた)

¹⁵ *luku-* 形式の詳しい用法については牧野 (2019) を参照されたい。なお、この Imperfective は、Comrie (1977) の言う Perfective と対立する概念としての Imperfective (Comrie 1977: 25) ではなく、参照点あるいはその前後で継続していて、始まりや終わりなどの境界のない出来事を表す Imperfective (Nurse 2008: 136) である。

- (18) a. *ichiβusa chanji chi-a-li uku-pend-a ili ibuuku mailo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be INF-read-BF 5.this 5.book yesterday
 「私の友達は昨日この本を読んでいた」
- b. *ichiβusa chanji chi-a-li uku-laal-a kani chi-a-βon-a áβensu*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be INF-fall_asleep-BF if 7SM-PST-see-BF 2.guests
 「私の友達は客が来るといつもベッドにもぐりこんだ」

現在テンスの *luku-* 形式においても、語尾に *-ile* をとる形式⑬が現れたのは、動詞に *lwal* 「病気である」をとった (19) の 1 例のみで、ほかの動詞では (20) のように非文として判断される。つまり形式⑬は非常に稀であり、現在ではほぼ非文であると言ってよい。*luku-* 形式は現在テンスにおいても語尾にとれるのは *-a* のみであり、動詞 *pend* 「読む」では (21a) のように発話時において「読む」という行為がなされている最中であることが表される。*laal* 「寝る」が *luku-* の語尾に *-a* をとる形式⑭で表れた場合は、(21b) のように近い未来に起こる出来事が表される。

- (19) *n-ø-li uku-lwall-ile*
 1sgSM-PRS-be INF-be_sick-ANTF
 「私は病気である」
- (20) **ichiβusa chanji chi-ø-li uku-laal-ile*
 7.friend 7.my 7SM-PRS-be INF-sleep-ANTF
- (21) a. *ichiβusa chanji chi-ø-li uku-pend-a ili ibuuku*
 7.friend 7.my 7SM-PRS-be INF-read-BF 5.this 5.book
 「私の友達はこの本を読んでいる」
- b. *ichiβusa chanji chi-ø-li uku-laal-a*
 7.friend 7.my 7SM-PRS-be INF-sleep-BF
 「私の友達は（もうすぐ）寝る」

形式②, ⑬のほか、未来テンスで不定詞の接頭辞 *uku-* に Persistentive の *chi-* をとる形式である⑯, ⑰, ⑱も観察されなくなっている。

3.4. Doke (1922, 1938) にはない新たな形式

(5) の当日過去の形式⑤と (14)–(16), (18)–(21) の *luku-* 形式は、どちらもコピュラ動詞 *li* との複合形式である。筆者の調査データでは、これらの複合形式と同じ意味を表す形式が新たに見つかった。ただし、これらの新形式のいくつかについては、Bickmore (1995) や湯川 (1995) でもすでに報告されている。以下 a と b で分けている例文については、a には新たに報告された、あるいは筆者の調査で見つかった形式、b には Doke (1922, 1938) でもすでに報告のある、もともと存在していた形式を挙げている。

3.4.1. 当日過去を表す新たな形式

まずひとつめは、当日過去を表す以下の (22a) である。(22a) は TA 接辞に *achi-*、語尾に *-a* の組み合わせで表されている。これは Bickmore (1995) と湯川 (1995) で新たに報告された形式である。

発話当日に起こった出来事を表しており、(22b) に示すように複合形式⑤と用法が同じである。

- (22) a. *ichíβusa chanji chi-achi-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.PST-read-BF 5.this 5.book today
 b. *ichíβusa chanji chi-a-li chi-a-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be 7SM-PST-read-BF 5.this 5.book today
 「私の友達は今日この本を読んだ」(=(6a))

3.4.2. Imperfective を表す新たな形式

以下、(23a), (24a), (25a) の TA 接辞 *lee-* は、Bickmore (1995) で新たに報告された接辞であり¹⁶、これによって表されるのは *luku-* 形式と同じく参照点において継続していた出来事である。したがって接辞 *lee-* が表すのは Imperfective である。以下の (23a) は明日以降の未来を表す TA 接辞 *ka-* が接辞 *lee-* をとった例である。(23b) の *luku-* 形式②③と同じように、明日のある時点において「読む」という行為が進行中であることを表す。

- (23) a. *ichíβusa chanji chi-ka-lee-pend-a ili ibuuku mailo ulúcheelo*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-IMPV-read-BF 5.this 5.book tomorrow morning
 b. *ichíβusa chanji chi-ka-li uku-pend-a ili ibuuku mailo ulúcheelo*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-be INF-read-BF 5.this 5.book tomorrow morning
 「私の友達は明日の朝この本を読んでいるだろう」

TA 接辞が *aku-* になり参照点が発話当日になった場合も同様に、(24a) の接辞 *lee-* が使われた例と(24b) の *luku-* 形式(形式⑧)が使われた例は同じ意味を表す。(24a) も(24b) も発話当日のある時点において「読む」という動作が継続されることを表す。

- (24) a. *ichíβusa chanji chi-aku-lee-pend-a ili ibuuku akásuβa leelo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-IMPV-read-BF 5.this 5.book afternoon today
 b. *ichíβusa chanji chi-aku-li uku-pend-a ili ibuuku akásuβa leelo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-be INF-read-BF 5.this 5.book afternoon today
 「私の友達は今日の午後この本を読んでいるだろう」

以下の (25) は過去テンスにおける Imperfective の例である。(25a) が新形式の TA 接辞 *lee-* をとった例で、(25b) の *luku-* 形式①と同じく、過去のある時点において「読む」という行為が進行中であったことを表す。

- (25) a. *ichíβusa chanji chi-a-lee-pend-a ili ibuuku leelo/mailo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-IMPV-read-BF 5.this 5.book today/yesterday
 b. *ichíβusa chanji chi-a-li uku-pend-a ili ibuuku leelo/mailo*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be INF-read-BF 5.this 5.book today/yesterday
 「私の友達は今日/昨日本を読んでいた」

¹⁶ 牧野 (2019) では接辞 *lee-* が湯川 (1995) でも報告されているとしたが (牧野 2019: 22)、これは筆者の誤りである。

(25) が表す過去の Imperfective は、参照点が発話当日と昨日以前のどちらにあっても構わないが、TA 接辞に *achi-* をとると発話当日の Imperfective の出来事のみを表すことになる。ただしここで Imperfective を表す接辞として現れるのは、以下の (26) のように *lee-* ではなく *laa-* である。TA 接辞として *laa-* が現れる形式は、Bickmore (1995) でも湯川 (1995) でも報告されていない。

- (26) a. **ichíβusa chanji chi-achi-lee-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.PST-IMPFV-read-BF 5.this 5.book today
 (int. 私の友達は今日この本を読んでいた)
- b. *ichíβusa chanji chi-achi-laa-pend-a ili ibuuku leelo*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.PST-IMPFV2-read-BF 5.this 5.book today
 「私の友達は今日この本を読んでいた」

luku- 形式は、TA 接辞が未来を表す *aku-* や *ka-* である場合、語尾に *-ile* をとることができる (cf. 表 2, 表 3 の ㉑と ㉒)。これは *luku-* 形式の代わりに接辞 *lee-* が用いられる場合も同様である。これらの形式も、どの先行研究においてもまだ報告されていない。

- (27) a. *ichíβusa chanji chi-ka-lee-laal-ile mailo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-IMPFV-sleep-ANTF tomorrow afternoon
- b. *ichíβusa chanji chi-ka-li uku-laal-ile mailo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-REM.FUT-be INF-sleep-ANTF yesterday afternoon
 「私の友達は明日の午後の時点で寝ているだろう」 (= (15))
- (28) a. *ichíβusa chanji chi-aku-lee-laal-ile leelo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-IMPFV-sleep-ANTF today afternoon
- b. *ichíβusa chanji chi-aku-li uku-laal-ile leelo akásuβa*
 7.friend 7.my 7SM-HOD.FUT-be INF-sleep-ANTF today afternoon
 「私の友達は今日の午後もまだ寝ているだろう」

3.4.1 で挙げた TA 接辞に *achi-* が現れる形式と接辞 *lee-* が現れる形式は、どちらもベンバ語では早い段階から観察されている形式である (Sharman 1955)。ベンバ語はザンビア北西部の主要言語である。ランバ語が話されている中部においても有力言語であり、ランバ語ではなくベンバ語を優先的に話している話者も多い。したがって、ベンバ語が語彙や文法においてランバ語に大きな影響を与えていることは十分に考えられる。*achi-* や *lee-* が現れる形式はベンバ語から借用した形式と考えるとよいだろう。つまり、Doke (1922, 1938) の時点では複合形式で表されていたテンスあるいはアスペクトが、*achi-* や *lee-* のような TA 接辞のみでも表されるようになったということである。また、当日過去の接辞 *achi-* で Imperfective の出来事を表す場合、(26) のように TA 接辞には *lee-* ではなく *laa-* が用いられるが、これもベンバ語では早い段階で観察されている形式である (Sharman 1955)。

3.4.3. 過去テンスにおける Persistentive

参照点が過去にある場合の Persistentive は、以下のようにコピュラ動詞の過去形に形式 ㉓あるいは ㉔が後続することによって表される。(29) は形式 ㉓が後続した形式の例である。この複合形式も先行研究では報告されていない。

- (29) *ichiβusa chanji chi-a-li chi-chi-laal-ile ulu n-a-i-ile*
 7.friend 7.my 7SM-PST-be 7SM-PES-fall_asleep-ANTF when 1sgSM-PST-go-ANTF
mu-ku-chi-βon-a mailo akásuβa
 LOC-INF-7OM-see-BF yesterday afternoon
 「私の友達は私が昨日の午後訪ねた時まだ寝ていた」

4. 新たなテンス・アスペクト体系の提案

ここまでの用語の使い方の訂正や形式の存在の有無の確認を反映させて、TA 体系をまとめ直したのが表 4 である（依存テンスは除く）。

まず Doke (1922, 1938) で Perfect とされていた形式のうち、形式⑮, ⑲, ⑳は、Persistentive あるいは Imperfective において完了語尾 *-ile* をとる形式である。これらの形式に用いられている Perfect は、それぞれ同じアスペクトにおいて基本語尾 *-a* をとる形式 (⑭, ⑱, ㉓, ㉔) と対比させるための呼び方だと考えられるが、この使い方は適切とは言えない。よって本稿では形式⑮, ⑲, ㉔, ㉕を Perfect と呼ぶことはしない。㉒と⑬は本来の Perfect (Comrie 1977 など) ではなく、Perfective である。Doke (1922) は Perfective と Perfect を混同して用いていた可能性がある。Nurse (2008) が指摘するように、両者が混同されるケースは多い (Nurse 2008: 95, 154)。本稿では無用な混乱を避けるため、Perfect の代わりに Anterior (Nurse 2007, 2008) を用いることにした。Anterior の要件を満たすのは形式④と⑯である。

luku- が語尾に *-ile* をとる形式は、未来テンスと TA 接辞に *nga-* をとる形式以外では現存していないため、形式②と⑬には × 印を付けている。*luku-* 形式が Persistentive の *chi-* をとる形式 (㉑と㉒, ㉕と㉖) も筆者の調査では非文となった。番号が太字になっている形式㉘–㉙は、ベンバ語から新たに借用したと考えられる形式である。㉘は発話当日に起こった過去の出来事を表す。形式㉔, ㉕–㉖にある TA 接辞 *lee-* は、*luku-* と同じく Imperfective を表す。ただし当日過去 *achi-* で Imperfective を表す場合は、形式㉕にあるように *lee-* ではなく *laa-* をとる。㉗, ㉘は先行研究では報告されていなかった複合形式で、過去テンスにおける Persistentive を表す。

TA 接辞がゼロで語尾に *-ile* をとる以下の形式 (*ø*-形式) は、筆者が新たに動詞のパラダイムに提案する TA 形式である¹⁷。以下の (30), (31) のように状態を表す (牧野 2019: 29–30)。

- (30) *ilaaya li-ø-um-ile*
 5.dress 5SM-PRS-get_dry-ANTF
 「(その) 服は乾いている」
- (31) *impata i-ø-um-ile*
 9.desert 9SM-PRS-get_dry-ANTF
 「砂漠は乾いている」

(30) は一時的な状態であるが、(31) の状態は本質的なものである。ある出来事が時間の流れによる影響を受けるかどうかという観点は、叙述類型論によるものである (cf. 益岡 (2008))。ここ

¹⁷ *ø*-形式は、牧野 (2019) の表では *li-* 形式との機能の類似性や補完関係を指摘できることなどから Anterior の欄に入れているが (牧野 2019: 31)、まだ検討の余地がある。

表4 筆者が新たに提案する TA パラダイム

| | Perfective | Imperfective <i>-li+ uku-/ lee-</i> | Persistentive <i>-chi-</i> | Anterior |
|---|---|--|--------------------------------------|-------------------------------|
| Pre-Hodiernal Past <i>-a-</i> | ③SM-a-li-VR-ile | ①SM-a-li uku-VR-a ②× | ③⑥SM-a-li SM-chi-VR-a | ④SM-a-VR-a ⑬SM-ø-li-VR-ile |
| Hodiernal Past <i>-a/ achi-</i> | ⑤SM-a-li SM-a-VR-a ②⑧SM-achi-VR-a | ②⑨SM-a-lee-VR-a ③⑩SM-achi-laa-VR-a | ③⑦SM-a-li SM-chi-VR-ile | |
| Present <i>-ø-</i> | ②⑦SM-la-VR-a | ①②SM-ø-li uku-VR-a ①③× ③①SM-ø-lee-VR-a | ①④SM-ø-chi-VR-a ①⑤SM-ø-chi-VR-ile | |
| Hodiernal Future <i>-aku-</i> | ①⑦SM-aku-VR-a | ①⑧SM-aku-li uku-VR-a ③②SM-aku-lee-VR-a ①⑨SM-aku-li uku-VR-ile ③③SM-aku-lee-VR-ile | ②⑩× ②①× | |
| Post-Hodiernal Future <i>-ka-</i> | ②②SM-ka-VR-a | ②③SM-ka-li uku-VR-a ③④SM-ka-lee-VR-a ②④SM-ka-li uku-VR-ile ③⑤SM-ka-lee-VR-ile | ②⑤× ②⑥× | |

では割愛したが、Anterior の形式⑬にも本質的な状態を表す用法がある。今後こういった観点からの議論も必要である。

5. おわりに

以上、Doke (1922, 1938) によるランバ語の参照文法について、TA 体系の分析の問題点を中心に述べた。Doke (1922, 1938) によるランバ語の文法書は、用語の使い方が独特で、TA 体系の理解を妨げかねない状態だった。そこで本稿では Comrie (1977) や Dahl (1985), Bybee et al. (1994), Nurse (2007, 2008) による定義にもとづいて用語の使い方を再検討した。また、すでに使われなくなった形式や、地域共通語であるベンバ語から借用したと思われる新たな形式が存在していることがわかり、これらの事実も反映させながら新たな TA 体系の提案を行った。本稿では Doke (1922, 1938) による用語の使い方、形式の存在の有無を中心に論を展開したが、各 TA 形式の詳細については牧野 (2019) を参照されたい。なお、筆者が新たに動詞のパラダイムに入れることを提案した \emptyset -形式およびこれについての叙述類型論的な観点からの議論は、今後の課題である。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」(2016–2017 年度) の成果の一部である。

略語一覧

| | | | |
|---------|-------------------|---------|--------------------------------|
| ANT | Anterior | OM | Object Marker |
| ANTF | Anterior Final | PES | Persistive |
| BF | Basic Final | pl | plural |
| HOD.FUT | Hodiernal Future | PFV | Perfective |
| HOD.PST | Hodiernal Past | PRS | Present |
| IMPFV | Imperfective | PST | Past |
| IMPFV2 | Imperfective2 | REM.FUT | Remote (Post-Hodiernal) Future |
| INF | Infinitive Prefix | sg | singular |
| LOC | Locative Prefix | SM | Subject Marker |
| NAR | Narrative | VP | Verb Root |
| NEG | Negative | | |
| NEUT | Neuter | | |

参考文献

- Bickmore, Lee, S. 1995. "Tone and Stress in Lamba." *Phonology* 12: 307–341.
- Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Comrie, Barnard. 1977. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dahl, Östen. 1985. *Tense and Aspect Systems*. New York: Basil Blackwell.
- Doke, Clement, M. 1922. *The Grammar of the Lamba Language*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.
- . 1927a. *Text-Book of Zulu Grammar*. London: Longmans, Green & Co. Ltd.
- . 1927b. "A Study in Lamba Phonetics." *Bantu Studies* 3(1): 5–47.
- . 1930. "Additional Lamba Aphorisms." *Bantu Studies* 4(2): 111–135.
- . 1931. *The Lambas in Northern Rhodesia: A Study of Their Customs and Beliefs*. Westport, Connecticut: Negro University Press.
- . 1934. "Lamba Literature." *Africa* 7(3): 351–370.
- . 1938. *Textbook of Lamba Grammar*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- . 1939. "Lamba Folk Tales Annotated." *Bantu Studies* 13(2): 85–111.
- . 1954. *The Southern Bantu Languages*. London; New York: Oxford University Press.
- . 1959. *Amasiwi AwaLesa* (The Words of God). Lusaka: Bible Society in Zambia.
- . 1963. *English-Lamba Vocabulary*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- and S. M. Mofokeng. 1957. *Textbook of Southern Sotho Grammar*. London: Longmans, Green & Co.
- Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fenning, eds. 2019. *Ethnologue: Languages of the World. Twenty-Second Edition*. Dallas, Texas: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com> (2019年5月8日閲覧)
- Madan, Arthur, C. 1908. *Lala-Lamba Handbook: A Short Introduction to the South-Western Division of the Wisa-Lala Dialect of Northern Rhodesia, with Stories and Vocabulary*. Oxford: the Clarendon Press. (Reprinted by Nabu Press in 2013.)

- . 1913. *Lala-Lamba-Wisa & English: English & Lala-Lamba-Wisa Dictionary*. Oxford: the Clarendon Press. (Reprinted by Nabu Press in 2011.)
- Nurse, Derek. 2007. “The Emergence of Tense in Early Bantu.” *Selected Proceedings of the 37th Annual Conference on African Linguistics* (Doris L. Payne and Jaime Peña, eds.), 164–179, Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- . 2008. *Tense and Aspect in Bantu*. Oxford: Oxford University Press.
- Sharman, John, C. 1955. “The Tabulation of Tenses in a Bantu Language (Bemba: Northern Rhodesia).” *Africa* 26: 29–46.
- 牧野友香 2019 「ランバ語のテンス・アスペクト体系の再検討」『スワヒリ & アフリカ研究』30: 14–32.
- 益岡隆志 2008 「叙述類型論に向けて」益岡隆志(編)『叙述類型論』, 3–18, 東京: くろしお出版.
- 湯川恭敏 1995 「ランバ語」『バントゥ諸語動詞アクセントの研究』, 140–157, 東京: ひつじ書房.
- 米田信子 2012 「アフリカの識字を考える」『リテラシー再考 (ことばと社会)』14: 43–66.

南米アンデス先住民語の文法書

蝦名大助

Grammatical Descriptions of Andean Languages

EBINA, Daisuke

Keywords: the Andes, Quechuan Language Family, Aymaran Language Family, Araucanian languages

キーワード: アンデス, ケチュア語族, アイマラ語族, アラウコ語族

1. 南米の主な語族とその地理的分布
2. 南米先住民語研究史
3. 南米先住民語の概説書
4. アンデス先住民語とその文法書
5. まとめ

1. 南米の主な語族とその地理的分布

本稿では、南米アンデス地域で話される先住民語の主な文法書や、近年までの研究動向、それぞれの言語のおおまかな特徴について述べる。本論に入る前に、ここでは南米全体の主要な語族と、その地理的分布、地域区分について述べる。

1.1. 主な語族

主要な語族として、以下の10が認められる。大陸北部に位置するものから順に挙げる。

チブチャ(Chibcha), アラワク(Arawak), カリブ(Carib), トゥピ・グアラニー(Tupí-Guaraní), トッカノ(Tucano), パノ(Pano), (マクロ)ジェー(Macro-Jê), ケチュア(Quechuan), アイマラ(Aymaran), もしくはハケJaqi), アラウコ(Arauco)

チブチャ語族の主要な分布域はコロンビアを中心とし、中米の一部にまで及んでいる。いわゆる中間領域¹に位置する。アラワク語族, カリブ語族, トゥピ・グアラニー語族, トッカノ語族,

蝦名大助. 2022. 「南米アンデス先住民語の文法書」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 247-261. DOI: <https://doi.org/10.15026/116969>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

¹ 中間領域 (intermediate area) とは主に考古学で用いられる用語で、「メソアメリカとアンデスのあいだ」、という意味で

パノ語族は主にアマゾン流域に位置している。これらの語族は相互に分布域が重なることもあり、言語接触が頻繁に見られる。最も話者人口の多いのはトゥピ・グアラニー語族で、分布はかなり広い。主要な先住民語の一つであるグアラニー語が属する。(マクロ)ジェー語族はブラジル東部に分布する。

ケチュア、アイマラ、アラウコの各語族はアンデス地域に分布しており、本稿で詳しく述べる。いずれも南米先住民語の中では話者人口が多い。

1.2. 地域区分

上記の語族に含まれない小さな言語群や孤立言語も多く見られ、また地域内での言語接触も盛んであるので(特にアマゾン領域)、以下のように地域で言語を分ける方法も有用である。

中間領域, アマゾン, ブラジル東部, アンデス², チャコ, コノスール

アマゾン流域については、コロンビア、ベネズエラ、ブラジルの低地を中心とした北部と、ボリビア低地を中心とした南部とで言語系統に一定の違いが見られるので、北部と南部とに分けるやり方も有用であるかもしれない。チャコとコノスールに分布する言語はいずれも話者数が少なく、消滅しかけの言語も多い。

2. 南米先住民語研究史

ここでは南米先住民語の研究史について簡単に述べる。南米先住民語の研究は、ヨーロッパ人による征服以降、スペイン人やポルトガル人の宣教師によって始められた。たとえば、ケチュア語最古の文法書は1560年に著されている(Santo Tomás 1560)。宣教師による文法書や辞書の出版は植民地期を通して見られる。19世紀の独立以降になると、欧米人探検家による記述なども見られるようになった。

現代的な水準の研究が現れてくるのは20世紀半ば以降である。主な担い手は地域によって多少異なるが、米国人研究者が多く、また現地研究者であっても特に初期には米国で言語学を学んだ研究者が多い。その中で数が多いのが Summer Institute of Linguistics の研究者である。アマゾン流域の言語の文法書は、多くが Summer Institute of Linguistics の研究者によるものである。アンデス諸国ではオランダやフランスなど欧州系の研究者が比較的多く見られる。また近年はアマゾン流域を中心としてオーストラリアの研究者も見られる。ブラジルのように現地研究者が比較的多く見られる国もある。先住民語話者自身が研究者でもある例も見られるが、まだ比較的少ない。南米先住民語の研究史は Adelaar (2004) に詳しい。

南米先住民語研究では、特有の用語や記述上の特別な特徴、といったものはそれほど多くないように思われる。特に近年の文法書は比較的理解しやすいものが多いように思われる。時代が遡ると、特定の枠組みに従って書かれているものもいくつか見られる。また、例文にグロスがなく、その言語を知っている読者でないと理解しにくいものも見られる。

ある。

² 考古学で「アンデス」といった場合には山岳部だけでなく海岸部も含まれる。アンデス海岸部ではスペイン人到来以前に先住民語が話されていたが、現在はすべて死語となっている。

3. 南米先住民語の概説書

近年、南米先住民語の概説書の出版が相次いでいる。個々の言語の記述文法が相次いで発表されてきていることに伴い、概説書の記述もより正確で詳細なものになっている。本稿の主な目的は、アンデス先住民語の文法書について述べることであるが、概説書の記述も有用であることが多いため、以下に主な概説書を挙げたいと思う。

Dixon and Aikhenvald (1999) は主にアマゾン流域の言語の概説である。アラワク、カリブ、ジェー、トゥピ・グアラニー、トゥカノ、パノなどの語族を扱う。Adelaar (2004) は「アンデスの言語」とタイトルが与えられているが、実際にはアンデス以外にも中間領域の南米側、アマゾンやチャコの一部、コノスールを扱っている。南米大陸の中で、前述の Dixon and Aikhenvald (1999) を補完する地域が扱われており、そのような意図があったものと推測される。前者に比べると文法の記述がやや少なく、歴史的な情報が比較的多い。この二冊で、南米先住民語全体の概要をつかむことができる。上で述べたように Adelaar (2004) では南米先住民語の研究史も扱われており、この点でも有益である。

Campbell and Grondona (2012) は最新の系統分類を挙げる他、類型学的特徴に一章が割かれている。O'Connor and Muysken (2014) は南米先住民語の歴史に関する著作である。

日本語で書かれたものとしては細川による言語学大事典の各項目がある（細川 1989などを参照）。1980年代という時代を考えると、当時これだけ詳しい情報を手に入れることができたことは驚きであり、現在でも有益な情報が多い。ただし系統分類についてはやや古くなっている部分もある。

Klein and Stark (1985) はやや古いですが、現在でも引用される文献である。ほぼ同時代の Payne (1990) はやや雑多ではあるが、Dixon and Aikhenvald (1999) 以前にアマゾン諸言語をまとめて扱ったものである。Constenla Umaña (1991) は中間領域の言語の概説である。情報量はそれほど多くないが、この地域の概説書が少ないだけに有用である。

Gildea (1998) はカリブ語族の概説書である。語族単位の概説書は比較的珍しい。同様にケチュア語族全体を扱ったものとして Cerrón-Palomino (1987) がある。

国ごとに先住民語を扱ったものもある。González de Pérez and Rodríguez de Montes (2000) はコロンビアの先住民語を扱ったものである。文法記述はやや少ないが、地図が充実していて各言語の分布が分かりやすい。Crevels and Muysken (2009, 2012) はボリビアの先住民語についての概説書であり、第1巻でアンデス、第2巻でアマゾンを扱っている。文法概説が比較的しっかりしている。Rodrigues (1986) はブラジルの先住民語を扱っている。

4. アンデス先住民語とその文法書

4.1. 「アンデス」の範囲

アンデスということばは、自然地理学、政治学、考古学など、分野によって幾分異なる意味で用いられる。自然地理学でアンデスといえば、北はコロンビアから南はチリに至るまでの南北7,500kmにおよぶ山脈を指す。政治的にはコロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアの4カ国がアンデス諸国と呼ばれる。考古学でアンデスといえば、ペルーを中心とした一つの文明圏を指

す。本稿ではこの最後の定義におおむね沿った意味で、アンデスということばを用いる。すなわち、インカ帝国の最大版図におおむね相当する地域で話されている（あるいは話されていた）先住民語を、アンデス先住民語と呼ぶことにしたい。なお、本来であれば、アラウコ語族はアンデス先住民語には含めるべきではないかもしれない。しかし、ケチュア語族やアイマラ語族との類型的な共通性が（部分的に）見られることから、本稿ではアラウコ語族の言語についても取り上げることにした。

Adelaar (2004) は、アンデスの代わりに Inca Sphere という独自の用語を用いている。やはり、かつてのインカ帝国の版図で話されている（ていた）言語群を指すための用語だと思われる。なお Adelaar (2004) でもアラウコ語族が取り上げられているが、ケチュア語族やアイマラ語族とは異なる章で扱われている。

4.2. アンデス先住民語研究の歴史

アンデス先住民語研究は、植民地時代の宣教師によるものに端を発し、長い伝統がある。1560年に Santo Tomás による文法書が出され、その後 Gonzales Holguín (1607) などが続いた。現代的な意味での研究は、20世紀半ばに始まったとっていいであろう。ペルー言語学の祖とされる Alfredo Torero が1960年代に歴史研究を発展させた (Torero 2002などを参照)。同時代に Gary Parker もケチュア諸語の系統関係の研究を行なっている (Parker 1969-1971などを参照)。これらの研究によって、かつてはケチュア「語」と考えられていたものが、実際には語族といえるほど互いに異なる言語群を成していることが明らかになった。その後、さまざまなケチュア語の変種の記述が進んだ。ペルーでは Torero の研究を継いだ Cerrón-Palomino が歴史研究を進展させている。

60年代から80年代にかけてさまざまなケチュア語の変種の記述研究が進み、その後も散発的に記述文法書が出されているが、アンデスでは記述研究と同じかそれ以上に歴史言語学的な研究が盛んである。これは中央アンデスで様々な文明が栄え、そのため考古学が盛んであることによると思われる。ただし国ごとに幾分関心は異なる。ペルーでは歴史研究に対する関心が高いが、エクアドルでは言語教育や言語保持に対する関心が高い。ボリビアでは社会言語学的な研究も見られる。また、ペルーとボリビアでは、同じ研究者が両国にまたがって研究を行なっているケースもよく見られ、研究者間の交流も盛んである。

アイマラ語族の研究は長い間 Hardman を中心に行なわれてきたが、最近では新しい研究も見られる (Coler 2014 など)。チリを中心に分布するマプチェ語は地理的にやや離れているために研究者集団が異なる。また、近年、死語や少数言語の記述も進んでいる。

4.3. アンデス先住民語の類型的特徴と文法記述の特徴

アンデス先住民語は類型的におおむね以下の共通特徴を持つ。語形成は膠着的で、ほぼ接尾辞のみによる。格のパターンは対格型であり、文法関係は主要部標示型（あるいは二重標示型）である。形容詞名詞型であり、非定形動詞、特に名詞化による従属節形成が盛んである。1人称に除外形と包括形の区別がある。また証拠性 (evidentiality) を表す文法範疇が発達しているが、この最後の特徴はアマゾン流域の言語にも広く見られる。

記述上の特徴としては、統語論に対し形態論の記述が多いことが挙げられる。これは一つには形態的に複雑な言語が多いので、形態論の記述が中心であることの裏返しだと考えられる。同時に、歴史言語学的な関心に応えるような研究が求められたということもあったかもしれない。す

なわち、個々の形態素の形式や、意味の説明が中心である、ということである。また、古い研究ではグロスがなかったりして、形態構造や統語構造が理解しにくいこともある。しかし近年は高水準の記述が現れてきている。

音韻表記は、時代や国によって違いが見られる。ケチュア語族の一部の言語、およびアイマラ語族の言語には、閉鎖音に、無声無気音、無声有気音、放出音の3系列がある。現在は無声有気音に対して^hまたはh、放出音に'をあてることが一般的である。例えば軟口蓋閉鎖音はk, kh, k'のように表記される。しかし、時代がさかのぼると有気音に対しk'のようにアポストロフを重ねて表しているものがあったり、kk, kkkのように子音字を重ねて有気音や放出音を表すものがあったりするため、注意が必要である。また、/h/ [h] はペルーでは近年はhで表されることが多いが、ボリビアでは依然としてjで表されることが多い。専門書以外まで視野に入れると、j以外にも /w/ [w] に対する gu や hu など、スペイン語式の表記もよく見られるので注意が必要である。こういった表記上の問題は、アンデスにとどまらずスペイン語圏全般に見られる問題だと考えられる。教科書などの学習書の場合、どのような表記法を用いるかは簡単な問題ではない。想定される読者がスペイン語式の表記法に慣れているからである。

4.4. ケチュア語族

4.4.1. 分布と系統分類

ケチュア語族(Quechuan language family)は、北はコロンビア南部から、南はアルゼンチン北部にかけて、おおむねインカ帝国の最大版図に広がる南米先住民語中最大の語族である。ケチュア諸語(Quechuan languages)とも呼ばれる。語族内にいくつの言語を認めるか、研究者間でコンセンサスがあるとはいえない。細川(1988b)は約40の変種を認めている。

ケチュア語族の現在の分布がインカ期の分布をそのまま反映しているわけではない。ボリビアやエクアドルの多くの地域では、インカ期に第二言語として話されていた公用語であったケチュア語が母語化したと考えられる。またボリビアの一部の地域ではスペイン植民地期以降にケチュア語が流入したようだ。アルゼンチンでも多くの地域が植民地期以降にケチュア語化したと考えられるが(細川1988a)、一部はボリビアからの移民による。またエクアドルのアマゾン地域では、高地からのケチュア語話者の移住に伴ってケチュア語化が起こったとされているが、これはさほど古い時代のことではない。

系統分類としては、ペルー中央部で話されるケチュアIグループと、周縁部で話されるケチュアIIグループとに分かれるというのが通説となっている。Heggarty(2005)は、ケチュア諸語の方言連続体的な側面を強調したが、多くの研究者は依然として伝統的な系統分類を支持している(Adelaar 2013など)。格接尾辞の形式や、その他いくつかの文法的形態素の形式に大きな違いが見られるが、文法構造はよく似ている。また、人称接尾辞は語族を通じてよく似ている。

4.4.2. 類型の特徴

ケチュア語族は典型的にアイマラ語族ときわめて類似している。ケチュア語族が分岐する前の祖語の段階でアイマラ語族(の祖語?)との言語接触があり、文法構造に大きな影響を被ったと考えられている。また分岐後も接触があったようである。

アイマラ語族と共通・類似する特徴としては、統合度の高さ、1人称における除外形と包括形の区別(clusivity)、動詞における主語・目的語の標示、格体系、動詞における証拠性の標示、などが挙げられる。これらのうち、少なくとも統合度、clusivity、主語・目的語の標示については明

らかにアイマラ語族からケチュア語族への影響と考えられる。従属節形成において非定形動詞、特に名詞化が大きな役割を果たす点もアイマラ語と共通である。語順は SOV とされることが多いが、主要部・従属部両者で文法関係が標示されるため、主節では比較的語順が自由である。

ケチュア語族内の諸言語は、文法的にかなり均質である。ただしいくつかの言語では人称標示の一部が失われているなど、やや文法の単純化が見られる。特に北部の変種で単純化が目立つ。言語的な差は語彙面で大きく、ケチュア I グループの言語と II グループの言語とでは相互理解が困難であるといわれる。音韻面ではペルーのクスコ県以南のケチュア語で、閉鎖音に無声無気音、無声有気音、放出音の 3 系列が認められるが、これはケチュア祖語からの分岐後に一部のケチュア語に起こったアイマラ語による影響であると考えられる。一方、エクアドルなど北部のケチュア語では鼻音の直後でいくつかの閉鎖音の有声化が見られる。

4.4.3. 文法書

ケチュア語族の研究は、話者数が最大であり数多くの変種が分布しているペルーでもっとも盛んである。全体の概説書としては前述したように Cerrón-Palomino (1987) がある。また Adelaar (2004) はアンデス全体を扱っているが、ケチュア語族についても詳しい。既に述べたように、ペルーでは、Alfredo Torero や Gary Parker が 1960 年代に歴史研究を進展させ、同時に現代的な水準の文法書が現れはじめた。その後 1976 年に教育省 (Ministerio de Educación) と Instituto de Estudios Peruanos (IEP) が共同でそれぞれ 6 冊の文法書と辞書を発行した。これはペルーを 6 つの地域に分けて地域ごとのケチュア語を記述したものだが、それぞれが必ずしも単一の変種ではない、という問題がある。つまり、実際にはペルー国内では 6 つ以上のケチュア語の変種が行なわれているにもかかわらず、便宜的に 6 つに分けたため、異なる変種の記述が 1 冊で行なわれてしまっている場合がある、ということである。また例文にグロスがなく、全般的に統語論の記述が少ないなどの問題があるが、その後各変種の記述が進んでいない地域もあるため、現在でも有用なシリーズである。文法書 (Gramática quechua) は以下の 6 冊から成る：Cerrón-Palomino (1976), Coombs et al. (1976), Cusihuamán (1976), Parker (1976), Quesada (1976), Soto Ruiz (1976)。

以下ではまずケチュア I グループに属する言語の文法書を紹介し、次に II グループの文法書を挙げることにする。

ケチュア I グループの言語の文法書には、Cerrón-Palomino (1976), Parker (1976), Adelaar (1977), Weber (1989) などがある。Weber (1989) は詳細な文法記述であり、ケチュア諸語の文法的な特徴を把握するのに適している。スペイン語版として Weber (1996) もある。

次にケチュア II グループのうち、ペルー領内の言語の文法書を挙げる。Parker (1969), Coombs et al. (1976), Cusihuamán (1976), Quesada (1976), Soto Ruiz (1976), Taylor (1982, 1996), Adelaar (1986) などがある。また近年出版されたものとして Wroughton (1996) や Shimelman (2017) などがある。Weber (1989) 同様、これら 2 冊も詳細な記述であり、ケチュア諸語について理解するのに適した文法書である。

ペルー以外に分布するケチュア語はすべて II グループに属する。ボリビアはペルーに次いでケチュア諸語の話者人口が多い国であるが、近年目立った文法書は出されていない。Lastra (1968) はコチャバンバ・ケチュア語の記述である。形態素分析はなされているが例文にグロスがないという問題がある。

エクアドルも比較的話者人口が多いが、近年は言語保持・言語政策や言語接触に関する研究が多く、目立った文法書は少ない。Cole (1985) によるインブラ・ケチュア語の記述がある。

コロンビアで話されるケチュア語の変種は1つだけであり、インガ語 (Inga) と呼ばれる。Levinsohn (1976) の記述があるが、tagmemics によるもので、形態素分析が成されていない、という問題がある。

アルゼンチンでは Bravo (1956) がある。

4.4.4. 記述上の特徴

ケチュア語族の文法書における一番の問題は、例文などで形態素分析が成されていないものがあることだろう。1970年代ごろまでの文法書によく見られる。(1) は Soto Ruiz (1976) が挙げる例文である。

- (1) *Pukllayta atin* ‘Puede jugar.’ (Soto Ruiz 1976: 48)

グロスと形態素境界を示すと以下ようになる。

- (2) *Puklla-y-ta* *ati-n*
 遊ぶ-INF.NMLZ-ACC できる-3
 「彼(女)は遊べる。」

この箇所は同書で統語構造を示す章であり、形態素分析は必要ないと考えられたのかもしれないが、複文の例であり、形態素分析が成されていたほうがわかりやすい。

グロスが示されないこともよくある。(3) も Soto Ruiz (1976) からの例である。

- (3) *Llaqta-kuna-ta* ‘a los pueblos’ (Soto Ruiz 1976: 48)

この例文には ‘a los pueblos’ 「町(複数)に」という訳があてられており、ここでは形態素境界が示されている。また前後の文脈から *llaqta* が「町」、*-kuna* が複数、*-ta* が何らかの格を表していることが分かるが、グロスがないため *-ta* が対格を表すことは同書の他の箇所を見なければわからない。

本文での説明の中に例文が示されることもあり、その場合にもグロスや形態素境界が示されないことがよくある³。

2つめの特徴として、個々の接尾辞の説明に多くの紙幅が割かれていることが挙げられる。たとえば、Parker (1976) の章立ては次のようになっている。

1. 導入
2. 音韻論
3. 単文
4. 名詞句
5. 動詞句
6. エンクリティック
7. 複文

³ これらの問題には、印刷技術や、1行あたりの文字数、ページ数などの制約が原因としてあったのかもしれない。

他の Gramática quechua のシリーズも、似たような章立てになっている。Parker (1976) では、4 章と 5 章の多くが接尾辞の説明にあてられている⁴。前述したように、形態論が複雑であることがその理由として考えられる。しかし、接尾辞の承接関係が図や表などで示されておらず、形態構造がどうなっているのか、分かりにくいこともある。もっとも、特に動詞について、接尾辞の数が多いため、承接関係や個々の接尾辞の位置を完全に明らかにするのは難しい。後述するように、マプチェ語研究でも同様の困難があるようだ。

付属語 (clitic) を認めるかどうかについて、文法書によって扱いが異なっている。Parker (1976) など Gramática quechua のシリーズは、一貫して clitic を認めている。一方、Adelaar (1977)⁵ や Weber (1989) は認めていない。また、認めていても接尾辞同様の表し方をされていて、区別がまぎらわしいこともある。以下に述べるように、筆者は clitic を認めたほうがよいと考えている。

ケチュア諸語の clitic には、主題を表す =qa, フォーカスや確言を表す =mi/=η, 疑問／否定のフォーカスを表す =chu など情報構造に関わるものがある。

- (4) *ama waqa-y=chu.*
NEG.IMP 泣く -IMP=NEG.FOC
「泣くな。」 (Ebina 2011: 29)

- (5) *wasi-y-manj hamu-ηki=chu.*
家-1-DAT 来る-2=Q.FOC
「君は私の家に来ますか？」 (Ebina 2011: 29)

(4)(5) はクスコ・ケチュア語の例である。(4) は否定文であり、否定辞 *ama* とともに =chu が現れている。(5) は疑問文であり、疑問のフォーカスである *hamu-ηki* に =chu が付いている。

ケチュア語族の研究では接尾辞において派生と屈折の区別が一般に認められている。これらの形態素は屈折接尾辞の外側に現れる。そうであれば、これを clitic とするか、屈折接尾辞とするかしかない。これらの形態素は i) 義務的要素ではない ii) ほとんどの接尾辞はホストが決まっていて名詞か動詞どちらかにしか付かないが、これらの形態素は名詞にも動詞にも小辞にも付く、といった性質があることから、屈折接尾辞とは認めにくい。であれば clitic と見るべきだと思われる。また、これらの多くが談話構造に関わる、すなわち文よりも大きな単位に関わる要素である。

対応する独立形が存在する clitic もある。たとえば, *ña* 「既に」は自立語としても現れるし、付属語としても現れる。表す意味はかわらない。一文中に共起することも可能である。再びクスコ・ケチュア語の例を挙げる。

- (6) *ña allij-ta=ña michi uyari-sha-η chay-ta.*
もう 良い-ACC=ENCL 猫 聞く-PROG-3 それ-ACC
「もう猫はそのことをよく聞いている。」

これも接尾辞とは認めにくいであろう。

⁴ 章のタイトルは La frase sustantiva (名詞句, あるいは実詞句), La frase verbal (動詞句) となっているが, 実際には内容の多くは句についてではなく名詞形態論と動詞形態論についてである。

⁵ 厳密に言えば, Adelaar (1977) はわずかな clitic の例を認めているが, 本稿で挙げるような形態素は接尾辞として扱っている。

アイマラ語族の文法書においても同様の問題があるが、これについては4.5で検討する。

ケチュア語族の記述においては特殊な用語が用いられることはあまり多くないが、一般的ではないものとして transition(s) (スペイン語：transición/transiciones) という用語がある。これは動詞における人称標示を指すもので、Adelaar (2004: 219) によれば、スペイン植民地時代の文法書に起源があり、現在でも伝統的なスタイルの文法書によく見られるという。この用語を用いた場合の欠点として、屈折 (inflection) との区別がわかりにくいということが挙げられる。すなわち、屈折中の一部分、すなわち人称標示部分のみを transition と呼んでいるのか、屈折の代わりに transition という用語を用いているのか、ということである。他のアンデス先住民語の記述においてもこの用語が用いられることがある。

このほか、それほど一般的ではないが、包括人称 (inclusive) の代わりに4人称 (4th person) という用語が用いられることもある。ただしこの用語は、アイマラ語族の研究においてより一般的に用いられている。ケチュア語族においては除外形・包括形の区別は複数の場合のみに見られるのに対し、アイマラ語族では単数の場合にも見られる。そのような意味では、「4人称」という用語はアイマラ語族の記述においてより適当であろう。

4.5. アイマラ語族

4.5.1. 分布と系統分類

アイマラ (Aymaran) 語族はアイマラ語 (Aymara)、ハカル語 (Jaqaru)、カウキ語 (Kawki、または Cauqui) からなる。伝統的にはハケ (Jaqi) 語族という呼び方が一般的であったが、近年はアイマラ語族という呼び方も定着してきている。最大の言語であるアイマラ語は、ペルー・ボリビア国境にあるティティカカ湖をはさんでペルー側、ボリビア側両方に分布している。ボリビア側のほうが話者人口が多い。ティティカカ湖周辺の一部の地域でケチュア語族と分布が重なる。ハカル語とカウキ語はペルー中央部に分布し、周囲をケチュア語族の言語に取り囲まれている。いずれも話者人口は少なく、カウキ語は消滅の危機に瀕している。ハカル語・カウキ語域と、アイマラ語域のあいだ、すなわちペルー南部アンデス地域では、現在はケチュア諸語が行なわれている。正確な分布は不明だが、歴史書の記述や地名などからみて、この地域ではかつてはアイマラ語族の何らかの言語が話されていたはずである。またアイマラ語はケチュア語族に比べて方言差が小さいとされている。すなわち、現在の分布域にアイマラ語が定着した時期は、ケチュア語族と比べて、比較的新しいと考えられる。以上のことから見て、アイマラ語の本来の分布域は現在よりも北であったが、ケチュア語族におされて南下した可能性が高い。

4.5.2. 類型の特徴

アイマラ語族の類型の特徴はケチュア語族とよく似ていて、統合度の高い言語である。アイマラ語族のほうが形態音韻論が複雑であり、また動詞における人称標示がより体系的である。上述したように、アイマラ語族とケチュア語族の類型的類似性の大きな原因は言語接触によるアイマラ語族からケチュア語族への影響と考えられているが (Adelaar 2011 など)、語彙面では双方向の借用があったと考えられている。

4.5.3. 文法書

20世紀半ば以降、アイマラ語族の言語の研究は、長いあいだフロリダ大学の Hardman を中心として行なわれてきた。アイマラ語については、Hardman et al. (1988) や Hardman (2001) などの文法

書があるが、近年は Hardman 以外による研究も見られるようになった。たとえば Cerrón-Palomino (2000) がある。ただし Cerrón-Palomino の言語学的な関心は一貫してアンデスの歴史言語学であり、本書もそのような意図で書かれていると思われる。現在までに書かれた文法書でもっともわかりやすく詳細なものは Coler (2014) である。本書はペルー側のアイマラ語の記述である。

ハカル語については Hardman (2000) がある。カウキ語については管見の限り文法書は見当たらない。カウキ語はまだ話者が存在しているかどうかも分からないが、ハカル語はいまだ話者が存在すると考えられる。ハカル語の研究は非常に少ないため、さらなる研究が望まれる。

4.5.4. 記述上の特徴

アイマラ語族の言語の記述上の特徴は、おおむねケチュア語族の場合と共通している。すなわち、かつては形態素分析が十分でないものや、グロスが付されていないものがあった。以下は Hardman et al. (1988) による。

- (7) *jisk'a.cha.si.ña.sa.:k.i.ti* 'no debemos discriminarnos'
(Hardman et al. 1988: 293)

これは一語であり、「私たちは（互いに）差別するべきではない。」という訳があてられている。Hardman は形態素境界に - の代わりに . を用いるので、この語は *jisk'a-*, *-cha-*, *-si-*, *-ña-*, *-sa-*, *-:⁶*, *-k-*, *-i-*, *-ti* の 9 つの形態素に分けられることが分かる。しかしグロスが付されていないので、個々の形態素の意味や働きはこの例だけではわからない。

形態素境界 - の代わりに . を用いる表記法は Hardman 独自のものであり、アイマラ語研究で一般化しているとはいえない。Cerrón-Palomino (2000) や Coler (2014) では - が用いられている。

アイマラ語族研究で用いられる独自の用語として、文接尾辞 (sentential suffix) や独立接尾辞 (independent suffix) というものがある。以下にハカル語の文接辞の例を挙げる (Hardman 2000: 95)。

- (8) *Marka.m.txi*. 'Is this your town?'

Hardman (2000: 95) によれば、*-txi* は疑問／否定のフォーカスを表す、という。これはケチュア語の *=chu* を想起させる。ケチュア語族と同様の問題、すなわち、屈折接尾辞の外側に現れる形態素を、「接辞」と分析してよいか、という問題がある可能性がある。

用語そのものの問題もある。上で述べたようにこの種の形態素はアイマラ語族の研究では一般に「文接尾辞」や「独立接尾辞」と呼ばれているが、「独立接尾辞」という用語は形容矛盾である。語幹に付いていて切り離せないから接辞なのであって、それを「独立」と形容するのはおかしい。接尾辞の中で比較的自立度が高いもの、という意味なのかもしれないが、まぎらわしい用語であることは確かである。

このような用語法は、ケチュア語族 (細川 1988b など)、チパヤ語 (Cerrón-Palomino 2006) にも見られるので、アンデス先住民語研究の伝統であるといってもいいかもしれないが、これを採用しない研究も少なくない。

⁶: は長母音を表す。

4.6. チパヤ語

チパヤ語 (Chipaya) はボリビア西部で話されている言語であり、後述するウチュマタク語とともに、ウル・チパヤ語族を成す。Cerrón-Palomino (2006) による記述がある。Cerrón-Palomino は主にケチュア語の研究を行ってきた研究者であるため、用語や記述のスタイルは彼のケチュア語研究に沿ったものである。

チパヤ語の語形成は膠着的で接尾辞型である。また、アイマラ語族やケチュア語族ほど体系的ではないが、動詞における人称標示が見られる。一方、clusivity の区別は見られない。

4.7. アラウコ語族

アラウコ語族 (Araucanian languages) の言語はチリ南部に分布しており、他のアンデスの言語とはやや地理的に離れている。すでに述べたように、「アンデス」に含めるべきではないかもしれないが、典型的に一定の共通性が見られることから、ここで取り上げることにした。代表的な言語はマプチェ語 (Mapuche, または Mapudungun) であり、記述の多くもマプチェ語のものである。近年のものに Smeets (2008) や Zúñiga (2000) がある。

マプチェ語と、ケチュア語族、アイマラ語族は、以下の共通する類型の特徴を示す。形態論が膠着的で接尾辞によること、動詞において主語と目的語両方の人称が標示されること、数が標示されること、時制・ムードが標示されること、動詞の名詞化が見られること、等である。またマプチェ語もケチュア語族やアイマラ語族同様、形態的にかなり複雑な言語である。Zúñiga (2000: 73) は、動詞の形態構造を示す際に “There is no consensus as to how many suffix slots one should postulate, nor is the relative order of the suffixes exactly as depicted in the table in every single instance” と述べている。ケチュア語族やアイマラ語族の研究と同様の問題があると思われる。

しかし clusivity の区別がない、名詞抱合がある、数に単数／双数／複数の区別がある、といった特徴はケチュア語族やアイマラ語族と異なる。また、すでに述べたようにアラウコ語族の研究は、他のアンデス先住民語とは異なる研究者集団によって行なわれており、記述のスタイルや用語にケチュア語・アイマラ語研究と大きな共通性は見いだせない。

4.8. カリヤワヤ語

カリヤワヤ語 (Callahuaya, または Kallahuaya) は、いわゆる混合言語 (mixed language) の一種である。文法構造はケチュア語に由来するが、語彙の多くが後述するプキーナ語に由来する可能性があると考えられる。このプキーナ語の語彙を保存しているという理由で、研究者に注目されてきた。断片的な記述だが、Oblitas Poblete (1968)、さらには先行研究のデータをまとめた Muysken (1997)、Muysken (2009) などの記述がある。

カリヤワヤ語を話す人々は、民間医療を行なう呪術師 (witch doctor) である。そしてカリヤワヤ語は呪術の際に用いられる言語である。母語として用いられたことがあるかどうかや、現在でも話されているかどうかはわからないという (Muysken 2009: 147)。

4.9. いくつかの死語

4.9.1. プキーナ語

プキーナ語 (Puquina) は死語となった言語で、歴史書にその名が見られるが、言語資料は非常に限られている。残された資料から、アマゾン流域に分布するアラワク語族に属すると考えられ

ている。系統分類から見れば、プキーナ語はアンデス先住民語ではなくアマゾン先住民語として扱われるべきかもしれないが、分布域などの理由から、アンデス地域の研究者によって扱われてきた。Adelaar and van de Kerke (2009)などに記述があるが、言語資料が限られているため、きわめて断片的な記述にとどまっている。

プキーナ語が注目されてきたのは、プキーナ語が話されていたと考えられる地域で、かつてティワナク文明が栄えていた、と考えられていることによる。すなわち、考古学・歴史的な観点から注目されてきたとあってよい。上述のカリャワヤ語についても、同様のことがいえる。セロン＝パロミーノ (2012, 他) は、インカ皇族 (の祖先) がプキーナ語を話していたという仮説を提示しているが、この仮説は現在のところ言語学者のあいだで多くの支持を集めている、とはいえない。

4.9.2. ウチュマタク語

ウチュマタク語 (Uchumataqu) はティティカカ湖周辺からポリビア側にかけての地域で話されていた言語である。ウル語 (Uru) と呼ばれ、チパヤ語とともにウル・チパヤ語族を成す。1950年頃に死語になったとされている (Hannß 2008: 1)。過去の資料をもとにした記述として Hannß (2008) がある。

ウチュマタク語とケチュア語族・アイマラ語族とでは以下の類型的共通性が見られる。動詞における人称 (主語・目的語)、時制、モダリティ、証拠性の標示。動詞を非定動詞化する接尾辞 (名詞化, その他) の存在, 等。ただし人称標示が付属語 (clitic) による点は異なる。地理的分布や、借用があることからみて、ウチュマタク語とアイマラ語族やケチュア語族とのあいだには接触があったと考えられる。

4.9.3. モチーカ語

モチーカ語 (Mochica) は、ペルー北部海岸に分布していた言語で、チムー文化の担い手の言語と考えられている。20世紀初頭まで話者が存在した。これまで述べてきたアンデス地域の言語とは分布域が異なる。Cerrón-Palomino (1995) や Hovdhaugen (2004) などの記述がある。語形成が膠着的で接尾辞型である点は他のアンデス先住民語と共通しているが、Hovdhaugen (2004) は典型的に他のアンデス先住民語とは異なると述べている。動詞における人称表示が見られず、clusivityの区別はない。また、名詞語幹に所有語幹と非所有語幹の区別がある、という。

ペルー北部海岸に分布していたその他の言語はいずれも死語となっており、また、目立った記述がほとんど残されていない。

5. まとめ

本稿では、南米先住民語の研究史や近年の概説書について簡単に見たあと、アンデス先住民語とその文法書について述べた。アンデス先住民語の記述研究は、20世紀半ば以降に盛んになった。かつては形態論に紙幅が割かれる傾向が強かったが、近年は包括的な文法書も見られるようになってきている。アンデス特有の記述のスタイルの伝統や、用語、といったものはあまりないが、いくつか特殊な用語が見られる。その一部は分析の問題とも関連している。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016-2017年度）の成果の一部である。

略語一覧

| | | | |
|------|----------|---------|----------|
| ACC | 対格 | NEG.FOC | 否定のフォーカス |
| DAT | 与格 | NEG.IMP | 否定命令辞 |
| ENCL | enclitic | NMLZ | 名詞化接尾辞 |
| INF | 不定(詞) | PROG | 進行相 |
| IMP | 命令 | Q.FOC | 疑問のフォーカス |

参考文献

- Adelaar, Willem F. H. 1977. *Tarma Quechua: Grammar, Texts, Dictionary*. Lisse: Peter de Ridder Press.
- . 2011. “Trayectoria histórica de la familia lingüística quechua y sus relaciones con la familia lingüística aimara.” *Boletín de Arqueología PUCP* 14: 239–254, Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú.
- . 2013. “Quechua I y Quechua II: En defensa de una distinción establecida.” *Revista Brasileira de Lingüística Antropológica* 5-1: 45–65.
- Adelaar, Willem F. H. with the collaboration of Pieter Muysken. 2004. *The Languages of the Andes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Adelaar, Willem and Simon van de Kerke. 2009. “Puquina.” *Lenguas de Bolivia Tomo 1: Ámbito andino* (Mily Crevels and Pieter Muysken, eds.), 125–146, La Paz: Plural.
- Bravo, Domingo A. 1956. *El quichua santiagueño. Reducto idiomático argentino*. Tucumán: Universidad Nacional de Tucumán.
- Campbell, Lyle and Verónica Grondona, eds. 2012. *The Indigenous Languages of South America: A Comprehensive Guide*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Cerrón-Palomino, Rodolfo. 1976. *Gramática quechua: Junín-Huanca*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.
- . 1987. *Lingüística quechua*. Cuzco: Centro de Estudios Rurales Andinos “Batrolomé de las Casas.”
- . 1995. *La lengua de Naimlap*. Lima: Fondo Editorial de Pontificia Universidad Católica del Perú.
- . 2000. *Lingüística aimara*. Lima: Centro de Estudios Regionales Andinos “Batrolomé de las Casas.”
- . 2006. *El chipaya o la lengua de los hombres del agua*. Lima: Fondo Editorial de Pontificia Universidad Católica del Perú.
- セロン=パロミーノ, ロドルフォ 2012 「インカの言語」(蝦名大助(訳) 島田泉・篠田謙一(編) 『インカ帝国—研究のフロンティア』, 51–71, 秦野: 東海大学出版会.
- Cole, Peter. 1985. *Imbabura Quechua*. London: Croom Helm.
- Coler, Matt. 2014. *A Grammar of Muylaq' Aymara: Aymara as Spoken in Southern Peru*. Leiden and Boston: Brill.
- Constenla Umaña, Adolfo. 1991. *Las lenguas del área intermedia: introducción a su estudio areal*. San José: La Universidad de Costa Rica.
- Coombs, David, Heidi Carlson de Coombs, and Robert Weber. 1976. *Gramática quechua: San Martín*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.

- Crevels, Mily and Pieter Muysken, eds. 2009. *Lenguas de Bolivia Tomo 1: Ámbito andino*. La Paz: Plural.
- . 2012. *Lenguas de Bolivia Tomo 2: Amazonía*. La Paz: Plural.
- Cusihuamán, Antonio. 1976. *Gramática quechua: Cuzco-Colloao*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.
- Dixon, R. M. W. and Alexandra Aikhenvald. 1999. *The Amazonian Languages*. New York: Cambridge University Press.
- Ebina, Daisuke. 2011. “CUSCO Quechua.” *Grammatical Sketches from the Field* (Yasuhiro Yamakoshi, ed.), 1–39, Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Gildea, Spike. 1998. *On Reconstructing Grammar: Comparative Cariban Morphosyntax*. New York: Oxford University Press.
- Gonzales Holguín, Diego. 1607 [1842]. *Gramática y arte nueva de la lengua general de todo el Perú llamada lengua qquichua o lengua del Inca*. Genova: Pagano.
- González de Pérez, María Stella and María Luisa Rodríguez de Montes, eds. 2000. *Lenguas indígenas de Colombia: una visión descriptiva*. Bogotá: Instituto Caro y Cuervo.
- Hannß, Katja. 2008. *Uchumataqu: The Lost Language of the Urus of Bolivia. A Grammatical Description of the Language as Documented between 1894 and 1952*. Leiden: CNWS Publications.
- Hardman, M. J. 2000. *Jaqaru*. Munich: LINCOM Europa.
- . 2001. *Aymara*. Munich: LINCOM Europa.
- Hardman, M. J., Juana Vásquez and Juan de Dios Yapita Moya. 1988. *Aymara: compendio de estructura fonológica y gramatical*. La Paz: Instituto de Lengua y Cultura Aymara.
- Heggarty, Paul. 2005. “Enigmas en el origen de las lenguas andinas: nuevos hallazgos.” *Revista Andina* 40: 9–57.
- 細川弘明 1988a 「アルゼンチン＝ケチュア語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大事典第1巻』, 523–524, 東京:三省堂.
- . 1988b 「ケチュア語族」 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大事典第1巻』, 1589–1608, 東京:三省堂.
- . 1989 「南米インディアン諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大事典第2巻』, 1494–1525, 東京:三省堂.
- Hovdhaugen, Even. 2004. *Mochica*. Munich: LINCOM Europa.
- Klein, Harriet E. Manelis and Louisa R. Stark, eds. 1985. *South American Indian Languages: Retrospect and Prospect*. Austin: University of Texas Press.
- Lastra, Yolanda. 1968. *Cochabamba Quechua Syntax*. The Hague: Mouton.
- Levinsohn, Stephen H. 1976. *The Inga Language*. The Hague: Mouton.
- Muysken, Pieter. 1997. “Callahuaya.” *Contact Languages: A Wider Perspective* (Sara G. Thomason, ed.), 427–447, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- . 2009. “Kallahuaya.” Crevels and Muysken, eds. 2009, 147–167.
- O’Connor, Loretta and Pieter Muysken, eds. 2014. *The Native Languages of South America: Origins, Development, Typology*. Cambridge University Press.
- Oblitas Poblete, Enrique. 1968. *El idioma secreto de los Incas*. Cochabamba: Los Amigos del Libro.
- Parker, Gary. 1976. *Gramática quechua: Ancash-Huailas*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.
- Payne, Doris L. 1990. *Amazonian Linguistics: Studies in Lowland South American Languages*. Austin: University of Texas Press.
- Quesada, Félix. 1976. *Gramática quechua: Cajamarca-Cañaris*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.
- Rodrigues, Aryon Dall’igna. 1986. *Línguas brasileiras: Para o conhecimento das línguas indígenas*. São Paulo: Edições Loyola.
- Santo Tomás, Domingo de. 1560. *Grammatica o arte de la lengua general de los indios de los reynos del Perú*. (Reprinted in 1995, Cuzco: Centro de Estudios Rurales Andinos “Batrolomé de las Casas”.)
- Shimelman, Aviva. 2017. *A Grammar of Yauyos Quechua*. Berlin: Language Science Press.
- Smeets, Ineke. 2008. *A Grammar of Mapuche*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Soto Ruiz, Clodoaldo. 1976. *Gramática quechua: Ayacucho-Chanca*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.

- Weber, David John. 1989. *A Grammar of Huallaga (Huánuco) Quechua*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- . 1996. *Una gramática del quechua del Huallaga (Huánuco)*. Lima: Instituto Lingüístico de Verano (Summer Institute of Linguistics).
- Wroughton, John R. 1996. *Gramática y textos del quechua Shausha Huanca*. Yarinacocha: Instituto Lingüístico de Verano (Summer Institute of Linguistics).
- Zúñiga, Fernando. 2000. *Mapdungun*. Munich: LINCOM Europa.

執筆者／CONTRIBUTORS

渡辺己

東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

教授

WATANABE, Honoré

Professor

Research Institute for Languages and
Culture of Asia and Africa

Tokyo University of Foreign Studies

加藤重広

北海道大学大学院文学研究院

教授

KATO, Shigehiro

Professor

Graduate School of Humanity and
Human Sciences

Hokkaido University

山越康裕

東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

准教授

YAMAKOSHI, Yasuhiro

Associate Professor

Research Institute for Languages and
Culture of Asia and Africa

Tokyo University of Foreign Studies

川澄哲也

松山大学経済学部

教授

KAWASUMI, Tetsuya

Professor

Faculty of Economics

Matsuyama University

林範彦

神戸市外国語大学外国語学部

教授

HAYASHI, Norihiko

Professor

Faculty of Foreign Studies

Kobe City University of Foreign Studies

澤田英夫

東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

教授

SAWADA, Hideo

Professor

Research Institute for Languages and
Culture of Asia and Africa

Tokyo University of Foreign Studies

吉岡乾

国立民族学博物館人類基礎理論研究部

准教授

YOSHIOKA, Noboru

Associate Professor

Department of Advanced Human
Sciences

National Museum of Ethnology

松本亮

神戸市外国語大学外国学研究所
客員研究員

MATSUMOTO, Ryo

Visiting Researcher

Research Institute for Foreign Studies
Kobe City University of Foreign Studies

米田信子

大阪大学言語文化研究科
教授

YONEDA, Nobuko

Professor

Graduate School of Language and Culture
Osaka University

牧野友香

日本学術振興会特別研究員 (PD)
(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化
研究所)

MAKINO, Yuka

Research Fellow of Japan Society for the
Promotion of Science

(affiliated to the Research Institute for
Languages and Culture of Asia and Africa,
Tokyo University of Foreign Studies)

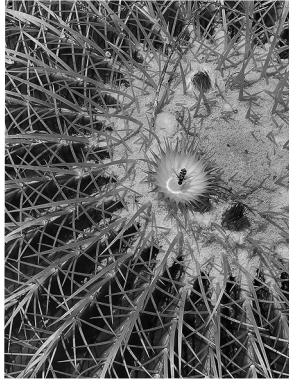
蝦名大助

関西国際大学国際コミュニケーション学部
准教授

EBINA, Daisuke

Associate Professor

School of International Communication
Kansai University of International Studies



表紙写真：

錯綜した言語現象の中に分け入り，解きほぐし，言語体系を見渡してその全体像を描く言語学者のイメージを，サボテンの花に坐するハナアブに重ね合わせてみた。

(撮影／澤田英夫)

All works published by the *Journal of Asian and African Studies, Supplement* are made available through a Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0) license. <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 2号

2022年3月31日発行

編集・発行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
(電話 042-330-5600)

編著者：渡辺己，澤田英夫

執筆者：蝦名大助，加藤重広，川澄哲也，澤田英夫，林範彦，牧野友香，
松本亮，山越康裕，吉岡乾，米田信子，渡辺己^{50音順}

アジア・アフリカ言語文化研究別冊・編集委員会：

安達真弓，飯塚正人，石川博樹，河合香吏（副編集長），倉部慶大，
栗原浩英，黒木英充（編集長），児倉徳和，澤田英夫，西井涼子，
峰岸真琴^{50音順}

印刷：中西印刷株式会社
〒602-8048 京都市上京区下立売小川東入

Studies on Reference Grammars

Edited by Honoré Watanabe & Hideo Sawada

JOURNAL OF ASIAN AND AFRICAN STUDIES
SUPPLEMENT

No.02



アジア・アフリカ言語文化研究

別冊